学生宗教意識調査
総合分析
（1995 年度～2015 年度）

國學院大學日本文化研究所編

2018 年 2 月

國學院大學

学生宗教意識調査
総合分析
（1995 年度～2015 年度）

國學院大學日本文化研究所編

2018 年 2 月

はじめに

本書は國學院大學日本文化研究所のプロジェクトと「宗教と社会」学会・宗教意識調査プロジェクトの合同により、1995 年度から 2015 年度まで 12 回にわたって実施された学生宗教意識調査の結果を比較し分析したものである。12 回の調査各回の結果は、昨年度刊行された國學院大學日本文化研究所編『学生宗教意識調査総合報告書（1995 年度～2015 年度）』にまとめられているので、本書では 20 年にわたる調査で得られたデータを全体的に比較考察し、さらにいくつかの視点からのクロス集計も行うなどして、多角的な分析を試みた。

この調査の質問項目には毎回ほぼ同じ内容のものと、回ごとに少しずつ変えたものとがある。ほぼ同じ質問内容としたのは、次のようなものである。回答者の性別、学年、所属する学校名、住居の形態（親と同居か一人住まいかなど）、卒業した高校が宗教系かそうでないか、宗教への関心度合、家の宗教があるかないか、両親が信仰をもっているかどうか、神棚・仏壇などが実家にあるかどうか、初詣、墓参りをしたかどうか、などである。他方、宗教に関わる意見、宗教教育への関心や知識、葬儀形態への意識、サブカルチャーへの関心、ジェンダー問題への関心、オウム真理教問題やイスラム教に関する知識や意識などについては、少しずつ質問内容を変えた。これらは数度にわたって質問したものもあれば、一度しか聞かなかったものもある。

本書の分析の視点は大きく 3 つが設けられている。経年変化の分析とクロス集計による傾向の析出、及び自由記述に見られる傾向の分析である。さらに 1999 年、2000 年、2005 年、2007 年の 4 回にわたって、規模はやや小さいのであるが韓国でもほぼ同様の調査を実施したので、日韓の学生の宗教意識の比較も行なう。日韓比較も調査ごとに行なってきたのだが、4 回を通して見られる傾向を分析した。

経年変化は全 12 回の調査だけでなく、それに満たない数回の調査における変化も扱っている。クロス集計では信仰をもつ学生とそうでない学生とに見られる宗教観の違いなどの比較や、宗教系の高校を卒業した者と非宗教系の高校を卒業した者との比較、性別による比較、学年別の比較などである。また自由記述の分析は、総合報告書では割愛した部分であり、調査ごとに刊行された 12 冊の報告書でもごく一部が紹介されただけであるので、なるべく多くの記述を問題ごとに掲載した。

全体を通しての傾向や特徴についての分析は冒頭の論文で行なった。末尾にはこの調査結果を用いた研究文献の一覧を付した。なお、12 回の調査の概要（質問票、調査対象校、調査分担者・協力者等）については総合報告書に記しておいたので、そちらを参照していただきたい。

2018 年 1 月

編集責任者　井上順孝

目次

はじめに

井上順孝「学生の宗教意識は 20 年間でどう変わったか
——グローバル化と情報化が進行する時代に観察されたこと——」 …… 1

調査の概要
① 回答者数 …… 43
② 調査実施校数 …… 43
③ 在学している学校の宗教系・非宗教系の別 …… 43
④ 卒業した高校の宗教系・非宗教系の別 …… 43
⑤ 回答者の性別 …… 43
⑥ 回答者の学年 …… 44

［Ⅰ］第1回～12回調査結果の経年比較
第 1 章 学生の宗教意識の経年変化
a) 信仰の有無 …… 45
b) 宗教に対する関心 …… 46
c) 神仏霊魂を信じるか
① 神の存在 …… 53
② 仏の存在 …… 55
③ 霊魂の存在 …… 57
④ 先祖は自分たちを見守ってくれている …… 59
⑤ 死後の世界の存在 …… 61

第 2 章 家庭の宗教環境
a) 家の宗教 …… 63
b) 両親の信仰 …… 65
c) 神棚・仏壇等 …… 67

第 3 章 宗教習俗との関わり
a) 初詣 …… 70
b) 墓参り …… 71
c) クリスマスと節分
① クリスマス …… 73
② 節分 …… 74
d) 葬儀について
① 自分が希望する葬法 …… 75
② 親が散骨・自然葬を望んだ場合 …… 77

③ 自分は散骨・自然葬を望むか …… 78
e) 信仰と宗教的習俗
① 非クリスチャンのキリスト教会での結婚式 …… 79
② 無信仰者が葬式のときだけ僧侶をよぶこと …… 80

第 4 章 宗教や宗教家への意見
a) 相談したい宗教家 …… 82
b) 宗教者に求めるもの …… 84
c) 宗教は人間に必要と思うか …… 87
d) 宗教を信じると、心のよりどころができるか …… 89
e) 「宗教はアブナイ」というイメージがあるか …… 91

第 5 章 宗教関連の社会問題
a) 宗教の勧誘について
① 勧誘を受けた経験 …… 93
② 勧誘を受けた宗教 …… 93
③ 勧誘を受けた時期 …… 94
④ 勧誘を受けた場所 …… 95
⑤ 勧誘を受けたときの対応 …… 96
b) 街頭での布教の制限 …… 97
c) カルト問題 …… 99
d) 公的な相談窓口の設置の必要性 …… 102
e) ジェンダー問題
① 役職や地位での差別 …… 104
② 聖地などへの女人禁制 …… 106
③ 同性愛の禁止 …… 109
f) 宗教と政治 …… 111
g) 宗教施設への課税 …… 112

第 6 章 オウム真理教問題
a) オウム真理教についての報道 …… 114
b) 関心の内容 …… 115
c) オウム真理教についての知識 …… 116

第 7 章 イスラム教関連
a) イスラム教徒との関わり …… 118
b) イスラム教への関心 …… 119
c) モスクの設立について …… 120

第 8 章 宗教教育関連
a) 宗教教育の必要性 …… 121
b) 宗教文化教育への意見 …… 122

第 9 章 サブカルチャー、その他
a) 占いへの関心や信頼度
① 手相 …… 124
② 姓名判断 …… 125
③ 血液型による性格判断 …… 125
④ 星占い …… 126
⑤ コンピュータ占い …… 127
b) ノストラダムスによる終末予言への関心 …… 128
c) 超常現象への関心
① 宜保愛子の霊視 …… 129
② 臨死体験 …… 130
③ 前世・生まれ変わり …… 131
④ 死後の世界の存在 …… 132
⑤ オーラの存在 …… 133
⑥ テレパシーの存在 …… 134
d) パワースポット …… 135

第 10 章 友人の信仰
a) 信仰をもつ友人がいるか …… 137
b) 信仰をもつ友人に対する態度 …… 138

第 11 章 情報化への対応
a) 1990 年代末の情報ツールの変化 …… 140
b) インターネット上の宗教関連情報への関心 …… 141

[Ⅱ] クロス集計
第 12 章 宗教への関心の度合いとの相関
a) 宗教に関する意見
① 宗教の必要性に関する意見 …… 143
② 宗教は心のよりどころになるかどうかについての意見 …… 145
③ 宗教はアブナイと思うか …… 147
b) 神仏、霊魂の存在
①神の存在 …… 148
②仏の存在 …… 150
③霊魂の存在 …… 151
c) イスラム教への関心・意識
①イスラム教への関心 …… 152
② 近所のモスクへの意識 …… 153
d) 宗教教育の必要性 …… 154
e) パワースポット …… 156

第 13 章 両親の信仰の有無との相関
a) 宗教への関心 …… 157
b) 宗教は人間に必要と思うか …… 161
c) 宗教はアブナイと思うか …… 164

第 14 章 性別との相関
a) 星占い …… 166
b) 手相 …… 168
c) 姓名判断 …… 169
d) コンピュータ占い …… 170
e) 血液型による性格判断 …… 170

第 15 章 卒業した高校の宗教系・非宗教系の別との相関
a) 宗教への関心 …… 172
b) 宗教は人間に必要 …… 174
c) 霊魂の存在 …… 176
d) 墓参り …… 178
e) 占いの経験 …… 178

第 16 章 学年別との相関
a) 宗教の勧誘の経験 …… 180
b) 宗教は人間に必要か …… 181
c) 宗教はアブナイと思うか …… 184
d) 高校までの宗教教育をどう思うか …… 187
e) 霊魂の存在 …… 189

[Ⅲ] 自由記述に示された意見
第 17 章 信仰・宗教に関わる問題
a) 宗教及び関連事象への関心内容 …… 193
b) 友人の信仰に関して …… 196
c) スピリチュアリティについて …… 197
d) 東日本大震災の心理的影響 …… 199
e) 霊魂のイメージ …… 200

第 18 章 宗教の社会的問題
a) 見知らぬ人からの勧誘に対して …… 202
b) 宗教者の社会的役割 …… 202

第 19 章 脳死状態での臓器移植問題 …… 205

第 20 章 靖国問題
a) 日本での調査 …… 208
b) 韓国での調査 …… 209

第 21 章 オウム真理教問題
a) 入信していた人たちについて …… 211
b) オウム報道について …… 213

第 22 章 イスラム問題 …… 215

[Ⅳ] 日韓比較
第 23 章 宗教意識の比較
a) 信仰をもつ割合 …… 218
b) 神仏や霊魂の存在を信じる割合
①神の存在 …… 219
②仏の存在 …… 219
③霊魂の存在 …… 219
c) 死後の世界 …… 220

第 24 章 家庭の宗教環境
a) 両親の信仰 …… 221

第 25 章 宗教習俗への関わり
a) 墓参り …… 222
b) 信仰と宗教習俗との関係 …… 222

第 26 章 宗教や宗教家への意見
a) 相談したい宗教家 …… 223
b) どんなに科学が発達しても宗教は必要 …… 223
c) 宗教はアブナイと思うか …… 224

第 27 章 宗教関連の社会問題
a) 宗教の勧誘 …… 225
b) 愛国心 …… 225
c) 靖国問題
①対立があることの認識 …… 226
②首相参拝への意見 …… 226
d) 脳死と臓器提供 …… 227
e) ジェンダー問題 …… 228

第 28 章 オウム真理教について …… 229

第 29 章 イスラム問題
a) イスラム教への関心 …… 230
b) 「9.11」以後のイスラム教のイメージ …… 230

第 30 章 宗教教育に関すること
a) 宗教教育の必要性 …… 231

第 31 章 サブカルチャー、その他
a) 占いへの関心
① 手相 …… 233
② 血液型による性格判断 …… 234
③ 姓名判断 …… 234
④ 風水 …… 235
b) 超常現象などへの関心
① テレパシー …… 235
② 前世・生まれ変わり …… 236
c) ウェブ上の宗教情報への関心 …… 236

本調査を参照している研究文献一覧 …… 238

あとがき

凡例

1. パーセンテージは小数点第２位を四捨五入した数値である。
2. 調査対象とした大学、専門学校等のうち宗教系の学校は「宗教系」、国公立や宗教と関係のない学校は「非宗教系」と表記する。
3. 回答者が卒業した高校のうち、宗教系の高校は「宗教系高校」、非宗教系の高校は「非宗教系高校」と表記する。
4. 宗教系かどうかの判断に当っては、國學院大學日本文化研究所編『宗教教育資料集』（すずき出版、1993 年）、公益財団法人国際宗教研究所・宗教情報リサーチセンターのホームページ（下記）に掲載の「宗教系学校リンク集」、及び各学校のホームページを参考にした。

   URL: http://www.rirc.or.jp
5. 男子学生、女子学生はそれぞれ男性、女性と表記する。
6. 各グラフについて若干の説明を加えた方が分かりやすいと思われた場合は、＊をつけてコメントを付した。
7. 宗教別のうち「新宗教」に含める教団は、井上順孝・孝本貢・対馬路人・中牧弘允・西山茂編『新宗教教団・人物事典』(弘文堂、1996 年)に記載された教団を基準とした。

学生の宗教意識は 20 年間でどう変わったか

―― グローバル化と情報化が進行する時代に観察されたこと ――

井上順孝

はじめに

1995 年から 2015 年までの 20 年間に実施されたこの調査は、終了した段階で振り返ってみると、きわめて注目すべき社会変化が起こった時期に実施されたことが分かる。そうなったことにはいくつかの偶然が絡んでいるが、調査の時期は日本社会が世界的な大変化の波に覆われた最中にあたることは、とくに指摘しておきたい。20 世紀末から 21 世紀初めにかけては、グローバル化や情報化が格段の早さで進行し、日本の宗教を包む環境という観点からも、節目と言えるような時期を迎えたからである。

調査を開始する大きなきっかけは 2 つある。1990 年に國學院大學日本文化研究所で宗教教育プロジェクトがスタートしたことと、1993 年に「宗教と社会」学会が設立されてプロジェクト制度ができたことである。学生の宗教意識プロジェクトは、その一つとして、同学会の設立当初から長年にわたり継続された。メンバーの入れ替わりはあったが、延べ数十名が関わる大規模なものであった [1]。こうした調査開始に関する経緯については、すでに何度か述べているので詳細は省くが [2]、大規模な共同調査を持続的に実施するには、それなりのインフラが必要である。それに当たるものが一定程度蓄積されていたことが大きい。

この調査時期の重要性はどこにあるか。少し具体的に述べる。グローバル化と情報化という社会全体の変化に加えて、宗教に関わるいくつかの重要な出来事が国内外で起こったという時期の調査であったという点である。主なものを挙げると、調査開始の年である 1995 年には、1 月 17 日に阪神淡路大震災が起こり、3 月 20 日には東京でオウム真理教による地下鉄サリン事件が起こった。2001 年 9 月 11 日にはニューヨークで同時多発テロ（9.11）が起こった。2006 年には教育基本法の改正による宗教教育の条項が改正された。2009 年には幸福の科学により幸福実現党の結成がなされた。2011 年 3 月 11 日には東日本大震災、そしてそれに起因する福島原発事故が起こった。

これらの国内外の出来事が学生の宗教意識に大なり小なり影響を与えたことが、調査で明らかになった。後述するように、初詣や墓参りなど宗教習俗を行うかなどには、あまり影響はなかったのであるが、宗教という言葉から連想されるイメージや、宗教が関係する社会的出来事への意見などには、少なからぬ影響を与えたことが、回答結果から推測されるからである。

限られたデータから性急な結論を出すことは控えたいが、初回から 12 回まで延べ 6 万人以上

---

1 参加メンバーについては、國學院大學日本文化研究所編『学生宗教意識調査総合報告書（1995 年度～2015 年度）』（國學院大學、2017 年）の巻末に紹介してある。

2 とくに次の 2 つの論文を参照。拙論「宗教の境界線―学生に対する意識調査から」『國學院大學研究開発推進機構　日本文化研究所年報』第 6 号、2013 年、所収、同「ポスト・サリン事件の学生の宗教意識とオウム真理教観―20 年間に生じた宗教意識の変化を中心に―」『國學院大學研究開発推進機構　日本文化研究所年報』第 9 号、2016 年、所収。

に対してなされたアンケートの回答結果には、若い世代の宗教に対する考え方がかなりの程度反映されているとみなしていいだろう。ここまで細かに質問した大規模なアンケート結果は国内ではほとんど類を見ない。それなりに丁寧に分析することが必要である。経年変化やクロス集計、自由記述の内容、そして日韓比較から見えてくるものは何かを、順次述べていく。

12 回の調査のうち、1999 年と 2005 年の調査では 25 の質問項目があるが、それ以外の 10 回の調査では 20 項目である。だが、それぞれの項目の多くには、さらに細かな下位の質問項目が設けられており、実質的には各回で数十の事柄について聞いたことになる。質問の内容を性別、学年、学校名など基本的属性に関するものを除いて大きく分けると、次のようなカテゴリーになる。

(1) 回答者の信仰に関すること
　信仰の有無、宗教への関心、神仏や霊魂の存在を信じるかどうかなど。
(2) 家庭の宗教環境に関わること
　家の宗教があるか、両親の信仰の有無、実家に神棚仏壇などがあるかどうかなど。
(3) 宗教的習俗に関すること
　年中行事、人生儀礼、その他の宗教習俗への関心や参加度合いなど。
(4) 宗教や宗教家に関すること
　宗教への期待、警戒、宗教家への期待など。
(5) 宗教関連の社会問題に関すること
　カルト問題、宗教とジェンダー、宗教と政治など。
(6) オウム真理教問題
　オウム真理教への関心、オウム真理教についての知識など。
(7) イスラム問題
　イスラムへの関心、イスラムについての知識など。
(8) 宗教教育に関すること
　宗教教育の必要性、宗教文化教育への意見など。
(9) サブカルチャー、その他
　占い、予言、超常現象への関心など。
(10) 友人の信仰
　信仰をもつ友人がいるか、その場合どうしているかなど。
(11) 情報化への対応
　情報ツール、インターネットの利用度など。

これらのテーマに関して、以下ではまず経年比較を行うことで、20 年間でどのような変化が見られるのかを示す。12 回の調査すべてにおいて継続的に質問したものだけでなく数回しか質問していないものでも、その間の変化が重要と思われるものは、比較できる年度で比較してある。ほとんど変化がないものと大きな変化が観察されるものとを見比べることで、その違いを生じさせた要因を考える手がかりが得られる。

次にクロス集計では、まず学生自身が信仰をもっているかどうかと相関のある事柄を見ていく。宗教に関する意見や神仏、霊魂を信じる割合など、信仰をもっているかどうかと相関性があると考えられる事柄についてクロス集計した。両親が信仰をもっているかどうかに影響を受ける事柄や、性別による差が明らかと思われる項目について、その相関性について検討する。卒業した高校が宗教系かどうかの影響もいくつか調べた。相関性が強いものとほとんど見られないものとが

ある。大学であると、一部を除いて宗教系といってもそれがほとんど意識されていないことが少なくない [3]。宗教系の高校であると一般的に週 1 時間ほどの「宗教」の時間をもうけており [4]、その影響が大学よりも大きくあらわれるものがあるのではないかと想定してのことである。また学年別とのクロス集計も行ったが、これは大学に在籍していることで変わることがあるかどうかを見るためのものである。

三番目に自由記述に見られる傾向を見ていく。自由記述を求めた質問項目はそれほど多くはないが、宗教への関心や逆に警戒していること、勧誘の経験など、実際の体験を知りたい項目には設けた。靖国問題、オウム真理教やイスラム教についてどう考えているかは、自由記述の内容を検討することで、大半がどのような見方をしているのかについての把握と、どれだけ多様な考えがあるかの双方をみてとることができる。数値だけでは見えにくい点について分析できる。

最後に日韓比較を行う。日韓での同時調査は 1999 年、2000 年、2005 年、2007 年の 4 回行った。10 年に満たない期間での変化しか比較することができないが、それでも両国の学生の宗教意識の違いを考える上では、かなり興味深い結果が得られた。比較の意味で質問項目は極力同じになるようにした。しかし、質問によっては少し違う形式にした。たとえば初詣の質問は韓国では使えない。そうした場合は適宜相当するような別の質問に変えた。日韓の学生の宗教意識を比較すると、非常に似通った回答結果になるものと、かなり異なった結果になるものがある。日韓の社会状況や宗教状況の違いを考えれば、その差がすぐ理解できそうなものもあるが、やや意外な結果になったものもある。占いなど、日韓の差よりも男女差が顕著なものもある。東アジアにおける宗教の社会的評価を比較する上でも参考になると考える。

以下では、経年比較、クロス集計、自由記述、日韓比較の順に、分析と考察を加えていく。

Ⅰ　経年比較で見えてくること

1. 回答者の信仰に関して

a）信仰の有無

若い世代の宗教への関わりについては、若者の宗教離れ説があるかと思えば、若者の間の宗教ブーム説や宗教への関心の深まり説などもあるが、たいていはきちんとした根拠が示されないままの言説である。実際のところ、20 歳前後の若者が信仰をもったり、宗教に関心を抱いている割合はどの程度なのであろうか。この調査ではこうしたテーマについて議論する上で非常に参考になるデータが得られた。それは、12 回の調査に一貫して設けた「あなたは宗教にどの程度関心がありますか。次のうちから選び、さらにそれぞれの質問に答えて下さい」という質問への回答である。用意された回答の選択肢は、「現在、信仰をもっている」、「関心がある」、「あまり関心がない」、「まったく関心がない」の 4 つであったが、このうち「現在、信仰をもっている」と

---

3 1992 年に日本文化研究所で全国 32 大学（短期大学を含む）、4,005 名の学生を対象に行ったアンケートの結果がそれをよく示している。この調査では 2,636 名の回答者が宗教系の大学に在籍していたが、そのうち 91.5%が受験前にその大学が宗教系であることを知っていたと回答している。そして宗教系であることが受験意欲にどう関係したかという質問には 70.7%が「別に気にしなかった」と回答している。詳しくは井上順孝『「宗教教育に関するアンケート」報告書』（国学院大学日本文化研究所、1993 年）を参照。

4 この実態については 1990 年代に國學院大學日本文化研究所の宗教教育プロジェクトで網羅的に調査した。その結果については國學院大學日本文化研究所編『宗教教育資料集』（すずき出版、1993 年）と同『宗教と教育』（弘文堂、1997 年）を参照。

いう回答の割合の変化をみていくと、若い世代が宗教離れしているのかそうでないかの議論に非常に参考になる。

「信仰をもっている」と回答した学生の割合には、あまり大きな変化はないものの、全体の傾向としては 20 年の間にゆるやかな増加傾向である（**グラフ 1a1**[5]参照）。回答者全体での推移を見ると年ごとの変動が大きいが、これは創価大学や天理大学の学生の回答数に影響されたものであり、非宗教系の学校、すなわち国公立及び一般の私立学校の回答者だけで見ると、比較的安定した数値を示している。1995 年から 2007 年までは 5～6%台を推移していて、変化は誤差の範囲と解釈できる幅である。しかし 2010 年に初めて 7%台になり、2012 年には 8%となった。2015 年に 7.7%とやや下がったが、傾向としては信仰を持つ学生はわずかながら、増加傾向にあると言っていい。

ここで創価大学と天理大学の学生からの回答の割合について予め示しておきたい。というのも、この 2 つの大学は他の宗教系の大学とは異なり、信仰をもつ学生の割合がきわめて高い。創価大学の場合、回答者が信仰をもつと答える割合は、92.0%から 99.1%の間である。天理大学だと 1997 年を除いて 7 割と 9 割の間である。これが全体の数値にかなり影響を及ぼす[6]。また信仰をもつ割合だけでなく、両大学の学生の回答者が多かったことによる影響は親の信仰や友人の信仰など、いつくかのことに影響を与えていると考えられる。

創価大学と天理大学がアンケート対象校に含まれていた年と回答者の数、回答者全体に占める割合は下記のとおりである。1997 年と 2012 年は合わせて 5%を超えている。

創価大学と天理大学の回答者が全体に占める割合

	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2005	2007	2010	2012	2015
創価大学　（名）	—	149	96	108	150	115	101	125	97	261	80
全体に占める割合	—	2.6	1.5	1.0	2.3	2.0	2.4	2.9	2.3	6.4	1.4
天理大学　（名）	109	282	—	—	163	116	—	—	—	—	—
全体に占める割合	2.5	4.9	—	—	2.5	2.0	—	—	—	—	—

b）宗教への関心

信仰はもっていなくても、宗教に関心を抱く人は一定数いる。「宗教に関心がある」と回答した学生も 2000 年代に増加傾向にある（**グラフ 1b1** 参照）。しかも宗教系よりも非宗教系においてそれが顕著である（**グラフ 1b2、1b3** 参照）。1996 年から 2001 年までは非宗教系でおおよそ 25～30%が、「宗教に関心がある」と回答している。1995 年に 35%だったのは、おそらくオウム真理教に関する報道が関係している可能性が高い。というのも、翌年から数年このように回答する割合が減少しているからである。しかし、やがて増加に転じ 2005 年に 35%を超え 1995 年と同じような数値になった。増加傾向はその後も続き 2012 年には 50%を超えた。2015 年にはまた下がっているが、2000 年代はおおむね増加傾向にあったと考えた方がいい。

宗教の関心に男女差はあるだろうか。さほど大きな差は見られないが、非宗教系で比較してみると、宗教への関心の 2000 年代における増加が女性の方がやや顕著である（**グラフ 1b4、1b5** 参照）。

---

5 以下、グラフの記号は、Ⅰ部以下の各章と節、及びその中での番号という構成にした。この 1a1 であるとⅠ章 a 節の 1 番目のグラフという意味になる。

6 どの大学で調査を実施するかは、そのときどきのメンバーによって変わる。回答者数も受講者数に依存する。12 回とも実施した大学もあれば 1 回しか行わなかったところもある。多くは数回行っているが、実施校に関しては『学生宗教意識調査総合報告書』（前掲）の巻末に示してある。

他方で注目したいのは「宗教にまったく関心がない」と回答した学生の割合の変化である。これはあまり大きな変化は見られず、12 回の調査を通してほぼ 2 割前後を推移している。非宗教系の方が若干高い数値であることが多いが、宗教系の方が高い年もある。創価大学や天理大学などを除くと、宗教系、非宗教系の違いはあまりない[7]。この質問に「宗教にまったく関心がない」と回答する学生は「意識的無宗教層」とみなせる。その割合はおおよそ 2 割前後ではないかと推測できる。

c）神仏や霊魂の存在について

宗教への意識や態度は信仰の有無を聞くだけでは十分ではない。少し質問を変えるとかなり異なった回答結果になることが分かった。たとえば「信仰をもっている」と回答したのは数%でも、神仏の存在を信じるかを聞くと、「信じる」と回答した割合は 10 数%から 20%になる（**グラフ 1c1、1c3** 参照）。信仰はもっていなくても、神仏の存在を信じるというのは、矛盾のように感じられるかもしれないが、初詣をする人の多さを考えるなら、この結果も日本人の宗教に対する意識のあり方を反映したものとして考えることができる。つまり神や仏、あるいは霊的な存在への信仰はあっても、組織としての宗教に距離を置くということを示しているとも考えられる。また社寺への参拝は直ちに信仰につながるものと思っていないという解釈も成り立つ。

神仏や霊魂の存在について、どう思うかという質問を初めて設けたのは 1999 年で、以後毎回質問した。信仰をもつという回答と、この質問への回答との比較が重要に思われたからである。神の存在に関してはおおよそ 2 割が「信じる」と回答し、3 分の 1 ほどが「ありうると思う」と回答している。「信じる」と「ありうると思う」を合わせたものを「肯定的回答」とすると、神の存在については、半数ほどが肯定的回答になるということである。この傾向は宗教系と非宗教系とを比較してもほとんど違いがない。なかなか興味深い結果である。逆に「否定する」を選択したのは 10 数%であり、これがやはり「意識的無宗教層」と大きく重なっている可能性が高い。

仏の存在を信じる学生は神の存在を信じる学生よりやや少ない[8]。従って仏の存在に対し肯定的に考える学生も若干少ない。ただ否定する学生の割合はほぼ同じである。また宗教系と非宗教系の違いはそれほど多くない（**グラフ 1c2、1c4** 参照）。

神の存在を肯定的にとらえる割合は仏の存在を肯定的にとらえる割合よりも多いが、霊魂の存在を肯定的にとらえる割合はそれよりも多い。ほぼ 6 割を超え、2007 年のように 7 割近くになった年もある。従って、否定する割合も神仏の存在に否定である割合に比べて少なくなっている。2005 年と 2007 年には霊魂の存在を否定する割合が 1 割を切っている。アニミズムは現代でも強い影響をもっているとする説を支持するような結果である（**グラフ 1c5** 参照）。

神仏の存在、そして霊魂の存在という観念と深い関わりをもつのが祖霊という観念である。これに関しては、祖霊の存在というような聞き方ではなく、「先祖は自分たちを見守ってくれていると思うか」という質問を別に設けた。この質問は 1998 年から 2005 年まで 4 回行っている（**グラフ 1c7** 参照）。4 分の 1 から 3 分の 1 ほどが「そう思う」と回答し、4 割弱が「どちらかといえばそう思う」と回答している。3 分の 2 前後が先祖の見守りということに肯定的ということで

---

7 ちなみに創価大学であると、1997 年の調査で 149 名の回答者のうち、142 名が信仰をもっているという選択肢を選んでおり、「宗教にまったく関心がない」を選択した学生はいない。また 2012 年の場合は 261 名の回答者のうち、242 名が信仰をもっているという選択肢を選んでおり、「宗教にまったく関心がない」を選択した学生は 4 名である。

8「仏の存在」という問い方については、少し不適切という意見も調査実施者から出されたが、途中で質問項目を変えると結果の比較がしにくくなるということから、最後までこの表現で質問した。

ある。これも全体で見ても、また非宗教系で見ても、2000 年前後の数年間であまり変化はなく、どちらかと言えば微増傾向である。先祖は自分たちを見守ってくれているという考えをもつ人の割合は神仏や霊魂の存在を肯定的にとらえる割合よりはおしなべて高い。

d) 死後の世界を信じるか

若い世代にとっては、死後の世界という観念は、高齢者に比べてややリアリティが薄いものかもしれないが、彼らの宗教意識を調べるときには欠かせないものの一つである。「死後の世界の存在」を信じるかどうかについては、1996 年から 2000 年まで毎年 5 回にわたって質問している。「信じる」という回答は 10 数%であり、全体、非宗教系ともほぼ一定している。「ありうると思う」という回答が 30 数%であり、5 割ほどが肯定的であることが分かる（**グラフ 1c9、1c10** 参照）。

以上の結果を総合すると、霊魂の存在に肯定的な割合と先祖が見守ってくれることに肯定的な割合はともに 6 割程度で、死後の世界の存在に肯定的な割合は、それより 1 割ほど少ない 5 割程度ということになる。互いに関連性のある質問内容であるが、微妙な違いが、霊魂、先祖、死後の世界というそれぞれの言葉が持つイメージの差を反映していると考えられる。

2. 家庭の宗教環境

a) 家の宗教について

江戸時代に始まった檀家制度（寺請制度）は、明治維新によって政治的な後ろ盾を失った。実質的な社会制度としてはその後も存続しているのだが、明治維新から 100 年を過ぎる頃には、人々の意識に与える影響も弱まってきたことが考えられる。調査対象とした学生の世代は 1970 年代生れから 1990 年代生まれが大半を占めるので、その親の世代は檀家意識がしだいに希薄になっていく時代に子どもを育てたことになる。檀家制度の弱まりは、「家の宗教」という考え方も薄れる方向に作用したと考えられる。調査結果はどうなったであろうか。

まず家の宗教があるかどうかを質問した上で、あると回答した学生に、具体的に宗教名を回答してもらった。宗教系で家の宗教を「仏教」と回答した割合は 1995 年には 56.5%であったが、翌 1996 年には 50%を割り、その後ゆるやかに減少していく。10 年後の 2005 年には 40%を下回る。2010 年代は 30%台の半ばを推移している（**グラフ 2a1** 参照）。この数値では非宗教系の方が家の宗教を仏教と答える割合がやや高いのが注目される（**グラフ 2a2** 参照）。他方で無回答、つまり「家の宗教」という意味が分からない、あるいは「ない」という割合が 5 割を超すようになっている。家の宗教を仏教と回答する割合と無回答である割合とが逆転するのが 2000 年であるので、世紀の変わり目は「家の宗教」という観念の希薄化が顕著になる時期でもあったと言える。家の宗教として、仏教以外の宗教をあげた学生もいるが少数である。

b) 両親の信仰

家庭の宗教環境を考える場合に、より注目したいのは、両親の信仰の有無である。回答者は 20 歳前後が大半を占める。その両親となると、40 歳代から 50 歳代が多くなるであろう。ではその世代の人たちが信仰をもつ割合はどれくらいであろうか。本人が回答したものでなく、子どもの認識に依存した問いであるので、正確さは欠けるが経年変化を見るとある程度の傾向が浮かび上がる。回答者が創価大学や天理大学の学生である場合、両親が創価学会あるいは天理教の信者である割合は高くなると考えられるので、非宗教系の学生の場合で傾向を見てみる。そうすると父親はだいたい 6～7%前後で推移し、12 回の平均が 7.2%である。母親は 9～10%前後で推移し、平均が 10.2%である。母親の方が 3%ほど高いことが分かる（**グラフ 2b2** 参照）。

これは 2 割程度から年によっては 5 割以上、信仰を持つ割合が、母親の方が父親を上回ってい

ることになり、回答者においてはこれほどの男女差がないことを考えると、興味深い結果である。20 歳前後では男女差があまりなくても、中高年になると差が出てくるということを示唆しているからである。男女差が時代によって変化する可能性も考慮しなくてはならないが、20 年間の調査を通して、学生の世代では性差が一貫して小さく、その親の世代では一貫して明確に差があるということからするなら、やはり加齢によって差が生じたという見方の方に妥当性がある。20 年間で大きな変化は見られないものの、21 世紀にはいり若干の増加傾向も見られる。これは回答者における傾向と重なるので、両親の信仰の有無が回答者である学生の信仰の有無にどの程度関係があるかはクロス集計の章で扱う。

c）神棚・仏壇等

家の宗教という認識はしだいに乏しくなっていることが分かった。両親の信仰はあまり大きな変化はないものの少なくとも減少傾向ではない。こうした自分や親の信仰についての認識を聞いた質問に対し、家庭に宗教的なものがあるかどうかというモノの次元での質問もした。実家に神棚、仏壇等があるかどうかという質問である。ここからはかなり明確な減少傾向が見てとれる。

家庭に神棚、仏壇等があるかどうかについては 1997 年以降 10 回質問している。学生が住んでいるところではなく、実家にそうしたものがあるかどうかという聞き方である。むろん親と同居している場合は、学生が住んでいる家について答えることになる。この回答結果も非宗教系でみて行く方が全体の傾向を推測する上では適している。というのも、神棚や仏壇は、キリスト教徒は置かない傾向が強く、宗教系がむしろ消極的に見える可能性があるかである。非宗教系で推移をみるといずれも減少傾向にあることが分かる。18 年の間に神棚のある家の割合ではおおよそ 15%、仏壇のある家の割合ではおおよそ 10%、それぞれ減少している（**グラフ２c３**参照）。

この結果から、次の項目で述べるように神社仏閣に行く割合はあまり変わらないのであるが、家庭で神棚や仏壇に向かって手を合わせたりするような割合は減っていることが推測される。ちなみに「亡くなった近親者の写真を飾ったもの」があると回答した割合は 30 数%を保ち、大きな変化は見られない。

3. 宗教習俗への関わり

a）年中行事 —初詣とお盆の墓参り

宗教習俗の代表的なものとしては年中行事と人生儀礼があるが、この調査では年中行事のうち、初詣とお盆の墓参りについて毎回質問し、クリスマスと節分についてはそれぞれ 1 回だけ質問した。初詣については 95 年の調査では「あなたの家族は今年の初詣はどうしましたか。次のうちから選んで下さい」という質問形式であったが、96 年以降は「あなたは今年の初詣はどうしましたか。次のうちから選んで下さい」とした。回答の選択肢はいずれも「家族と行った」、「家族とは別に行った」、「行った家族もいるが自分は行かなかった」、「家族の誰も行かなかった」、「その他」とした。質問の仕方が少し変わっても、選択にあまり影響がないと考えられるので、95 年も含めて比較する。初詣に行った回答者はおおよそ半数で、どちらかと言えば増加傾向にある（**グラフ 3a1** 参照）。これは宗教系でも非宗教系でもあまり変わらない（**グラフ 3a2** 参照）。

墓参りについては、95 年は「あなたの家族は去年のお盆の墓参りはどうしましたか。次のうちから選んで下さい」という質問内容であり、96 年以降は「あなたは去年のお盆の墓参りはどうしましたか。次のうちから選んで下さい」という内容である。回答の選択肢は「家族と行った」、「行った家族もいるが自分は行かなかった」、「家族とは別に自分だけで行った」、「家族の誰も行かなかった」、「その他」である。直近のお盆の墓参りについて尋ねたのであるが、これもおおよそ半数が墓参りに行っている。また初詣と比べると、増加の傾向が顕著である。

ここではまとめて示したが、細かく見ると初詣と墓参りの違いは、家族と一緒に行ったかそうでないかの割合である。初詣であると、家族とは別に行った割合がやや少ない程度であるが、墓参りは大半が家族と一緒に行っている。これは日常的に観察されることを考え併せても当然の結果である（**グラフ** 3a1、3a2 参照）。

神棚、仏壇が実家にある割合が明らかに減少傾向にあるのに対し、宗教的習俗への関わりはどちらかといえば増加傾向である。これは宗教的習俗への意識が変わったのではという観点だけでなく、住居形態などの生活形態の変化が及ぼす影響としても考える余地がある。むろん、一般的に初詣や墓参りという年中行事は、家庭に神棚とか仏壇を置くということに比べて宗教的なものと感じられる割合が弱いという可能性もある。

b）クリスマスと節分

クリスマスと節分については、それぞれ 1 回しか調査していないので経年変化を示せないが、初詣や墓参りとの比較で考えられることなどについて付記しておきたい。クリスマスについては、1995 年に「あなたの家族は去年のクリスマスはどうしましたか。次のうちから選んで下さい」と質問し、回答の選択肢は「家族でクリスマスパーティを開いた」、「家族の誰かと教会に行った」、「家族では特に何もしなかった」、「その他」とした。約 3 分の 2 が家族とは特に何もしなかったと回答している（**表** 3c1 参照）。家族と教会に行ったのは宗教系で 0.6%、非宗教系で 1.2%である。両者とも少ない上に非宗教系の方が数値が高い。これはキリスト教の大学でも学生は信者は少ないことと、宗教系には神道系、仏教系、新宗教系が含まれていることを考えると奇妙な結果というわけではない。

節分は 1996 年に「あなたは今年の節分はどうしましたか。次のうちから選んで下さい」と質問し、回答の選択肢を「家族と豆まきをした」、「家族と神社または寺院に行った」、「家族では特に何もしなかった」、「その他」とした。これもクリスマスと似たような結果になり、「家族では特になにもしなかった」が 6 割近くであり、家族で豆まきをしたが 3 割弱である。宗教系と非宗教系であまり差がない。また家族と一緒に神社や寺院に行った割合はクリスマスのときに家族とともに教会に行く割合よりも低い（表 3c2 参照）。

以上のことから、クリスマスや節分を家族で楽しむのは 3 割弱であり、どちらも宗教施設を訪れる回答者は 1%にも満たないということが分かる。イベントとして定着しているという現状を反映した回答結果になっている。

c）葬儀について

葬儀については社会全体で 20 世紀末から大きな変化が生じている。これは檀家意識の弱まりと関係していると考えられるが、実際に仏式の葬儀が減り、無宗教式の葬儀、あるいは直葬と呼ばれる葬儀すら行わない形態も出てきている。また埋葬の場合も墓地ではなく散骨・自然葬という形態を選ぶ人も少数ながら存在する。

まず自分の葬儀についてはどのような形を望むのであろうか。「自分が希望する葬法はどれですか」と質問し、回答の選択肢を「神道式」、「仏式」、「キリスト教式」、「その他の宗教による式」、「宗教色のない式」、「葬式をやらない」、「どれでもいい」とした。これを 1999 年から 2015 年までの変化で見ると、非宗教系で神道式、仏式がともに増加傾向にあり、「宗教色のない式」、「葬式をやらない」が減少傾向にあるという興味深い結果になった（**グラフ** 3d2 参照）。神道式はもともと少ないので小さな変化であるが、仏式は 10%ほど増えている。逆に「葬式をやらない」は 3 分の 1 近くに減っている。21 世紀になると、散骨・自然葬 [9]、あるいは直葬がメディアで

9 散骨・自然葬は安田睦彦が 1990 年に結成した「葬送の自由をすすめる会」などにより、社会的に知られるよう

話題になり、実際そうした葬儀が増えているとされるのであるが、若い世代がむしろ葬儀面での仏教回帰、ないしは宗教回帰的な様相を示していることは非常に注目される。

葬儀について質問されても、若い世代にとって、自分の葬儀というのは、あまりリアリティが感じられないかもしれない。だが、1990 年代に散骨・自然葬と呼ばれる新しい葬法が少しずつ広まったことを考慮して、1999 年から 2015 年の間に 5 回にわたって、散骨・自然葬や自分が希望する葬法などについて質問した。まず散骨・自然葬について知っているかどうかを尋ねたのちに、「親が『散骨・自然葬』を望んだ場合、あなたはそれに従いますか」という質問をした。非宗教系でみると、ほぼ 8 割程度が従うと答えている（**グラフ 3d3** 参照）。しかし「自分が死ぬときのことを考えた場合、散骨・自然葬を希望しますか」という質問に「はい」と答えたのは 3 割程度であり（**グラフ 3d4** 参照）、2010 年以降は 1 割程度減少傾向である。

d）信仰と宗教的習俗のズレ

信仰心があると答える学生は 1 割にも満たなくても、初詣に行き、墓参りをし、葬式は宗教的なやり方がいいと思う学生は過半数を占めることが分かった。こうした宗教的習俗への日本人の関わり方には、考えようによっては首尾一貫していない。その一つがキリスト教の人口が 1%程度の日本で、結婚式はキリスト教式を選ぶ人が過半数に達するという現象である。キリスト教式といっても本当に牧師や神父が司式をしているのか疑わしいものもあるし、またキリスト教式が神式を上回ったのは 1990 年代後半のことであるから、一種のブームに過ぎないという捉え方もできる。

ではキリスト教を信仰していないカップルがキリスト教式を選ぶのを学生たちはどう思っているのであろうか。1998 年と 99 年に「クリスチャンでない人が、キリスト教会で結婚式をあげるのはおかしい」と思うかどうかを質問した。回答の選択肢は「そう思う」、「どちらかといえばそう思う」、「どちらかといえばそう思わない」、「そう思わない」である。

いずれの年も「そう（おかしいと）思う」という回答の割合は 1 割未満であり、「どちらかといえばそう（おかしいと）思う」回答を含めても 3 割に満たない。おかしいと思わない人が 4～5 割であるから、半数ほどはキリスト教の信仰がない人のキリスト教会での結婚式は、別に変なことだとは思っていないことが分かる。この割合は宗教系と非宗教系であまり違いはない（**グラフ 3e1、3e2** 参照）。

この質問と並べて、「ふだん信仰のない家が、葬式のときだけ僧侶（お坊さん）をよぶのはおかしい」と思うかどうかも聞いた。この質問は 1998 年～2000 年に続けて 3 回設けたが、1998 年と 99 年は結婚式の場合と似たような結果になった（**グラフ 3e3、3e4** 参照）。しかし 2000 年は少し否定的な傾向が増えている。つまりそうしたことはおかしいと思うようになったということである。残念ながら、その後、この質問は設けておらず、2000 年にはキリスト教会での結婚式について質問していないので、21 世紀におけるこの問題の動向については推測できない。誤差と見るには大きな違いだが、葬式観に変化が兆し始めたという可能性はあるけれども、分からない。またキリスト教会での結婚式にも同様の意識の変化が生じたかどうかも分からない。20 世紀末における一つのデータとして提示しておくしかない。

4. 宗教や宗教家への意見

a）相談したい宗教家

になった。1999 年からは樹木葬もあらわれた。これに関しては井上順孝編『現代宗教事典』（弘文堂、2005 年）の「散骨・自然葬」の項目やコラム「樹木葬」を参照。

学生たちの多くは信仰をもっていないわけであるが、宗教や宗教家に対してはどのような印象や意見をもっているのだろうか。日本では比較的身近な宗教家としては神職、僧侶、神父・牧師、修道女（シスター）が考えられるが、そうした人たちが人生の悩みなどの相談の対象として考えられているのだろうか。

2001 年から 15 年まで 6 回にわたり、「人生に悩んだ時に、相談したいと思う宗教者がいたら次から選んでください」という質問を設け、回答の選択肢を「仏教の僧侶」、「キリスト教の牧師・神父・シスター」、「神社の神主」、「街の占い師」、「その他の宗教家（具体的に：　　）」とした。複数回答可である。2007 年からはこれに「ネット上で相談に回答してくれる人」、また 2010 年からは「テレビに登場するような霊能者」を加えた。

宗教系と非宗教系とでそれほど大きな違いはないものの、この質問は非宗教系で見た方が全体の傾向が推測しやすいと考えられる。特徴的なのは、「キリスト教の牧師・神父・シスター」がやや減少傾向にあることと、それに関連して 2007 年以後は「仏教の僧侶」がもっとも相談したい宗教家となっている。日本で数が多い宗教家といえば、神道の神職、仏教の僧侶、キリスト教の牧師・神父等であるが、2001 年は牧師等、僧侶、神職の順であったのが、2015 年には僧侶、牧師等、神職となり、その差が縮まっている（**グラフ 4a2** 参照）。

途中から選択肢に加えた「ネット上で相談に回答してくれる人」と答えた学生も 1 割以上いるが、他方で占い師が減少している。2001 年と 2015 年とを比べると、5%強の減少である。占い師からネット上への相談者へと移行している可能性もある。

b）宗教家に求めるもの

相談の対象としてではなく、社会的存在としての宗教家、宗教者には何が求められていると考えているのだろうか。2001 年、2005 年、2010 年、2012 年の 4 回にわたり、「宗教者であるならば、やるべきだと思う社会的活動が以下にあったら選んでください」と質問した。回答の選択肢は、「差別をなくすための活動」、「被災者・被害者の心のケア」、「死を迎えようとする人の心の支え」、「障害者や高齢者に対する社会福祉活動」、「その他（具体的に：　　）」である。これも複数回答可である。2005 年だけはこれに「平和のために祈る」という選択肢を加えた。また 2010 年には「平和運動」、そして 12 年には「病に苦しむ人の心の支え」を加えた[10]。もっとも多かったのは「死を迎えようとする人の心の支え」であり、もっとも少なかったのは、「障害者や高齢者に対する社会福祉活動」であった（**グラフ 4b1** 参照）。宗教系と非宗教系とで、それほど大きな差は見られない（**グラフ 4b2、4b3** 参照）。

2011 年 3 月 11 日には東日本大震災が起こった。その後、各宗教関係者の援助活動もなされたが、それはこの回答結果にはあまり影響していないようである。「被災者・被害者の心のケア」を選択した学生の割合も、2011 年の調査で増えたということはない。宗教関係者の援助活動が、あまりメディアで報道されなかったということも関係しているかもしれないが、宗教家と被災者・被害者の心のケアという問題がとくに連想されていない可能性の方が高い。非宗教系でみると、2012 年の回答で一番多いのは「死を迎えようとする人の心の支え」の 45.7%であり、「被災者・被害者の心のケア」は 32.8%であり、4 番目の多さになる。宗教系では「平和運動」が 44.8%でもっとも多く、「被災者・被害者の心のケア」は 40.5%であり、3 番目の多さである。非宗教系よりは心のケアへの期待が高い。どちらも障害者や高齢者に対する社会福祉活動」がもっとも少ないことと考え合わせると、宗教家を社会福祉や困った人のケアに結びつける発想はさほど強

---

10 新しい選択肢を加えた背景には、この時期、研究者の間で宗教の社会貢献に対する研究が盛んになり、より細かく宗教者への期待を知りたいという要望があったことが関係している。

くはない。

c）宗教の必要性

ではそもそも宗教は必要だと学生たちは感じているだろうか。これを調べるために、設けたのが、「どんなに科学が発達しても、宗教は人間に必要だ」と思うかという質問である。これは 1995 年から毎回質問した。回答の選択肢は「そう思う」、「どちらかといえばそう思う」、「どちらかといえばそう思わない」、「そう思わない」の 4 つである。

平均すると 10 数%が「そう思う」であり、「どちらかといえばそう思う」を含めた肯定的回答は 5 割前後である。ただし 21 世紀にはいってやや増加の傾向も見られる（**グラフ** 4c1 参照）。科学が発達しているから宗教は必要でなくなっていくという考えは少なくとも多数派ではない。

宗教の役割を肯定的に見ているかどうかを知るためのもう一つの質問として、「宗教を信じると、心のよりどころができる」と考えるかどうかを、1995 年から 2015 年までに 7 回質問した。これも宗教系と非宗教系でさほどの違いはなく、また年ごとにやや数値の変動が大きいものの、増減に関しては傾向は見えない。全体で見ると、「そう思う」は 2 割前後であり、「どちらかといえばそう思う」を含めた肯定的回答は 5〜6 割である（**グラフ** 4d1 参照）。

肯定的意見で比較すると、「どんなに科学が発達しても、宗教は人間に必要だ」という意見より少し多めである。「宗教は人間に必要」という表現は、宗教を多少歴史的に長い目で見るというニュアンスが含まれるのに対し、「心のよりどころができる」は、現在の状態に引き付けて考えやすい表現かもしれない。問の表現の微妙さがあらわれていると考えられる。「そう思わない」という否定的な意見は二つの質問とも 2 割前後であり、これも「意識的無宗教層」と重なるはずである。

他方で、否定的な意見をもっているかどうかに関しても質問した。1998 年から 2015 年まで 7 回、「一般的に宗教は、アブナイというイメージがある」と思うかどうかを質問した。アブナイと思う割合は 2 割前後で、年とともにやや減少気味である。「どちらかといえばそう思う」を加えると 6 割前後だが、この割合にも大きな変化はない（**グラフ** 4e1 参照）。

宗教にアブナイというイメージを抱きがちな学生が過半数ということは、宗教は必要とか、心のよりどころになると思いつつも、あまりイメージは良くないということを示している。これも宗教系と非宗教系とでさほど大きくない（**グラフ** 4e2 参照）。宗教系の大学に通っても、宗教に肯定的イメージを抱くようになるわけでもない。

5. 宗教関連の社会問題に関する意見

a）宗教の勧誘

宗教関連の社会問題として代表的なものの一つは、街頭、あるいは戸別訪問による宗教勧誘である。宗教は布教者がいることによって広まるわけであるから、宗教の勧誘と言われていることは、とりわけ設立されたばかりの宗教側からすれば、存続にとっての生命線とも言える。長く社会に定着している宗教の場合は、親から子どもへと伝えられる割合が高いので、それほど布教に力を入れなくても、世代から世代へとある程度伝わる。現代日本でいえば神社神道や仏教宗派がそうであり、実は現在のユダヤ教やイスラム教も基本的にそうである。しかし、設立されて間もない新宗教は日本でも国外でも布教に熱心な教団が多い。また伝統的な宗教であっても、改革運動的な性格を帯びると勧誘が積極的になる。福音派のキリスト教、ペンテコステ派などがその良い例である。

しかし、積極的な布教とか熱心な布教というより、正体を隠した勧誘、宗教ではないと言って行われる勧誘、さらにときに危機感を煽って多額の金銭を求めるようなタイプの勧誘となると、

深刻な社会問題になってくる。こうした団体をカルトと呼ぶ研究者やマスメディアもある。日本におけるカルト問題（あるいはカルト・セクト問題）は、とりわけオウム真理教事件以後さかんに議論されるようになった。こうしたカルト問題の対象となる教団の例はいくつかあるために、日本社会では「宗教の勧誘」がしばしば否定的にとらえる傾向が強くなった。

まず宗教勧誘の経験について 2000 年と 2005 年に「あなたは見知らぬ人から宗教の勧誘を受けたことがありますか」という質問をした。そのような経験を持つ学生は、2000 年が 51.6%で 2005 年が 43.6%である（**グラフ 5a1** 参照）。勧誘は複数回ある人もいると考えられるが、一つだけについて記入してもらった。

勧誘を受けた宗教だが、何の宗教であったか、当然ながら学生側も分からない場合があるが、具体的に挙げられたものが多かった。その宗教名を、神道、仏教、キリスト教、新宗教に区分すると、2000 年は新宗教がもっとも多く、2005 年はキリスト教がもっとも多い。かなりの変動があるが、その理由はこれだけでは分からない（**グラフ 5a2** 参照）。

また勧誘を受けた時期は高校時代がもっとも多い。ただ回答者は大学 1 年生がもっとも多く、1 年生は入学して間もない頃に回答しているので、この点も関係していると考えるべきである（**グラフ 5a3** 参照）。

勧誘を受けた場所については、あらかじめ「大学内」、「駅周辺（路上）」、「自宅」、「電話」、「その他（具体的に：　）」という選択肢を設けておいた。駅周辺と自宅が多い（**グラフ 5a4** 参照）。大学内は少ないが、これは上記と同じ理由で、回答者に 1 年生が多く、大学生活をまだ長く送っていないことが関係する。これに加え、オウム真理教事件以後、大学が学内での宗教勧誘を禁止するケースが多くなっていることも関係していると考えられる。

勧誘を受けたときの対応についても質問した。「無視した」、「一応話を聞いた」、「相手の説明を聞いて関心をもった」、「相手の説明を聞いて反論し議論になった」という回答の選択肢を用意した。両年とも「無視した」がもっとも多く、約半数である。しかし「一応話を聞いた」という人も 4 割ほどいる（**グラフ 5a5** 参照）。対応した場合を記載しているであろうから、実際はこの回答の背後に無視した場合が数多くあると推測すべきである。しかし、たとえ一度であっても、このように見知らぬ人からの勧誘に対し、一応話を聞いたという経験をもつ学生が 4 割ほどにのぼったという事実は、この問題を考える研究者や教員にとって心に留めておくべきことである。

b）街頭での布教の規制

見知らぬ人からの布教のうち、街頭での布教は歩いている人を呼びとめて行われるものであり、これに対し不快や不安に感じている学生もいる。1995 年から 2015 年まで 8 回にわたり、「街頭での布教は迷惑だから、法律によって規制すべきだ」と思うかどうかを質問した。回答の選択肢は「そう思う」、「どちらかといえばそう思う」、「どちらかといえばそう思わない」、「そう思わない」の四択である。これについては宗教系と非宗教系でほとんど違いはなく、規制すべきという意見に「そう思う」割合は 3 割前後で、「どちらかといえばそう思う」を含めた規制に肯定的な回答の割合は 3 分の 2 ほどで、大半は規制して欲しいという意見に傾くようである。ただ回ごとに誤差の範囲と考えるにはやや大きいブレがあるが、理由は分からない（**グラフ 5b1、5b2** 参照）。

c）大学での「カルト対策」

オウム真理教事件が起こったことが大きく関係していると考えられるが、事件後大学によっては「カルト問題」を重視し、カルト対策を打ち出しているところがある[11]。2012 年から 15 年

---

11 大学におけるカルト問題については、櫻井義秀『「カルト」を問い直す―信教の自由というリスク』（中央公論新社、2006 年）などを参照。

までの 3 回、「大学が主催して、新入生などを対象に『カルト対策』の教育をすることについてどう思いますか」という質問をした。回答の選択肢は、「ぜひやるべきである」、「やったほうがいい」、「あまりやらなくてもいい」、「やるべきではない」、「『カルト対策』というのが何のことか分らない」とした（**グラフ 5c1** 参照）。

これについては非宗教系の方がカルト対策の教育が必要とする割合が少し高い（**グラフ 5c2、5c3** 参照）。3 回とも 2 割程度が「ぜひやるべきである」であると回答し、「やったほうがいい」がいいも 4 割程度である。合わせて 6 割ほどが肯定的である。さらに「『カルト対策』というのが何のことか分らない」という回答が 10 数%から 20%ほどあるので、この人たちを除くと、カルト対策という意味が分かっている人のうち、おおよそ 4 分の 3 ほどが対策を肯定的にとらえていることになる。

d）相談窓口の必要性

そうなると、大学だけでなく、別に相談窓口のようなものを求める人もいるかもしれない。1998 年から 2015 年まで 7 回にわたり、「宗教的トラブルがあったときに相談できるような公的な窓口の設置が必要だ」と考えるかどうかを質問した。やはり四択にしたが、回答結果は興味深いものとなった。1998 年から 2000 年までは「そう思う」という回答が 7 割前後を占めたのであるが、2005 年に 50%台半ばに減少し、2010 年から 2015 年まではほぼ 5 割である（**グラフ 5d1** 参照）。かなり特徴的な変化であり、考えられるのは 2005 年はオウム真理教事件から 10 年が経った年であり、事件の影響が薄れ始めた可能性もある。

e）ジェンダー問題

ジェンダー問題に関しては、大きく 3 つの事柄について複数回の質問をした。教団内における役職や地位に関わる差別、聖地への女人禁制の類の差別、そして同性愛に関する差別である。同性愛については最近は LGBT[12]、あるいは SOGI[13]といった概念の中で議論されることが一般的になったが、ジェンダー問題についての質問を始めた当初はどちらもそれほど学生の世代にも知られていなかったので、同性愛というテーマで調査した。ジェンダー問題に関しては、予想された通り、男女差が明確にあらわれた。

役職や地位に関する差別については二通りの聞き方をした。1999 年、2000 年の調査では、「宗教によっては女性が教団の特定の役職や地位につけない」ことをどう思うかを聞いた。差別を肯定する割合は、いずれの年も男性が 4 割程度であり、女性は 3 割弱である。2001 年～2012 年の 4 回の調査では、「宗教によっては、女性が教団の特定の役職や地位につけないことがあります。これは差別だと思いますか」という質問に変えた。男性が差別だと思う割合は 4 割～5 割であるが、女性が差別だと思う割合は、5 割から 6 割強である。二つの質問とも男女差はおおよそ 10%である（**グラフ 5e１～5e4** 参照）。

ただ質問の中に差別という言葉を入れた場合とそうでない場合では、男女とも反応が変わる。「決まりだからそれでいい」というのは 4 割程度だが、「差別だと思わない」というのは 3 割弱になる。つまり差別という言葉を用いたことで、これを好ましいことではないと思う割合が 1 割ほど増えたと理解できる。女性の場合も「決まりだからそれでいい」というのは 3 割弱だが、「差別だと思わない」というのは 10 数%で、やはり 1 割割り以上減る。やはり差別という表現になると、それを否定する割合が高くなる。

聖地への女人禁制の類についても、男女差は 1 割以上である。決まりだからよいというのは男

---

１２ Lesbian, Gay, Bisexual, Transgender の頭文字をとった用語。

１３ Sexual Orientation and Gender Identity の頭文字をとった用語。

性で 4 割強であり、女性で 3 割前後である（**グラフ 5e5、5e7** 参照）。また差別ではないというのは男性で 3 割強であり、女性で 2 割前後である。1 割程度の差があるとともに、差別という言葉が入ったことで、1 割程度否定的にとらえる割合が高くなる（**グラフ 5e6、5e8** 参照）。

最後の同性愛の禁止も男女差が大きい。宗教がそうしたことに関与すべきではないと考える割合は女性の方が高い（**グラフ 5e9〜5e12** 参照）

ジェンダー問題に関しては女性の方が敏感であることが分かる。この傾向は韓国でも同様であったので、日韓比較の章で述べる。

f) 政治と宗教

政教分離についてどう思うかは、具体的に問を提示した方がいいと考え、「特定の宗教団体が特定の政党を支持する」ことについてどう思うかを質問した。よくないと思う割合はほぼ 5 割である。どちらかといえばよくないと思う割合を加えると、7〜8 割があまりよくないことと考えていることが分かる。宗教団体が特定の政党を支持する例は少なくない。創価学会による公明党支持は広く知られているが、特定の政治家を宗教団体が支持する例は神社神道、新宗教の一部に見られる。複数の宗教が関わっている日本会議というような組織の政治への強い関与もある[14]。しかし学生たちはそうした実態にはあまり詳しくないと考えられる。それでも一般的には好ましくないと考えている（**グラフ 5f1** 参照）。

g) 宗教施設への課税

宗教施設の課税については、そもそも知識がない可能性が高いので、少し説明を加えたような質問文にした。すなわち「神社、寺院、教会などの宗教施設は現在税金がかかっていないが、一般の建物と同じように課税すべきだ」と思うかどうかを聞いた。宗教施設として用いられているものは非課税であることへの意見ということになるが、1996 年と 97 年は同意するかしないかの二択にした。1999 年と 2000 年は、「そう思う」、「どちらかといえばそう思う」、「どちらかといえばそう思わない」、「そう思わない」の四択にした。二択の場合、同意が 4 割前後で、四択だとそう思うが 3 割弱、肯定的回答が 5〜6 割程度である。（**グラフ 5g1、5g2** 参照）

年によりやや変化が大きいが、おおよそ半数ほどが課税した方がいいという意見である。宗教施設だから税制上特別の扱いをしてよいというような考えは、半々ほどということである。今後こうした考えがどのように変化するかは、メディアの報道にも影響されそうである[15]。

6. オウム真理教問題

a) オウム真理教の報道について

1995 年の 3 月 20 日に東京でオウム真理教の幹部による地下鉄サリン事件が起こり、同年 5 月 16 日に教祖の麻原彰晃（本名松本智津夫）が逮捕された。オウム真理教については 1995 年の第 1 回調査ではオウム真理教に関する質問は設けていない。調査票の内容はプロジェクトメンバーによって、すでに前年度から何度も会議を経て決定されていた。事件から 3 週間後ほどに開始された各大学での調査に、事件に関することを反映させるのは困難であった。またこの時期は事件がオウム真理教によるものかどうか一応の保留がついていた段階であったので、これも対応を困難にした一因である。宗教学者の中にさえ、当初サリン事件がオウム真理教によるものであ

---

14 日本会議における政治と宗教の関わりについては、菅野完『日本会議の研究』（扶桑社新書、2016 年）、塚田穂高『宗教と政治の転轍点 保守合同と政教一致の宗教社会学』（花伝社、2015 年）などを参照。

15 宗教法人になると宗教施設や境内には課税されないが、宗教家は所得に対し課税されているという事実を知らない学生が大半である。

ることを疑問視する発言さえ見られたような状況だったのである[16]。

翌 1996 年の調査では、地下鉄サリン事件以前のオウム真理教についての知識や、犯罪には関わらなかったがオウム真理教に入信していた人たちへの意見を聞いた。そして 1997 年からはオウム真理教についての報道への関心に着目し、「現在あなたは、オウム真理教についての報道に対して、どれくらい関心がありますか。次の中から選んで下さい」という質問をした。回答の選択肢は「非常に関心をもっている」、「多少関心をもっている」、「あまり関心をもっていない」、「関心はない」の四択である。以後同様に、1999 年、2010 年、2012 年、2015 年と、計 5 回質問した（**グラフ 6a1** 参照）。

ここで注目されるのは事件後 20 年を経た 2015 年でも、「非常に関心をもっている」と回答したのは 12.8%で、1997 年の 13.4%とあまり変わらず、しかも 1999 年、2010 年、2012 年よりも高い数値だということである。「多少関心をもっている」という回答を含めると、この間おおよそ 6〜7 割が一定の関心をもっていることが分かる[17]。

b）関心の内容

オウム真理教についての報道には関心が持続しているが、一体どのような内容の報道に関心を寄せていたのであろうか。1997 年、1999 年、2005 年の 3 回質問しているが、1997 年、99 年の回答の選択肢と 2005 年の回答の選択肢は少し異なるので、厳密な比較はできない。それでもここから見える傾向がある。それは「裁判のなりゆき」にはしだいに関心が薄れるということである。2006 年 9 月 15 日には麻原彰晃への死刑が最高裁判決で確定している。サリン事件に直接関わった中核的信者たちの死刑も次々に確定していく。そうした中に裁判のなりゆきへの関心が薄れるのは理解できる。麻原彰晃、逮捕された信者たち、事件後の信者たちに関する報道には関心を失っていく傾向が見える。ただし、サリン事件の被害者に関する報道への関心はあまり変化がない。ほぼ 3 割ほどが 2005 年まで関心を抱いている（**グラフ 6a2 参照**）。

c）オウム真理教についての知識

地下鉄サリン事件から、時間が経過するとともに、「事件の風化」ということも言われるようになった。1997 年にはサティアンも壊され、かつてオウム真理教の信者たちが活動していたことを想起させるような建物はすっかりなくなった。これによりオウム真理教に関する知識も薄れてきた可能性がある。そこで事件後 10 年を経た 2005 年から 2015 年まで 4 回にわたり「オウム真理教について、以下のうちあなたが知っているものに〇をしてください」という質問を設けた。回答の選択肢は次の 5 つを設けた。

「1995 年に地下鉄サリン事件を起こした」、「教祖は麻原彰晃（本名松本智津夫）である」、「現在はアーレフと名乗って活動している」、「修行によって空中浮揚など超能力が得られると主張した」、「信者たちが修行していたところはサティアンと呼ばれていた」。

2010 年と 12 年には、これに次の 2 つの選択肢を加えた。「サリン事件にかかわった教祖と幹部の何人かは死刑が確定した」、「オウム真理教の元信者の一部は、現在アレフという団体に所属

---

16 研究者によって具体的にどういう発言がなされていたかは、平野直子・塚田穂高「メディア報道への宗教情報リテラシー――「専門家」が語ったことを手がかりに」（宗教情報リサーチセンター編『〈オウム真理教〉を検証する―そのウチとソトの境界線』、春秋社、2015 年、所収）において実証的に示されている。

17 学生たちのオウム真理教に対する関心が事件後 20 年以上経過しても、一定程度の高さがあることについては拙論「学生たちが感じたオウム真理教事件―宗教意識調査の一六年間の変化を追う」（宗教情報リサーチセンター編、同上）を参照。なお、この論では刊行の時期が 2015 年 8 月であるので、2012 年の調査までのデータが議論の対象になっている。

している」、「麻原彰晃の弟子であった上祐史浩は「ひかりの輪」という団体を作った」。

さらに 2015 年には「真理党を結成し（1990 年の）衆議院選挙に教祖と幹部信者たちが立候補した」という選択肢を加えた。

これも回答の選択肢が少しずつ異なるので、比較に注意を要するが、明らかな傾向だけを述べておきたい。サリン事件を起こしたことへの知識はそれほど低下しておらず、2015 年でも 9 割近くが知っている。事件により数千人の被害者が出たことも減っておらず、これも 9 割近くが知っている。教祖が麻原彰晃ということも 8 割程度は維持されている。

これに対しオウム真理教がアレフと名称を変えたことや、麻原の側近であった上祐史浩がアレフの分派である「ひかりの輪」を設立したことなどは 2015 年時点で半数程度にとどまる。アレフについては 53.1%であり、「ひかりの輪」については 43.7%である（**グラフ６ｃ１**参照）。

以上で分かるように、マスメディア等の報道に見られる「事件の風化」と学生たちの意識の変化は少し異なる面がある。オウム真理教問題は、報道においては地下鉄サリン事件の被害者や麻原彰晃他、逮捕された幹部の裁判での量刑などに多くの紙数が費やされているが、当初からの疑問を深めるような議論は減っている。つまり、オウム真理教がなぜとりわけ若い世代の関心を集めたのか、理系の専門的知識を得た人物が幹部になったのはなぜか、いまだに信仰を続けている人がいるのはなぜか、等々である。

これに対しこの調査からは、学生たちには事件の中核的部分への関心が一定程度持続されていることを感じさせる部分がある。2015 年度の調査であると、事件が起こったのが自分の生まれる前であったという学生も出てきているが、それでもオウム真理教についての知識や関心は一定程度が維持されている。このこと自体も研究する必要のある事実である。

7. イスラム教に関すること

a）イスラム教との関わり

イスラム教に関係する事柄への質問は、2005 年、2012 年、2015 年の調査で行った。ただし 3 回とも同じ質問内容としたのは「最近のあなたのイスラム教への関心は次のうちどれですか」と「あなたのイスラム教徒（ムスリム）とのかかわりで、次のうちあてはまるものがあったら選んでください」である。2001 年 9 月 11 日に米国で起こった同時多発テロ（「9.11」）に関する質問は 2005 年だけ、またモスクに関する質問は 2012 年と 2015 年だけである。

イスラム教についての印象は、国外のイスラム教関連のニュースに大きく影響されることが分かる。この 3 回の調査に大きく関わっているのは、「9.11」の他には 2013 年頃に組織化が進んだとされる IS（イスラム国）の問題がある。とくに 2015 年 1 月にはジャーナリストの後藤健二氏が IS により殺害されるという事件が起った。2015 年のアンケート調査の直前であり、この事件が学生に与えた心理的影響はかなり大きかったと思われる。それは近所にモスクができることをどう思うかという質問の回答にあらわれている。

ニューヨークのツインタワーがハイジャックされた 2 機の飛行機が激突したことで崩れ落ちた「9.11」の事件後、最初に実施された調査は 2005 年の第 8 回調査である。事件から 3 年半ほど経った時期であったが、回答した学生たちの記憶はまだ鮮明であったと考えられる。米国同時多発テロ事件以後、イスラム教へのあなたのイメージはどうなりましたか。」という質問に「少し悪くなった」という回答が 23.1%、「悪くなった」という回答が 26.3%であった。ほぼ半数がイメージの悪化の傾向になったことが分かる。

2000 年代以降、イスラム教について継続的に質問したのは、イスラム教への関心とイスラム教との関わりである。2005 年から 15 年までの 10 年間では、「イスラム教徒の友人がいる」と

いう回答がやや増加傾向である（**グラフ 7a1** 参照）。1.8%から 3.6%とほぼ倍になっているが、絶対数としてはさほど多くない。「国外にイスラム教徒の友人がいる」も 2012 年が 3.6%、2015 年が 3.4%で 2005 年の 1.7%よりは多い。

b）イスラム教への関心

イスラム教への関心はどちらかというと増加傾向とみるべきであろう。「大変高い」と「やや高い」を合わせた数が、2005 年は 31.3%であるが、2015 年は 53.1%と増加している。「あまり高くない」と「ほとんどない」を合わせた割合が 2005 年の 66.7%から 2015 年は 46.5%に減っている。ただし、後述するように、これは必ずしも肯定的な関心とは限らず、否定的な評価を含んだ関心の高まりも含まれていると考えられる（**グラフ 7b1** 参照）。

c）モスクができることへの意見

ニュースで扱われるイスラム問題はテロなどが多いので、身近なイスラム教についてどう考えているかを知るため、日本国内に増加しつつあるモスクに関連した質問をした。「モスク（イスラム寺院）が近所にできることになったとするとあなたは不安を感じますか」という質問をした上で、「不安は感じない」、「少し不安を感じる」、「かなり不安を感じる」という 3 つの回答選択肢を用意した。そして二番目と三番目を選んだ人その理由を簡単に記入してもらった（**グラフ 7c1** 参照）。

モスクが近所にできることに不安を感じる割合は 2015 年の方が増えている。2012 年には「不安は感じない」は 52.7%と過半数を超えていたのに、2015 年には 36.4%と 3 分の 1 強へと減少している。逆に「かなり不安を感じる」は 13.7%から 21.3%へと約 1.5 倍に増えている。後述の自由記述の結果から判断しても、これには明らかに IS 問題が関わっている。

モスクが建てられることへの意見は大学ごとにもかなり違いがある。表には示さなかったが、留学生が多い東京外国語大学だと「不安は感じない」という回答がかなり高く、2012 年で 81.0%、2015 年で 67.6%と、調査した大学の中ではもっとも高い数値である。それでも 2012 年と 15 年を比べると 13.4%も減少している。

細かく調べてみると、この傾向はすべてに当てはまることが分かった。2012 年と 2015 年の両年とも調査を実施した大学のうち、比較的「不安は感じない」と回答した割合の高い大学で比べてみる。創価大学は 65.1%から 57.5%へ、関西大学は 63.9%から 49.6%へ、北海道大学は 63.8%から 52.6%へ、國學院大學は 61.2%から 40.7%へ、大阪大学は 59.7%から 52.5%、神田外語大学が 56.1%から 50.0%へと減少している。数%の減少から 20%以上の減少まで減少の幅には差があるが、軒並み警戒感が高まっており、これは学生一般に生じた傾向と考えて差し支えないであろう。2012 年の調査では「不安は感じない」と回答する学生が 5 割を超えた大学が 32 大学中 21 大学あったのに対し、2015 年では 36 大学中 7 大学に過ぎない。IS 問題は日本人のイスラム教のイメージ形成に対し非常に暗い影を落としたのである。

8. 宗教教育関連

a）宗教教育の必要性

宗教教育について学生たちがどのように感じているかは、もともとこのアンケート調査が 1992 年に國學院大學日本文化研究所が中心になって実施した「宗教と教育に関する調査研究」が一つの契機になっていることもあり、明らかにしたいことの一つであった。中等教育における宗教教育について、どのように感じているかを知りたいと考えたが、公立学校や一般の私立学校では受験の知識以上の宗教についての授業を行っているところはまずない。これは 1990 年に開

始された日本文化研究所の宗教教育の実態調査によって確認された[18]。

そこで、この調査では 1996 年から 99 年まで 4 回にわたり「高校までにもっと宗教についての基礎知識を教えるべきだ」と考えるかどうかを質問した。回答の結果はほぼ同じで、「そう思う」という積極的な肯定は 11～13%程度であり、「どちらかいえばそう思う」を含めた肯定的回答は 3 割少々であった。

ほぼ同じ傾向であったので、2000 年の調査からは質問を省いたが、2005 年に「高校までにもっと世界の宗教についての基礎知識を教えるべきだ。」というふうに「世界の」という言葉を加えた設問にしたところで回答結果が大きく異なった。「そう思う」は 22.5%と約 2 倍になり、肯定的回答は 5 割を超した。

さらに 2007 年から 15 年まで「高校までに日本や世界の宗教文化についての基礎的な知識を学んだ方がいい。」と設問を変え、宗教文化という表現にし、学んだ方がいいというふうにややゆるやかな表現にしたところ、「そう思う」は 35～44%の間に増え、肯定的回答は 7～8 割に達した。「そう思わない」という回答も 1996 年からの質問では 35～45%であったのが、2007 年以降は 1 割未満になった。穏やかな表現にしたことの影響を差し引いても「宗教」についての基礎知識ではなく「宗教文化」の基礎知識に変えたことの影響は大きいと考える（**グラフ 8a1** 参照）。

b）宗教文化教育について

日本や世界の宗教文化についての基礎的な知識を学ぶことは、宗教文化教育と呼ばれるものの重要な構成要素である[19]。こうした教育の必要性を認める割合は、調査でもいのちの教育に次いで高い割合となった。

2007 年の調査から宗教文化教育に対応するような事柄を選択肢に入れ、それらがどの程度必要と思われているかを調べた。「神社や寺院など、日本の伝統的宗教施設を見学する機会を設けた方がいい」は、2010 年、12 年、15 年の 3 回選択肢に入れたが、これはさほど高くなく、「そう思う」と積極的な意見をもった割合は 2 割弱である。「坐禅や礼拝の作法など、各宗教の儀礼や修行法を体験する機会を設けた方がいい」は 2012 年と 15 年の 2 回選択肢に入れたが、さらに低く、「そう思う」と積極的な意見は 13～14%程度である（**グラフ 8b1** 参照）。

けれども、「どちらかといえばそう思う」を含めた肯定的意見であると、前者は 6 割近くになり、後者も 4～5 割程度となる。また宗教文化教育の必要性を感じる割合は、学年によっても異なるので、クロス集計の項でそれについては触れる。

9. サブカルチャー、その他

a）占い

占いへの関心は若い世代でも高い。一般的には女性の方が占いを信じやすいとされている。学生の意識調査でもそれは明らかとなった。この点は性別とのクロス集計で扱うので、ここでは全体の傾向を簡単に示す。質問した占いは手相、姓名判断、血液型による性格判断、星占い、そしてコンピュータ占いである。

手相は 1995 年、1999 年、2000 年に質問したが、「かなり当たると思う」は大体 1 割程度である。男女別にみると、「かなり当たると思う」と回答した割合は、この 3 回を見ると、女性が

---

18 これについては國學院大學日本文化研究所編『宗教と教育』（弘文堂、1997 年）を参照。

19 2011 年 1 月 9 日に宗教文化教育推進センターが設立されたが、そこでの目的の一つは、自国と外国の宗教文化についての基礎的知識や素養を身に付けるための教育システムの向上である。

男性の 1.5 倍から 2 倍以上になる。「当たることもあると思う」という回答を含めた肯定となると、男性は 5 割強、女性は 7〜8 割の間である。3 回ともかなりの差である（**グラフ 9a1** 参照）。

姓名判断も同様に女性の方が当たると思う割合が多い。肯定派が男性が 4 割強であるのに対し、女性は 6〜7 割の間である（**グラフ 9a2** 参照）。

血液型による性格判断は占いとは少し違うが、相性占いなどによく用いられるので、ここに含めた。やはり女性が当たると思う割合が高い。肯定派は男性が 5 割前後で女性が 7 割前後である。星占いは 1995 年と 1999 年の 2 回しか質問していないが、男女差はもっとも大きい。肯定派で見ると男性が 4〜5 割なのに対し、女性は 7〜8 割にのぼる（**グラフ 9a3** 参照）。

星占いはいくつかの聞き方をしているが、「生まれ月による星占い」というのは 1995 年と 99 年のものである（**グラフ 9a4** 参照）。

コンピュータ占いはコンピュータの普及によって登場した新しい占いであるが、信頼度はもっとも低い。これも 1995 年と 1999 年の 2 回聞いている。WINDOWS95 の登場で、コンピュータを使う人が 1990 年代後半に急激に増えていくが、そうした時期における質問である。肯定派が男性で 3 割前後で女性が 4 割前後である。また「かなり当たると思う」は男女とも 2%に満たない。それほど真剣にやっているわけではないことが見えてくる（**グラフ 9a5** 参照）。

b）ノストラダムスによる終末予言への関心

1990 年代後半はノストラダムスの終末予言が話題になった[20]。そこで学生たちはこれをどの程度信じているのか、またどのような終末論が広まっているのかを調べた。1995 年から終末の年とされる 1999 年まで、これを信じるのかどうか毎回質問した。さらに予言が外れたことになる 2000 年にも同様の質問をした。1999 年が近づくにつれて信じる割合が増えるわけでもなかった。「信じる」という回答は減少気味である。また 2000 年にも 2%が「信じる」と回答しているが、どれだけ真面目な回答かは分からない。実はこれも女性の方が少し多いのだが、占いほどの差はない（**グラフ 9b1** 参照）。

c）超常現象への関心

超常現象に関しては、1990 年代前半に非常に話題になっていた宜保愛子の霊視、臨死体験、前世・生まれ変わり、死後の世界の存在、オーラの存在、テレパシーの存在、こうしたものをどの程度信じるかを調べた。この質問は 1995 年以降 99 年まで毎年行って、ほぼ似たような傾向にあることが確かめられた。

しかしながら、宜保愛子の霊視はマスメディアの扱いによって非常に信じる割合が変動するものである。霊視・霊感というような一般的な事柄として質問すれば、それほど変動は生じなかったと考えられるが、個人名を含めた質問になると、細木数子や江原啓之もそうであるが、マスメディアとりわけテレビがどのようなスタンスで扱うかによって、彼らの発言の影響が大きく左右される。宜保愛子の例についてはすでに細かな分析をしたことがあるが、1992 年に行った日本文化研究所の調査では、その霊視を肯定的に捉える学生が 5 割を超していたのであるが[21]、この調査では 1995 年の時点で肯定的なとらえ方は約 4 分の 1 になっており、以後しだいに減少し 99 年には 2 割を切っている[22]（**グラフ 9c1** 参照）。

---

20 ノストラダムスの大予言が最初に流行したのは 1970 年代であり、五島勉の一連の著作が大きく影響したと言われている。1990 年代のブームはいわば第二波と言えるものである。これについては井上順孝『若者と現代宗教』（ちくま新書、1999 年）を参照。

21 詳しいデータは国学院大学日本文化研究所編『報告書』（1993 年）を参照。

22 拙論「霊能番組への関心と宗教情報リテラシー —第 9 回学生宗教意識調査の結果を中心に—」『國學院大學研

興味深いのは「死後の世界の存在」を信じる割合が、全体ではずっと 15%前後であるのに対し、「前世・生まれ変わり」を信じる割合が、17%と 19%の間で、3%ほど多いという点である。一度だけの結果なら誤差の範囲とも言えるが、5 回を通して同じ傾向というのは、この二つの表現が学生たちにやや異なった認知をもたらしている可能性を考えるべきである。「ありうると思う」を含めた肯定的回答で見ても、肯定派が死後の世界で 5 割前後であるのに対し、前世・生まれ変わりが 6 割以上である。平均して 1 割ほどの差がある（**グラフ 9c3、9ｃ4** 参照）。

つまり「死後の世界」はないけれども「前世・生まれ変わり」はある（だろう）と考えている学生が一定数いるということである。輪廻転生というインドに起源する観念が現代の日本で死後の世界という観念よりもわずかながらでも影響力をもっていることになる。

オーラやテレパシーはサブカルチャーとの関わりが深い観念になるが、これらは信じる割合が多少減る。それでも肯定派は 5 割あるいは 5 割近くになる（**グラフ 9ｃ5、9c6** 参照）。

d）パワースポット

パワースポットという言葉がブームになったのは 2000 年代である。女性誌を中心にパワースポット特集が頻繁に出された。したがって、女性の方が信じる割合が高いと言われていたが、2010 年から 2015 年までの 3 回の調査結果でも、女性の方がパワースポットを信じる割合は高い。宗教系と非宗教系でも多少差があり、宗教系の方が若干、信じたり、ありうると思ったりする割合が高い。しかし男女の差は 3 回ともそれより大きい。

男性の場合、信じるは 12.9～14.4%の範囲であったが、女性は 14.6～17.6%の間であった。またありうると思うは男性が 29.7～32.1%で、女性が 39.9～42.2%である。男性は 4 割強が肯定派で女性は 5～6 割程度が肯定派である（**グラフ 9d1** 参照）。女性がより関心を抱く事柄であると言える[23]。

10. 友人の信仰

a）信仰をもつ友人がいるか

友人の信仰に関しては、信仰をもつ友人の割合と、友人が信仰をもっていた場合にそれをどう意識するかについて質問した。「あなたの友だちの中に、信仰をもっている人がいますか」という質問に「はい」と答えた割合は、8 回の調査で 28.2～36.3%の範囲である。1990 年代後半にはどちらかと言えば減少気味ではあるが、2000 年代には減少していない。全体として、そう大きな変動ではない（**グラフ 10a1** 参照）。

b）信仰をもつ友人に対する態度

友人が信仰をもっている場合、どういう態度になるかであるが、1995 年から 99 年までの調査では「他の友人と変わらない態度で接している」が 7 割前後であり、2000 年から 2005 年までの調査では 7～8 割と少し増えている（**グラフ 10b1、10b2** 参照）。

この設問では回答の選択肢を一度変えているので、その影響が少しあらわれているようである。95 年からのものは「変わらない態度」以外の選択肢が否定的なものになっている。すなわち「やや気にしながら接している」、「だいぶ気にしながら接している」、「その信仰をやめるように勧め

究開発推進機構日本文化研究所年報』第 1 号、2008 年、所収、参照。

23 筆者が 2010 年 6 月に「イーウーマン」が主催するウェブサイトで、「あなたはパワースポットを信じますか?」というテーマでサーベイを行ったことがある。393 名が回答したが、そのうち 72%が「はい」と回答した。回答者の多くは働いている女性であるので、むしろ学生よりも 30 代、40 代の女性の方が関心を抱いていることが推測される。

ている」である。この選択肢は問題ではないかという議論が出たので、2000 年からは、「他の友人より親しく接している」、「他の友人よりはちょっと気にして接している多い」として、肯定的ニュアンスと否定的ニュアンスの双方の選択肢を並べた。

こうした選択肢が「他の友人と変わらない態度で接している」の割合に影響を与えた可能性がある。なお、肯定的、否定的の両方を提示した 3 回の調査では、「だいぶ気にしながら接している」が「他の友人より親しく接している」の 2〜3 倍の多さになっている。

11. 情報化への対応

a) 1990 年代末の情報ツールの変化

情報ツールは 20 年の調査期間の間に大きく変わった。調査開始の 1995 年は WINDOWS95 が登場して、日本社会にインターネットが急速に広まり始める年である。21 世紀にはいると、宗教団体がホームページを作成する例も増えてきた[24]。学生たちがコミュニケーションツールとして用いるものも、固定電話から携帯電話・PHS、そしてスマートフォンと変わっていった。それによって宗教情報へのアクセス方法も変わってきた。使用するコミュニケーションツールを 1998 年と翌 99 年に調べているが、わずか 1 年でもその変化は顕著である。

1998 年 4 月〜6 月の時点で 13.9%の学生が用いていたポケベルは翌年の同時期には 1.2%と 10 分の 1 以下になってしまっている。逆に携帯電話・PHS は 56.4%から 76.9%に増えている。パソコンを使ったメール・通信も 11.0%から 19.1%と 2 倍近くに増えている（**グラフ 11a1** 参照）。

b) インターネット上の宗教関連情報への関心

こうしたコミュニケーションツール、そして情報収集ツールの変化は非常に大きいが、その変化を追うことはこの意識調査の目的ではない。しかしそうした新しいツールでどのような宗教情報にアクセスしているかは調べておくべきことである。そこで 2001 年から 2010 年までどのようなホームページに関心があるかを調べた。

宗教関連のホームページを分類する方法はいくつかあるが、他の質問項目との連関性を考える上で、次のような回答の選択肢とした。すなわち「宗教団体のホームページ」、「オカルト・超常現象に関するホームページ」、「癒しに関するホームページ」、「UFO に関するホームページ」、「占いに関するホームページ」である。これらに関心あるかをたずね、またこのいずれにも関心がないという選択肢も設けておいた。

結果を見ると宗教に関わるホームページにはさほど関心がないことが分かる。これらのホームページに関心がないと回答した割合がもっとも高く、男性で 5 割から 7 割強、女性で 4 割弱から 5 割強程度である。年によってだいぶ差があるが、インターネットの普及度、教団がホームページを作成した割合、モバイル化などいくつかの要因が絡むので、これだけでこの変化の理由を推定するのは難しい。宗教団体のホームページへの関心は概して低く、男性で 3〜5%、女性で 1〜3%である（**グラフ 11b1、11b2** 参照）。

サブカルチャーに関わるサイトなどもそれほど多くの関心をもっているわけではないが、注目すべきは男女差である。とくに占いのサイトだと、男性が 1 割前後であるのに対し、女性が 3 割以上になっている。この性別による差はクロス集計の章で扱う。

---

24 20 世紀末の宗教界のインターネットへの対応については、国際宗教研究所編『インターネット時代の宗教』（新書館、2000 年）が参考になる。

Ⅱ　クロス集計で見えてくること

クロス集計の軸としたのは、宗教への関心の度合い、両親の信仰の有無、性別、卒業した高校の宗教系・非宗教系の別、学年別である。それぞれに相関性が高いと想定されたものについてクロス集計を行ったが、ほとんど相関性がないということが意味を持つ場合もあるので、一部はそうした結果についても示した。

1.「宗教への関心の度合い」との相関

信仰をもつ回答者や、宗教に関心をもつ回答者は宗教に関わる事柄に肯定的な捉え方をする割合が高いのではないかと考えられるので、次の質問項目とクロス集計した。宗教に関する意見、神仏や霊魂の存在を信じるかどうか、イスラム教への関心・意識、宗教教育の必要性、パワースポット。非常に高い相関性が見られたもの、ある程度の相関性が見られたもの、ほとんどないものなどがある。

a）宗教に関する意見

「どんなに科学が発達しても、宗教は人間に必要だ」という問いへの回答は、宗教への関心の度合いと深く関係していると想定される。「信仰あり」と答えた人は、宗教は人間に必要だと考える割合が高くなると予測されるが、比較的はっきりとこの傾向は見てとれる。「宗教は人間に必要だ」とする割合の多さは、どの年度においても、「信仰あり」、「関心あり」、「あまり関心なし」、「まったく関心なし」の順で多い。

「信仰あり」という回答者は宗教は人間に必要だと思う割合が 11 回の調査で 45.4%～62.5%の範囲になる。「関心あり」だと 28.6%～34.3%の範囲である。「あまり関心なし」で 5.5%～12.4%、そして「まったく関心なし」で 3.1%～6.0%である。「信仰あり」のもっとも低い年でも「関心あり」のもっとも高い年よりも高い割合である。同様のことは「関心あり」と「あまり関心なし」の間でも言える。「あまり関心なし」と「まったく関心なし」では 2 回ほど例外はあるものの、似たような傾向である。この傾向は複数ならべたグラフで一目瞭然である（**グラフ 12a1** 参照）。「信仰あり」の列と「まったく関心なし」の列の違いは明白である。

やはり宗教への関心の度合いと相関性があると考えられるのが、「宗教は心のよりどころになるか」に対する回答の割合である。これも同様のグラフを作成したが（**グラフ 12a2** 参照）、列ごとのパターンは非常に似通っている。多少の変化はあってもどの年も「信仰あり」、「関心あり」、「あまり関心なし」、「まったく関心なし」の順に「宗教は心のよりどころになる」と思う割合が高い。当然の結果であるが、その差がどの程度であるかが可視化されたことに意味がある。

では「宗教はアブナイと思うか」という宗教の否定的評価への回答はどうであろうか。これは信仰をもつ方がアブナイと思う割合は減少し、関心が薄れると宗教はアブナイと想う割合が高くなっている。ただし信仰がある人が宗教に関心ある人よりも、アブナイと思う割合が高い年もあるので、信仰をもつからといって、アブナイという警戒が大きく弱まるわけではなさそうである（**グラフ 12a3** 参照）。信仰をもつ人は 1 割前後から 10 数%がアブナイと思うと回答し、宗教にまったく関心がない人は 3 割から 4 割強がアブナイと思うと回答しているので、信仰をもつ人と「意識的無宗教層」とでは明確な違いがある。

b）神仏、霊魂の存在

神仏や霊魂の存在を信じる割合と宗教への関心との相関を見てみる。信仰をもつ人の神の存在を信じる割合の高さは顕著で、信仰をもっている人とそれ以外とでは神の存在を信じる割合には明確な違いがある。だが、関心の強弱のレベルで比較すると、必ずしも相関は明確ではない。宗

教への関心がまったくない人の方があまりないという人より神の存在を信じる割合が少しだけ高い年もある（**グラフ** 12b1 参照）。

仏の存在に関しても同様のことが言える（**グラフ** 12a2 参照）。霊魂の存在は宗教への関心ともっとも相関性が弱い（**グラフ** 12b3 参照）。

c）イスラム教への関心・意見

宗教への関心とイスラム教への関心のクロス集計結果は注目すべきである。信仰ありという人よりも宗教に関心があるという人の方がイスラム教への関心は高いのである。2005 年、12 年、15 年の 3 回の調査とも同じ結果であった。信仰をもつ人は自分の宗教以外にはあまり関心をもたないということかもしれない。留意したい点である（**グラフ** 12c1 参照）。

モスクに不安を感じない割合は、信仰があると関心があるとでほとんど差がない。まったく関心がない人が、一番不安に感じる割合が高い（**グラフ** 12c2 参照）。

イスラム教への関心やモスクに対するイメージのこうした動向は、日本における宗教教育の内容を考える上でも非常に参考になるところがある。

d）宗教教育の必要性

これも信仰をもつ人が宗教教育の必要性を感じる割合がもっとも高いわけではないことに注目したい。むしろ信仰はないけれども宗教に関心がある人の方が割合が高い年もある（**グラフ** 12d1 参照）。

e）パワースポット

これは信仰の有無、さらに宗教への関心の有無とも関係がないことが分かった（**グラフ** 12e1 参照）。

2. 両親の信仰の有無とのクロス集計

両親が信仰をもつかどうかは、回答者の信仰や宗教への関心、また宗教が必要と思う割合などに強い相関があるのではないかと考えられる。どの程度の相関性かを確かめた。

a）宗教への関心

父母の信仰の有無は回答者の信仰の有無に大きく関係するが、信仰はないが宗教に関心があるという割合にはあまり関係ない。「ほとんど関心がない」と「まったく関心がない」という割合と逆の相関がある。つまり父母が信仰をもつと、子どもは信仰をもつ割合が高くなり、宗教にほとんど、あるいはまったく関心がないという割合が低くなるという予想されたとおりの結果であるが、その影響の度合いがこのクロス集計で分かる。平均して父親で 9.9 倍、母親で 11.6 ほどの大きな差が見られた（**グラフ** 13a1 参照）。

この差を分かりやすく示すために表にした。

	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2005	2007	2010	2012	2015	平均
父親信仰あり	40.0	47.4	57.0	39.3	43.7	57.6	54.3	51.7	57.2	54.8	62.3	55.1	51.7
父親信仰なし	3.7	4.1	5.7	3.9	4.6	5.0	4.4	4.8	5.0	6.6	8.6	6.0	5.2
あり÷なし	10.8	11.6	10.0	10.1	9.5	11.5	12.3	10.8	11.4	8.3	7.2	9.2	9.9

	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2005	2007	2010	2012	2015	平均
母親信仰あり	36.7	42.2	54.8	42.2	42.1	56.6	48.3	50.1	53.6	54.6	59.4	53.5	49.5
母親信仰なし	2.9	3.2	4.4	2.7	3.5	4.1	3.8	3.9	4.3	5.6	7.7	5.2	4.3
あり÷なし	12.7	13.2	12.5	15.6	12.0	13.8	12.7	12.8	12.5	9.8	7.7	10.3	11.6

また父母とも信仰をもっている場合には、さらにこの傾向が強くなると考えられるので、2015 年の結果から、父母とも信仰をもっている場合と、もっていない場合とを比較した。差はさらに大きくなり、父母とも信仰がある学生の場合、父母とも信仰がない学生に比べ、自身が信仰をもつ割合は 14.3 倍になった（**グラフ 13a2** 参照）。

b）宗教は人間に必要と思うか

父母の信仰の有無を「どんなに科学が発達しても、宗教は人間に必要だ」という意見への回答結果との相関もかなりはっきり見いだされる（**グラフ 13b1** 参照）。父あるいは母が信仰をもっている場合とそうでない場合で、宗教は人間に必要と思う割合を比較すると、父母とも約 3.6 倍の差が出た。親が信仰をもっていると、子どもが宗教が必要と思う割合はやはりかなり高くなることが分かった。11 回の調査を通して両者の差の比にはあまり大きな変動がなく、3.1 倍から 4 倍の範囲に収まっている。親の影響を考える上でこれも非常に参考になる結果である。

参考までに 1995 年から 2015 年までの回答結果から、宗教は人間に必要だという意見に「そう思う」と答えた割合を父母別に表にしておく。

	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2005	2007	2010	2012	2015
父親信仰あり	42.1	43.5	51.4	39.6	42.4	49.6	51.7	52.8	45.9	49.1	39.9
父親信仰なし	15.3	15.5	16.0	15.8	15.3	16.1	18.6	21.1	17.4	18.5	15.1

	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2005	2007	2010	2012	2015
母親信仰あり	40.4	41.1	47.2	41.5	43.1	48.1	49.9	49.7	44.9	49.6	38.3
母親信仰なし	14.5	15.0	15.6	15.1	14.3	15.6	18.1	20.8	17.0	17.6	14.9

c）宗教はアブナイと思うか

宗教はアブナイと思うというのは、宗教に対する否定的評価である。父あるいは母に信仰があると否定的評価は少なくなると考えられるが、実際そのような結果になった。しかし、宗教は人間に必要と思うという割合のような大きな差はない（**グラフ 13c1** 参照）。父母が信仰をもっていても、宗教に対する警戒心が大幅に減るというわけではないことを示す。また「宗教一般」あるいは「社会的に批判を浴びるような宗教」と父母が信仰しているような宗教とは異なるものと認知している可能性がある[25]。

これも分かりやすくするため、父母それぞれが信仰をもっている場合とそうでない場合とで、宗教はアブナイと思っている割合の違いを表にしておく。7 回の調査の平均で父母の場合とも約 1.5 倍の差が出ている。つまり父もしくは母が信仰をもっていなかった場合は、もっていた場合にくらべ、宗教はアブナイと思う割合が 1.5 倍ほど多くなるということである。

	1998	1999	2005	2007	2010	2012	2015	平均
父信仰あり	15.6	15.9	17.1	13.7	13.3	10.8	10.4	13.8
父信仰なし	22.4	21.0	28.4	22.1	18.2	17.0	18.5	21.1
なし÷あり	1.4	1.3	1.7	1.6	1.4	1.6	1.8	1.5

25 こうした推測をする一つの理由は、新宗教の教団を調査していて、信者の一部は自分たちの教団が新宗教として社会的に議論されていることを知らなかったり、問題を起こすのは特定の教団だけだという認識を抱いている場合が少なくない、ということを感じたからである。

母信仰あり	14.8	15.0	14.2	14.4	12.1	9.8	13.2	13.4
母信仰なし	22.9	21.2	29.2	22.1	18.6	17.3	18.4	21.4
なし÷あり	1.5	1.4	2.1	1.5	1.5	1.8	1.4	1.6

3. 性別との相関

性別とクロス集計したのは、すでに今までのさまざまな調査で男女差が明らかになっている占いに関する質問である。星占い、手相、姓名判断、コンピュータ占い、そして血液型による性格判断である。どの程度の違いが出るのかを見たい。

a) 星占い

星占いに関しては、4 回質問しているが表現の仕方が年により異なる。1995 年と 99 年は「生まれ月による星占い」であり、2000 年は「西洋星占い」、そして 2005 年は「毎日テレビでやる星占い」である。いずれの表現でも男女差は顕著である。「かなり当たると思う」と「当たることもあると思う」という肯定派の割合で見て、女性は男性の 1.5 倍ほどの多さである（**グラフ 14a1** 参照）。

生まれ月による星占いと西洋星占いではあまり違いはないが、「毎日テレビでやる星占い」となると、男女とも信じる割合に大きな違いはないものの、肯定派の割合は明らかに減少する。星占いそのものを信じている人は媒体はあまり問題ではないが、どちらかというと信じるという人には何が媒体かも影響するということを示している。

b) 手相

手相は 1995 年、1999 年、2000 年に質問したが、「かなり当たると思う」は大体 1 割程度である。男女別にみると、「かなり当たると思う」と回答した割合は、この 3 回を見ると、女性が男性の 1.5 倍から 2 倍以上になる。「当たることもあると思う」という回答を含めた肯定となると、男性は 5 割強、女性は 7～8 割の間である。3 回ともかなりの差である（**グラフ 14ｂ1** 参照）。

信じるかどうかという聞き方をした 2005 年の質問でも、「信じる」割合は、女性は男性の 2 倍以上になる。肯定派で 20%以上の差が出ている。

c) 姓名判断

姓名判断も同様に女性の方が当たると思う割合が多い。肯定派が男性が 4 割強であるのに対し、女性は 6～7 割の間である（**グラフ 14c1** 参照）。信じるか信じないかというような 2005 年の聞き方でも、信じる割合は女性が男性の 2 倍以上である。

d) コンピュータ占い

コンピュータ占いはコンピュータの普及によって登場した新しい占いであるが、信頼度はもっとも低い。これも 1995 年と 1999 年の 2 回聞いている。WINDOWS95 の登場で、コンピュータを使う人が 1990 年代後半に急激に増えていくが、そうした時期における質問である。肯定派が男性で 3 割前後で女性が 4 割前後である。また「かなり当たると思う」は男女とも 2%に満たない。それほど真剣にやっているわけではないことが見えてくる（**グラフ 14d1** 参照）。

e) 血液型による性格判断

血液型による性格判断は占いとは少し違うが、相性占いなどによく用いられるので、ここに含めた。やはり女性が当たると思う割合が高い。肯定派は男性が 5 割前後で女性が 7 割前後である。星占いは 1995 年と 1999 年の 2 回しか質問していないが、男女差はもっとも大きい。肯定派で見ると男性が 4～5 割なのに対し、女性は 7～8 割にのぼる（**グラフ 14e1** 参照）。

以上の結果から、多少の誤差を見込んでも、占いに関しては女性が占いが当たると思ったり、占いを信じたりする割合は、男性のおおよそ 1.5 倍ととらえていい。男女差はすでに広く知られ

ていることであるが、学生の世代で実際のところどれくらいの違いがあるのかの見当がついたことに意味がある。この結果からすると、「女性の方が占いを信じやすい」は適切な表現だが、「男性はあまり占いを信じない」は適切とは言い難いことになる。

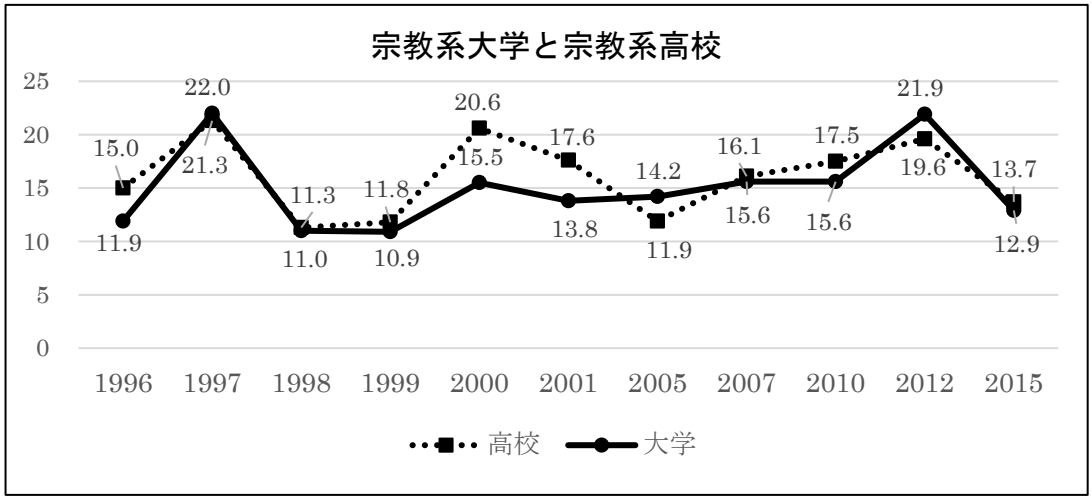
4. 卒業した高校の宗教系か非宗教系かの別とのクロス集計

宗教系の高校はたいていの場合、週に 1 時間ほどの宗教の時間を設けている。その学校に関係した宗教を中心とした授業を行うのが一般的である。キリスト教系であれば聖書やイエスの生涯についての授業、仏教系であれば、仏典の基礎知識やブッダの伝記的生涯の話の他、その宗派の開祖についての授業となる[26]。

これらの授業は基本的に宗派教育である。なかには大学の一般教養的な内容に近い授業をする教師もいるが、それは例外的である。また授業以外に宗教関連の行事、たとえばキリスト教であればクリスマスや復活祭、仏教系であれば灌仏会、お盆、成道会などに生徒たちを参加させるのが一般的である。したがって、在学中には少なくとも関係した宗教への知識が増え、また宗教的行事にもなじむと考えられる。その影響がこうしたアンケートにもいくらかあらわれるのかどうかをクロス集計で見てみた。

a）宗教への関心

1996 年から 2015 年の調査まで、信仰を持つ割合や宗教に関心を持つ割合は、いずれも宗教系の高校を卒業した学生（以下「宗教系高校」）の方が、宗教系でない高校を卒業した学生（以下「非宗教系高校」）よりも高かった（グラフ 15a1 参照）。しかし在籍する大学が宗教系か非宗教系かとの関係は複雑になった。両者を比較すると、その違いは年によって大きく異なる。つまり卒業した高校の宗教系か非宗教系かと、在籍する大学の宗教系か非宗教系かで、高校の影響の方が大きいとは限らないということである。「現在、信仰をもっている」と答えた学生について、在籍する大学が宗教系の学生の場合と卒業した高校が宗教系である学生とで比較してみた。下のグラフがそうであるが、割合の多さは年ごとに入り組んでいる。



[26] 宗教系の学校の授業や、そこで用いられている教科書や参考書については 1990 年代に、國學院大學日本文化研究所の宗教教育プロジェクトで、アンケート調査を行った。すべての学校に質問票を送付し、中には実際に訪問して授業を見学した場合もある。その結果については、國學院大學日本文化研究所編『宗教教育資料集』（すずき出版、1993 年）と同『宗教と教育』（弘文堂、1997 年）を参照。

このように複雑な関係になったことには、創価大学と天理大学の回答者数が調査ごとにだいぶ異なることが関係している可能性がある。

これを先のグラフと比べてみると、信仰をもつ割合が宗教系で 20%を超えるのが、1997 年、2000 年、2012 年である。これを先に掲げた表と比べると、97 年は創価大学、天理大学から合わせて 431 名の回答があり、2012 年は創価大学から 261 名の回答があった。261 名というのは創価大学からの回答者があった年の中でもっとも多い。

b）宗教は人間に必要

「どんなに科学が発達しても、宗教は人間に必要だ」という意見に対する回答も、宗教系高校と非宗教系高校で差がある（**グラフ 15b1** 参照）。宗教系高校の方が「そう思う」という割合が常に高く、平均で約 1.4 倍の差がある。逆に「そう思わない」を比較すると、非宗教系高校が宗教系高校の約 1.4 倍である。ちょうど対照的な数値になっていて興味深い。

c）霊魂の存在を信じるか

上記 2 つの質問に対し、霊魂の存在を信じるかどうかは、宗教系高校と非宗教系高校の差が小さくなる。平均してみると、「信じる」という割合は、宗教系高校が非宗教系高校の約 1.1 倍である。逆に「否定する」という割合は、非宗教系高校が宗教系高校の約 1.2 倍である。これもほぼ対照的な数値になっている（**グラフ 15c1** 参照）。

d）墓参り

「去年のお盆の墓参り」に行ったかどうかについては、行った人、つまり「家族と行った」あるいは「家族とは別に自分だけで行った」と回答した数で比較した。行ったか行かないかであるので、折れ線グラフで示した（**グラフ 15d1** 参照）。宗教系と非宗教系で、年によりどちらが多いかが異なるが、非宗教系の方が比較的一定している。これは宗教系高校がどこが多かったかに関係している可能性が高い。仏教系とキリスト教系でいくらか傾向が異なると考えられるからである。

e）占い

占いはさまざまな占いについて質問しており、質問形式もすべてが統一されているわけではない。占いの経験でみると、宗教系高校と非宗教系高校で、ほとんど差がないことが分かる（**グラフ 15e1** 参照）。

以上の結果から、高校までの宗派教育は、宗教の必要性を感じさせたりする点では影響があるが、民俗信仰、サブカルチャー的なものにはほとんど影響を持たないと結論できる。

5. 学年別とのクロス集計

大学で講義を受けたことが宗教観にどれだけ影響を及ぼすであろうか。個々の学生がどのような科目をとっているかは分からないが、宗教系の大学では非宗教系の大学より宗教に関連した科目が多いのが通例であるので、宗教についての考え方になんらかの影響を与えると予測される。この調査では常に回答者の学年についても質問しているので、大学にはいった直後の 1 年生とその大学での経験が積み重なっていく 2～4 年生とで、どういう違いが出るかである[27]。

これに関しては、宗教の勧誘に関することがら、宗教は人間に必要かどうかについての意見、宗教はアブナイとおもう割合、高校までの宗教教育についての意見、霊魂の存在を信じるかどうか、といった質問との相関を調べた。これは 2000 年と 2005 年に回答がある。

---

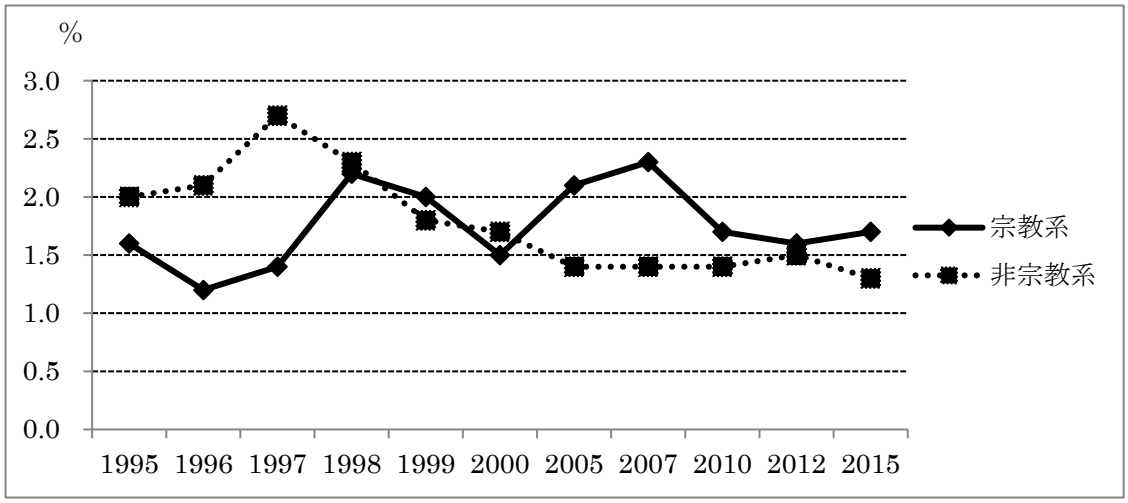
27 1 年生の中にも社会人学生が含まれているので、生年によって社会人学生を除外することも可能であるが、絶対数はさほど大きくないことと、その大学での影響を確かめるということから、年齢は度外視することとした。

a）宗教の勧誘の経験

宗教の勧誘については、1 年生より 4 年生の方が勧誘された経験は多くなるはずであるが、どの程度の違いがあるかを見た。宗教系と非宗教系とで年度での違いが見られるが、1 年生から学年があがると、宗教系でも非宗教系でも勧誘された経験が増えるのは同じである。1 年生と 4 年生とでは、1.3 倍強から 1.7 倍強ほどに増える（**グラフ 16a1** 参照）。

b）宗教は人間に必要

宗教についての考え方は学年で変わるのであろうか。「宗教は人間に必要か」という設問で見てみる。これを宗教系と非宗教系で比べると興味深い結果となった。非宗教系の大学の方が、学年があがるにつれ、必要と思う割合が増える年と逆の年とがある。1995 年から 98 年までは非宗教系の方が増える割合が高いが、その後入れ替わりがある。分かりやすくグラフにすると次のようになる。



回答者は 1 年生を除いて、大学で多少なりとも一般教養に類する講義を受講していると考えられる。そこではメディアなどで報じられる宗教像と比べて、より実証的なデータにもとづいた宗教についての知識を学ぶ可能性が増えると言える。

学年別と宗教を必要と思うかという問の結果をクロスさせると、それを感じさせる結果になっている。11 回の調査を比較すると（**グラフ 16b1** 参照）概して学年があがると宗教の必要性を認める割合が高くなる傾向にある。むろん講義だけでなく、いろいろな社会経験も関係していると考えられるのだが、これを宗教系と非宗教系で比較するとあまり違いがない。11 回の調査を平均すると、必要だと思う割合は、宗教系では 1 年生で 18.6%で 4 年生で 32.0%である。非宗教系では 1 年生で 16.3%であり、4 年生で 27.5%である。1 年生と 4 年生で比べると、宗教系では 4 年生が 1.8 倍になっており、非宗教系では同じく 1.7 倍になっている。学年を経ることによる差は宗教系と非宗教系であまり違わないということである。

c）宗教はアブナイと思うか

学年があがると「宗教はアブナイ」と思う割合はどう変わるか。全体の傾向としてはやや減少する。ただ年によっては増えることもあり、学生生活を長く送ったことで、必ずしも「宗教はアブナイ」と思う割合が減るわけではない。これは宗教系においてもそうである（**グラフ 16c1** 参照）。

d）高校までの宗教教育をどう思うか

宗教教育についての考えを学年別に見てみる。宗教教育については年ごとに少しずつ異なる 3

種類の設問があり、肯定する割合もそれに応じてかなり異なっている。また学年別との相関はある程度見られる（グラフ 16d1 参照）。

1996～1999 年の「高校までにもっと宗教についての基礎知識を教えるべきだ」では、学年があがると肯定的回答が増えるというわけではないが、おおむね増加の傾向である。

2005 年の「高校までにもっと世界の宗教についての基礎知識を教えるべきだ」も、全体として賛成の割合が増えているものの、学年との相関はややあるという程度である。

2007～2015 年の「高校までに日本や世界の宗教文化についての基礎的な知識を学んだ方がいい」は、宗教文化教育に相当する内容の質問であるが、非宗教系の方がどの学年でも数値が高い場合が多い。

e）霊魂の存在

霊魂の存在を信じるかどうかに関しては、学年別の差はほとんど見られない。学年により増えるとか減るとかの傾向もない。この結果からは、霊魂の存在を信じるかどうかといったような事柄は、大学在学中の経験によって左右されるものではなさそうだということが言える（グラフ 16e1 参照）。

Ⅲ 自由記述に示された意見

自由記述の欄がある質問項目は毎年いくつか設けてあるが、信仰する宗教名を記してもらったような類以外ではそれほど多くない。ある程度続けて同じような記述が続いた質問については途中から除外したというような場合もあり、毎回設けた自由記述はない。その中で統計的な傾向を補完するような記述をいくつかここで示したい。

具体的な記述を例示したのは、信仰に関すること、宗教の社会的問題、脳死状態での臓器移植問題、靖国問題、オウム真理教問題、そしてイスラム問題である。アンケート調査では宗教や宗教に関わる問題についての全体的傾向は分かるが、学生たちが自分たちの置かれた環境をどう把握しているかは掴みにくい。こうした自由記述はそれを考えていく上での一助となる。

1. 信仰・宗教に関わる問題

信仰・宗教に関わる問題としては、宗教及び関連事象への関心内容、友人の信仰に関して、スピリチュアリティについて、東日本大震災の心理的影響、霊魂のイメージについての記述をいくつか示す。

a）宗教及び関連事象への関心内容

これは信仰をもっていないが宗教に関心があるという場合には、具体的にはどのようなことに関心をもっているのかを知るためのものである。予め提示した回答の選択肢は「聖書や仏教経典などの宗教書」、「宗教を扱った小説やノンフィクション」、「宗教教団や世界の宗教などを扱ったテレビ番組」、「神社や仏閣などの宗教施設の見学」である。これ以外にどのようなものがあったかを見ると、1995 年はオウム真理教に関わることを挙げたものが数十名いた。その後数は減ったものの、オウム真理教あるいは新興宗教、カルトといったことを知りたいという記述は一定数あった。

宗教文化や宗教学的な関心に当たるものも、どの年も一定程度あった。年ごとの変化の傾向としてはかなりマニアック、あるいは特別な関心が少しずつ増えている。宗教の見方が多様にかつ自由になっているという可能性がある。個別の宗教より、宗教研究、あるいは宗教文化全般にわたるさまざまなテーマへの関心が見られる。これは調査当時に話題になっていた宗教関連の出来

事、ニュース、さらに聴講している講義の内容とも関係があると考えられる。

b) 友人の信仰に関して

本人が信仰をもっていなくても、友人の中には信仰をもつものがある。この場合どう対応するかを聞いたものである。経年変化を見て分かるように、多くは友人が信仰をもっているかどうかが友人関係にあまり影響をもたない場合が多い。だがもし気にすると具体的にどのようなことを考えるのか。自由記述からある程度それが推測できる。

友人の信仰は基本的に尊重するが、もしそれが熱狂的な信仰であったり、オウム真理教のような宗教なら、警戒したり、注意したり、あるいは付き合いをやめるというような反応が大多数を占めている。

毎回 3%程度がこの質問に具体的な回答を記述している。自由記述をした人の割合に大きな変化がないということは、友人が信仰をもっていることに何がしかの意見を述べようとする割合がこの調査でおおよそ知れたということを意味する。やはりどのような宗教であるかを確かめてから考えるというごく常識的な姿勢が大半なのであるが、しかしこの結果はまた、カルト問題にも関わる点があることに留意したい[28]。

c) スピリチュアリティについて

スピリチュアリティに関する設問は 2007 年と 15 年にあるが、2007 年当時は「オーラの泉」というテレビ番組が人気であったことも関係して、スピリチュアリティという言葉自体をよく知っていたようである。ただし回答を見ると、学生たちはこの言葉を必ずしも肯定的なものとしては捉えていないことが分かる。2007 年と 15 年とを比べると、肯定的に捉える数値が減少して否定的に捉える数値は増加している。自由記述では否定的な言及の方が目立つ。テレビのやらせというような意見もあり、うさんくさいというような表現も散見される。

d) 東日本大震災の心理的影響

2011 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災、すなわち「3.11」が学生たちにどのような心理的影響を与えたかは、自由記述からある程度分かる。自由記述は、予め提示した回答の選択肢と重なるものが少なくなかったが、自分なりの表現をしていると考えられるので、それらも含めて紹介した。

家族の大切さを感じたとか、家族を守りたいと思ったなど、家族への思いが強まったとする記述、無常を感じたような記述、自分の無力さを感じたような記述などがある。また国や政府への不信感、ネット情報の不正確さ、原発の危険性の認識など、自分を取り巻く環境を厳しい目で見るようになった記述も多い。

e) 霊魂のイメージ

霊魂のイメージについては 2000 年と 2005 年に自由記述の欄を設けた。「輪廻するもの」、「死んですぐの人の霊」、「守護霊・背後霊」といった理解も少しあるが、他方で自然科学的な捉え方もいくつかあった。「人の頭脳の電気信号の集合体」、「偶発的なエネルギー」、「光のかたまり」などである。

2. 宗教の社会的問題

a) 見知らぬ人からの勧誘について

---

28 本人が信仰がなくて友人が信仰をもっている場合でも、それが友人関係にとってはさほど問題ではないという点を利用していると言えるのが、サークル活動等を装った宗教の勧誘方法である。宗教の勧誘が目的であることを意図的に隠して、まず親しくなり、そのあとで宗教活動へ誘うというやり方である。

路上などで、あるいは戸別訪問によって見知らぬ人から宗教などの誘いを受けたという体験をもつ学生が一定数いる。彼らはどのような声のかけられ方をしたのかを 2007 年に調べた。オウム真理教事件から 12 年が経過し、大学や学生たちが宗教の勧誘に対し、事件当時ほど敏感に反応しなくなった時期の調査である。

見知らぬ人から声をかけられた経験をもつ人は 27%程度で、女性だと 3 割を超した。手相が圧倒的に多いが、「守護霊が見えます」とか「特別なオーラを感じます」という類の声のかけ方も 1 割ほどいる。「悪い霊がついているのが見えます」などと言われれば気になる人もいるだろうが、実際約 3 割がどちらかといえば気にするし、女性は 3 分の 1 が気にすることが分かった。

どのような声のかけられ方をしたかをみると、相手をほめるような言い方、どちらかと言えば不安を煽るような言い方、関心をそそるような言い方など、いくつかパターンがあることが分かった。予め選択肢に入れておいたのは「手相の勉強をしています」、「あなたの守護霊が見えます」、「あなたには特別のオーラを感じます」、「このままだと何か不幸なことにあいます」、「今、人生の転換期です」であった。

これらの声のかけ方は、カルト問題を研究している人の間ではよく知られているものである。これと大きく異なるパターンはほとんどなかったので、学生が声をかけられたのはたいていが特定の決まった団体であることを推測させる。

b）宗教者の社会的役割

宗教の社会貢献というテーマはとくに東日本大震災の後に、宗教研究者の間で関心が高まったテーマの一つであるが、学生たちは宗教者の社会貢献ということに対してどのような意見をもっているのであろうか。自由記述ではさまざまな意見が見られたが、大きく分けると 3 つのパターンがある。積極的に何をやるべきかについて記したもの、宗教者だからといって特にやるべきことはないというもの、そしてかなり辛辣な批判的意見である。

積極的な意見は予め回答の選択肢に設けておいた内容と重なるものも多く、とくにそれに付け加えることを思いつかなかったのかもしれないが、辛辣な批判的意見はなかなか多様であった。「金もうけを考えないこと」、「お布施の要求を止めること」、「無料で人の相談を受ける」、「他人をどうこうする前に自分自身をもっと見つめるべき」、「平和を祈るだけでなく行動」などというのもあった。

3. 脳死状態での臓器移植問題

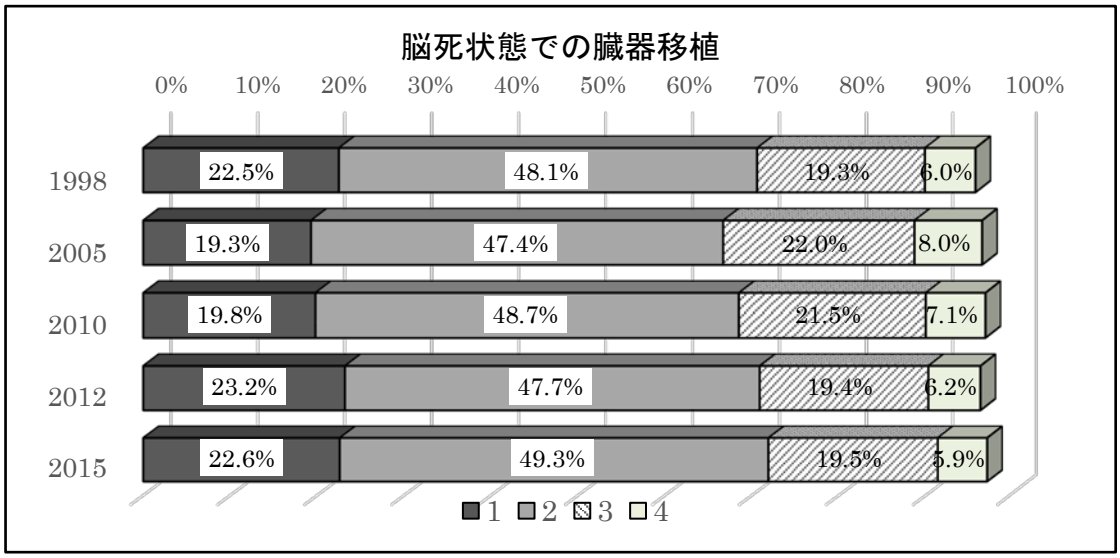
自分が脳死状態になったときの臓器移植に関する質問は 7 回行ったが、質問形式が 2 パターンあり、自由記述を含む回答の選択肢を設けたのは、1998 年、2005 年、2010 年、2012 年、2015 年の 5 回である。2 つのパターンで回答結果は若干異なるが、自由記述を含む 5 回の結果で見るとあまり大きな変化はない。

次のグラフに示すとおり、「1.すすんで提供したい」（あるいは「1.ぜひ提供したい」）という回答は 2 割強だが、「2.提供してもよい」を含めると約 3 分の 2 ほどになる。「3.あまり提供したくない」は 2 割前後で、「4.絶対提供しない」は 1 割未満である。

この問題に関する学生の意識はほぼ一定であるとみなしていいだろう。宗教界の一部からは非常な反対が起こった脳死状態での臓器移植であるが、学生たちは提供自体には過半数が肯定的である。

自由記述の内容で目立つのは、親や親族が了解するのならという態度や、相手によるという考えである。「自分を大切に思ってくれている人に任せる」というような意見もあった。むろん批判的な意見もあり「そもそも脳死は人の死ではないと思う」とか「脳死についてもっと研究が進

んだら提供してもよい。今の段階では不明瞭すぎる」という意見もあった。脳死ということを理解していないような回答もあったが、これは仕方がないことである。



4. 靖国問題について

日韓の間で靖国問題は慰安婦問題と並んで常に政治的な非難の舞台になることの多いものである。では学生の世代においては、これはどのように認識され、またどう感じられているのであろうか。この問題はとくに日韓の自由記述を比較する形で示してある。

a) 日本での調査

日本の首相の靖国神社参拝をめぐる問題については 2005 年との 2015 年に質問しているが、自由記述を求めたのは 2005 年だけである。2005 年当時の首相は小泉純一郎であり、2001 年 8 月 13 日に首相就任後最初の参拝をした[29]。これは政教分離違反になるのではということで訴訟になったが、2005 年のアンケート調査は、訴訟の地裁判決が出て、高裁へと控訴された時期に行われている。学生の中にはそうした当時の報道で、多少の知識を得ていた者もいると考えられる。

「首相が靖国神社を参拝することをめぐって対立する意見があることを知っていますか。」という質問には、83.1%が「はい」と回答している。ちなみに 2015 年の同様の質問には、84.6%が「はい」と回答しているので、学生たちは 8 割以上が靖国問題の存在は知っていると考えていい。2005 年には「はい」と答えた 3,534 人の学生に、「参拝に反対する人たちの反対理由について、知っているものを 2 つまで具体的に書いてください。」と自由記述をしてもらった。

半数近くの 1,681 人が具体的な内容を記載した。戦犯がまつられていることが反対理由となっていることを挙げた人がもっとも多かった。なお、A 級を「永久」と記したものが若干名いた。「一級」などと記したものも一部あった。中国や韓国からの反発、また政教分離違反について言及した人も多く、回答を記載した人は、たいていがほぼ的確に反対理由を把握していることが分かる。ただ、この年の有効回答数は 4,370 であるので、全体からすると問題をおおよそ把握して

29 小泉純一郎首相は在任期間（2001 年 4 月 26 日～2006 年 9 月 26 日）に、6 回靖国神社に参拝している。それぞれ 2001 年 8 月 13 日、 2002 年 4 月 21 日、 2003 年 1 月 14 日、 2004 年 1 月 1 日、 2005 年 10 月 17 日、2006 年 8 月 15 日で、終戦記念日の参拝は 2006 年である。

いる学生は 4 割弱ということになる。

b）韓国での調査

靖国問題は 2005 年に韓国においても質問項目に加えた。この年の調査では韓国で 1,288 の有効回答が得られたが、「首相が靖国神社を参拝することをめぐって対立する意見があることを知っていますか。」という質問に対し、48.2%が「はい」と答えている。「はい」と回答した人に対し、日本同様その内容を具体的に 2 つまで自由記述してもらった。少なくとも 1 つ具体的に記述した人は回答者全体の 4 割弱なので、日本とあまり差がないことになる。

自由記述の内容を日韓で比較してみると、戦犯に言及している点は共通するが、韓国では過去を反省していないという記述や東アジアにおける外交上の問題を指摘する意見が多いことが目立つ。

またもっとも多い内容が「戦犯がまつられているから」という類であり、2 割近くを占めた。次に目立ったのは「過去を反省していない」という類の記述である。戦争を反省せず正当化しているという意見である。またこれと同じくらい多かったのが外交上の問題になるという記述である。国際社会、周辺国という表現もあるが、具体的に中国・韓国と二つの国との関係に言及しているものが多い。また軍国主義の復活に触れたものもあるが、日本にはない表現として帝国主義の復活という記述がいくつかある。

5. オウム真理教問題

a）入信していた人たちについて

オウム真理教に関する自由記述は 2 種類ある。1996 年のものは、犯罪にはかかわらなかったが、オウムに入信していた人についての意見である。1997 年と 99 年はオウム真理教についての報道に対して、どれくらい関心があるかについてである。1996 年の調査がなされたのは地下鉄サリン事件から 1 年余という時期であり、学生たちがオウム真理教事件をきわめて身近に感じていたはずの頃である。そこでオウム真理教の信者たちについての意見を求めた。1997 年と 99 年は事件から少し時間が経過していたので、マスコミの報道に関する意見を聞いたのである。

犯罪には関わらなかったがオウム真理教の信者であったという人は、日本国内で 1 万人ほどいたと推定されている。国外には国内以上の信者が存在していた[30]。また幹部であったが上祐史浩が事件後テレビに頻繁に登場したこともあり、学生たちのオウム真理教への関心はかなり高かった。テロを肯定するような意見はないが、知らなかった信者に対しては厳しい意見と同時に同情するような意見も散見される。

厳しい意見としては「自業自得」、「自分のことしか考えられない馬鹿な人たち」など突き放したようなものや、「人に頼ろうとする根性が気にくわない」、「心の弱い人達が、うまい口車に乗せられたんだと思う」といった弱さを指摘するようなものがある。「だまされていた」というような言い方もある。それは「運が悪かったのだと思う」とか、「入信した教団がたまたま犯罪集団だったのはその人の不幸だと思う」というような一種不運とみなすものもある。さまざまな観

---

30 国外ではもっと多くの信者がいたことが、とくにロシアでは 3 万人から 4 万人いたとされている。これに関しては、井上まどか「ロシアにおけるオウム真理教の活動」（宗教情報リサーチセンター編『情報時代のオウム真理教』（前掲）、所収）及び同「今なおロシアで続くオウム真理教の活動―日本とロシアの並行現象」（宗教情報リサーチセンター編『〈オウム真理教〉を検証する―そのウチとソトの境界線』（前掲）、所収）を参照。ロシアの信者は現在でも存在する。

点からの記述が見られるが、そのことからも真剣に事件を受け止めた学生が多かったのではないかと推測される。

b）オウム報道について

オウム真理教に関する報道への関心やそのあり方については 1997 年と 99 年に質問している。オウム真理教の記憶はまだ鮮明であった時期である。麻原彰晃の刑は確定しておらず事件に関わったとされる信者の中にはまだ逮捕されていない者がいた段階である。

なぜこのような事件が起こったのかが分からないという記述や報道の姿勢そのものを疑問視する記述もあった。当時よく使われたマインドコントロールという言葉に関心を抱いたような記述もある。「とにかくすべて気になる」という記述もあり、学生たちにとってはあまり報道されないオウム真理教の実態や背景について多様な関心を抱いていたことが分かる。

1999 年になると、破防法に言及した人も 31 名いるなど、危険な団体の規制という点にも関心が強まっている。上祐史浩の動向が知りたい旨の記述も数名からなされている。マスコミ報道が偏っているとか、コメンテーターによる解説が信用できないといったような記述も見受けられる。

事件の背後に潜むものを知りたい、そうしたことを報道してほしいというようなものが多い。1997 年には 289 名（5.1%）、99 年には 728 名（6.7%）が自由記述をしており、オウム問題への関心の高さを反映していると考えられる。

6. イスラム問題

先に述べたとおり、IS 問題はイスラム教のイメージを非常に悪化させた。自由記述の内容を見ると、それがどのような感情によっているかが分かる。またその感情は主にメディアの伝える内容によってきわめて大きな影響を受けていることが分かる。IS 問題はまだ国内では実感が乏しい出来事であろうが、近所にモスクができるとなると身近な問題になる。

もし近所にモスクができたら不安かどうかという質問には、2012 年の調査で、1,447 名が具体的に記述している。回答者全体の 35.3%に当たる。不安を感じる理由を聞いたのであるが、中にはさほど不安を感じない理由を記入した人もいる。イスラムをそれなりに理解しようとする姿勢が少なからず出てきていることもうかがえる。

これは 2010 年代になって、日本におけるイスラム教、そしてムスリムやモスクに対する理解が少し広まる傾向が出てきたという社会背景との関連性が想定できる。2010 年代にはたとえばハラールという言葉が日本でもしだいに広まる時期であり、ハラール食品、イスラム金融といった言葉が新聞等で数多く見られるようになった[31]。

しかしながら、2012 年と 2015 年を比べると、2015 年にはイスラム教への警戒が増えている。近所にモスクができることへの不安の理由として、IS に言及したものが増えている。IS の組織化が 2013 年頃と考えられているので、2012 年で IS についての言及がないのは当然だが、2015 年には IS、ISIS、ISIL という言葉を用いた人が 110 名にのぼる。比率としては全回答者の 1.9%ほどであるので、さほど多いとは言えないかもしれないが、IS 問題は当時少なからぬ影響を学生たちの世代に与えたことが推測される。

---

31 2017 年 10 月に東京都豊島区にあるマスジド大塚を、宗教文化教育推進センター主催の「宗教文化士の集い」で訪問した。その際、同マスジドの責任者からモスクに対する社会の目がここ数年でかわったということが述べられた。その一つの理由として責任者が挙げたのは 2011 年 3 月 11 日の東日本大震災の後、イスラム教徒が現地に赴き支援活動をしたことの影響である。

不安を感じない人には自由記述を求めなかったのであるが、記述した人が 1,550 名いる。これは不安を感じない人の 74%ほどにのぼる。その内容を読むと、IS とイスラム教徒一般とは区別して考えるという態度がおおむね形成されているのがよく分かる。

Ⅳ 日韓比較によって見えてくること

1. 宗教意識の比較

a）信仰をもつ割合

韓国での調査は 4 回なので、比較できるのはそれぞれのテーマについて 4 回以下になる。宗教への関心や両親の信仰の有無については 4 回とも比較できる。ただし、韓国の場合、宗教系と非宗教系とを分けて集計していない年があるので、全体での比較をしてみた。

まず「現在信仰をもっている」という回答の割合を比較すると、大きな差がある。韓国の方が 3 倍ないし 4 倍ほど高い（**グラフ 23a1** 参照）。1999 年から 2007 年にかけては日本はどちらかと言えば増加傾向だが、韓国の場合は、どちらかと言えば減少傾向である。日本の場合、男女差はわずかであり、男性が多い年もあれば女性が多い年もある。これに対し、韓国ではあまり大きな差ではないけれども、常に女性の方が多い。

信仰を持つ割合は、全体として韓国の方が日本よりも高いことが各種の統計から分かっているので、日韓の差は当然としても、増加、減少の対照的な傾向と男女差の違いについては、数年の間のことであるので、性急な結論は控えたいが、注目したい結果である。

b）神仏や霊魂の存在を信じる割合

韓国の学生の方が信仰をもつ割合が高いことを反映して、神仏や霊魂の存在を信じる割合も概して韓国の方が高いが、神と仏とでは異なった様相になる（**グラフ 23b1、23b2** 参照）。神の存在を信じる割合は韓国が日本の 1.5 倍以上から 2 倍近く多い。だが、仏の存在を信じる割合はそれほど大きく異ならず、2005 年はわずかだが、日本の方が多い。神の存在を信じる割合が大きく異なるのは、学生に限らず、韓国では日本に比べてキリスト教を信じる割合がはるかに高いことを反映していると考えられる。日本のキリスト教人口は 1%程度であるが、韓国では 30%近くにのぼる。

しかし、日本は江戸時代の檀家制度の影響があるので、仏教が社会に制度的に定着している度合いは韓国よりも強いと言える。しかし、高度成長期以後は檀家制度の影響も薄れ、若い世代では仏教との関わりはかなり乏しくなってきているので、こうした結果になった可能性がある。霊魂の存在も韓国の方が高く、これも 1.5 倍から 2 倍近く高い。宗教的な事柄を信じる割合は、一般的に韓国の学生の方が高いと考えることができる（**グラフ 23b3** 参照）。

c）死後の世界

死後の世界を信じる割合も韓国の方が若干高い。死後の世界を「信じる」と回答した割合は、1999 年と 2000 年の 2 回とも韓国が日本の 1.5 倍強であった。「ありうると思う」と回答した割合も、韓国の方が 1～2 割高い（**グラフ 23c1** 参照）。信仰をもつ割合も神仏や霊魂の存在を信じる割合も韓国の方が高いので、この結果も当然と考えられる。

2. 家庭の宗教環境

a）両親の信仰

本人が信仰をもつかどうかには、両親の影響が大きいのはどの国にもあてはまることである。4 回の調査で比較してみると、本人が信仰をもつ割合は韓国の方が 3 倍ないし 4 倍ほど高かった

が、両親が信仰をもつ割合も大きな差がある。日本が父親・母親とも 1 割前後が信仰をもつのに対し、韓国では父親が 4 割前後、母親が 6〜7 割である。つまり、韓国では父親が信仰をもつ割合は日本の 4 倍あるいはそれ以上であり、母親だと 5 倍から 6 倍である（**グラフ** 24a1 参照）。

両国とも母親が信仰をもつ割合が父親より高いという点は共通する。ただその差は韓国の方が大きい。日本では母親が父親の 1.2〜1.4 倍の多さであるが、韓国では 1.5 倍から 1.7 倍の多さである。また親の世代と本人の世代との差を見ると、韓国の場合は女性において減少が目立つ。つまり韓国では信仰をもつという人の割合は、女性においては若い世代になるほど減少しているのではないかという推測ができる。

3. 宗教習俗への関わり

a）墓参り

宗教習俗の日韓比較は難しい点がある。日本と韓国は宗教文化において多くの共通の要素を持つと言えるが、宗教習俗はかなり異なる。その中で祖先祭祀は東アジアに共通の宗教習俗であるので、祖先祭祀の一つに含められる墓参りを比較してみる。これも時期や形態には違いがあるが、社会的な機能としてみれば、日本のお盆の墓参りと韓国のチュソク [32]の墓参りは比較的意義が似通っている。これについての質問は 4 回とも行ったので比較してみる。

日韓とも墓参りはほぼ家族で一緒に行うものであるが、回答の選択肢の「家族と行った」と「家族とは別に自分だけで行った」を合計した。「家族とは別に自分だけで行った」で行ったという回答は日韓ともごくわずかである。回答者自身が墓参りをしたかどうかを比較した。

年ごとの変動が韓国の方が日本より大きいが、日韓ともおおよそ半数ほどが行っていることが分かる。韓国でも若い世代が宗教習俗を一定程度継承していることが推測される（**グラフ** 25a1 参照）。

b）信仰と宗教習俗との関係

ふだん信仰のない家が、葬式のときだけ僧侶（お坊さん）をよぶというのは、日韓ともに見られる現象のようであるが、これをおかしいと感じる割合は韓国の方が高い。またそう思う割合が 1999 年から 2000 年の 1 年の間で日韓とも増えている（**グラフ** 25b1参照）。誤差の範囲とは言い難い増加である。おかしいと思う割合が韓国の方が 1.5 倍ほど高い理由としては、韓国が日本と比べてキリスト教を信仰する人がはるかに多いことと関係があると考えられる。キリスト教徒と答えた学生はそう思う割合が 5 割近くと高いからである。

4. 宗教や宗教家への意見

a）相談したい宗教家

「人生に悩んだ時に、相談したいと思う宗教者」に関する質問は 2005 年と 2007 年に日韓とも行った。神職は韓国にはいないので、韓国の回答の選択肢には含まれていない。日韓でともに一定の社会的存在になっている僧侶と牧師・神父等について比較してみる。

僧侶も神父・牧師等も、相談したいと感じさせる割合は韓国の方が高い傾向にあるが、両者ではその違いの差が異なる。これは日韓の宗教状況の違いが反映されていると考えられる。「仏教の僧侶」は韓国が日本の 1.5 倍程度であるが、「キリスト教の牧師・神父・シスター」は、韓国が 1.5 倍から 3 倍近くである（**グラフ** 26a1 参照）。

---

32 チュソク（추석）は漢字では秋夕となるが、旧暦の 8 月 15 日のことで、この日に先祖の祭祀、墓参りなどが行われる。

b）宗教の必要性

宗教の必要性についての考えの比較を「どんなに科学が発達しても宗教は人間に必要だ」と思うかどうかの質問によって行ってみる。「そう思う」とはっきり肯定した人の割合で見てみると、宗教の信頼度は韓国が高い。日本が 17.5%～24.8%であるのに対し、韓国は 42.2%～51.9%である。どんなに科学が発達しても宗教は必要と考える割合は、韓国が 1999 年、2000 年、2005 年では 2 倍以上であり、2007 年では 2 倍近い（**グラフ 26b1** 参照）。

c）宗教はアブナイか

宗教に対してマイナスのイメージを抱いている割合を、「一般的に宗教は、アブナイというイメージがある」という意見を持つかどうかで見てみる。1999 年、2005 年、2007 年の 3 回共通して設けている質問である。

宗教の必要性を認める割合は韓国が高いことに対応して、マイナスのイメージは韓国の方が少ない。しかもその差はかなり大きい。1999 年は日本が 20.8%であるのに対し、2.8%でしかない。ただし 1999 年から 2007 年にかけての変化で見ると、日本は数%の範囲で上下しているのに対し、韓国はアブナイと思う割合が少しずつ増える傾向にある。2007 年には宗教の必要性を感じる割合が低くなったのに呼応してアブナイという割合が 1 割近くになっている。日本の 2 分の 1 近くになっている（**グラフ 26c1** 参照）。

この 3 つの項目への回答結果を比べても、日韓で宗教への信頼度が大きく異なることが分かる。韓国では宗教家への信頼度は日本より高いが、キリスト教と仏教で異なる。これは 2005 年と 2007 年のデータしかないが、僧侶に相談したい人の割合はあまり差がないが、キリスト教の牧師、神父などへの相談は、2 倍近くから 3 倍近く多い。

5. 宗教関連の社会問題

a）宗教の勧誘

見知らぬ人からの宗教の勧誘は、日本ではカルト問題を連想させることが多くなったが、キリスト教の布教や新宗教の布教では珍しいことではない。勧誘された体験で比較すると、韓国の学生の方が勧誘された割合は高い。韓国では平均して 8 割ほどが体験しており、日本では 5 割前後である（**グラフ 27a1** 参照）。

b）愛国心

教育において愛国心をどう扱うか。2007 年に「高校までの教育で、愛国心を深めるための工夫をした方がいい。」という質問を韓国でも設けた。予測されたことであったが、韓国の方が肯定的回答の比率が高かった。「そう思う」が日本が 10.3%であったのに対し、韓国は 26.1%と倍以上である。「どちらかといえばそう思う」を合わせた肯定的回答の割合は、日本が 35.9%で韓国が 64.4%と 3 分の 2 近くになっている。ただ、すでに示したように、日本も 2012 年と 2015 年の調査では肯定的回答がやや増加し、それぞれ 42.2%、42.0%と 4 割を超えている（**グラフ 27b1** 参照）。

c）靖国問題

靖国問題については自由記述で日韓の対比が分かるが、認識と首相参拝の是非ではその差が数値で明確になる。首相が靖国神社を参拝することをめぐって対立する意見があることを知っているのは、日本では 8 割以上だが、韓国では半数にやや満たない（**グラフ 27c1** 参照）。それでも後述のオウム真理教事件同様、日本での話であるが、かなり関心は高いと考えていい。

首相の参拝について、「参拝してはいけない」が日本では 1 割に満たないが、韓国では 4 割近

くになる。日本でも「必ず参拝すべきである」という強い意見は 1 割に満たない（**グラフ 27c2** 参照）。自由記述で触れたように政教分離に関わる問題であることは一定の数の学生が知っていると考えられる。したがって「個人的な信仰なら参拝してもいい」が 5 割強となっている。日本では参拝に否定的な意見は 3 分の 1 に満たない。

d）脳死と臓器提供

「自分が脳死状態になったら、臓器を提供したい」という質問は 2000 年、2005 年、2007 年の 3 回とも行っている。この質問では回答の選択肢によってかなり数値が異なった。2000 年と 2007 年は「そう思う」、「どちらかといえばそう思う」、「どちらかといえばそう思わない」、「そう思わない」の四択であった。しかし 2005 年は「ぜひ提供したい」、「提供してもよい」、「あまり提供したくない」、「絶対提供したくない」という四択であった。

「そう思う」「ぜひ提供したい」で数値を比べると日韓とも数値が半分前後に減っている（**グラフ 27ｄ1** 参照）。「そう思う」、「どちらかといえばそう思う」を合わせた数値と「ぜひ提供したい」、「提供してもよい」を合わせた数値を比較すると、グラフは日韓とも変動の小さなものとなった（**グラフ 27ｄ2** 参照）。「ぜひ提供したい」は「そう思う」より、強い肯定になるので、こうした結果は当然だろう。この質問で臓器移植に肯定的な姿勢を示す学生は、日韓ともに 6 割ないし 7 割強の割合になることが分かった。

e）ジェンダー問題

ジェンダー問題は日韓とも男女で他の項目に比べて回答の違いが大きい。聖地への女人禁止などは韓国ではあまり知られていないようなので、宗教団体において女性が役職や地位に関して受けることがある点についての項目を比較する。1999 年と 2000 年は「宗教によっては女性が教団の特定の役職や地位につけないところがあります。これについてあなたはどう思いますか」と質問した。2005 年は「宗教によっては女性が教団の特定の役職や地位につけないところがあります。これは差別だと思いますか」と質問した。少し質問の形態が異なり、数値も変わっている。それでも日韓の違いは同じような傾向になっている（**グラフ 27e1** 参照）。

1999 年、2000 年は非常に似通った結果となり、「宗教によっては女性が教団の特定の役職や地位につけない」ことを問題視する割合は、男女とも日本の方がだいぶ低いことが分かる。「その宗教の決まりにもとづくものだからそれでよい」とする回答が、日本では男性が 4 割ほどで女性が 3 割弱である。韓国では男性が 3 割弱で女性が 2 割弱である。また 2005 年の質問でも、差別だと思わない割合は男性の方が女性より高く、日本の方が韓国より高い。つまりジェンダーによる差別に関してもっとも反応が鈍い、つまり是認の態度が高いのは日本の男子学生ということになる。

6. オウム真理教問題

オウム真理教事件は日本の学生にとっては大きな衝撃になったと考えられるが、韓国の学生の受け止め方はどうであったか。事件から 10 年が経過した 2005 年にオウム真理教についての知識を聞いた。日本ではサリン事件はほとんどの学生が知っているが、韓国の学生の間で認知されている割合は約 2 割である。麻原彰晃についても日本の学生の 94.3%が知っているのに対し、韓国の学生では 6.7%と 1 割にも満たない。ただ空中浮揚の話は韓国でも 7.7%が知っている。ある程度の関心を呼んだことが推測される（**グラフ 28a1** 参照）。

後継団体であるアレフについてはほとんど知られておらず、知っているのはわずか 1.0%である。サティアンについても同様である。韓国でもカルト問題はいくつかあり、これらは「似而非

（サイビ）宗教」と表現されることがあり[33]、学生たちの関心も高い。2000 年には天尊会の牟幸龍教祖と朴貴達夫人が終末論を流布して巨額な詐欺を行ったとして逮捕された[34]。一部の韓国の新宗教研究は天尊会を若者の信者が多いことでオウム真理教と比較しながら見ていたようである。しかし日韓両国とも隣国のカルト問題にはほとんど知識がない。

7. イスラム問題

a）イスラム教への関心

イスラム教徒が人口に占める割合は、韓国の方が日本より多く現在では約 2 倍である。2005 年の 1 回しか共通した質問はないので、その結果だけ見てみる。イスラム教への関心は日本の方が高い。「大変高い」、「やや高い」を合わせると、日本は 33.6%と約 3 分の 1 になるが、韓国は 7.6%と 1 割に満たない（**グラフ 29a1** 参照）。

b) 9.11 以後のイスラム教のイメージ

2001 年に起こった「9.11」から 4 年後の 2005 年の調査で、イスラム教へのイメージは日韓とも悪くなったが、その度合いを比較した。大きな差ではないものの、日本の方がイメージが悪くなった割合が高い。「少し悪くなった」と「悪くなった」を合わせると、日本では 49.4%とほぼ半数になるが、韓国では 39.8%と 4 割程度であり、1 割ほどの差がある（**グラフ 29b1** 参照）。日本の方がイスラム教への関心が高いことの裏返しかもしれない。関心があるがゆえに、この事件からの心理的影響は大きかったではないかという推測である。

8. 宗教教育に関して

実際に学校を訪問しての日本と韓国の宗教教育の比較研究は、日本文化研究所のプロジェクト「宗教教育の国際比較」により、1996 年から 2001 年までの 6 年間にわたり行われた。調査結果をまとめた報告書において、日本の宗教教育と韓国の宗教教育の共通する面と異なる面については説明されているが[35]、この意識調査を分析するにあたって重要な点だけを述べておく。まず宗教系の学校の割合はおおよそ日本の 2 倍である。日本でも韓国でも、宗教系の中学や高校では週に一時間宗教に関する授業があるのが一般的である。そして宗派教育も行われている。違いは入学の仕組みである。

日本の場合、宗教系の中学・高校に入学する生徒は、それを了解した上で入学する。宗教系の学校が嫌なら、公立の学校や宗教と関係のない私立学校を受験すればいい。これに対し、韓国では 1977 年の平準化と呼ばれる政策後、中学校への進学には自由の度合いが著しく狭まった。宗教系の学校に入学する生徒は割り振られてくるので、仮に両親がキリスト教系の学校に入学させたくても仏教系の学校に入学させられるとか、その逆とかが生じる。しかし大学は自由に選べるので、大学レベルでは日本と韓国は宗教系の学校の選択において違いはない。

このアンケート調査は大学で実施したので、両国の中高レベルでの制度の違いはあまり関係な

---

33 似而非宗教と呼ばれる団体による事件は韓国でも 1990 年代に起こっている。セウォル号沈没事件にからんで救援派と霊世教が韓国内で話題になったが、日本ではほとんど知られていない。これに関しては李賢京「宗教は韓国人を幸せにするのか―「セウォル号沈没事故」を手がかりに」（櫻井義秀編『しあわせの宗教学』（蔵館、2018 年）を参照。

34 天尊会事件に関しては渕上恭子「韓国似而非宗教」事情―天尊会の教団犯罪をめぐって」（『国際宗教研究所ニュースレター』第 30 号、2001 年、所収）を参照。

35 調査結果については、井上順孝編『宗教教育の日韓比較』（國學院大學、2002 年）を参照。

いと考えられるが、宗教系の高校を卒業した割合は韓国が日本よりも高いことを念頭に置いておきたい。

宗教教育に関する質問では日韓の結果がほとんど一致するという興味深い結果となった。1995 年、2005 年、2007 年は、宗教教育に関する質問を行ったが、質問の内容が少しずつ変えてあった。1999 年の調査では「高校までにもっと宗教についての基礎知識を教えるべきだ」という意見をどう思うかであった。しかし、2005 年には「高校までにもっと世界の宗教についての基礎知識を教えるべきだ」という意見について質問した。「宗教について」の部分が「世界の宗教について」と変わったのである。これによって、宗派教育というイメージが薄らいだと考えられる。そして 2007 年には「高校までに日本（韓国）や世界の宗教文化についての基礎的な知識を学んだ方がいい。」という意見についての質問とした。自分の国の宗教文化と世界の宗教文化についての基礎知識という表現にしたのである。質問を変えるたびに「そう思う」という肯定の意見が 10%台から 20%台、そして 40%台へとおおよそ倍々に増えた。この増え方も日韓で非常に似通ったものとなった。両国とも肯定する意見が 4 倍前後に増えている（**グラフ 30a1** 参照）。

「そう思う」という回答に「どちらかといえばそう思う」を加えた肯定的回答の割合でも同様の結果で、ほぼ同じような増加のグラフになっている（**グラフ 30a2** 参照）。2007 年における肯定的回答は両国とも 8 割近くに上っている。こうした結果からして、宗教そのものについての教育よりも宗教の文化的側面についての教育の方が、はるかに受け入れられやすいということが明らかである。

宗教教育の必要性に関する日韓の回答結果を 1999 年から 2007 年まで比較すると、宗教文化教育的なものには韓国の方が少しだけ明確に賛成する割合が高くなっている（**グラフ 30a3** 参照）。

9. サブカルチャー、その他

a）占いへの関心

占いへの関心は男女差が大きく、日韓とも女性の方が圧倒的に関心が高いが、ここでは日韓の差を見た。手相、血液型による性格判断、姓名判断、風水の 4 つの事項に関して比較してみると、性別による差に比べて日韓の差はさほど大きくない。

手相では「かなり当たると思う」という一定程度信じていると思われる学生の割合は日韓とも数%から 1 割強であるが、1999 年から 2005 年の間で日本があまり変化がないのに対し、韓国は半分近くに減っており、2007 年にはさらに減少している（**グラフ 31a1** 参照）。「当たることもあると思う」というやや弱い信じ方ではどちらも減少傾向にある。調査した期間では手相はしだいに減少傾向にあるが、これは変動する可能性がある。

血液型による性格判断は日韓で同時に行ったのは 2 回だけであるので、比較して傾向を論じるのは難しいが、韓国は減少傾向にある（**グラフ 31a2** 参照）。

姓名判断は 3 回同時に質問しているが、日本の方が当たると思う割合は少し高い。これは韓国ではハングルが一般的になっていて、自分の姓名を漢字で正確に書けない若い世代も出ている。こうしたことが関係あるかもしれない（**グラフ 31a3** 参照）。

風水は 2000 年と 2005 年に日韓で質問したが、違いを論じられるほどの結果になっていない。さほど差がない（**グラフ 31a4** 参照）。

b）超常現象などへの関心

超常現象と呼ばれているものについては、テレパシーと前世・生まれ変わりについて比較した。生まれ変わりは超常現象というより、宗教的世界観に含めるのが適切だが、若い世代では信仰の問題というより、オカルト的な話題になっていることが多い。漫画やアニメでこの観念がしばし

ば登場することからも、そのように理解できる。

テレパシーは韓国の方が当たると思う割合が高い。19990 年と 2000 年の 2 回だけだが、「信じる」と「ありうると思う」を合わせると、1999 年で日本は 49.0%だが、韓国は 80.0%である。8 割が肯定的なのである。2000 年も日本の 48.9%に対し、韓国は 76.1%である（**グラフ 31b1** 参照）。

前世・生まれ変わりは差があまりない（**グラフ 31b2** 参照）。テレパシーとの受け止め方の違いは興味深い。

c）ウェブ上の宗教情報への関心

宗教関連のどのようなホームページに関心あるかは、2005 年と 2007 年に日韓で同じ質問をしたが、ここでも男女差がはっきりした。つまり日韓の差はあまりないが、日韓での男女差は同じパターンになるということである。

男性の方が関心を示すのは日韓とも「オカルト・超常現象に関するホームページ」と「UFO に関するホームページ」である。男女差は日韓とも 2 倍以上である。女性の方が関心を示すのは同じく「癒し・スピリチュアリティに関するホームページ」と「占いに関するホームページ」である。癒し・スピリチュアリティは女性が男性の 2 倍ほど、占いは 3 倍ほどである（**グラフ 31c1、31c2** 参照）。

むすび

これまで述べてきたことで分かるように、この調査は非常に多岐にわたる質問をしており、それによって明確にされたことは数多い。印象論で語られがちな若い世代の宗教観、宗教意識、あるいは宗教行動であるが、こうした調査に基づく分析は、ときに印象論を補強し、ときに印象論の方向違いを指摘することができる。世俗化という言葉では片づけられない、情報時代に生きる学生たちの複雑な意識や行動がうかがえる。

全体を通して、得られた知見の主なものを箇条書き的にまとめておきたい。

①若い世代が宗教離れというような見方は適切ではなく、信仰をもつ学生や宗教に関心をもつ学生は 21 世紀にはいってむしろ増加気味である。

②信仰をもっていると回答する人の割合は 1 割に満たないけれども、神仏や霊魂の存在を信じる割合は 2 割前後であり、宗教に親和性をもつ割合を信仰をもつかどうかだけで判断するのは適切でない。

③神棚、仏壇をもつ家は減少しているが、初詣、墓参りのような年中行事的な宗教習俗に関わる割合は 20 年間に大きな変化はなく、どちらかと言えば高くなる傾向にある。民俗信仰の形態に大きな変化はないと考えられる。

④宗教者への期待はあまり高くなく、檀家意識が薄れたのも確かであるが、葬儀などは宗教的なものにしたいと思う割合が 21 世紀には微増している。

⑤宗教がアブナイといった警戒は 6 割程度と過半数を超えるものの、他方で宗教は人間に必要であるとか、心の支えになるという見方も半数程度に見られる。

⑤宗教とジェンダーが関わる問題には、女性の方が宗教界に対し厳しい意見をもつ割合が高く、これは日韓とも同じである。

⑥サブカルチャーについては、性別による事柄ごとの関心の違いが顕著である。オカルト現象などには男性の方が、また占いなどには女性の方が強い関心をもち、また信じる度合いも高い。

これも日韓とも同じである。

⑦両親が信仰をもっているかどうかは、学生の信仰の有無や宗教に対する考え方を大きく左右する。親が信仰をもっていると、その学生が宗教に肯定的になる傾向がはっきりしている。

⑧友人が信仰をもっていても、それが何かに左右するというより、友人関係そのものを重視する場合が多い。

⑨オウム真理教に関する関心は地下鉄サリン事件から 20 年を経ても一定程度保たれており、麻原彰晃や事件そのものに基本的知識をもつ割合もさほど減少していない。

⑩イスラム教に関してはまだ十分な知識がない学生が多く、メディアのニュースに左右される割合がとりわけ高いが、日本に住むイスラム教徒への理解は少しずつ深まっている可能性がある。

⑪日韓の比較では、日本がやや信仰をもつ人が増加傾向であったの対し、韓国では比較した期間では減少傾向であった。もともと日本は信仰をもつ割合が低く、韓国は高いので、少しだけ差が縮まったことになる。

⑫宗教教育のうち宗教文化教育を中等教育でおこなうことに対しては日韓とも必要性を認める割合が高い。

こうした結果を見ても、宗教文化教育推進センターを通して実施されている宗教文化教育の意義と課題があらためて確認される[36]。宗教についての知識だけでなく、民俗信仰、サブカルチャーに関するものは、男女差はあっても、在籍する大学の宗教系・非宗教系、また卒業した高校の宗教系・非宗教系ではほとんど差がない。これらは高校や大学でおこなわれる宗派教育、そして一般教養的宗教学も影響をあたえていないということが推測される。これは現代における宗派教育、及び教養としての宗教研究が現代宗教にあまり時間を割いていないということとも関係する可能性がある。つまり現代宗教、身近な問題としての宗教や宗教文化に対する知見を学生たちが深める機会を増やすことを、教育する側がより強く自覚化していく必要がある。

---

36 宗教文化教育推進センターの設立自体が、國學院大學日本文化研究所の宗教教育プロジェクトによる調査研究、またこのアンケート調査の結果を踏まえて具体的案が練られ実現したものである。

調査の概要

① 回答者数

	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回	第6回	第7回	第8回	第9回	第10回	第11回	第12回
	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2005	2007	2010	2012	2015
総回答者数	4,058	4,718	5,991	6,374	11,151	6,751	5,961	4,370	4,401	4,443	4,242	6,017
有効回答者数	3,773	4,344	5,718	6,248	10,941	6,483	5,759	4,252	4,306	4,311	4,094	5,773
有効回答率(%)	93.0	92.1	95.4	98.0	98.1	96.0	96.6	97.3	97.8	97.0	96.5	95.9

＊回答者の内訳には少し変化がある。2001年までは一部専門学校生の回答者もいたが、以後は大学生のみになっている。

② 調査実施校数

	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2005	2007	2010	2012	2015
宗教系	8	12	13	11	19	16	15	14	14	17	14	19
宗教系(%)	25.0	28.6	31.7	25.6	26.0	38.1	39.5	43.8	40.0	47.2	46.7	52.8
非宗教系	24	30	28	32	54	26	23	18	21	19	16	17
非宗教系(%)	75.0	71.4	68.3	74.4	74.0	61.9	60.5	56.3	60.0	52.8	53.3	47.2

③ 在学している学校の宗教系・非宗教系の別

	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2005	2007	2010	2012	2015
宗教系	1,152	1,510	2,093	2,142	3,779	2,976	2,733	1,611	2,096	2,308	2,375	2,746
宗教系(%)	30.5	34.8	36.6	34.3	34.5	45.9	47.5	37.9	48.7	53.5	58.0	47.6
非宗教系	2,621	2,834	3,625	4,106	7,162	3,507	3,026	2,641	2,210	2,003	1,719	3,027
非宗教系(%)	69.5	65.2	63.4	65.7	65.5	54.1	52.5	62.1	51.3	46.5	42.0	52.4

④ 卒業した高校の宗教系・非宗教系の別

	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2005	2007	2010	2012	2015
宗教系	—	588	712	773	1283	812	871	582	653	573	475	525
宗教系(%)	—	13.5	12.5	12.4	11.7	12.5	15.1	13.7	15.2	13.3	11.6	9.1
非宗教系	—	3,595	4,786	5,175	9,117	5,323	4,477	3,270	3,208	3,679	3,531	5,118
非宗教系(%)	—	82.8	83.7	82.8	83.3	82.1	77.7	76.9	74.5	85.3	86.2	88.7
その他	—	161	220	300	541	348	411	400	445	59	88	130
その他(%)	—	3.7	3.8	4.8	4.9	5.4	7.1	9.4	10.3	1.4	2.1	2.3

＊「その他」は、無回答、外国の学校、大検など、宗教系か非宗教系かが不明な場合を指す。

⑤ 回答者の性別

	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2005	2007	2010	2012	2015
男性	1,308	1,628	2,619	2,602	4,643	2,918	2,737	1,945	1,920	1,953	1,911	2,458
男性(%)	34.7	37.5	45.8	41.6	42.4	45.0	47.5	45.7	44.6	45.3	46.7	42.6
女性	2,446	2,699	3,090	3,630	6,281	3,552	3,007	2,274	2,378	2,350	2,171	3,304
女性(%)	64.8	62.1	54.0	58.1	57.4	54.8	52.2	53.5	55.2	54.5	53.0	57.2
無回答	19	17	9	16	17	13	15	33	8	8	12	11
無回答(%)	0.5	0.4	0.2	0.3	0.2	0.2	0.3	0.8	0.2	0.2	0.3	0.2

⑥ 回答者の学年

	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2005	2007	2010	2012	2015
1 年生	1,860	2,008	2,719	2,939	4,530	2,838	2,029	1,800	1,779	1,807	1,704	2,848
1 年生(%)	49.3	46.2	47.6	47.0	41.4	43.8	35.2	42.3	41.3	41.9	41.6	49.3
2 年生	1,163	1,369	1,785	1,877	4,051	2,142	2,237	1,354	1,024	1,357	1,187	1,242
2 年生(%)	30.8	31.5	31.2	30.0	37.0	33.0	38.8	31.8	23.8	31.5	29.0	21.5
3 年生	446	640	848	1,118	1,576	1,093	943	676	913	767	758	1,020
3 年生(%)	11.8	14.7	14.8	17.9	14.4	16.9	16.4	15.9	21.2	17.8	18.5	17.7
4 年生	271	281	313	230	600	349	410	303	415	291	352	491
4 年生(%)	7.2	6.5	5.5	3.7	5.5	5.4	7.1	7.1	9.6	6.8	8.6	8.5
その他	33	46	53	84	184	61	140	119	175	89	93	172
その他(%)	0.9	1.1	0.9	1.3	1.7	0.9	2.4	2.8	4.1	2.1	2.3	3.0

＊「その他」は、無回答、大学院生、5年生以上など、学部1～4年生には該当しない場合を指す。

［Ⅰ］第1回～12回調査結果の経年比較

第1章 学生の宗教意識の経年変化

a）信仰の有無

質問内容

あなたは宗教にどの程度関心がありますか。次のうちから選び、さらにそれぞれの質問に答えて下さい。

1.現在、信仰をもっている

2.信仰はもっていないが、宗教に関心がある

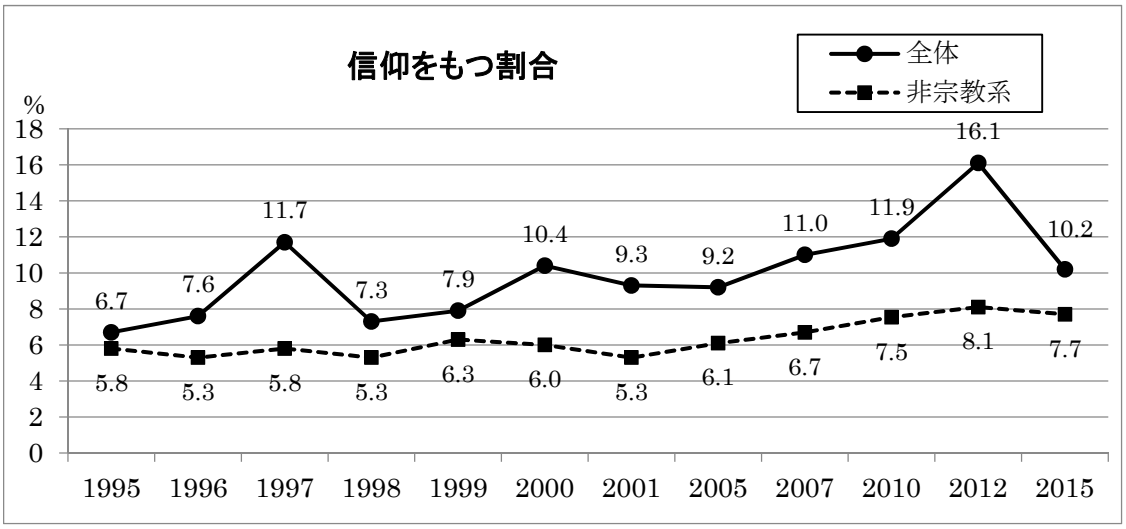
3.信仰はもっていないし、宗教にもあまり関心がない

4.信仰はもっていないし、宗教にもまったく関心がない

この質問は 1995 年から 2015 年まで一貫して行った。質問に対し、「現在、信仰をもっている」と回答した学生の割合を全体及び非宗教系に分けて示す。

以下、全体とは回答者全体であり、宗教系、非宗教系は、宗教系学校に在籍する学生、それ以外の学生を指す。

グラフ 1a1



b) 宗教に対する関心

上記質問に対し、「信仰を持っている」、「関心がある」、「あまり関心がない」、「まったく関心がない」と回答した学生の割合

＜全体＞

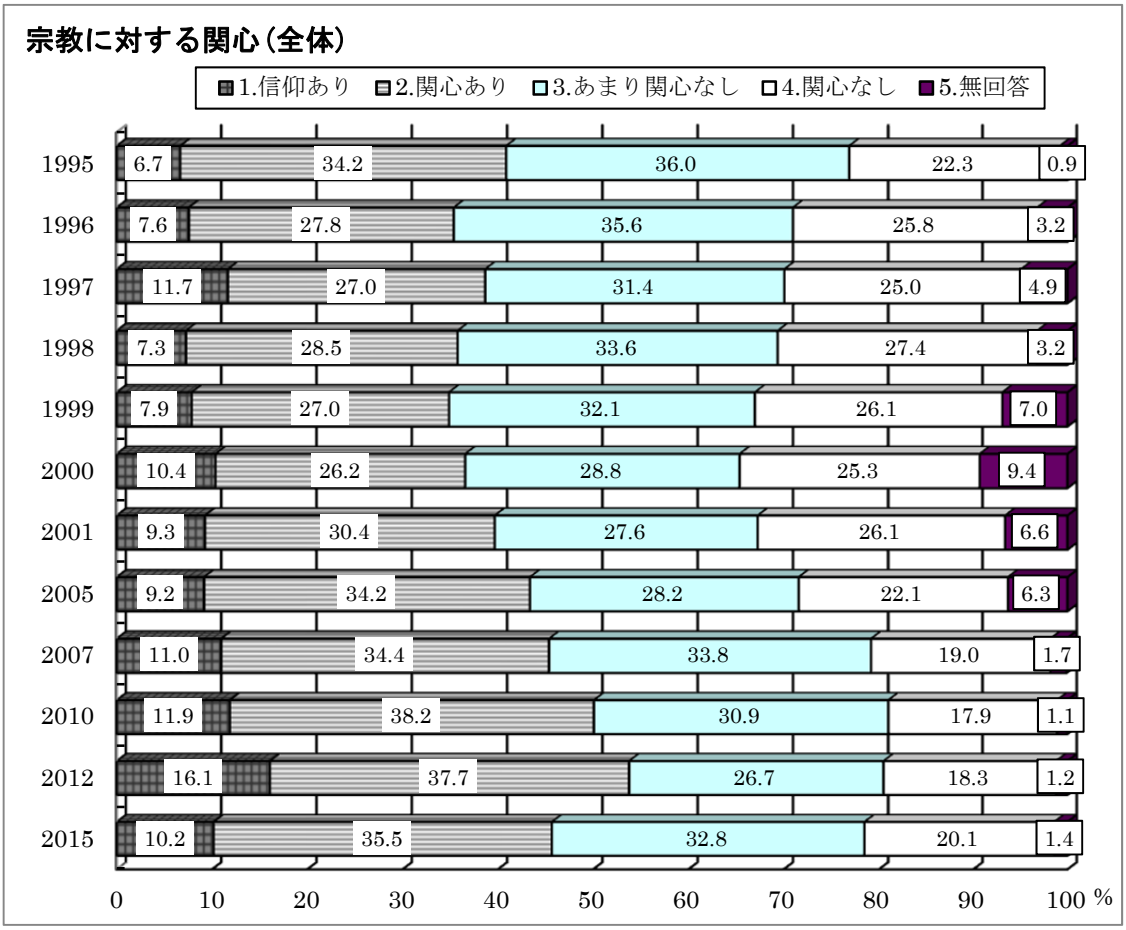
＊全回答者の集計は、以下＜全体＞として示す。

表 1b1

	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2005	2007	2010	2012	2015
1.信仰を持っている	6.7	7.6	11.7	7.3	7.9	10.4	9.3	9.2	11.0	11.9	16.1	10.2
2.関心がある	34.2	27.8	27.0	28.5	27.0	26.2	30.4	34.2	34.4	38.2	37.7	35.5
3.あまり関心がない	36.0	35.6	31.4	33.6	32.1	28.8	27.6	28.2	33.8	30.9	26.7	32.8
4.まったく関心がない	22.3	25.8	25.0	27.4	26.1	25.3	26.1	22.1	19.0	17.9	18.3	20.1
5.無回答	0.9	3.2	4.9	3.2	7.0	9.4	6.6	6.3	1.7	1.1	1.2	1.4

＊数字はパーセンテージ。以下同様。

グラフ 1b1



「宗教に対する関心」については宗教系と非宗教系との違いが分かりやすいようにした。

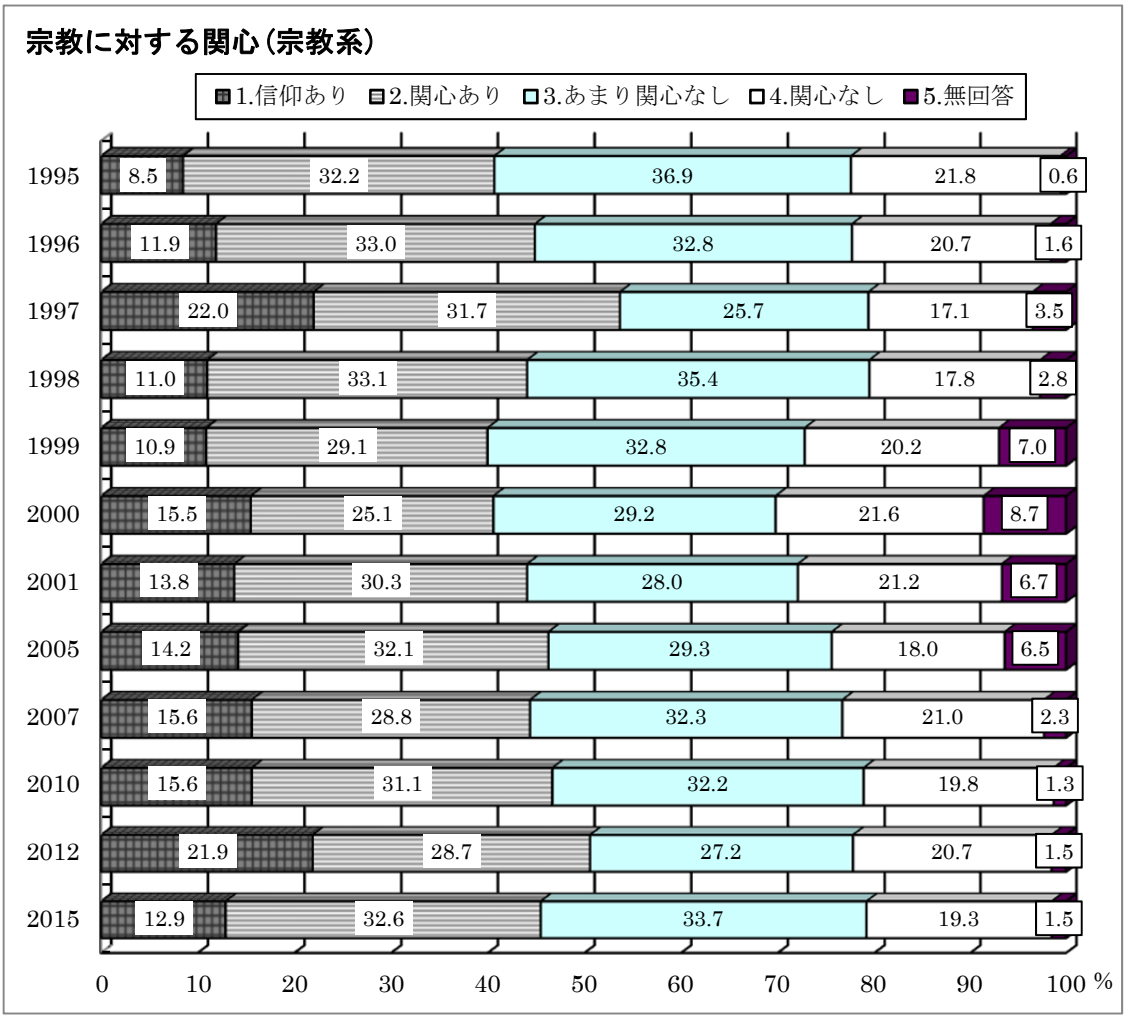
＜宗教系＞は、宗教系の大学等に在籍する学生で、＜非宗教系＞は、それ以外の私立学校、国公立の学校に在籍する学生、以下同様。

＜宗教系＞

表 1b2

	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2005	2007	2010	2012	2015
1.信仰を持っている	8.5	11.9	22.0	11.0	10.9	15.5	13.8	14.2	15.6	15.6	21.9	12.9
2.関心がある	32.2	33.0	31.7	33.1	29.1	25.1	30.3	32.1	28.8	31.1	28.7	32.6
3.あまり関心がない	36.9	32.8	25.7	35.4	32.8	29.2	28.0	29.3	32.3	32.2	27.2	33.7
4.まったく関心がない	21.8	20.7	17.1	17.8	20.2	21.6	21.2	18.0	21.0	19.8	20.7	19.3
5.無回答	0.6	1.6	3.5	2.8	7.0	8.7	6.7	6.5	2.3	1.3	1.5	1.5

グラフ 1b2

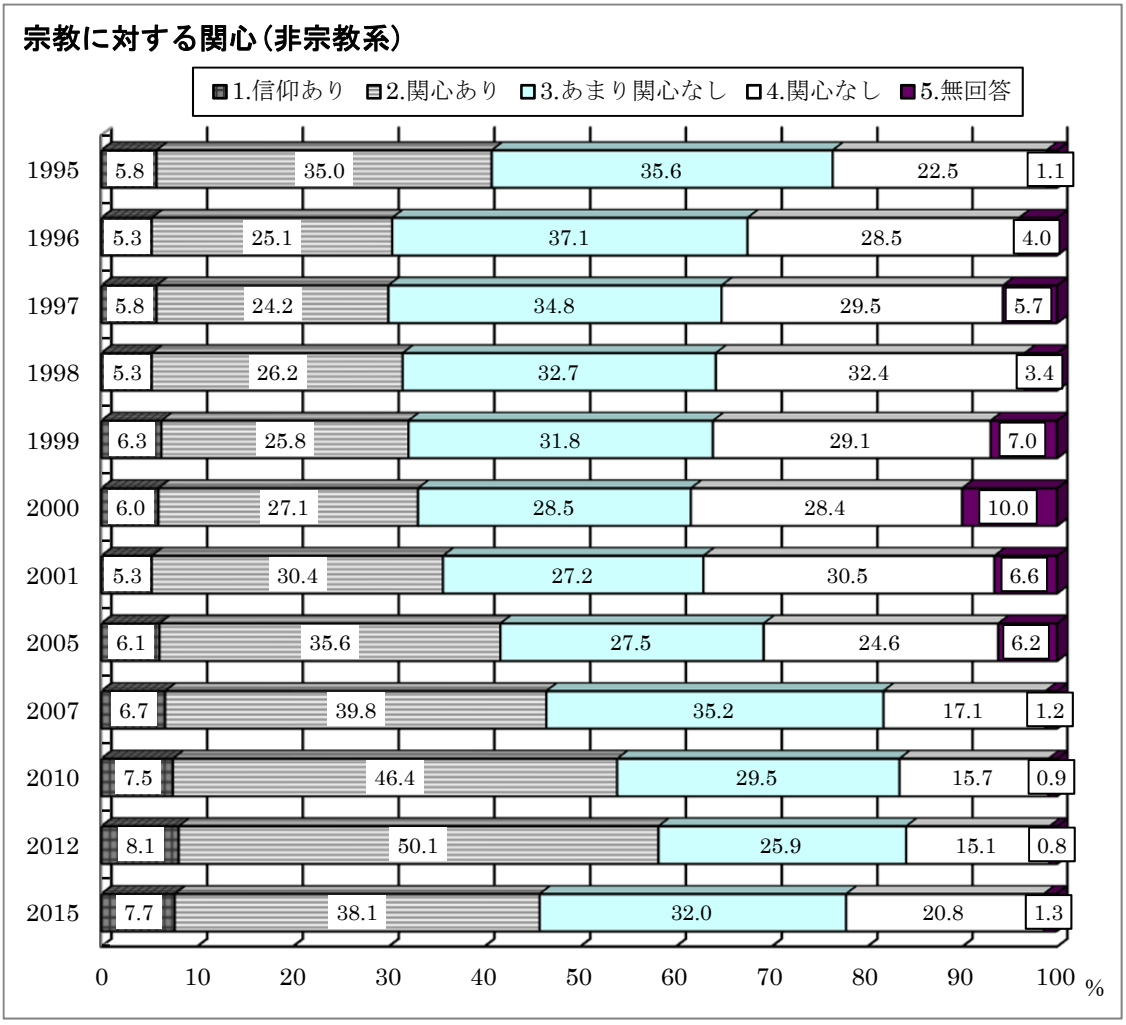


＜非宗教系＞

表 1b3

	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2005	2007	2010	2012	2015
1.信仰を持っている	5.8	5.3	5.8	5.3	6.3	6.0	5.3	6.1	6.7	7.5	8.1	7.7
2.関心がある	35.0	25.1	24.2	26.2	25.8	27.1	30.4	35.6	39.8	46.4	50.1	38.1
3.あまり関心がない	35.6	37.1	34.8	32.7	31.8	28.5	27.2	27.5	35.2	29.5	25.9	32.0
4.まったく関心がない	22.5	28.5	29.5	32.4	29.1	28.4	30.5	24.6	17.1	15.7	15.1	20.8
5.無回答	1.1	4.0	5.7	3.4	7.0	10.0	6.6	6.2	1.2	0.9	0.8	1.3

グラフ 1b3

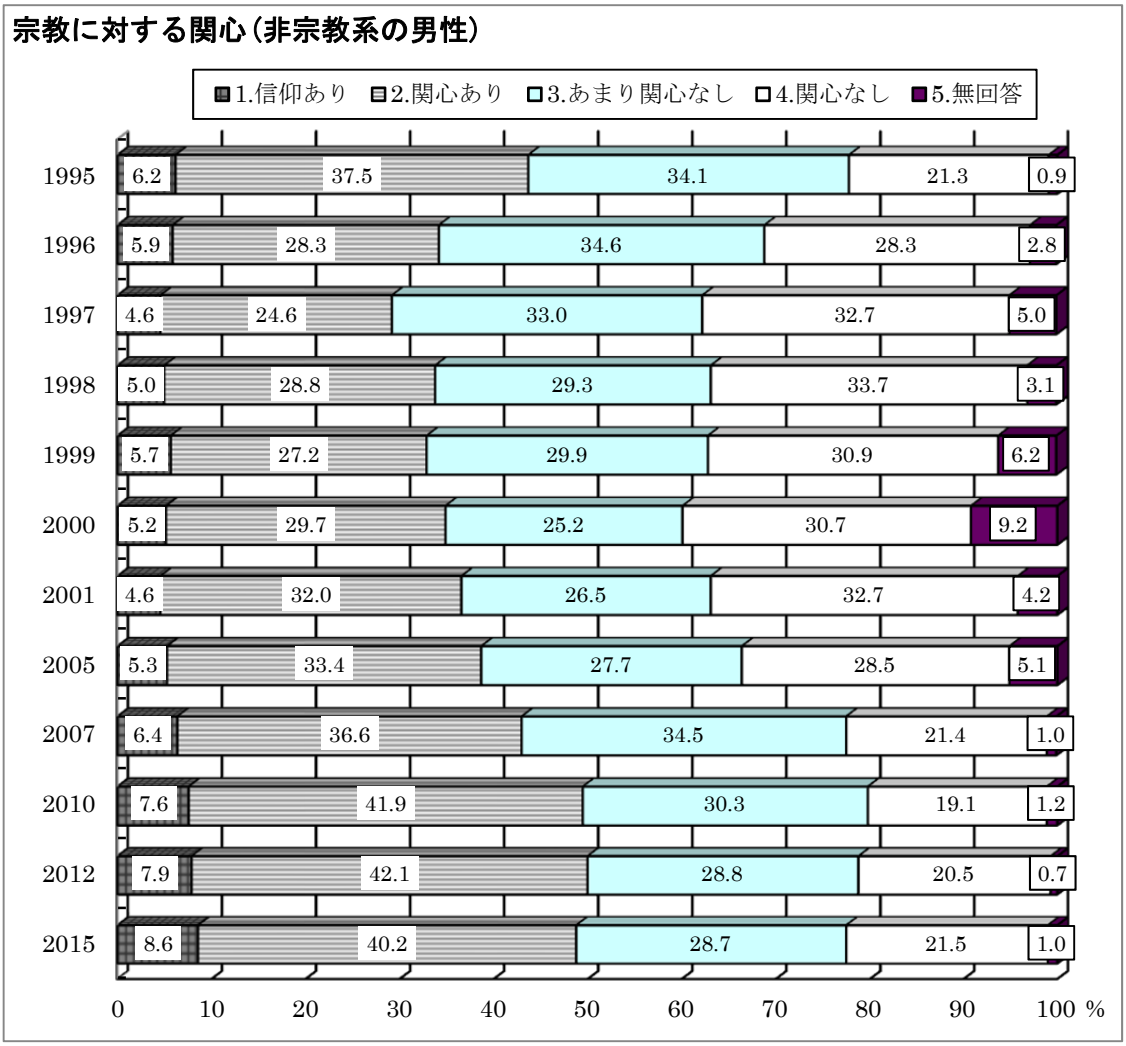


＜非宗教系男性＞

表 1b4

	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2005	2007	2010	2012	2015
1.信仰を持っている	6.2	5.9	4.6	5.0	5.7	5.2	4.6	5.3	6.4	7.6	7.9	8.6
2.関心がある	37.5	28.3	24.6	28.8	27.2	29.7	32.0	33.4	36.6	41.9	42.1	40.2
3.あまり関心がない	34.1	34.6	33.0	29.3	29.9	25.2	26.5	27.7	34.5	30.3	28.8	28.7
4.まったく関心がない	21.3	28.3	32.7	33.7	30.9	30.7	32.7	28.5	21.4	19.1	20.5	21.5
5.無回答	0.9	2.8	5.0	3.1	6.2	9.2	4.2	5.1	1.0	1.2	0.7	1.0

グラフ 1b4

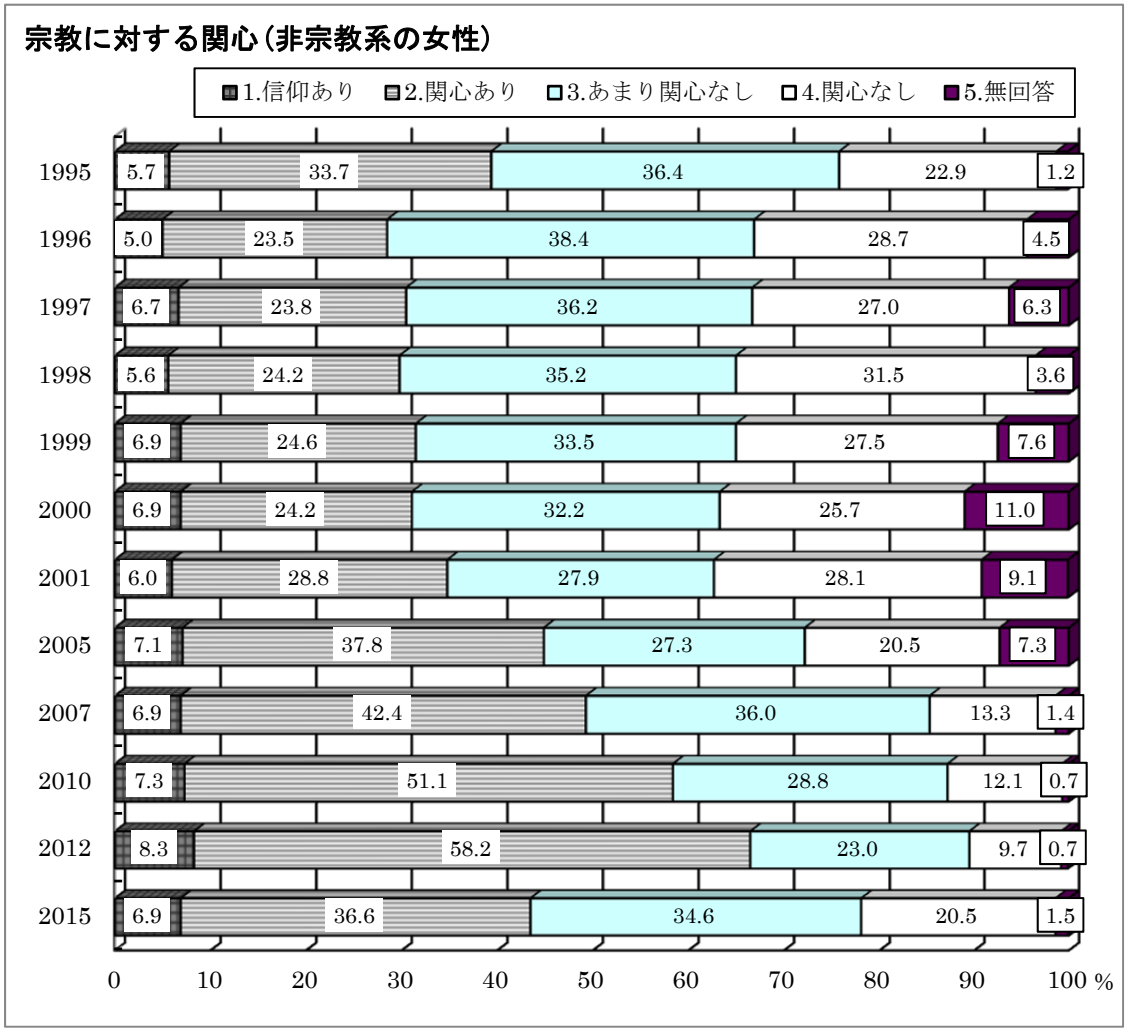


＜非宗教系女性＞

表 1b5

	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2005	2007	2010	2012	2015
1.信仰を持っている	5.7	5.0	6.7	5.6	6.9	6.9	6.0	7.1	6.9	7.3	8.3	6.9
2.関心がある	33.7	23.5	23.8	24.2	24.6	24.2	28.8	37.8	42.4	51.1	58.2	36.6
3.あまり関心がない	36.4	38.4	36.2	35.2	33.5	32.2	27.9	27.3	36.0	28.8	23.0	34.6
4.まったく関心がない	22.9	28.7	27.0	31.5	27.5	25.7	28.1	20.5	13.3	12.1	9.7	20.5
5.無回答	1.2	4.5	6.3	3.6	7.6	11.0	9.1	7.3	1.4	0.7	0.7	1.5

グラフ 1b5

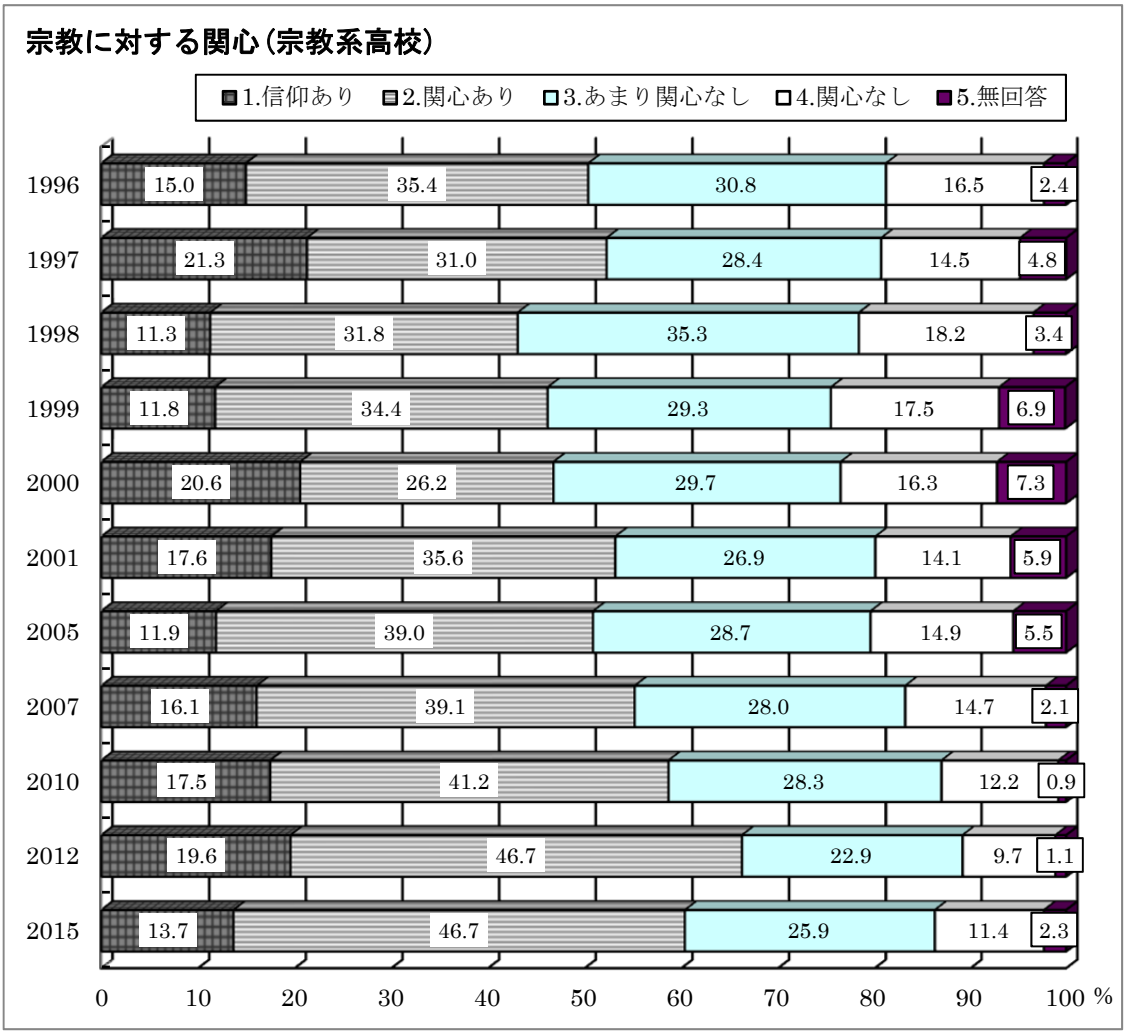


＜宗教系高校＞

表 1b6

	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2005	2007	2010	2012	2015
1.信仰を持っている	15.0	21.3	11.3	11.8	20.6	17.6	11.9	16.1	17.5	19.6	13.7
2.関心がある	35.4	31.0	31.8	34.4	26.2	35.6	39.0	39.1	41.2	46.7	46.7
3.あまり関心がない	30.8	28.4	35.3	29.3	29.7	26.9	28.7	28.0	28.3	22.9	25.9
4.まったく関心がない	16.5	14.5	18.2	17.5	16.3	14.1	14.9	14.7	12.2	9.7	11.4
5.無回答	2.4	4.8	3.4	6.9	7.3	5.9	5.5	2.1	0.9	1.1	2.3

グラフ 1b6

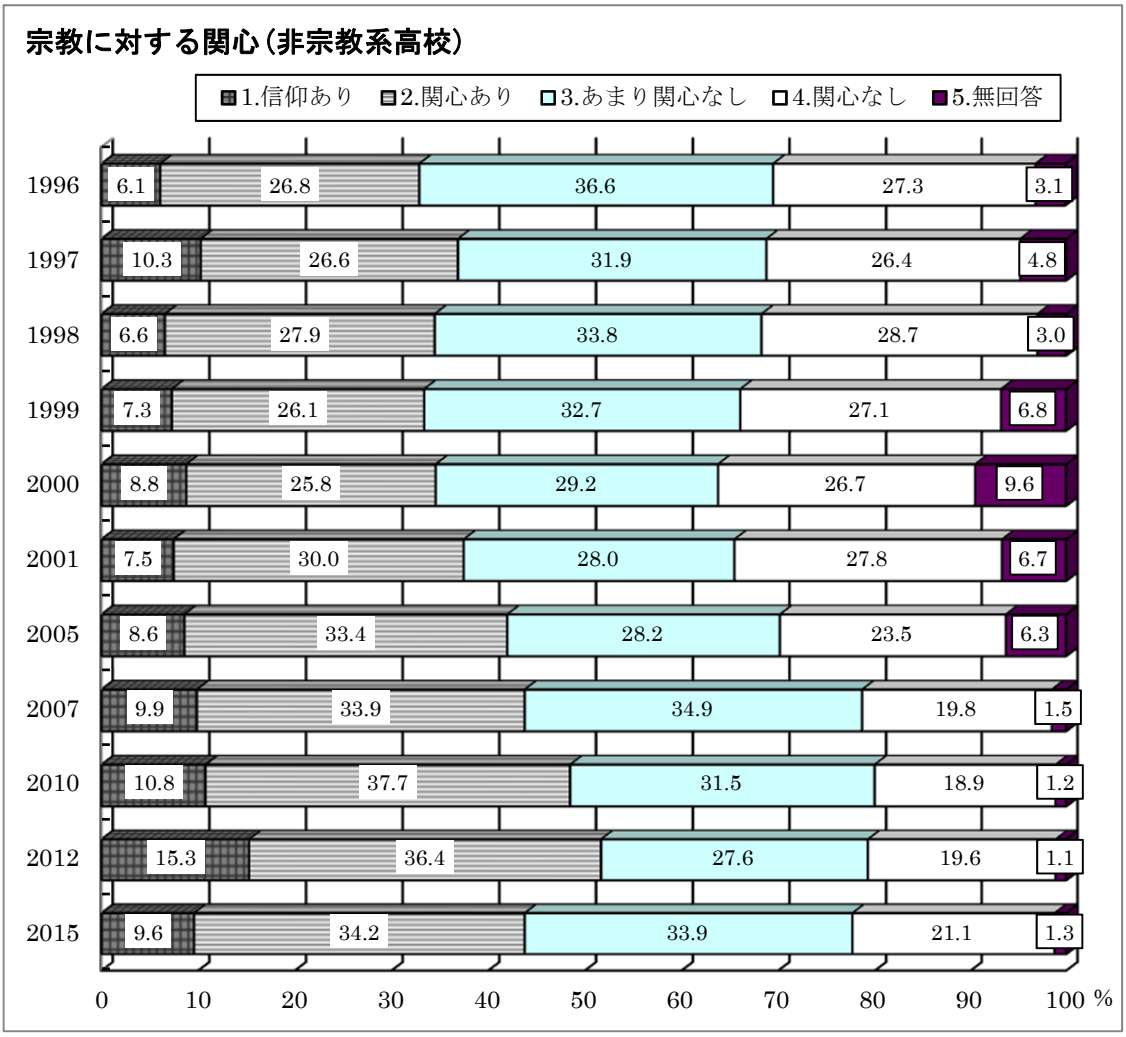


＜非宗教系高校＞

表 1b7

	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2005	2007	2010	2012	2015
1.信仰を持っている	6.1	10.3	6.6	7.3	8.8	7.5	8.6	9.9	10.8	15.3	9.6
2.関心がある	26.8	26.6	27.9	26.1	25.8	30.0	33.4	33.9	37.7	36.4	34.2
3.あまり関心がない	36.6	31.9	33.8	32.7	29.2	28.0	28.2	34.9	31.5	27.6	33.9
4.まったく関心がない	27.3	26.4	28.7	27.1	26.7	27.8	23.5	19.8	18.9	19.6	21.1
5.無回答	3.1	4.8	3.0	6.8	9.6	6.7	6.3	1.5	1.2	1.1	1.3

グラフ 1b7



c) 神仏霊魂を信じるか

質問内容

神や仏の存在について、あなたはどう思いますか。「1.信じる 2.ありうると思う 3.あまり信じない 4.否定する」のなかから、番号で答えて下さい。

1.神の存在[　]　2.仏の存在[　]　3.霊魂の存在[　]

この質問について、神の存在、仏の存在、霊魂の存在に関しての回答の推移を示す。

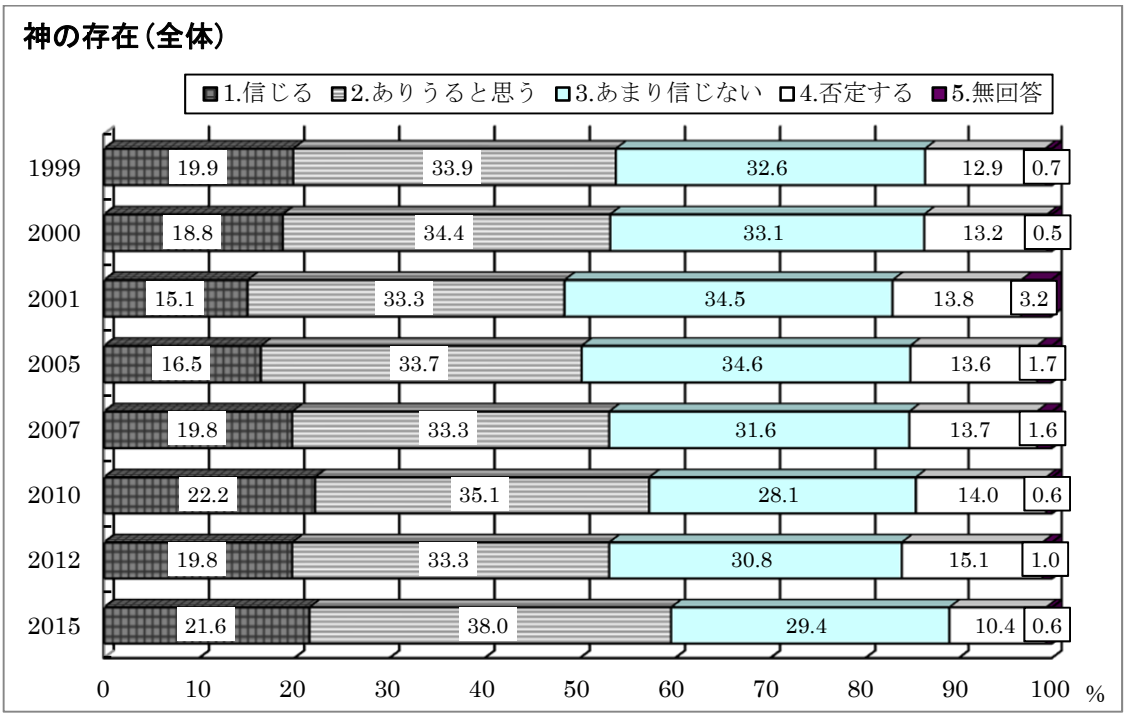
①神の存在

＜全体＞

表 1c1

	1999	2000	2001	2005	2007	2010	2012	2015
1.信じる	19.9	18.8	15.1	16.5	19.8	22.2	19.8	21.6
2.ありうると思う	33.9	34.4	33.3	33.7	33.3	35.1	33.3	38.0
3.あまり信じない	32.6	33.1	34.5	34.6	31.6	28.1	30.8	29.4
4.否定する	12.9	13.2	13.8	13.6	13.7	14.0	15.1	10.4
5.無回答	0.7	0.5	3.2	1.7	1.6	0.6	1.0	0.6

グラフ 1c1

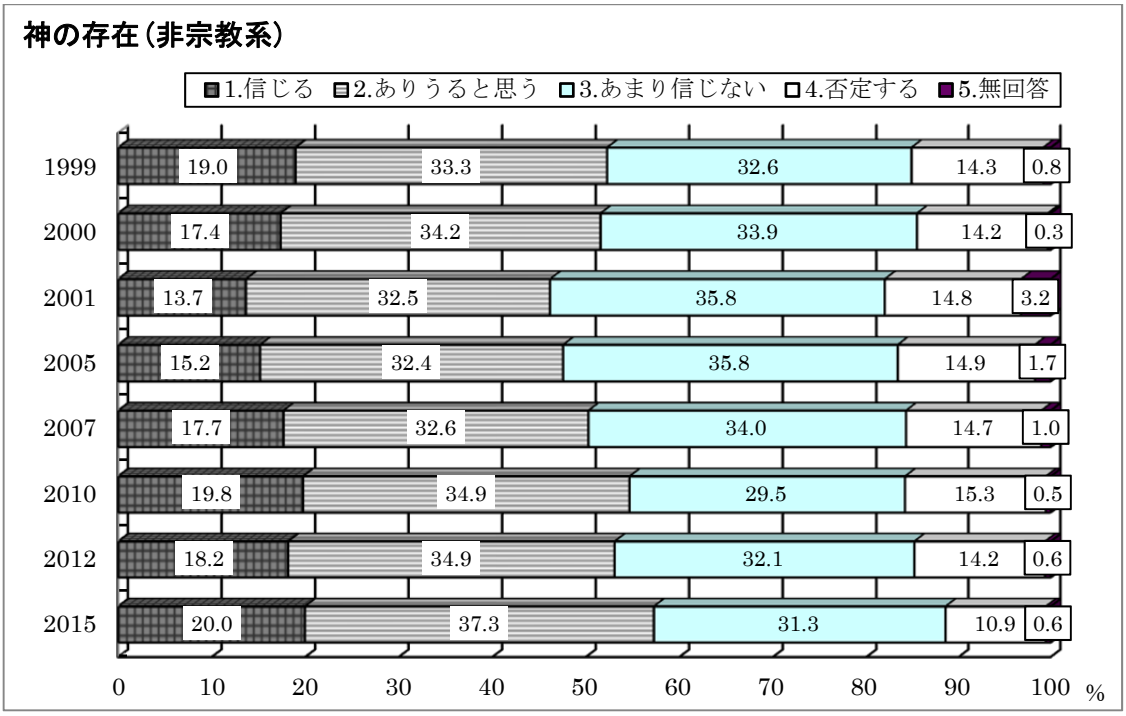


＜非宗教系＞

表 1c2

	1999	2000	2001	2005	2007	2010	2012	2015
1.信じる	19.0	17.4	13.7	15.2	17.7	19.8	18.2	20.0
2.ありうると思う	33.3	34.2	32.5	32.4	32.6	34.9	34.9	37.3
3.あまり信じない	32.6	33.9	35.8	35.8	34.0	29.5	32.1	31.3
4.否定する	14.3	14.2	14.8	14.9	14.7	15.3	14.2	10.9
5.無回答	0.8	0.3	3.2	1.7	1.0	0.5	0.6	0.6

グラフ 1c2



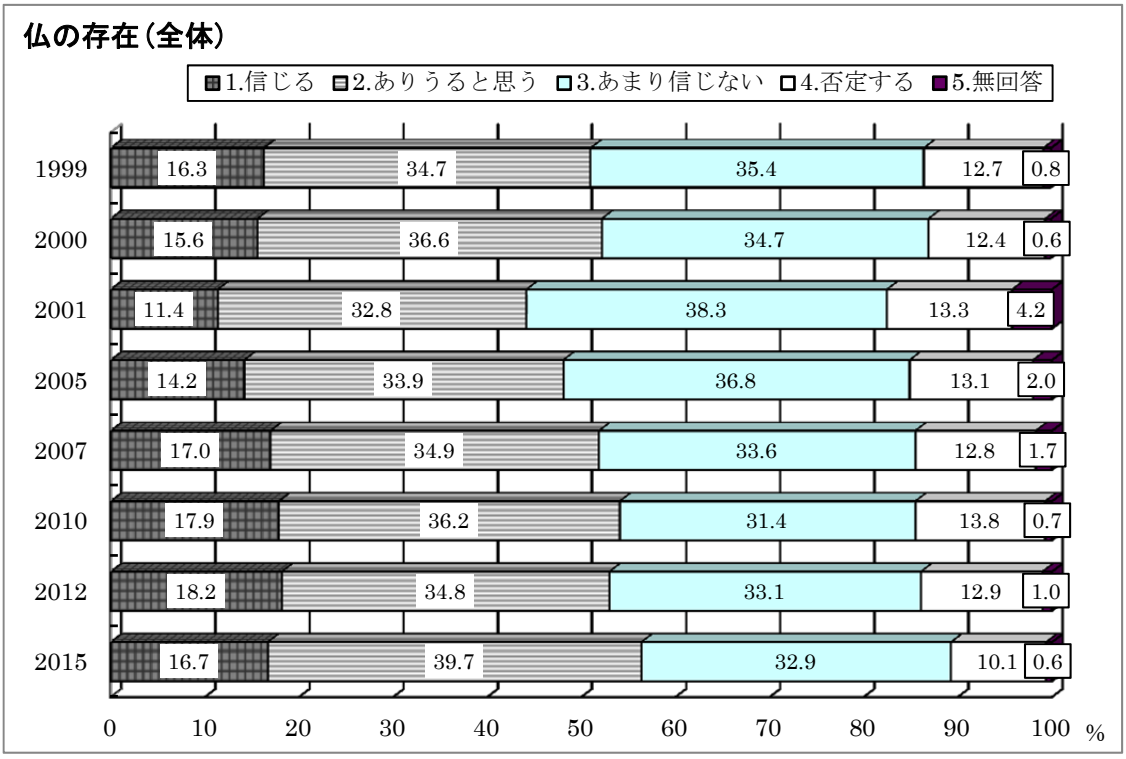
②仏の存在

＜全体＞

表 1c3

	1999	2000	2001	2005	2007	2010	2012	2015
1.信じる	16.3	15.6	11.4	14.2	17.0	17.9	18.2	16.7
2.ありうると思う	34.7	36.6	32.8	33.9	34.9	36.2	34.8	39.7
3.あまり信じない	35.4	34.7	38.3	36.8	33.6	31.4	33.1	32.9
4.否定する	12.7	12.4	13.3	13.1	12.8	13.8	12.9	10.1
5.無回答	0.8	0.6	4.2	2.0	1.7	0.7	1.0	0.6

グラフ 1c3

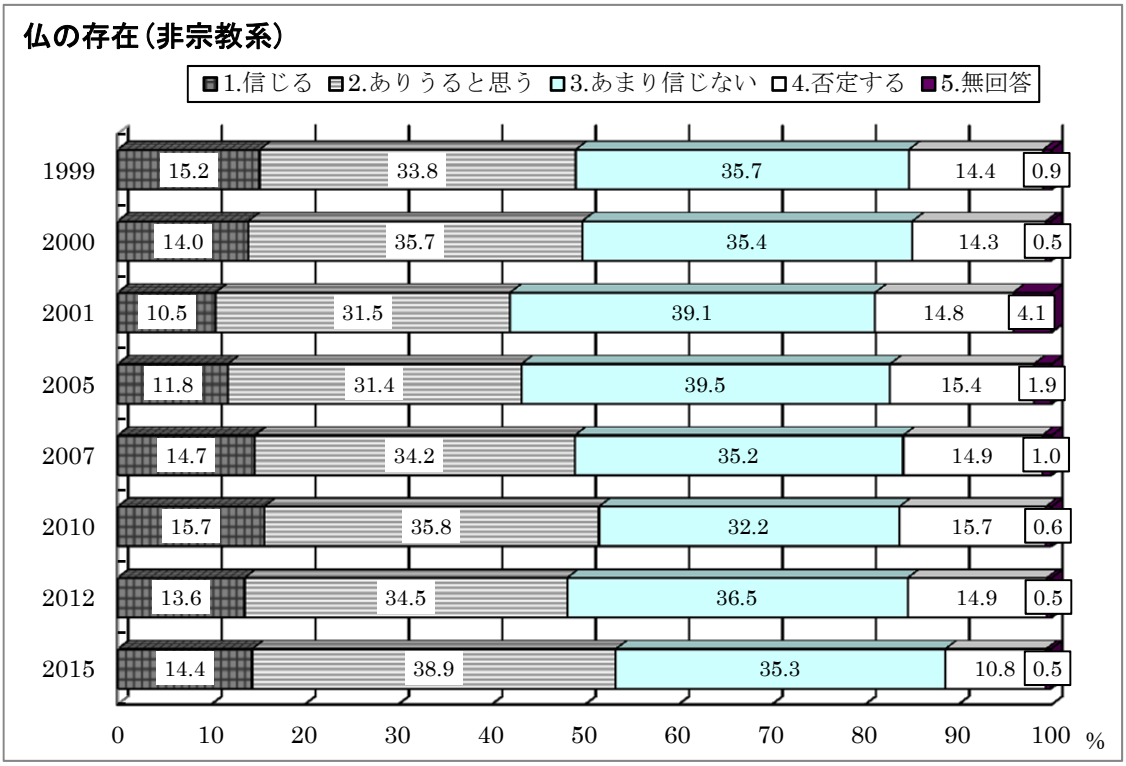


＜非宗教系＞

表 1c4

	1999	2000	2001	2005	2007	2010	2012	2015
1.信じる	15.2	14.0	10.5	11.8	14.7	15.7	13.6	14.4
2.ありうると思う	33.8	35.7	31.5	31.4	34.2	35.8	34.5	38.9
3.あまり信じない	35.7	35.4	39.1	39.5	35.2	32.2	36.5	35.3
4.否定する	14.4	14.3	14.8	15.4	14.9	15.7	14.9	10.8
5.無回答	0.9	0.5	4.1	1.9	1.0	0.6	0.5	0.5

グラフ 1c4



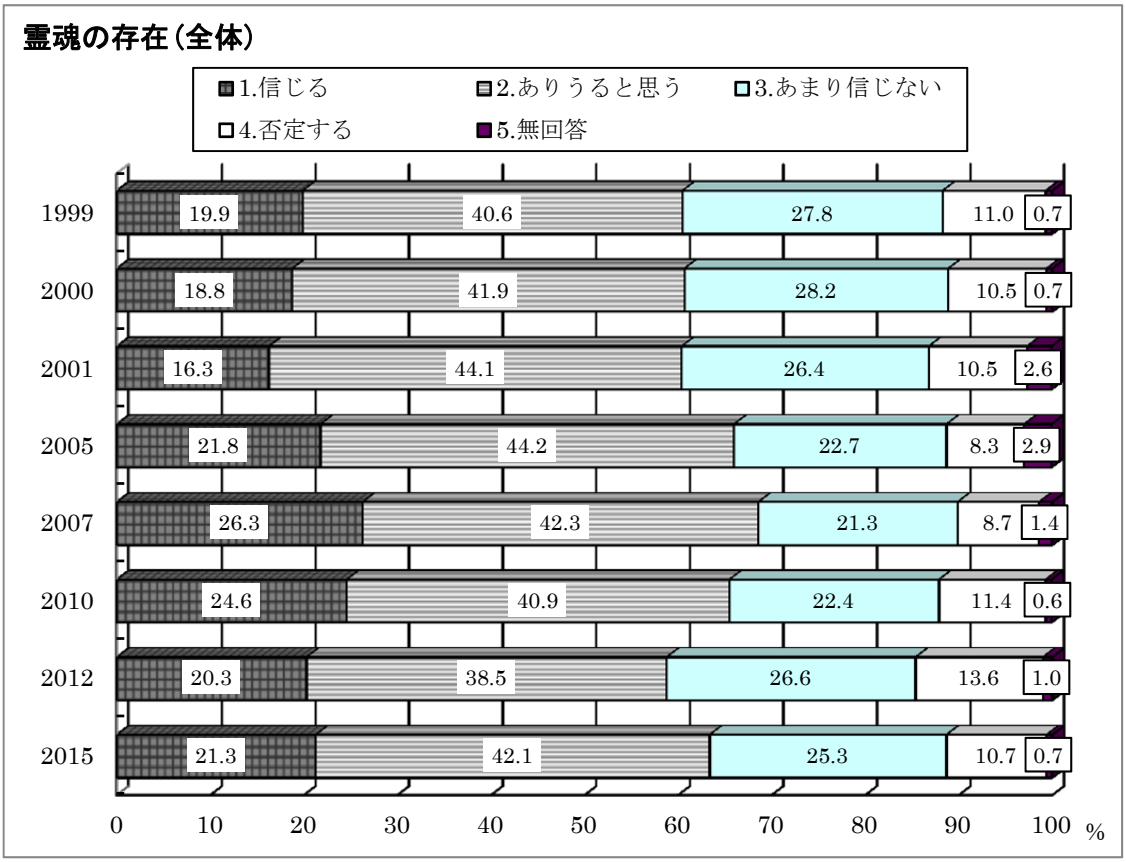
③霊魂の存在

＜全体＞

表 1c5

	1999	2000	2001	2005	2007	2010	2012	2015
1.信じる	19.9	18.8	16.3	21.8	26.3	24.6	20.3	21.3
2.ありうると思う	40.6	41.9	44.1	44.2	42.3	40.9	38.5	42.1
3.あまり信じない	27.8	28.2	26.4	22.7	21.3	22.4	26.6	25.3
4.否定する	11.0	10.5	10.5	8.3	8.7	11.4	13.6	10.7
5.無回答	0.7	0.7	2.6	2.9	1.4	0.6	1.0	0.7

グラフ 1c5

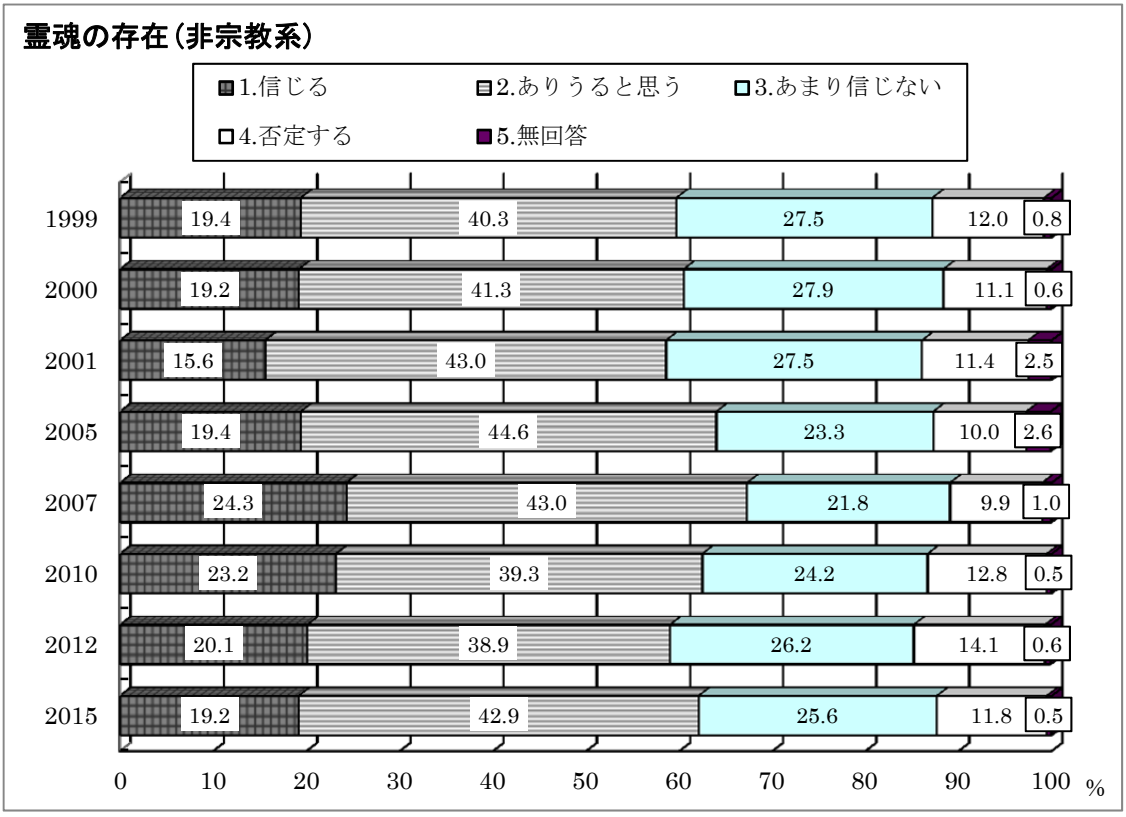


＜非宗教系＞

表 1c6

	1999	2000	2001	2005	2007	2010	2012	2015
1.信じる	19.4	19.2	15.6	19.4	24.3	23.2	20.1	19.2
2.ありうると思う	40.3	41.3	43.0	44.6	43.0	39.3	38.9	42.9
3.あまり信じない	27.5	27.9	27.5	23.3	21.8	24.2	26.2	25.6
4.否定する	12.0	11.1	11.4	10.0	9.9	12.8	14.1	11.8
5.無回答	0.8	0.6	2.5	2.6	1.0	0.5	0.6	0.5

グラフ 1c6



④先祖は自分たちを見守ってくれている

この質問は 1998 年から 2005 年までに 4 回行っている。

質問内容

次のような意見について、「1.そう思う　2.どちらかといえばそう思う　3.どちらかといえばそう思わない　4.そう思わない」のいずれかの番号で答えて下さい。

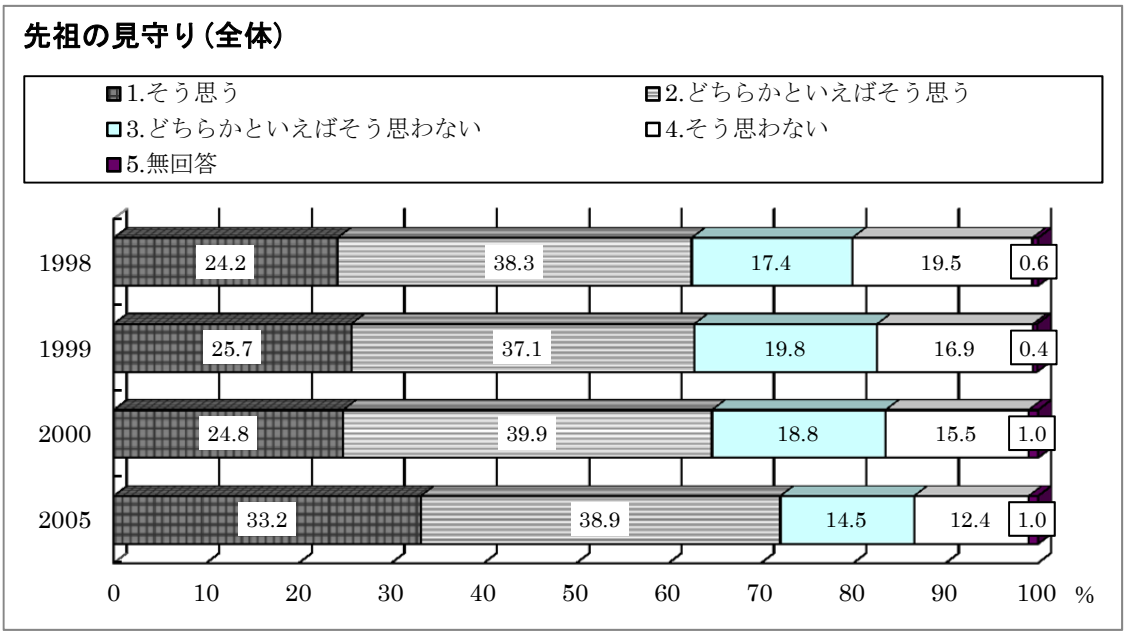
「先祖は自分たちを見守ってくれている」　　[　　]

＜全体＞

表 1c7

	1998	1999	2000	2005
1.そう思う	24.2	25.7	24.8	33.2
2.どちらかといえばそう思う	38.3	37.1	39.9	38.9
3.どちらかといえばそう思わない	17.4	19.8	18.8	14.5
4.そう思わない	19.5	16.9	15.5	12.4
5.無回答	0.6	0.4	1.0	1.0

グラフ 1c7

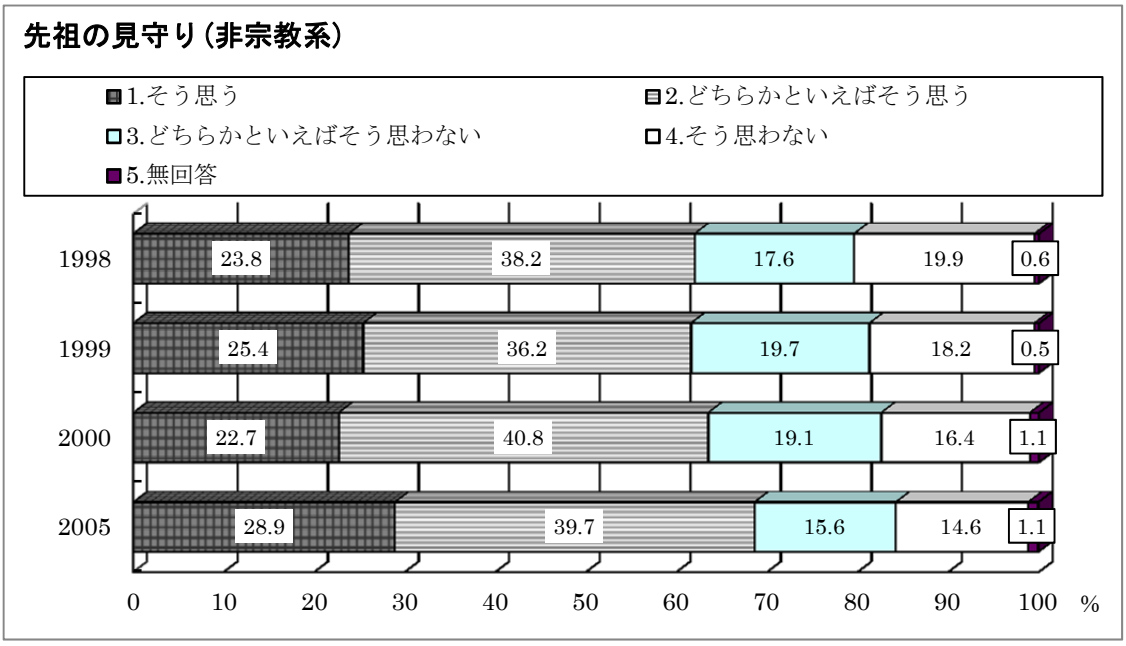


＜非宗教系＞

表 1c8

	1998	1999	2000	2005
1.そう思う	23.8	25.4	22.7	28.9
2.どちらかといえばそう思う	38.2	36.2	40.8	39.7
3.どちらかといえばそう思わない	17.6	19.7	19.1	15.6
4.そう思わない	19.9	18.2	16.4	14.6
5.無回答	0.6	0.5	1.1	1.1

グラフ 1c8



⑤死後の世界の存在

この質問は 1996 年から 2000 年まで 5 回行っている。

質問内容

次の事柄について、「1.信じる 2.ありうると思う 3.あまり信じない 4.否定する 5.その事柄を知らない」のなかから、番号で答えて下さい。

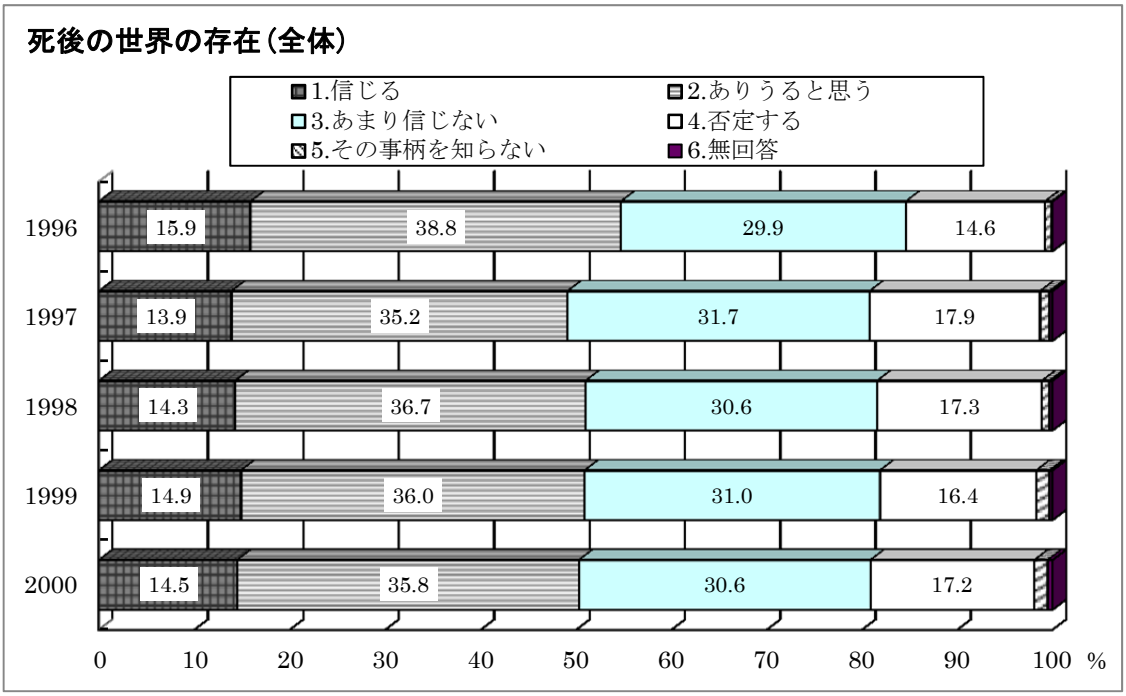
死後の世界の存在　　[　]

＜全体＞

表 1c9

	1996	1997	1998	1999	2000
1.信じる	15.9	13.9	14.3	14.9	14.5
2.ありうると思う	38.8	35.2	36.7	36.0	35.8
3.あまり信じない	29.9	31.7	30.6	31.0	30.6
4.否定する	14.6	17.9	17.3	16.4	17.2
5.その事柄を知らない	0.7	1.0	0.8	1.4	1.4
6.無回答	0.1	0.3	0.4	0.3	0.5

グラフ 1c9

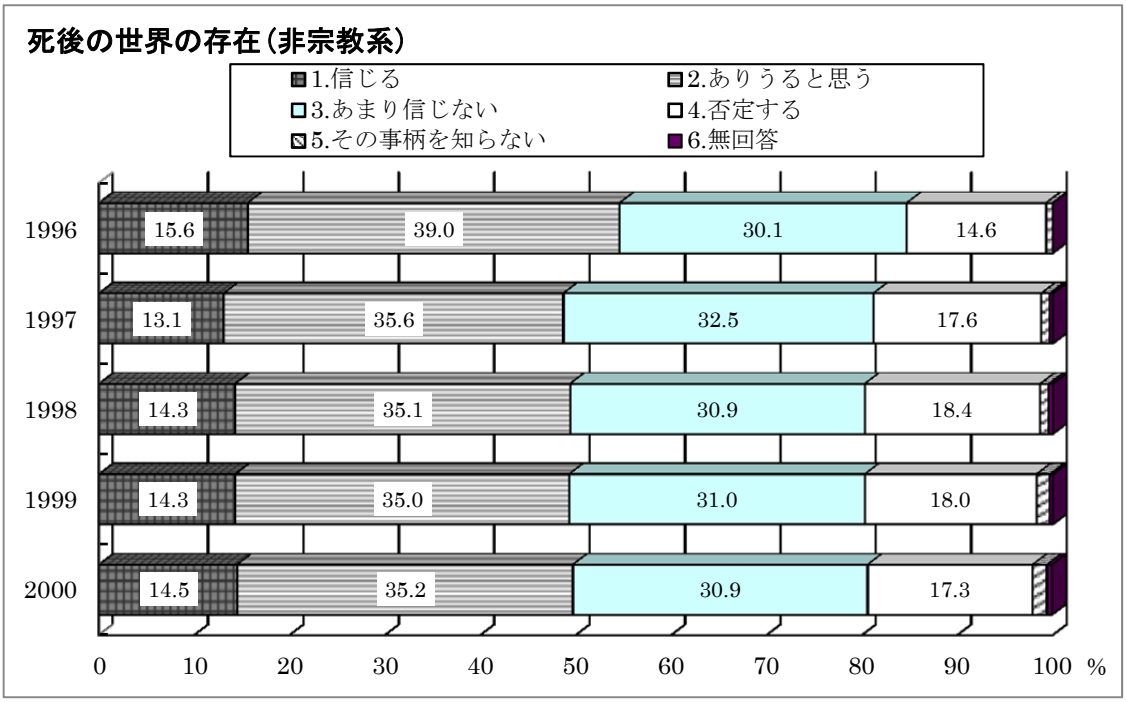


＜非宗教系＞

表 1c10

	1996	1997	1998	1999	2000
1.信じる	15.6	13.1	14.3	14.3	14.5
2.ありうると思う	39.0	35.6	35.1	35.0	35.2
3.あまり信じない	30.1	32.5	30.9	31.0	30.9
4.否定する	14.6	17.6	18.4	18.0	17.3
5.その事柄を知らない	0.7	0.9	0.9	1.4	1.5
6.無回答	0.1	0.3	0.4	0.3	0.5

グラフ 1c10



第2章 家庭の宗教環境

a）家の宗教

家の宗教は宗教系と非宗教系でやや異なる。宗教系は創価大学や天理大学の回答者数によって受ける影響が大きいので、比較の意味で宗教系と非宗教系に分けてみた。

質問内容

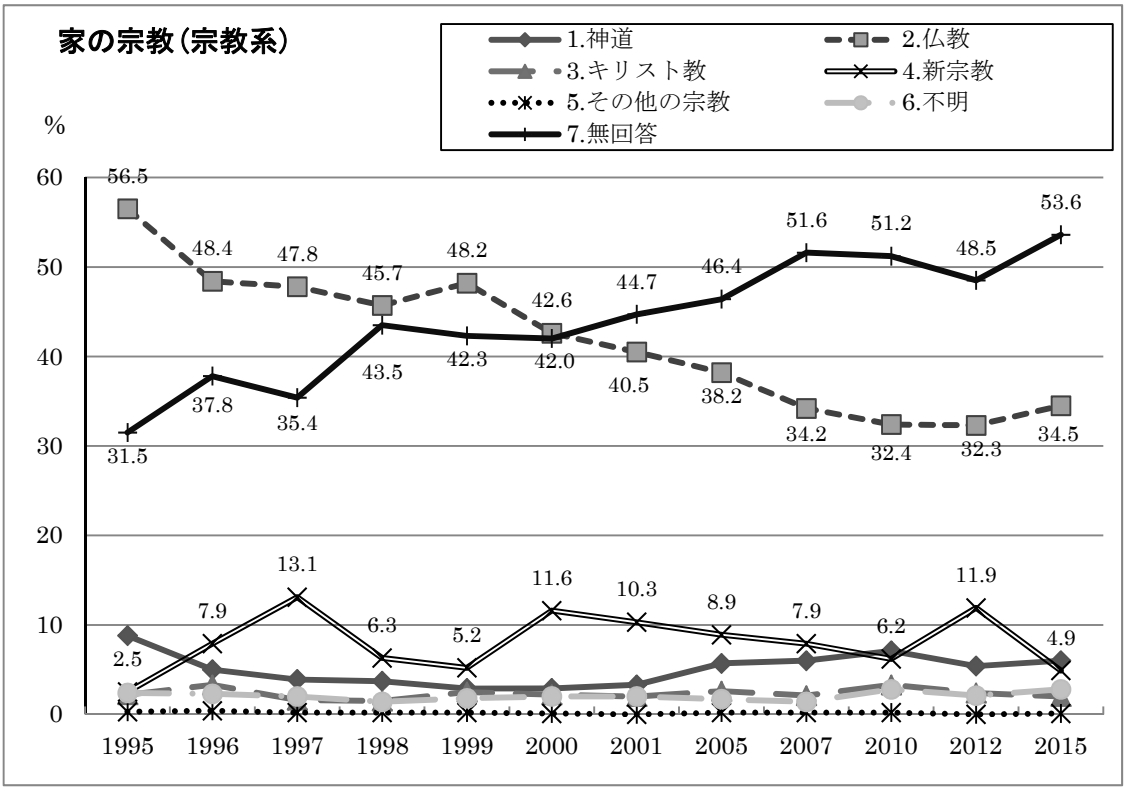
あなたの「家の宗教」がありましたら、「宗教名一覧表」の中から選んで、記号または具体的名称を書いて下さい。2つ以上ある場合は、すべて記入して下さい。　　［　　］

＜宗教系＞

表 2a1

	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2005	2007	2010	2012	2015
1.神道	8.8	5.0	3.9	3.7	2.9	2.9	3.3	5.7	6.0	7.1	5.4	6.0
2.仏教	56.5	48.4	47.8	45.7	48.2	42.6	40.5	38.2	34.2	32.4	32.3	34.5
3.キリスト教	2.2	3.3	1.6	1.5	2.5	2.2	2.0	2.6	2.1	3.3	2.4	2.0
4.新宗教	2.5	7.9	13.1	6.3	5.2	11.6	10.3	8.9	7.9	6.2	11.9	4.9
5.その他の宗教	0.3	0.4	0.2	0.2	0.2	0.1	0.0	0.2	0.2	0.2	0.0	0.1
6.不明	2.4	2.3	2.0	1.4	1.8	2.0	2.0	1.7	1.4	2.8	2.1	2.8
7.無回答	31.5	37.8	35.4	43.5	42.3	42.0	44.7	46.4	51.6	51.2	48.5	53.6

グラフ 2a1

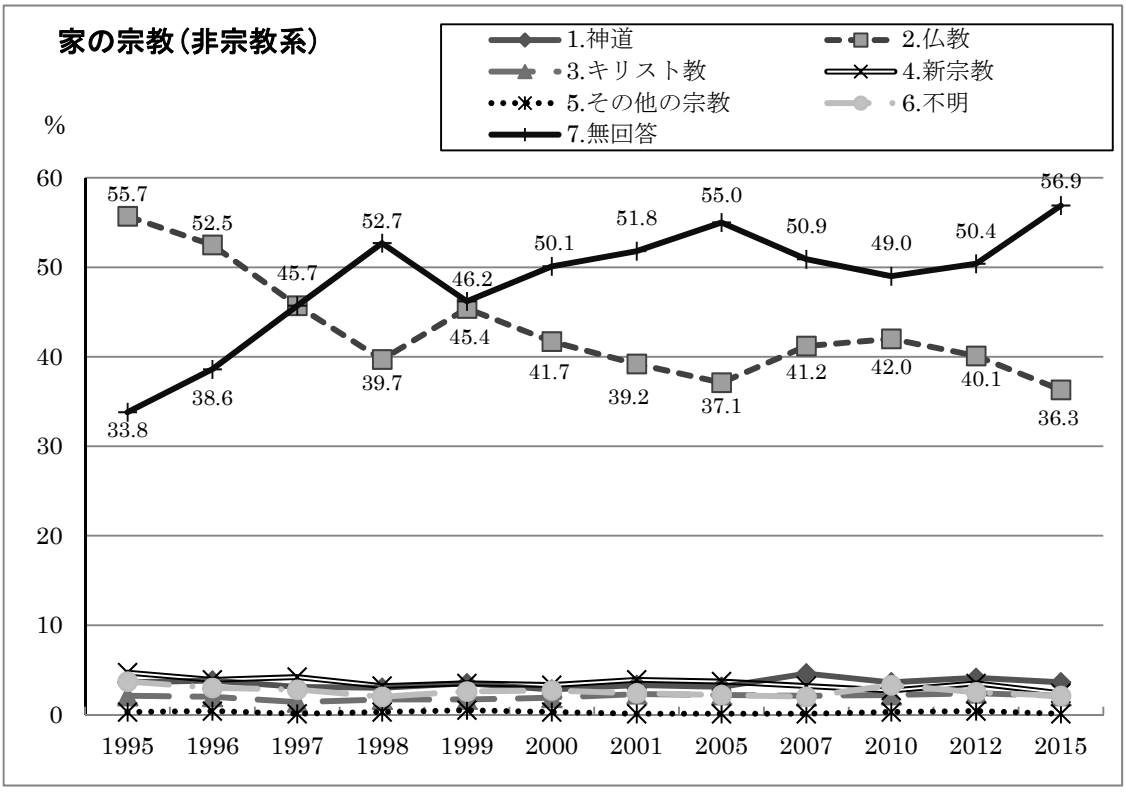


＜非宗教系＞

表 2a2

	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2005	2007	2010	2012	2015
1.神道	3.6	3.8	3.1	3.0	3.5	2.8	3.3	3.1	4.6	3.6	4.1	3.6
2.仏教	55.7	52.5	45.7	39.7	45.4	41.7	39.2	37.1	41.2	42.0	40.1	36.3
3.キリスト教	2.1	2.0	1.4	1.7	1.7	1.9	2.3	2.2	2.1	2.2	2.4	2.1
4.新宗教	4.7	3.9	4.2	3.2	3.5	3.3	3.9	3.7	3.2	2.7	3.5	2.4
5.その他の宗教	0.3	0.4	0.1	0.3	0.5	0.3	0.1	0.1	0.1	0.3	0.4	0.1
6.不明	3.7	3.0	2.8	2.0	2.6	2.7	2.4	2.2	2.0	3.3	2.5	2.1
7.無回答	33.8	38.6	45.7	52.7	46.2	50.1	51.8	55.0	50.9	49.0	50.4	56.9

グラフ 2a2



b）両親の信仰

両親の信仰についての質問では具体的な宗教名まで聞いているが、ここでは信仰の有無についての回答のみを比較する。

質問内容

あなたのお父さんは個人で信仰をもっていますか。　1.はい 2.いいえ

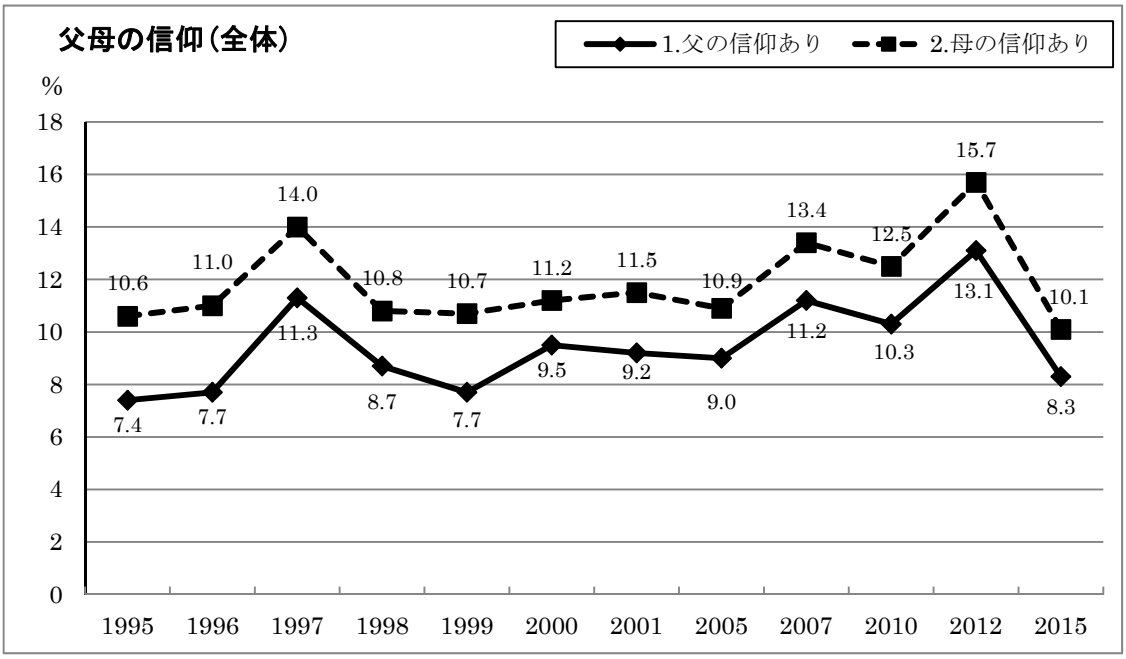
あなたのお母さんは個人で信仰をもっていますか。　1.はい 2.いいえ

＜全体＞

表２b１

	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2005	2007	2010	2012	2015
1.父の信仰あり	7.4	7.7	11.3	8.7	7.7	9.5	9.2	9.0	11.2	10.3	13.1	8.3
2.母の信仰あり	10.6	11.0	14.0	10.8	10.7	11.2	11.5	10.9	13.4	12.5	15.7	10.1

グラフ２b１

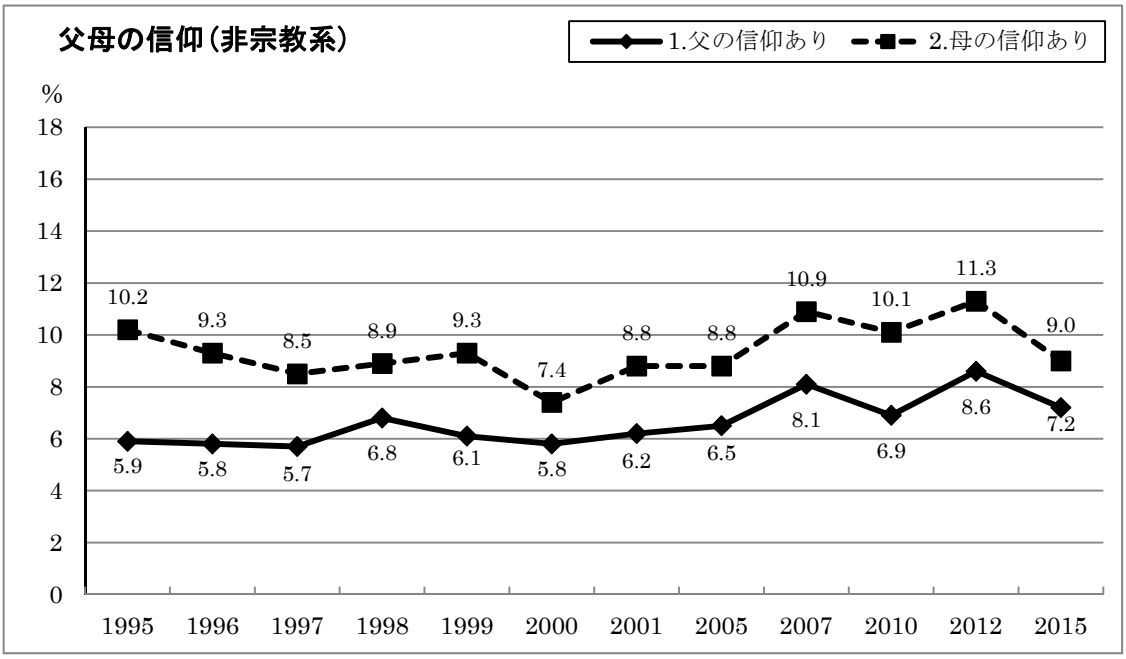


＜非宗教系＞

表２b2

	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2005	2007	2010	2012	2015
1.父の信仰あり	5.9	5.8	5.7	6.8	6.1	5.8	6.2	6.5	8.1	6.9	8.6	7.2
2.母の信仰あり	10.2	9.3	8.5	8.9	9.3	7.4	8.8	8.8	10.9	10.1	11.3	9.0

グラフ２b2



＊全体で見ても、また非宗教系だけで見ても、母親が信仰をもつ割合が父親が信仰をもつ割合よりも、一定程度高いというのは12回の調査を通して同じである。

c) 神棚・仏壇等

神棚、仏壇、その他が実家にあるかどうかの質問である。回答者個人ではなく、その家族が神棚・仏壇等を置いているかどうかを調べるためのものである。

質問内容

次のうち、あなたの家（一人暮らしの場合などは実家）にあるものすべてを選んでください。

1.神棚

2.仏壇

3.亡くなった近親者の写真を飾ったもの

4.その他宗教的なもの［具体的に:　　］

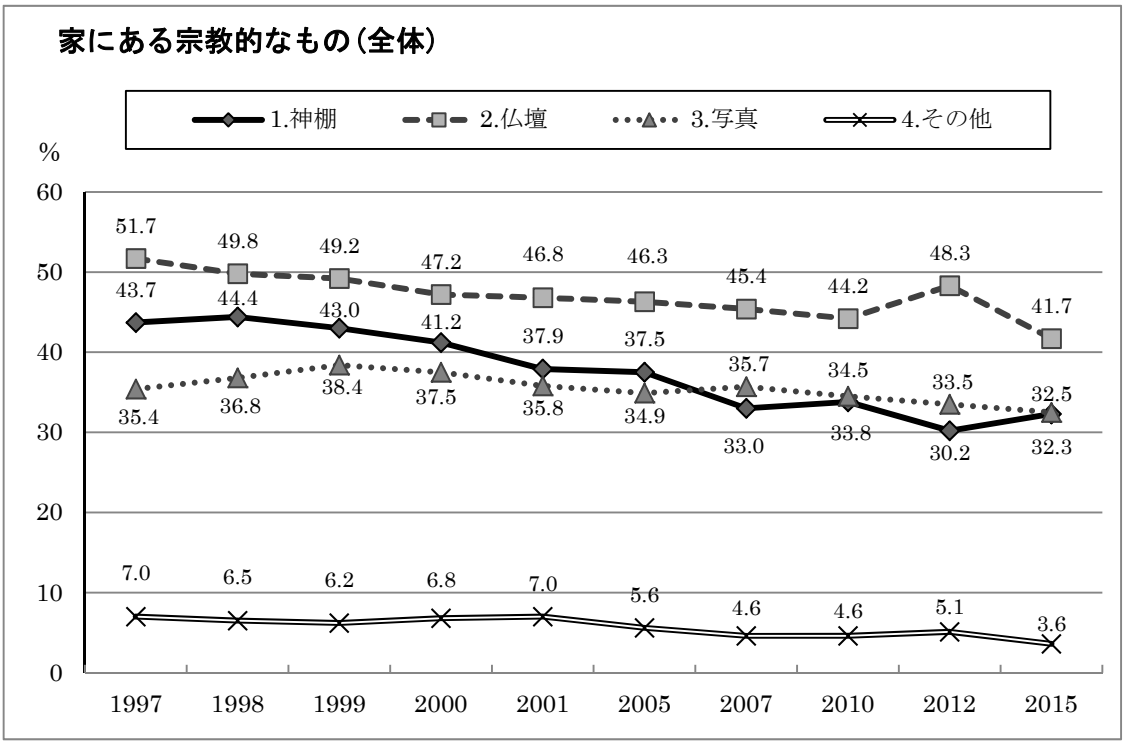
＜全体＞

表２c１

	1997	1998	1999	2000	2001	2005	2007	2010	2012	2015
1.神棚	43.7	44.4	43.0	41.2	37.9	37.5	33.0	33.8	30.2	32.3
2.仏壇	51.7	49.8	49.2	47.2	46.8	46.3	45.4	44.2	48.3	41.7
3.写真	35.4	36.8	38.4	37.5	35.8	34.9	35.7	34.5	33.5	32.5
4.その他	7.0	6.5	6.2	6.8	7.0	5.6	4.6	4.6	5.1	3.6

＊「神棚」「仏壇」「亡くなった近親者の写真を飾ったもの」「その他宗教的なもの」を選択肢とし、複数回答とした

グラフ２c１

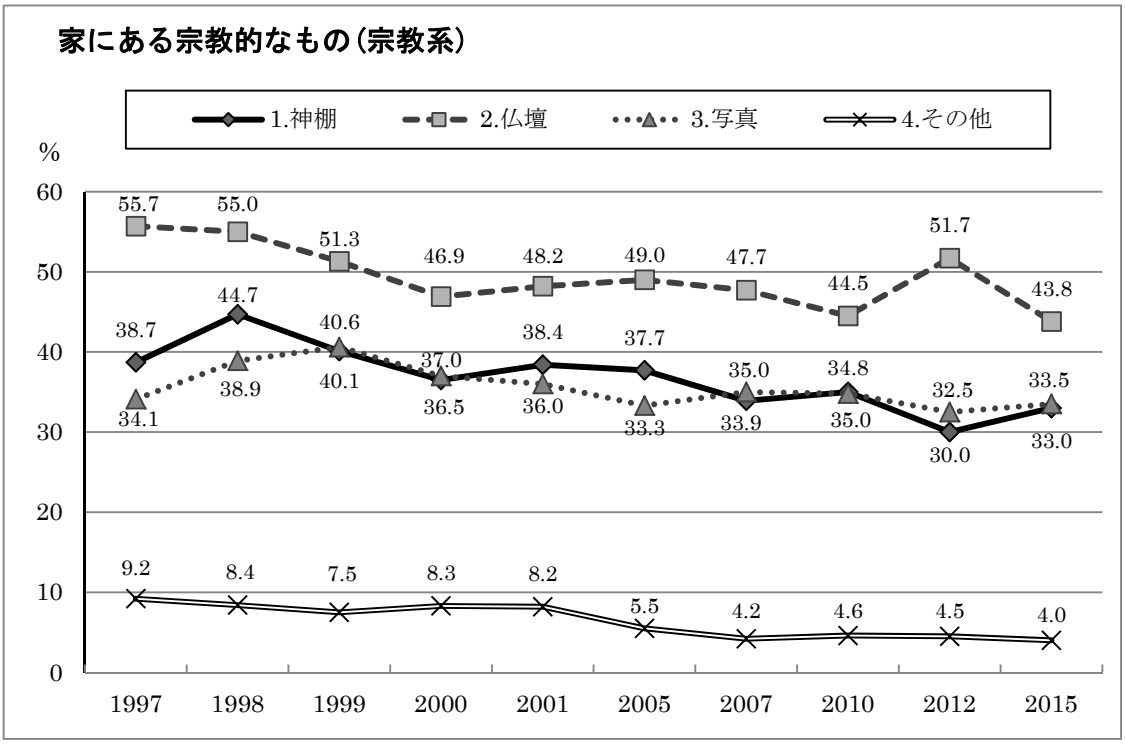


＜宗教系＞

表２ｃ２

	1997	1998	1999	2000	2001	2005	2007	2010	2012	2015
1.神棚	38.7	44.7	40.1	36.5	38.4	37.7	33.9	35.0	30.0	33.0
2.仏壇	55.7	55.0	51.3	46.9	48.2	49.0	47.7	44.5	51.7	43.8
3.写真	34.1	38.9	40.6	37.0	36.0	33.3	35.0	34.8	32.5	33.5
4.その他	9.2	8.4	7.5	8.3	8.2	5.5	4.2	4.6	4.5	4.0

グラフ２ｃ２

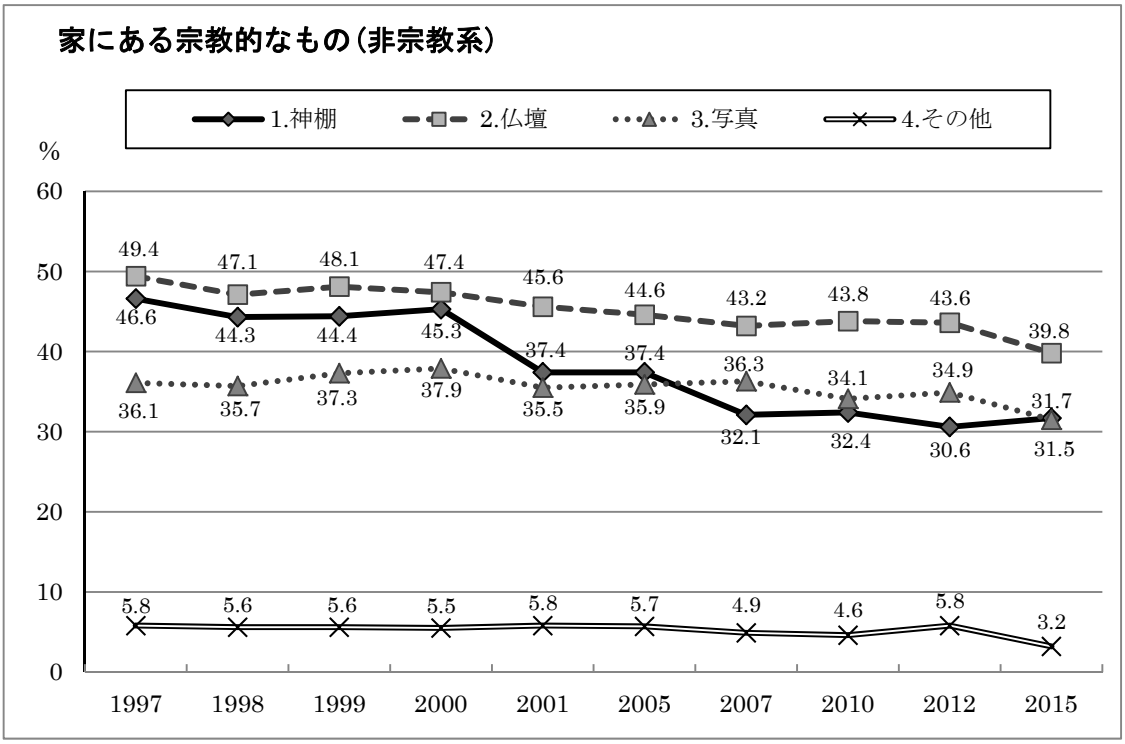


＜非宗教系＞

表２ｃ３

	1997	1998	1999	2000	2001	2005	2007	2010	2012	2015
1.神棚	46.6	44.3	44.4	45.3	37.4	37.4	32.1	32.4	30.6	31.7
2.仏壇	49.4	47.1	48.1	47.4	45.6	44.6	43.2	43.8	43.6	39.8
3.写真	36.1	35.7	37.3	37.9	35.5	35.9	36.3	34.1	34.9	31.5
4.その他	5.8	5.6	5.6	5.5	5.8	5.7	4.9	4.6	5.8	3.2

グラフ２ｃ３



第3章 宗教習俗との関わり

宗教習俗については、初詣、お盆の墓参りを毎回質問し、節分とクリスマスはそれぞれ 1 回ずつしか質問していないが、比較のためにここに示した。

a）初詣

質問内容

あなたは今年の初詣はどうしましたか。次のうちから選んで下さい。

1.家族と行った　2.家族とは別に行った　3.行った家族もいるが自分は行かなかった

4.家族の誰も行かなかった　5.その他[　　]

（ただし、95年だけは「あなたの家族は今年の初詣はどうしましたか」という質問になっている）

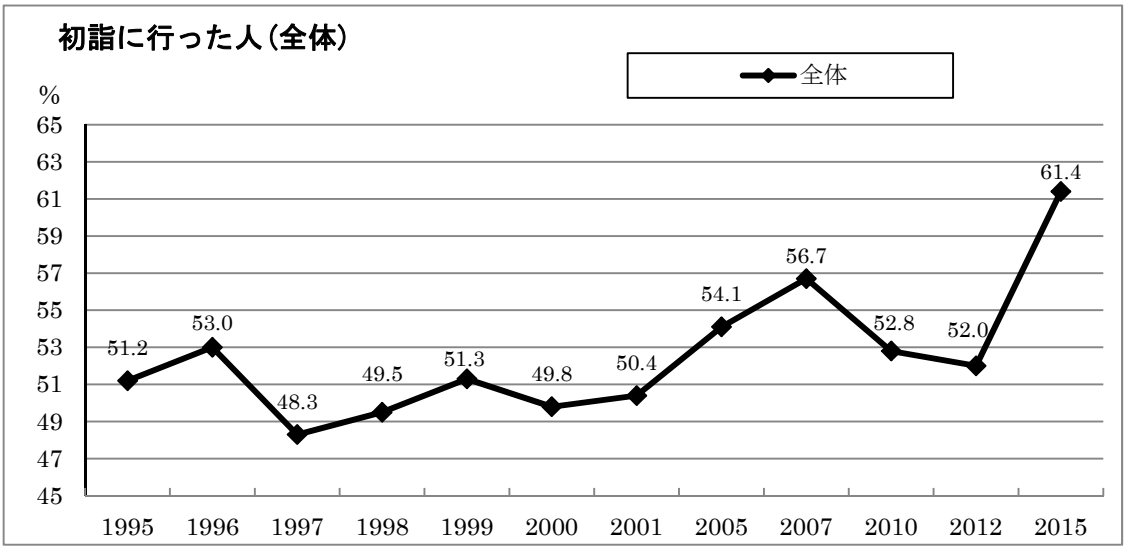
この質問に対し、「家族と行った」または「家族とは別に行った」と回答した人の割合を示す。

＜全体＞

表 3a1

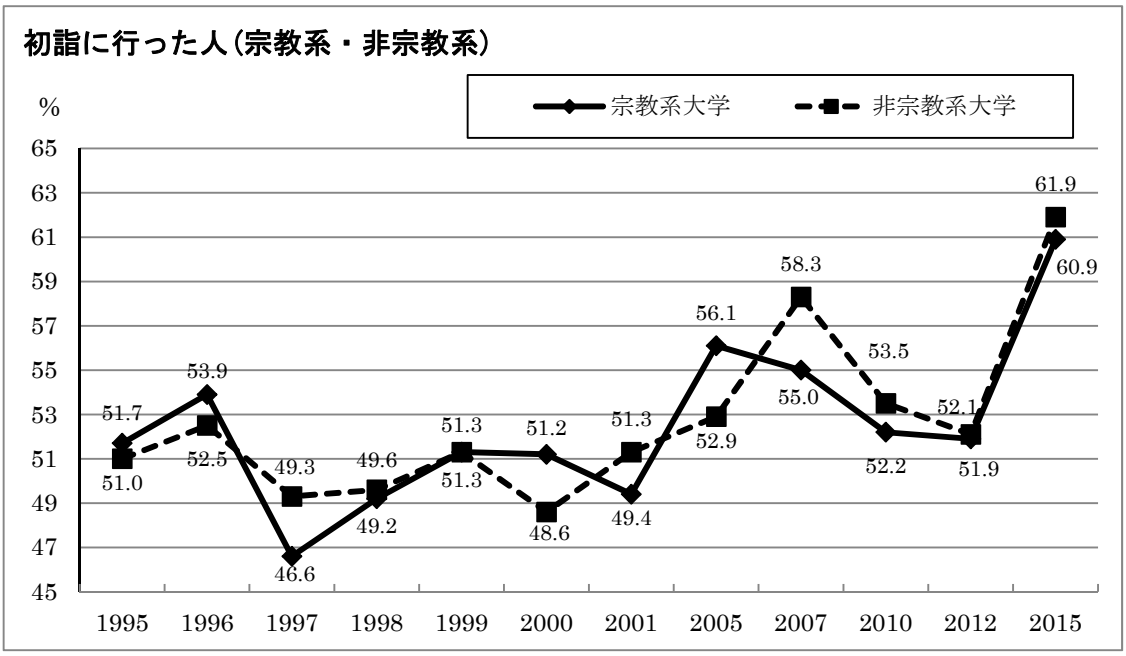
	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2005	2007	2010	2012	2015
全体	51.2	53.0	48.3	49.5	51.3	49.8	50.4	54.1	56.7	52.8	52.0	61.4
宗教系大学	51.7	53.9	46.6	49.2	51.3	51.2	49.4	56.1	55.0	52.2	51.9	60.9
非宗教系大学	51.0	52.5	49.3	49.6	51.3	48.6	51.3	52.9	58.3	53.5	52.1	61.9

グラフ 3a1



＜宗教系と非宗教系の比較＞

グラフ 3a2



b）墓参り

<u>質問内容</u>

あなたは去年のお盆の墓参りはどうしましたか。次のうちから選んで下さい。

1.家族と行った　2.行った家族もいるが自分は行かなかった

3.家族とは別に自分だけで行った　4.家族の誰も行かなかった　5.その他[　　]

（1995年は「あなたの家族はお盆の墓参りはどうしましたか」という質問になっている）

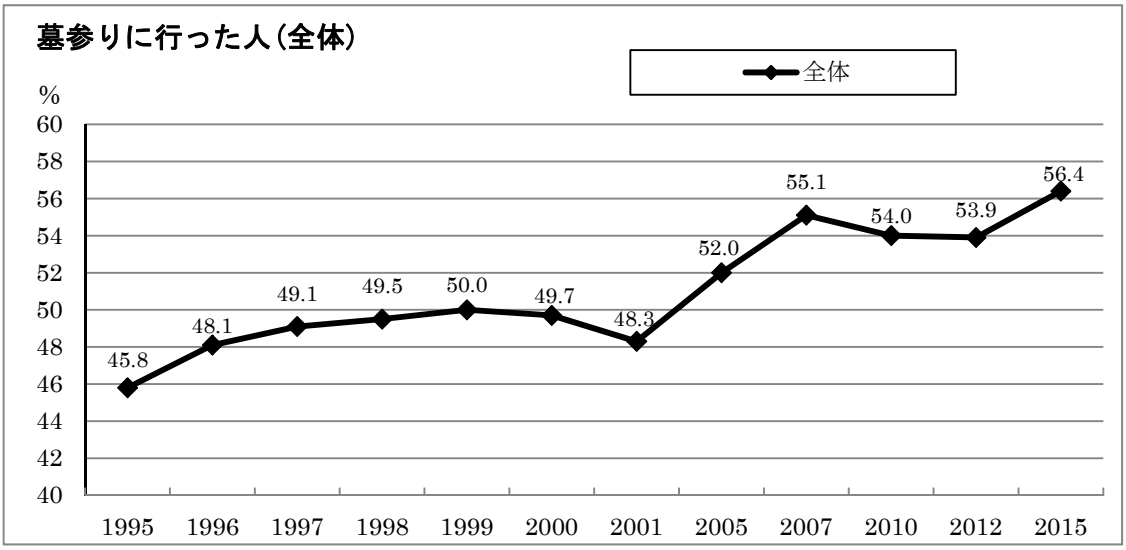
この質問に対し、「家族と行った」もしくは「家族とは別に自分だけで行った」と回答した人の割合を示す。

表 3b1

	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2005	2007	2010	2012	2015
全体	45.8	48.1	49.1	49.5	50.0	49.7	48.3	52.0	55.1	54.0	53.9	56.4
宗教系大学	45.3	44.1	44.3	47.3	48.4	47.3	46.2	53.3	55.8	55.2	55.3	58.3
非宗教系大学	46.1	50.2	51.8	50.7	50.9	51.7	50.1	51.3	54.4	52.6	51.9	54.6

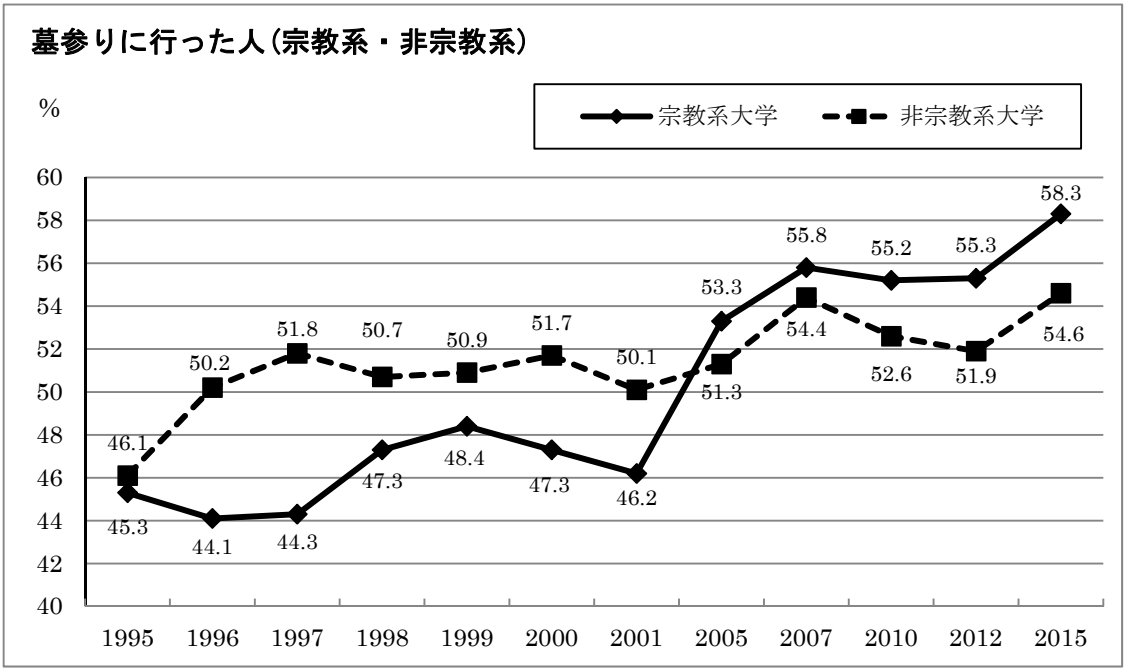
＜全体＞

グラフ 3b1



＜宗教系と非宗教系の比較＞

グラフ 3b2



c) クリスマスと節分

①クリスマス

質問内容

あなたの家族は去年のクリスマスはどうしましたか。次のうちから選んで下さい。

1.家族でクリスマスパーティを開いた

2.家族の誰かと教会に行った

3.家族では特に何もしなかった

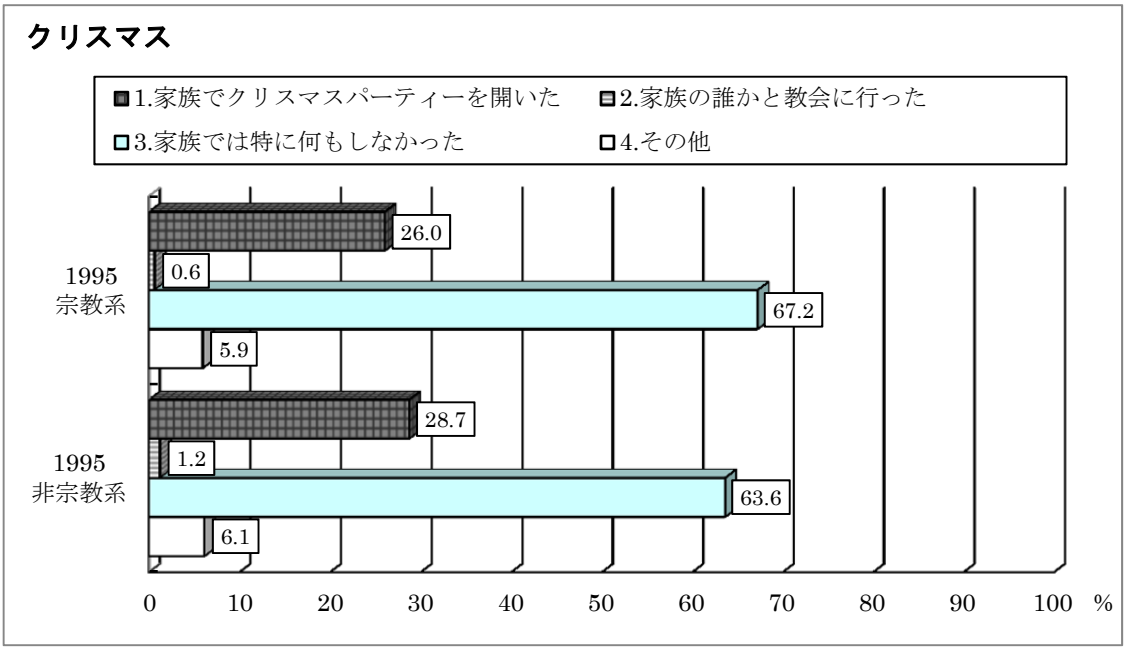
4.その他[　　]

表 3c1

	1995 宗教系	1995 非宗教系
1.家族でクリスマスパーティーを開いた	26.0	28.7
2.家族の誰かと教会に行った	0.6	1.2
3.家族では特に何もしなかった	67.2	63.6
4.その他	5.9	6.1

＊この質問への回答は複数回答

グラフ 3c1



②節分

質問内容

あなたは今年の節分はどうしましたか。次のうちから選んで下さい。

1.家族と豆まきをした

2.家族と神社または寺院に行った

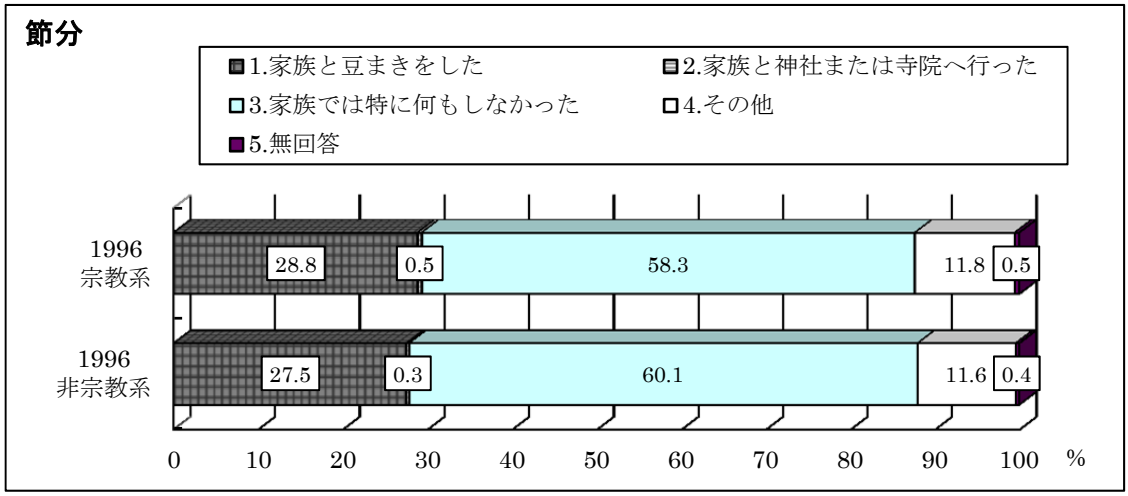
3.家族では特に何もしなかった

4.その他[　　]

表 3c2

	1996 宗教系	1996 非宗教系
1.家族と豆まきをした	28.8	27.5
2.家族と神社または寺院へ行った	0.5	0.3
3.家族では特に何もしなかった	58.3	60.1
4.その他	11.8	11.6
5.無回答	0.5	0.4

グラフ 3c2



d) 葬儀

葬儀については自分の葬儀をどんな風にしたいかと、散骨・自然葬に関する意識を質問した。

①自分が希望する葬法

質問内容

自分が希望する葬法はどれですか。

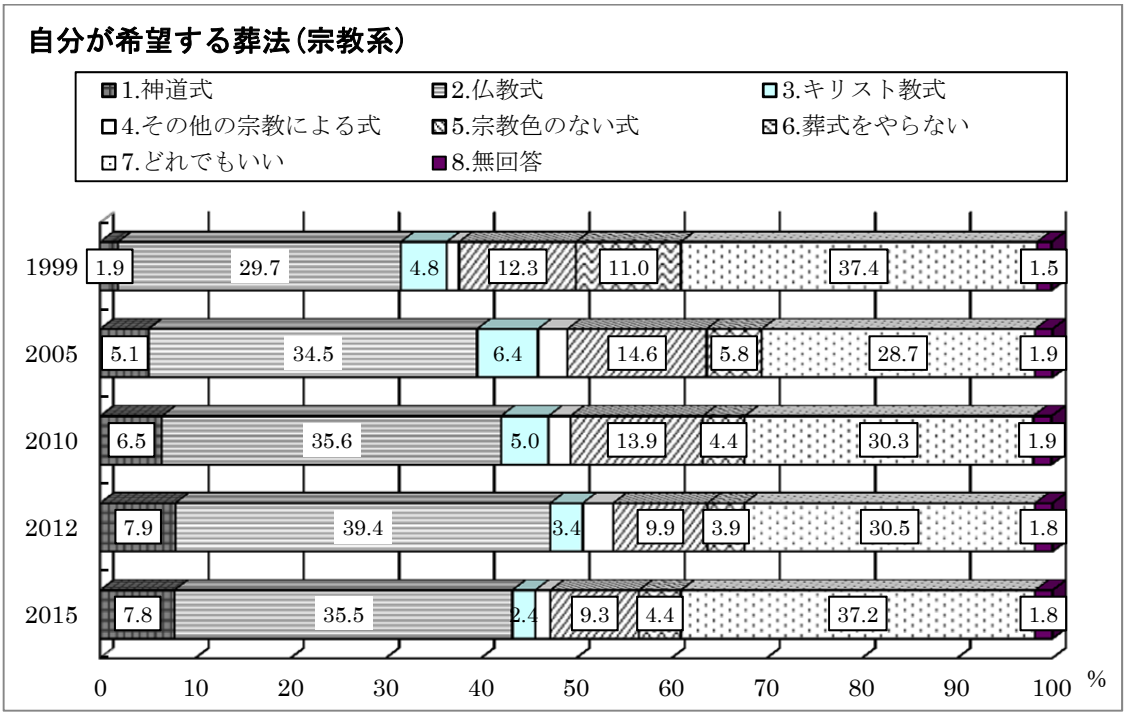
1.神道式　2.仏式　3.キリスト教式　4.その他の宗教による式
5.宗教色のない式　6.葬式をやらない　7.どれでもいい

＜宗教系＞

表 3d1

	1999	2005	2010	2012	2015
1.神道式	1.9	5.1	6.5	7.9	7.8
2.仏教式	29.7	34.5	35.6	39.4	35.5
3.キリスト教式	4.8	6.4	5.0	3.4	2.4
4.その他の宗教による式	1.3	3.1	2.3	3.2	1.6
5.宗教色のない式	12.3	14.6	13.9	9.9	9.3
6.葬式をやらない	11.0	5.8	4.4	3.9	4.4
7.どれでもいい	37.4	28.7	30.3	30.5	37.2
8.無回答	1.5	1.9	1.9	1.8	1.8

グラフ 3d1

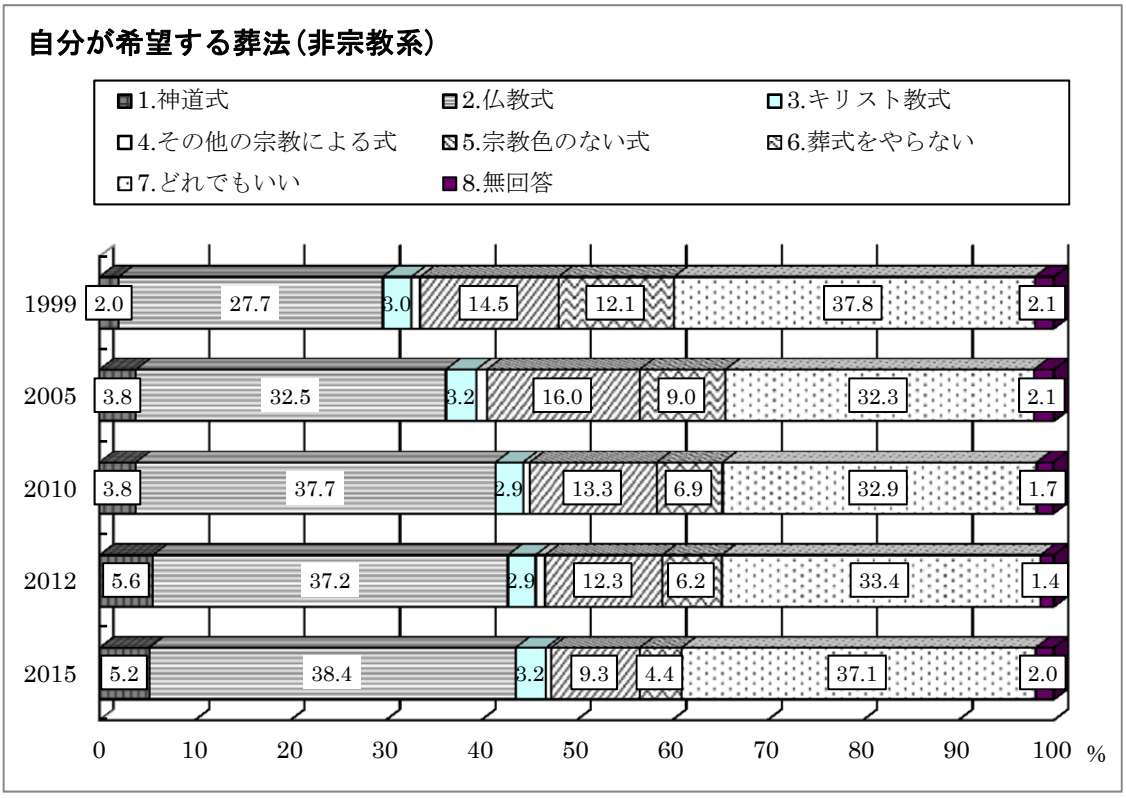


＜非宗教系＞

表 3d2

	1999	2005	2010	2012	2015
1.神道式	2.0	3.8	3.8	5.6	5.2
2.仏教式	27.7	32.5	37.7	37.2	38.4
3.キリスト教式	3.0	3.2	2.9	2.9	3.2
4.その他の宗教による式	0.9	1.1	0.7	1.0	0.5
5.宗教色のない式	14.5	16.0	13.3	12.3	9.3
6.葬式をやらない	12.1	9.0	6.9	6.2	4.4
7.どれでもいい	37.8	32.3	32.9	33.4	37.1
8.無回答	2.1	2.1	1.7	1.4	2.0

グラフ 3d2



②親が散骨・自然葬を望んだ場合

質問内容

親が散骨･自然葬を望んだ場合、あなたはそれに従いますか。

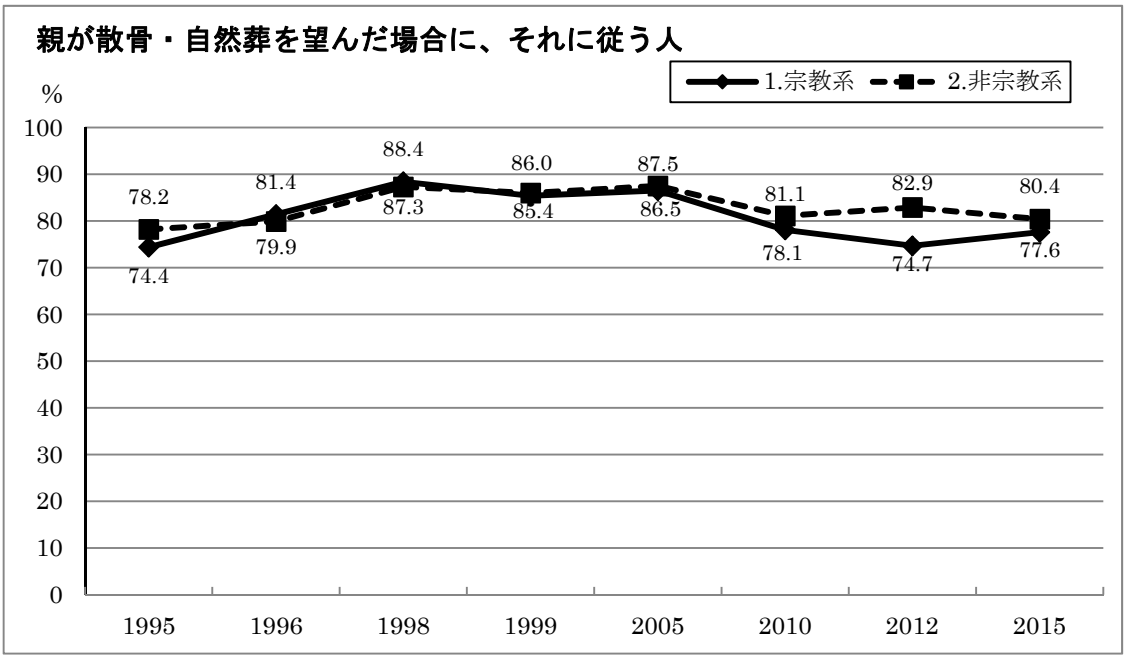
1.はい　2.いいえ

表 3d3

	1995	1996	1998	1999	2005	2010	2012	2015
宗教系大学	74.4	81.4	88.4	85.4	86.5	78.1	74.7	77.6
非宗教系大学	78.2	79.9	87.3	86.0	87.5	81.1	82.9	80.4

＊1995年、1996年は「散骨・自然葬を知っているか」で「1.はい」と答えた人に限定している。

グラフ 3d3



③自分は散骨・自然葬を望むか

質問内容

自分が死ぬときのことを考えた場合、散骨・自然葬を望みますか。

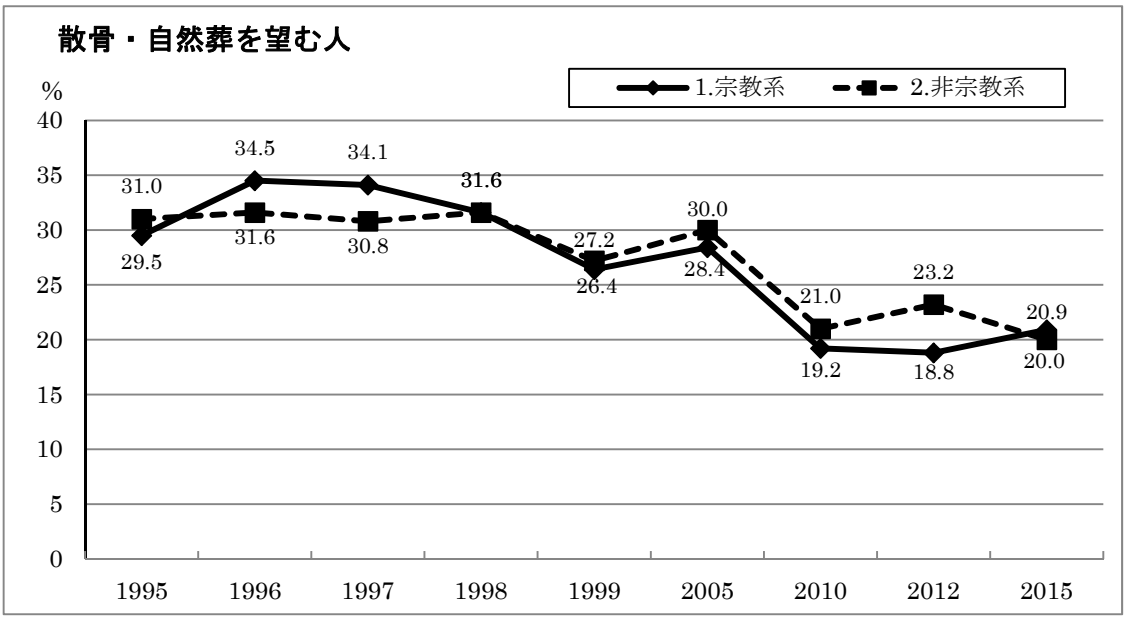
1.はい　2.いいえ

表 3d4

	1995	1996	1997	1998	1999	2005	2010	2012	2015
宗教系大学	29.5	34.5	34.1	31.6	26.4	28.4	19.2	18.8	20.9
非宗教系大学	31.0	31.6	30.8	31.6	27.2	30.0	21.0	23.2	20.0

＊1995年、1996年は「散骨・自然葬を知っているか」で「1.はい」と答えた人に限定している。

グラフ 3d4



e) 信仰と宗教的習俗

①非クリスチャンのキリスト教会での結婚式

質問内容

次の事柄について、「1.そう思う 2.どちらかといえばそう思う 3.どちらかといえばそう思わない 4.そう思わない」のいずれかの番号で答えて下さい。

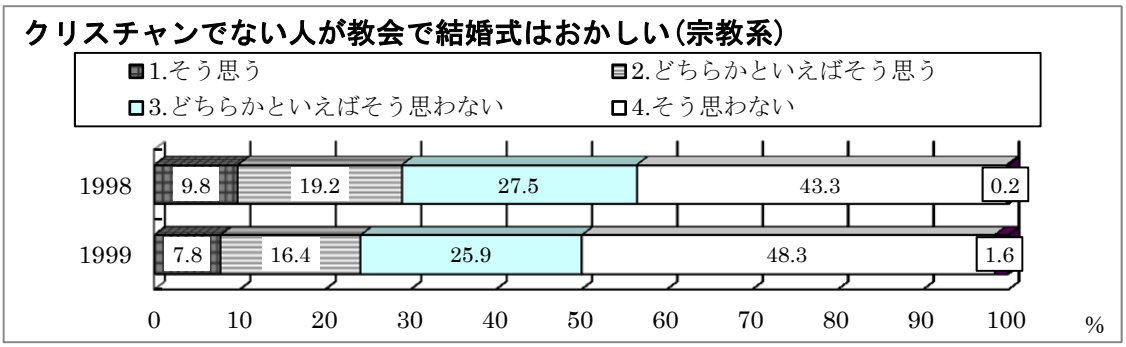
クリスチャンでない人が、キリスト教会で結婚式をあげるのはおかしい。　　[　]

＜宗教系＞

表 3e1

	1998	1999
1.そう思う	9.8	7.8
2.どちらかといえばそう思う	19.2	16.4
3.どちらかといえばそう思わない	27.5	25.9
4.そう思わない	43.3	48.3
5.無回答	0.2	1.6

グラフ 3e1

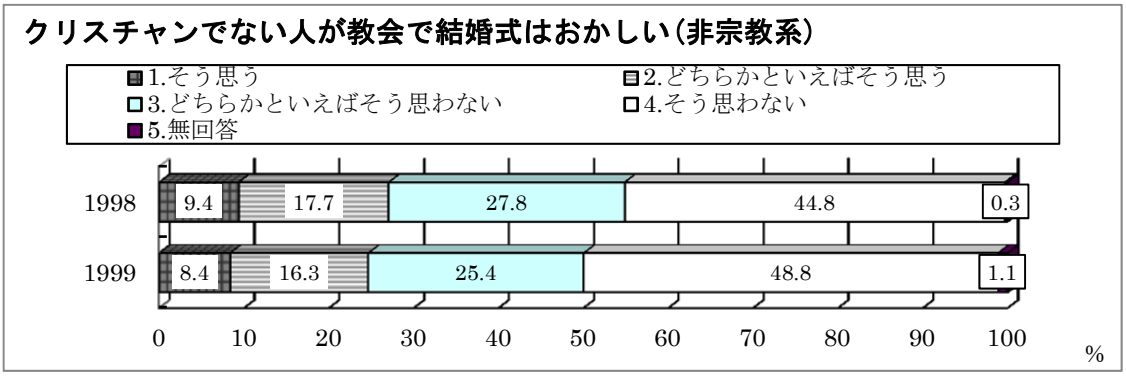


＜非宗教系＞

表 3e2

	1998	1999
1.そう思う	9.4	8.4
2.どちらかといえばそう思う	17.7	16.3
3.どちらかといえばそう思わない	27.8	25.4
4.そう思わない	44.8	48.8
5.無回答	0.3	1.1

グラフ 3e2



②無信仰者が葬式のときだけ僧侶をよぶこと

質問内容

次の事柄について、「1.そう思う 2.どちらかといえばそう思う 3.どちらかといえばそう思わない 4.そう思わない」のいずれかの番号で答えて下さい。

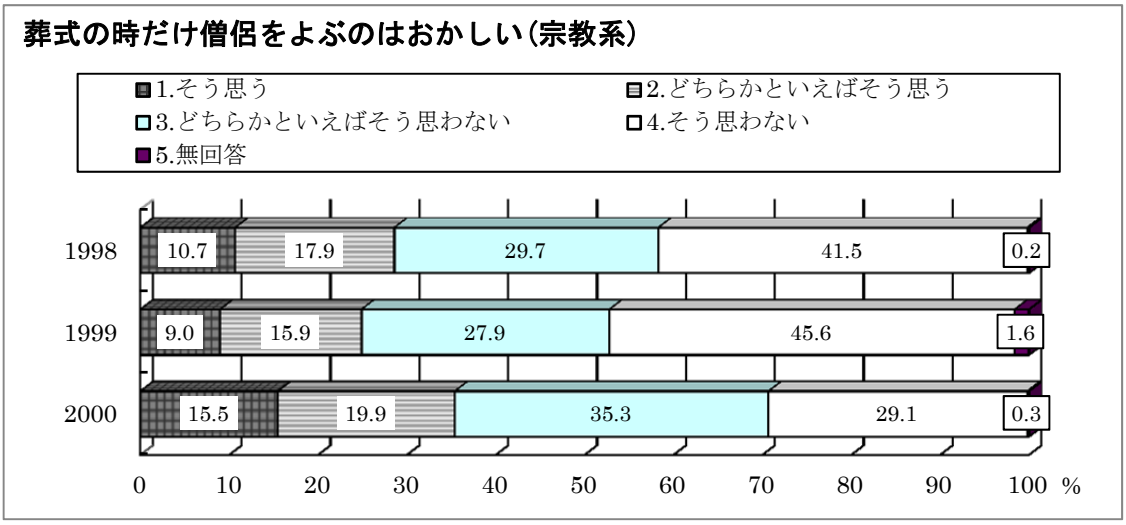
ふだん信仰のない家が、葬式のときだけ僧侶（お坊さん）をよぶのはおかしい。　［　］

＜宗教系＞

表 3e3

	1998	1999	2000
1.そう思う	10.7	9.0	15.5
2.どちらかといえばそう思う	17.9	15.9	19.9
3.どちらかといえばそう思わない	29.7	27.9	35.3
4.そう思わない	41.5	45.6	29.1
5.無回答	0.2	1.6	0.3

グラフ 3e3

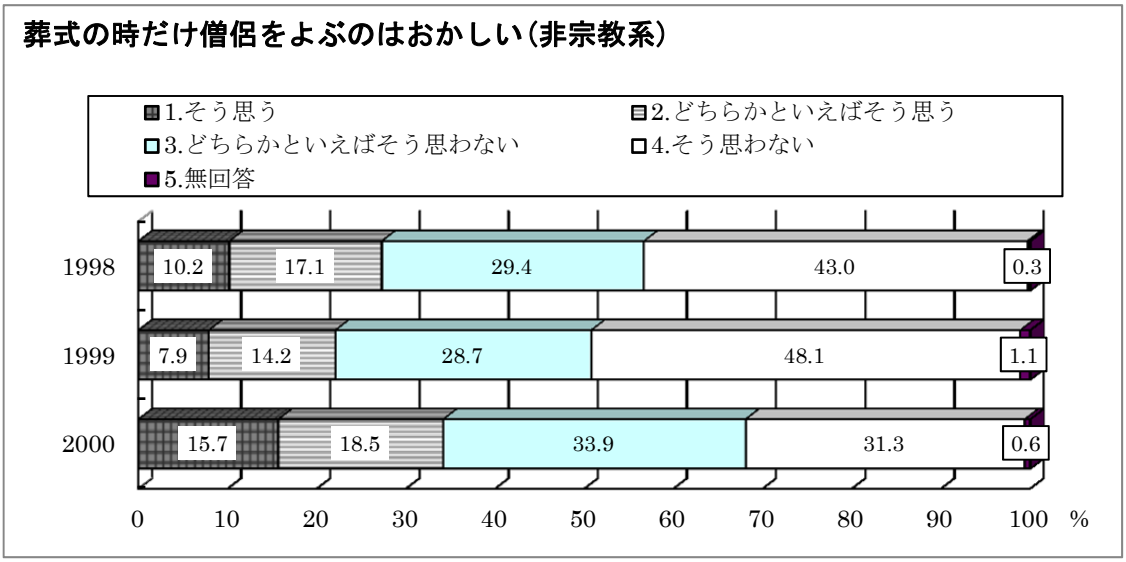


＜非宗教系＞

表 3e4

	1998	1999	2000
1.そう思う	10.2	7.9	15.7
2.どちらかといえばそう思う	17.1	14.2	18.5
3.どちらかといえばそう思わない	29.4	28.7	33.9
4.そう思わない	43.0	48.1	31.3
5.無回答	0.3	1.1	0.6

グラフ 3e4



第4章 宗教や宗教家への意見

a）相談したい宗教家

質問内容

人生に悩んだ時に、相談したいと思う宗教者がいたら次から選んでください。（複数回答可）

1.仏教の僧侶　2.キリスト教の牧師・神父・シスター　3.神社の神主

4.街の占い師　5.その他の宗教家（具体的に:　　）

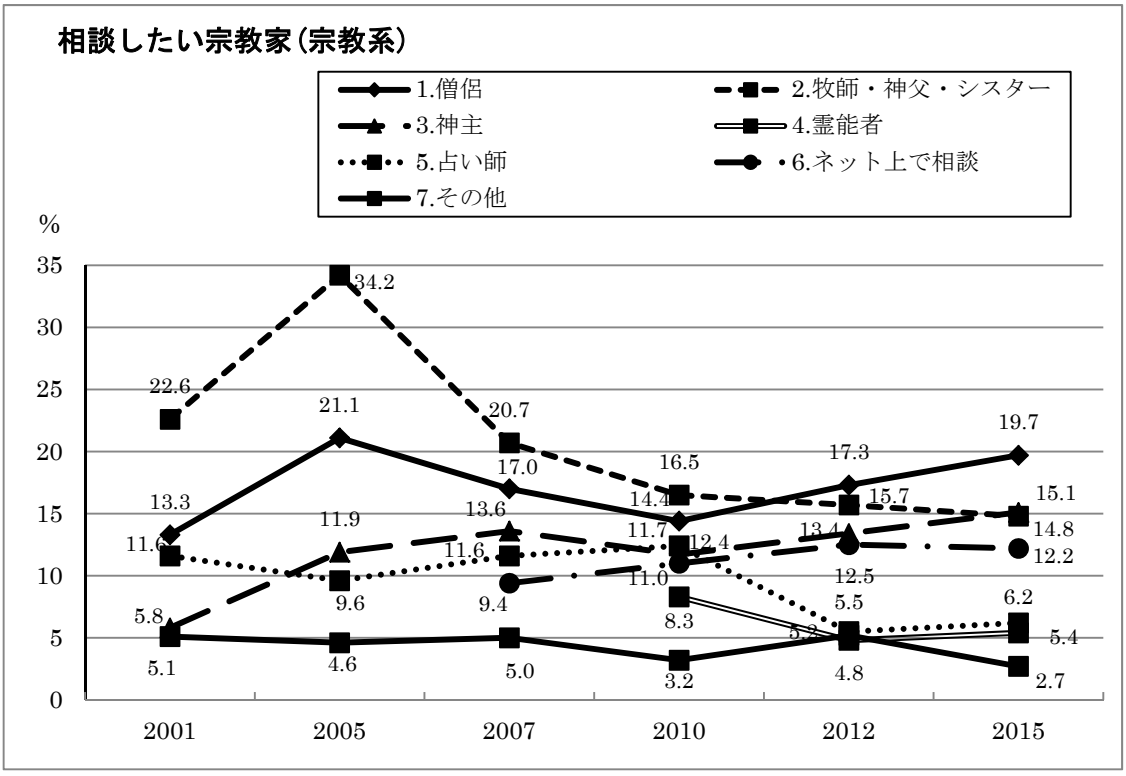
（2007年からは「ネット上の回答者」、さらに2010年からは「テレビに登場するような霊能者」を加えた。）

＜宗教系＞

表 4a1

	2001	2005	2007	2010	2012	2015
1.僧侶	13.3	21.1	17.0	14.4	17.3	19.7
2.牧師・神父・シスター	22.6	34.2	20.7	16.5	15.7	14.8
3.神主	5.8	11.9	13.6	11.7	13.4	15.1
4.テレビに出る霊能者	—	—	—	8.3	4.8	5.4
5.占い師	11.6	9.6	11.6	12.4	5.5	6.2
6.ネット上で相談	—	—	9.4	11.0	12.5	12.2
7.その他	5.1	4.6	5.0	3.2	5.2	2.7

グラフ 4a1

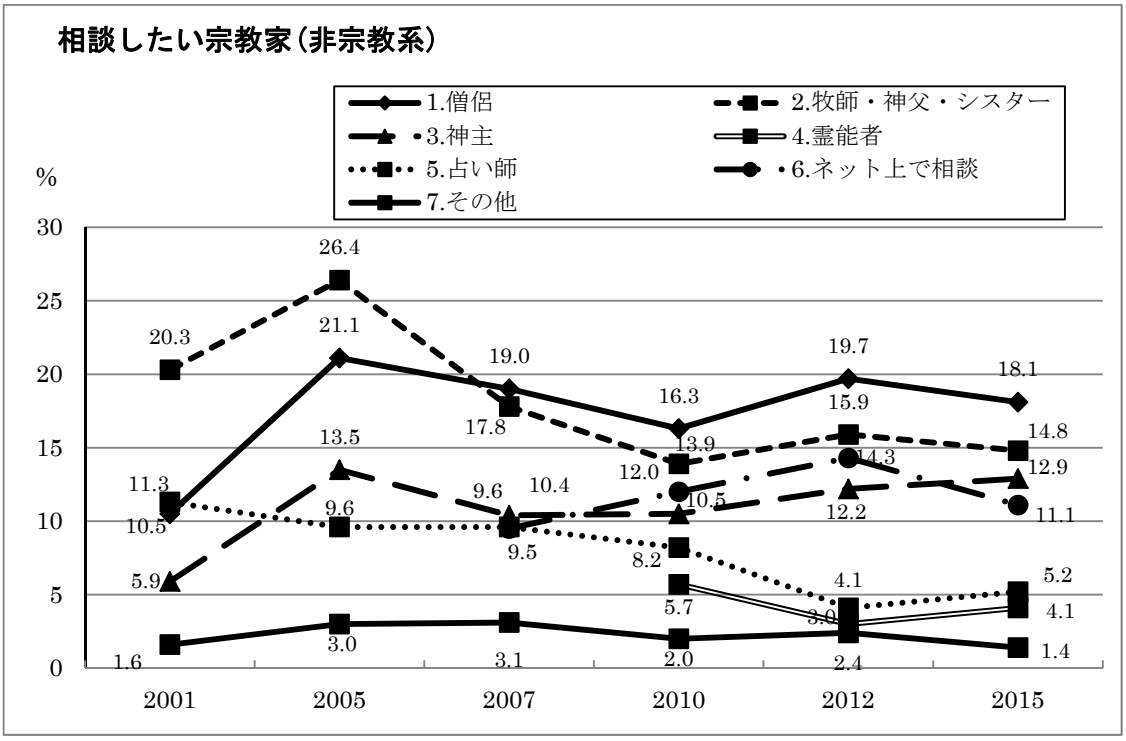


＜非宗教系＞

表 4a2

	2001	2005	2007	2010	2012	2015
1.僧侶	10.5	21.1	19.0	16.3	19.7	18.1
2.牧師・神父・シスター	20.3	26.4	17.8	13.9	15.9	14.8
3.神主	5.9	13.5	10.4	10.5	12.2	12.9
4.霊能者	—	—	—	5.7	3.0	4.1
5.占い師	11.3	9.6	9.6	8.2	4.1	5.2
6.ネット上で相談	—	—	9.5	12.0	14.3	11.1
7.その他	1.6	3.0	3.1	2.0	2.4	1.4

グラフ 4a2



b) 宗教者に求めるもの

質問内容

宗教者であるならば、やるべきだと思う社会的活動が以下にあったら選んでください。(複数回答可)

1.差別をなくすための活動　2.被災者・被害者の心のケア　3.死を迎えようとする人の心の支え

4.障害者や高齢者に対する社会福祉活動　5.その他(具体的に:　　)

(下記の表のように「平和のために祈る」、「平和運動」、「病に苦しむ人の心の支え」を加えた年がある)

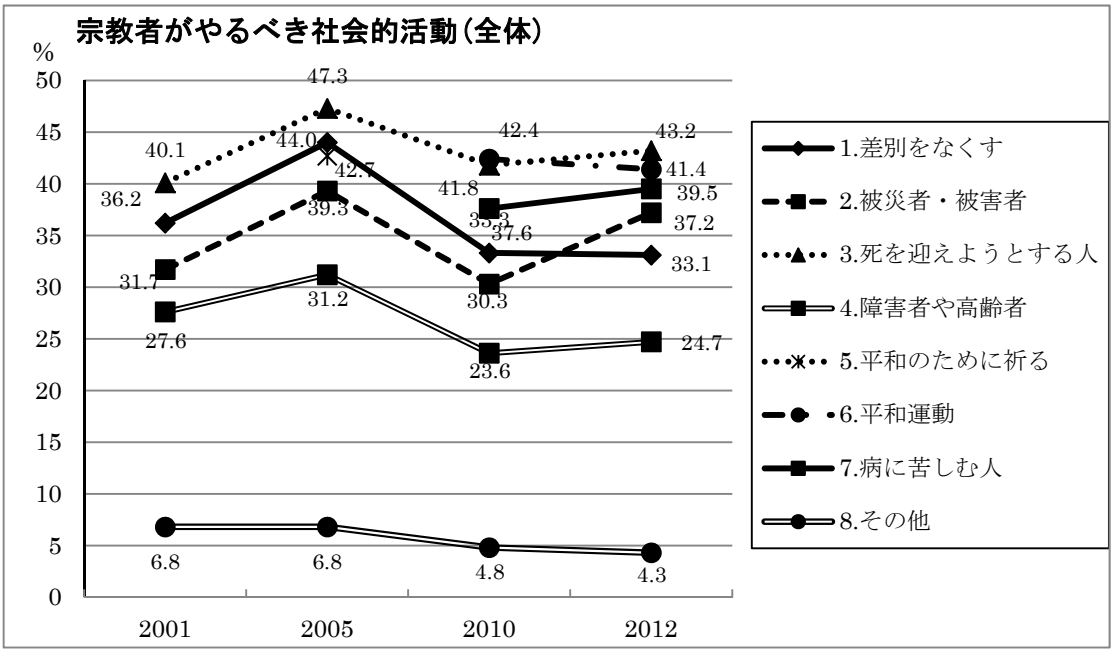
＜全体＞

表 4b1

	2001	2005	2010	2012
1.差別をなくすための活動	36.2	44.0	33.3	33.1
2.被災者・被害者の心のケア	31.7	39.3	30.3	37.2
3.死を迎えようとする人の心の支え	40.1	47.3	41.8	43.2
4.障害者や高齢者に対する社会福祉活動	27.6	31.2	23.6	24.7
5.平和のために祈る	—	42.7	—	—
6.平和運動	—	—	42.4	41.4
7.病に苦しむ人の心の支え	—	—	37.6	39.5
8.その他	6.8	6.8	4.8	4.3

＊2011年には東日本大震災が起こったが、数値の変化を比較する限り、それがこの回答にはさほど影響していないと考えられる。

グラフ 4b1

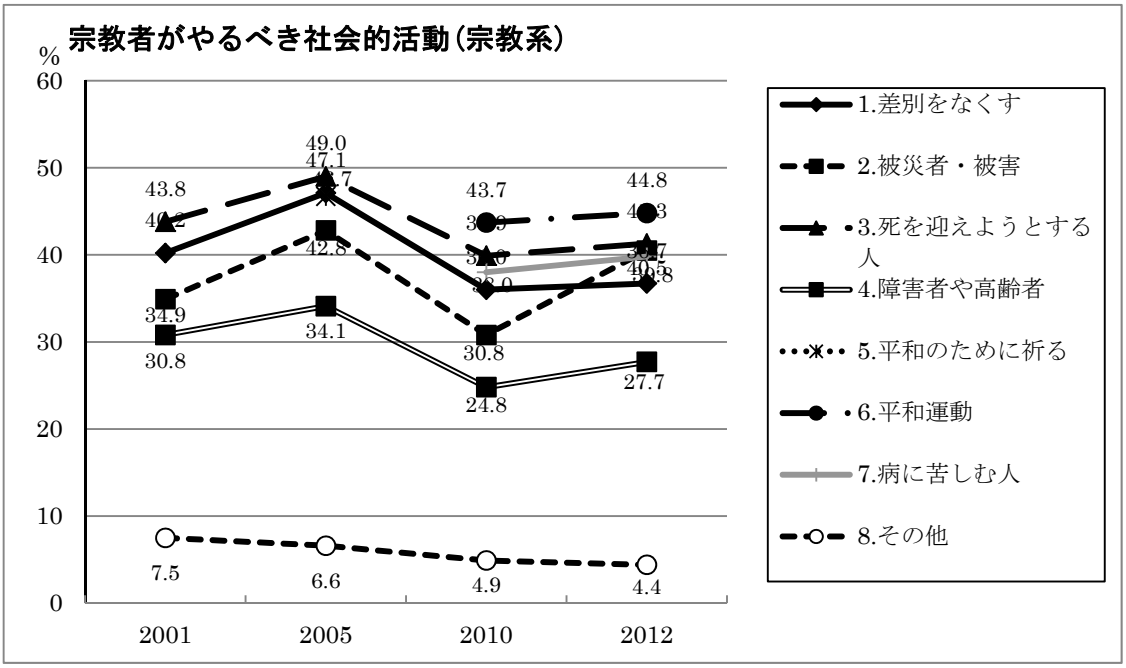


＜宗教系＞

表 4b2

	2001	2005	2010	2012
1.差別をなくすための活動	40.2	47.1	36.0	36.7
2.被災者・被害者の心のケア	34.9	42.8	30.8	40.5
3.死を迎えようとする人の心の支え	43.8	49.0	39.9	41.3
4.障害者や高齢者に対する社会福祉活動	30.8	34.1	24.8	27.7
5.平和のために祈る	—	46.7	—	—
6.平和運動	—	—	43.7	44.8
7.病に苦しむ人の心の支え	—	—	38.0	39.8
8.その他	7.5	6.6	4.9	4.4

グラフ 4b2

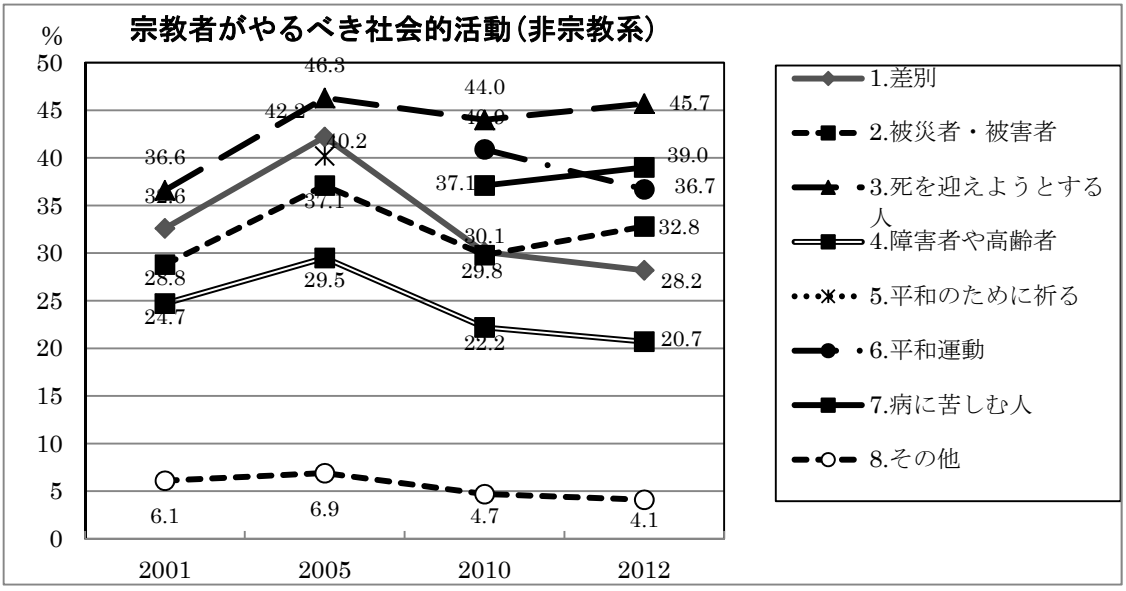


＜非宗教系＞

表 4b3

	2001	2005	2010	2012
1.差別をなくすための活動	32.6	42.2	30.1	28.2
2.被災者・被害者の心のケア	28.8	37.1	29.8	32.8
3.死を迎えようとする人の心の支え	36.6	46.3	44.0	45.7
4.障害者や高齢者に対する社会福祉活動	24.7	29.5	22.2	20.7
5.平和のために祈る	—	40.2	—	—
6.平和運動	—	—	40.9	36.7
7.病に苦しむ人の心の支え	—	—	37.1	39.0
8.その他	6.1	6.9	4.7	4.1

グラフ 4b3



c) 宗教は人間に必要と思うか

質問内容

次のような意見について、「1.そう思う　2.どちらかといえばそう思う　3.どちらかといえばそう思わない　4.そう思わない」のいずれかの番号で答えて下さい。

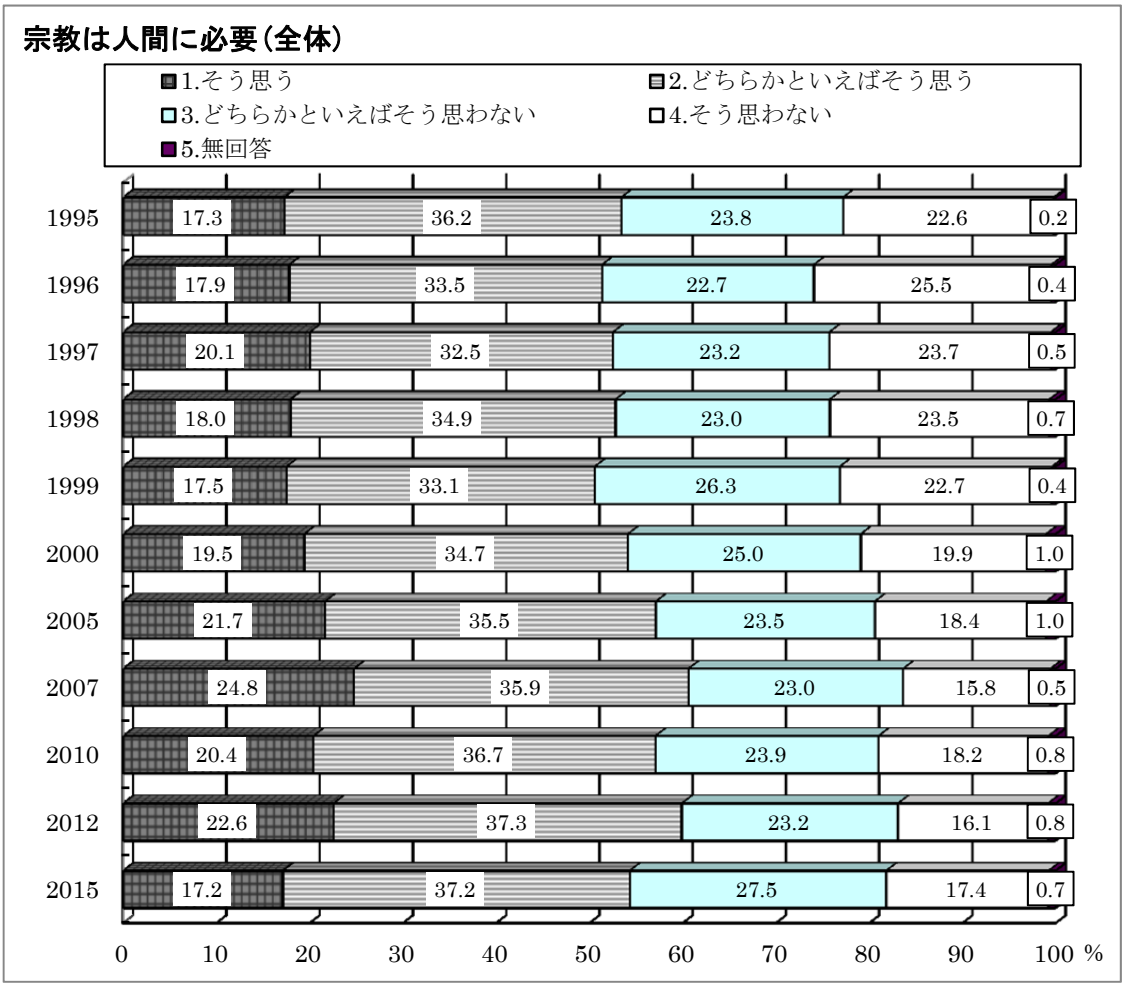
「どんなに科学が発達しても、宗教は人間に必要だ。」　　[　　]

＜全体＞

表 4c1

	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2005	2007	2010	2012	2015
1.そう思う	17.3	17.9	20.1	18.0	17.5	19.5	21.7	24.8	20.4	22.6	17.2
2.どちらかといえばそう思う	36.2	33.5	32.5	34.9	33.1	34.7	35.5	35.9	36.7	37.3	37.2
3.どちらかといえば思わない	23.8	22.7	23.2	23.0	26.3	25.0	23.5	23.0	23.9	23.2	27.5
4.そう思わない	22.6	25.5	23.7	23.5	22.7	19.9	18.4	15.8	18.2	16.1	17.4
5.無回答	0.2	0.4	0.5	0.7	0.4	1.0	1.0	0.5	0.8	0.8	0.7

グラフ 4c1

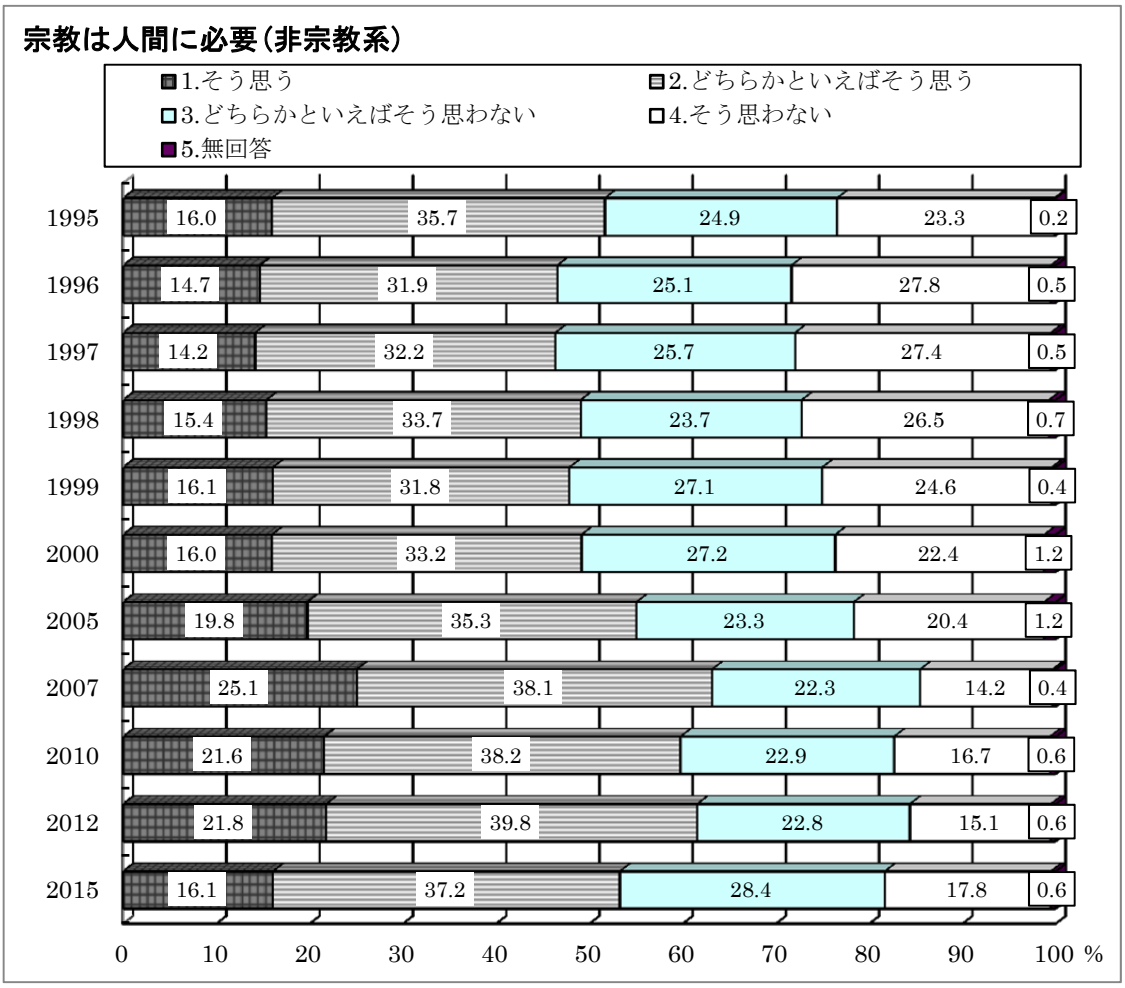


＜非宗教系＞

表 4c2

	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2005	2007	2010	2012	2015
1.そう思う	16.0	14.7	14.2	15.4	16.1	16.0	19.8	25.1	21.6	21.8	16.1
2.どちらかといえばそう思う	35.7	31.9	32.2	33.7	31.8	33.2	35.3	38.1	38.2	39.8	37.2
3.どちらかといえば思わない	24.9	25.1	25.7	23.7	27.1	27.2	23.3	22.3	22.9	22.8	28.4
4.そう思わない	23.3	27.8	27.4	26.5	24.6	22.4	20.4	14.2	16.7	15.1	17.8
5.無回答	0.2	0.5	0.5	0.7	0.4	1.2	1.2	0.4	0.6	0.6	0.6

グラフ 4c2



d) 宗教を信じると、心のよりどころができるか

質問内容

次のような意見について、「1.そう思う　2.どちらかといえばそう思う　3.どちらかといえばそう思わない　4.そう思わない」のいずれかの番号で答えて下さい。

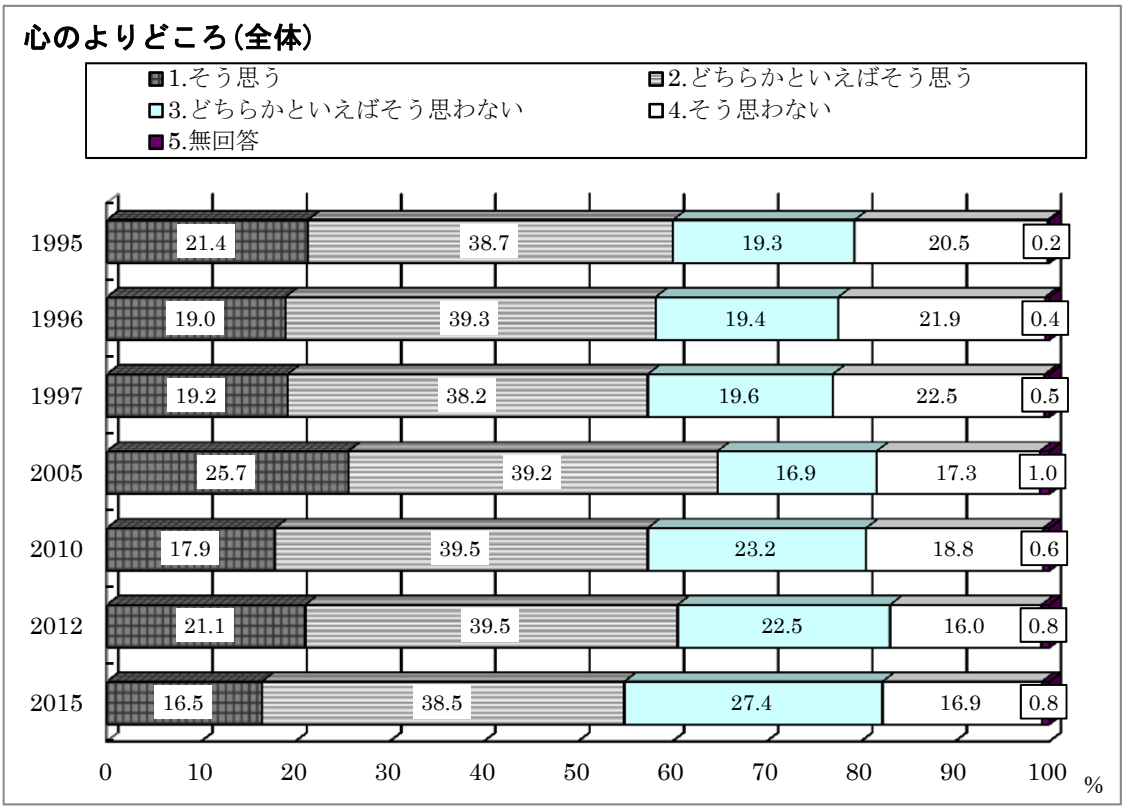
「宗教を信じると、心のよりどころができる。」　　[　　]

＜全体＞

表 4d1

	1995	1996	1997	2005	2010	2012	2015
1.そう思う	21.4	19.0	19.2	25.7	17.9	21.1	16.5
2.どちらかといえばそう思う	38.7	39.3	38.2	39.2	39.5	39.5	38.5
3.どちらかといえばそう思わない	19.3	19.4	19.6	16.9	23.2	22.5	27.4
4.そう思わない	20.5	21.9	22.5	17.3	18.8	16.0	16.9
5.無回答	0.2	0.4	0.5	1.0	0.6	0.8	0.8

グラフ 4d1

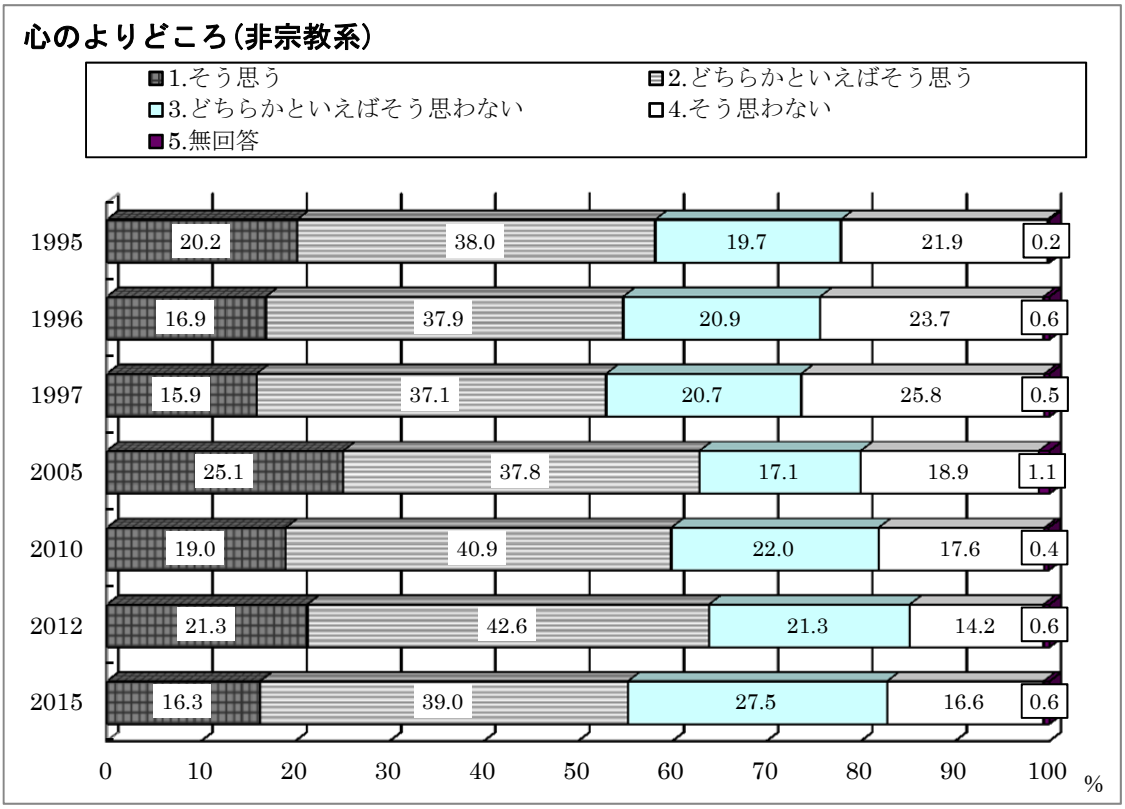


＜非宗教系＞

表 4d2

	1995	1996	1997	2005	2010	2012	2015
1.そう思う	20.2	16.9	15.9	25.1	19.0	21.3	16.3
2.どちらかといえばそう思う	38.0	37.9	37.1	37.8	40.9	42.6	39.0
3.どちらかといえばそう思わない	19.7	20.9	20.7	17.1	22.0	21.3	27.5
4.そう思わない	21.9	23.7	25.8	18.9	17.6	14.2	16.6
5.無回答	0.2	0.6	0.5	1.1	0.4	0.6	0.6

グラフ 4d2



e)「宗教はアブナイ」というイメージがあるか

質問内容

次のような意見について、「1.そう思う　2.どちらかといえばそう思う　3.どちらかといえばそう思わない　4.そう思わない」のいずれかの番号で答えて下さい。

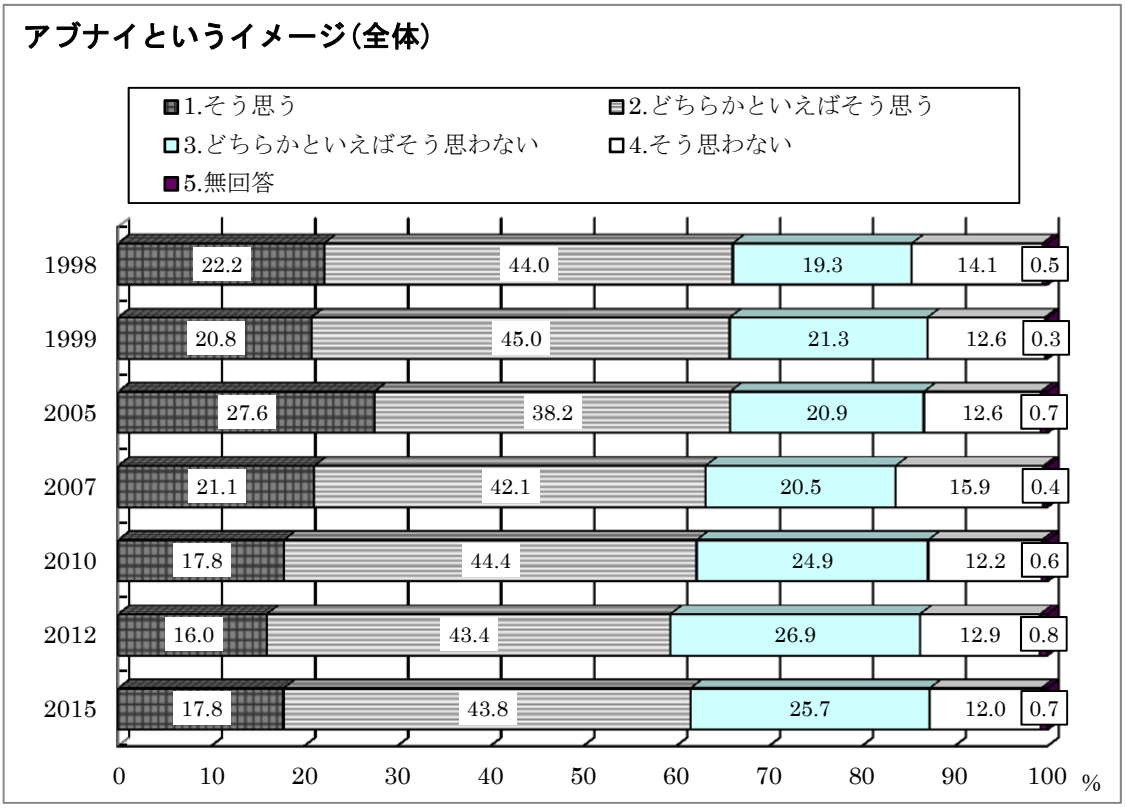
「一般的に宗教は、アブナイというイメージがある」　　[　　]

＜全体＞

表 4e1

	1998	1999	2005	2007	2010	2012	2015
1.そう思う	22.2	20.8	27.6	21.1	17.8	16.0	17.8
2.どちらかといえばそう思う	44.0	45.0	38.2	42.1	44.4	43.4	43.8
3.どちらかといえばそう思わない	19.3	21.3	20.9	20.5	24.9	26.9	25.7
4.そう思わない	14.1	12.6	12.6	15.9	12.2	12.9	12.0
5.無回答	0.5	0.3	0.7	0.4	0.6	0.8	0.7

グラフ 4e1

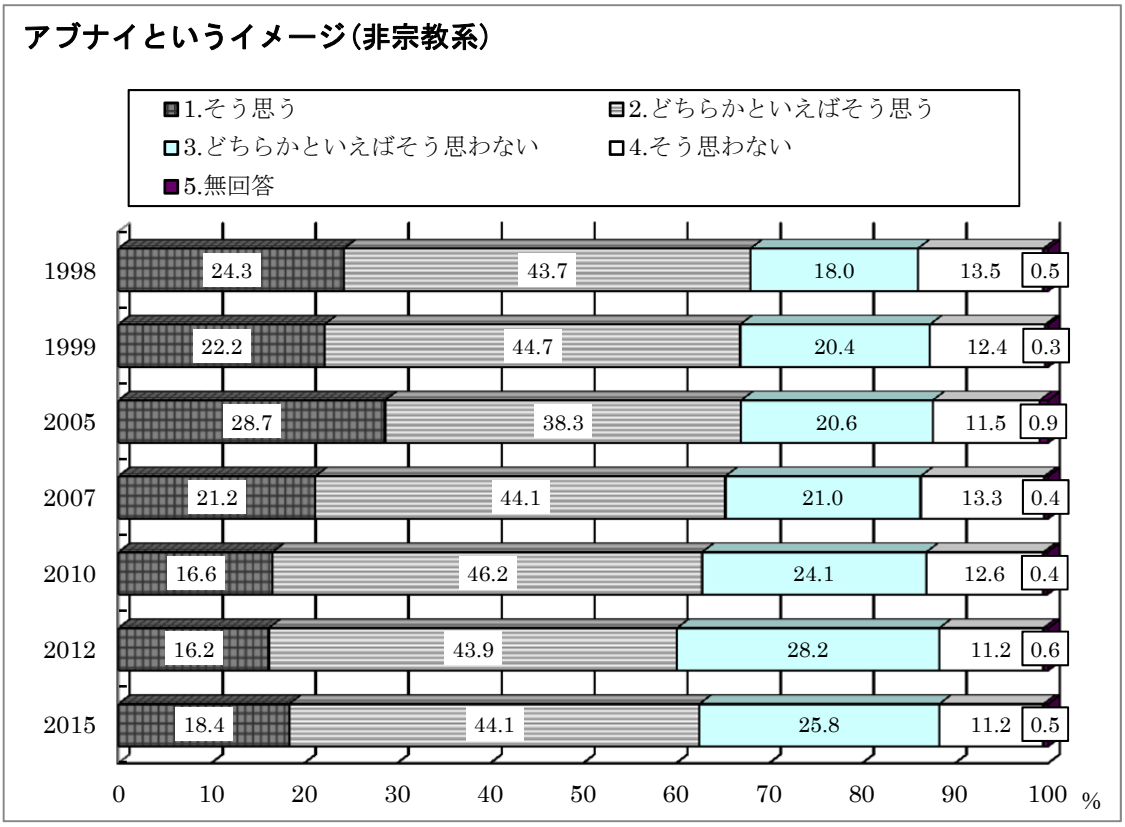


＜非宗教系＞

表 4e2

	1998	1999	2005	2007	2010	2012	2015
1.そう思う	24.3	22.2	28.7	21.2	16.6	16.2	18.4
2.どちらかといえばそう思う	43.7	44.7	38.3	44.1	46.2	43.9	44.1
3.どちらかといえばそう思わない	18.0	20.4	20.6	21.0	24.1	28.2	25.8
4.そう思わない	13.5	12.4	11.5	13.3	12.6	11.2	11.2
5.無回答	0.5	0.3	0.9	0.4	0.4	0.6	0.5

グラフ 4e2



第5章 宗教関連の社会問題

a）宗教の勧誘について

宗教の勧誘については 2000 年と 2005 年に質問しているのでこれを比較する。

①勧誘を受けた経験

質問内容

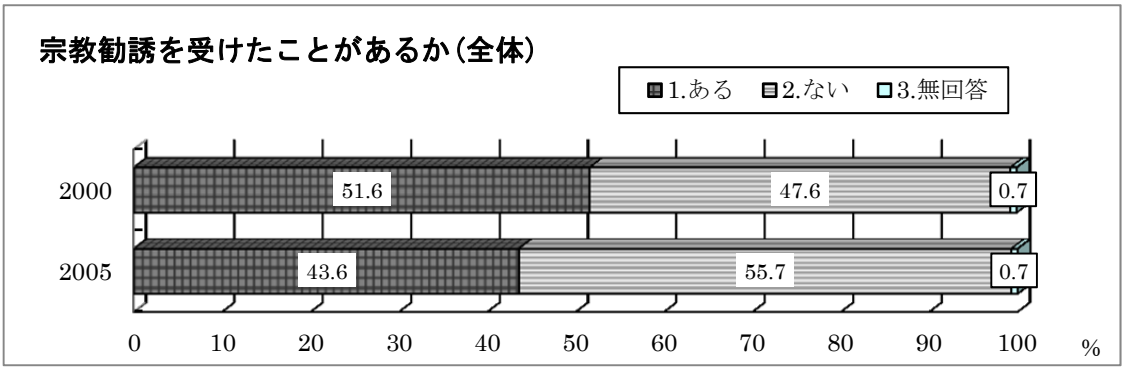
あなたは見知らぬ人から宗教の勧誘を受けたことがありますか。　1.はい　2.いいえ

＜全体＞

表 5a1

	2000	2005
1.ある	51.6	43.6
2.ない	47.6	55.7
3.無回答	0.7	0.7

グラフ 5a1



②勧誘を受けた宗教

質問内容

勧誘を受けた宗教の名前を下の欄に記入してください。

（分からない場合は「不明」と書いてください。複数ある場合は2つまで答えてください）

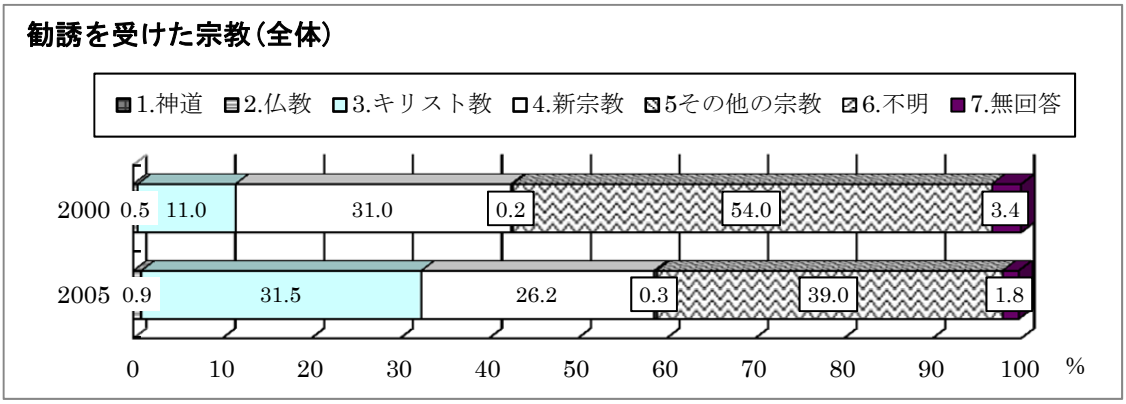
＜全体＞

表 5a2

	2000	2005
1.神道	0.0	0.0
2.仏教	0.5	0.9
3.キリスト教	11.0	31.5
4.新宗教	31.0	26.2
5.その他の宗教	0.2	0.3
6.不明	54.0	39.0
7.無回答	3.4	1.8

＊宗教名は具体的に記されていたものがあったが、それを上記のカテゴリーに分類して集計した。

グラフ 5a2



③勧誘を受けた時期

勧誘を受けた時期は、学年でも異なる（クロス集計を参照）。ここでは全体の傾向を示しておく。高校時代がもっとも多いが、中学時代に勧誘された経験を記憶するものが 2～3 割いる。

質問内容

勧誘を受けたのはいつ頃のことですか。次から選んで下の欄のBに番号を記入してください。

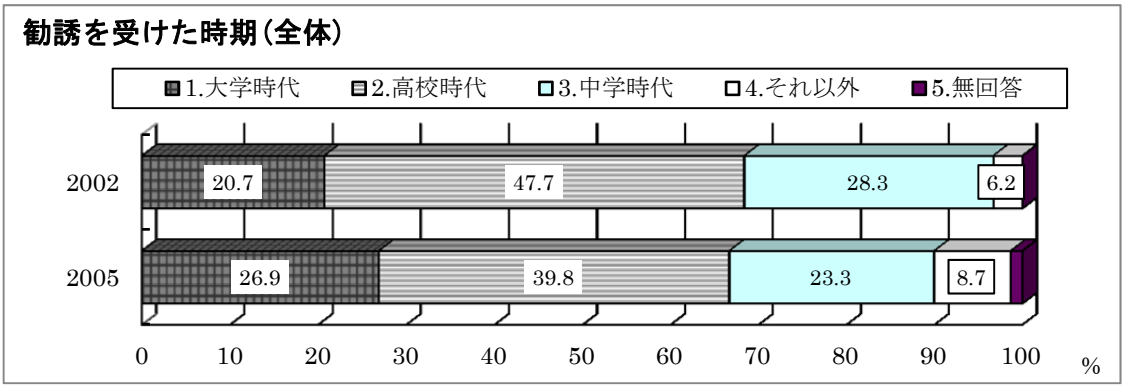
1.大学時代　2.高校時代　3.中学以前　4.それ以外

＜全体＞

表 5a3

	2000	2005
1.大学時代	20.7	26.9
2.高校時代	47.7	39.8
3.中学時代	28.3	23.3
4.それ以外	6.2	8.7
5.無回答	2.2	1.3

グラフ 5a3



＊高校以降が約7割である。

④勧誘を受けた場所

質問内容

勧誘を受けた場所はどこでしたか。次から選んで下の欄のCに番号を記入してください。

1.大学内　2.駅周辺（路上）　3.自宅　4.電話　5.その他（具体的に:　　）

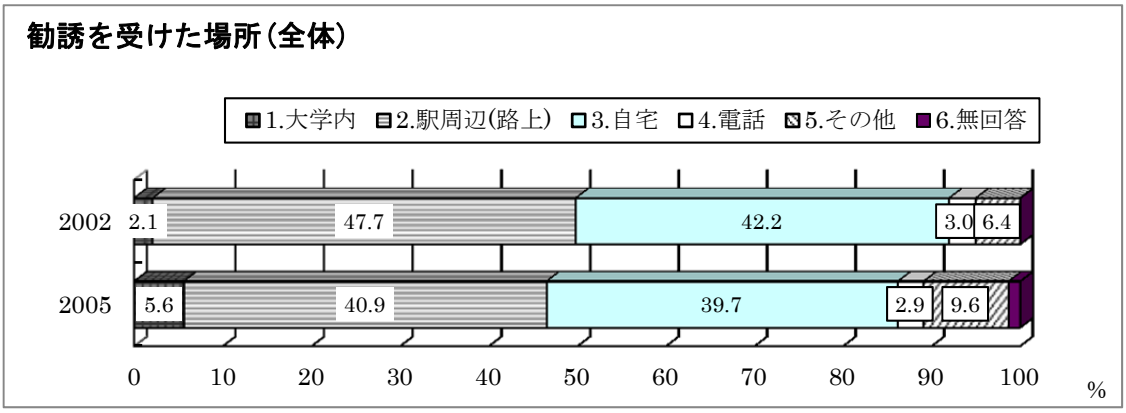
＜全体＞

表 5a4

	2000	2005
1.大学内	2.1	5.6
2.駅周辺(路上)	47.7	40.9
3.自宅	42.2	39.7
4.電話	3.0	2.9
5.その他	6.4	9.6
6.無回答	1.6	1.3

＊場所もあらかじめ選択肢に示した。

グラフ 5a4



⑤勧誘を受けたときの対応

質問内容

そのとき（勧誘を受けたとき）、どのように対応しましたか。次から選んで下の欄のDに番号を記入してください。

1.無視した　2.一応話を聞いた　3.相手の説明を聞いて関心をもった

4.相手の説明を聞いて反論し議論になった

（「5.断った」、「6. その他」は2000年のみ選択肢に入れた）

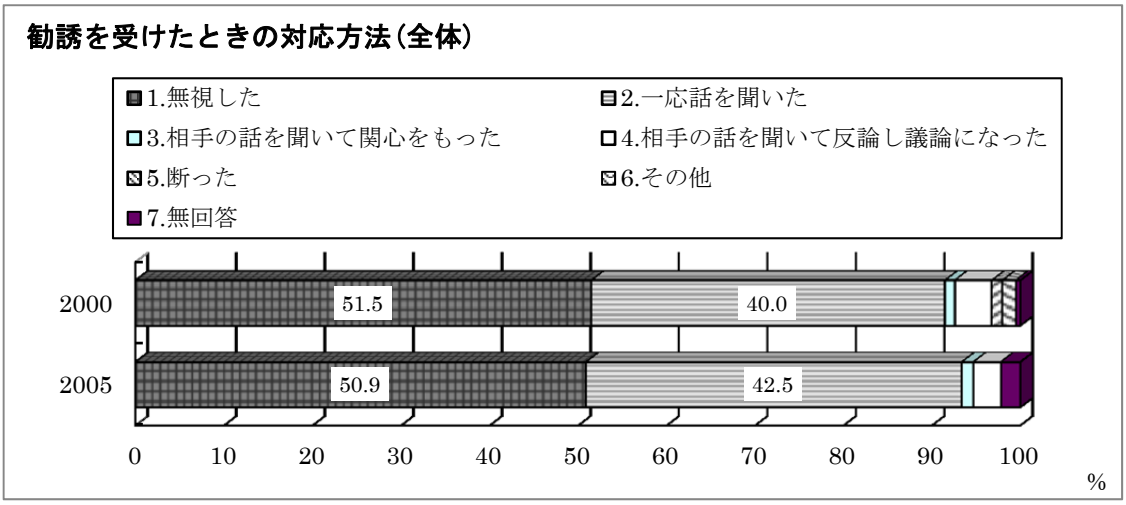
＜全体＞

表 5a5

	2000	2005
1. 無視した	51.5	50.9
2. 一応話を聞いた	40.0	42.5
3. 相手の話を聞いて関心をもった	1.1	1.3
4. 相手の話を聞いて反論し議論になった	4.2	3.1
5. 断った	1.2	—
6. その他	1.5	—
7. 無回答	1.4	2.2

＊対応方法もあらかじめ選択肢に示した。

グラフ 5a5



b）街頭での布教の制限

質問内容

次のような意見について、「1.そう思う　2.どちらかといえばそう思う　3.どちらかといえばそう思わない　4.そう思わない」のいずれかの番号で答えて下さい。

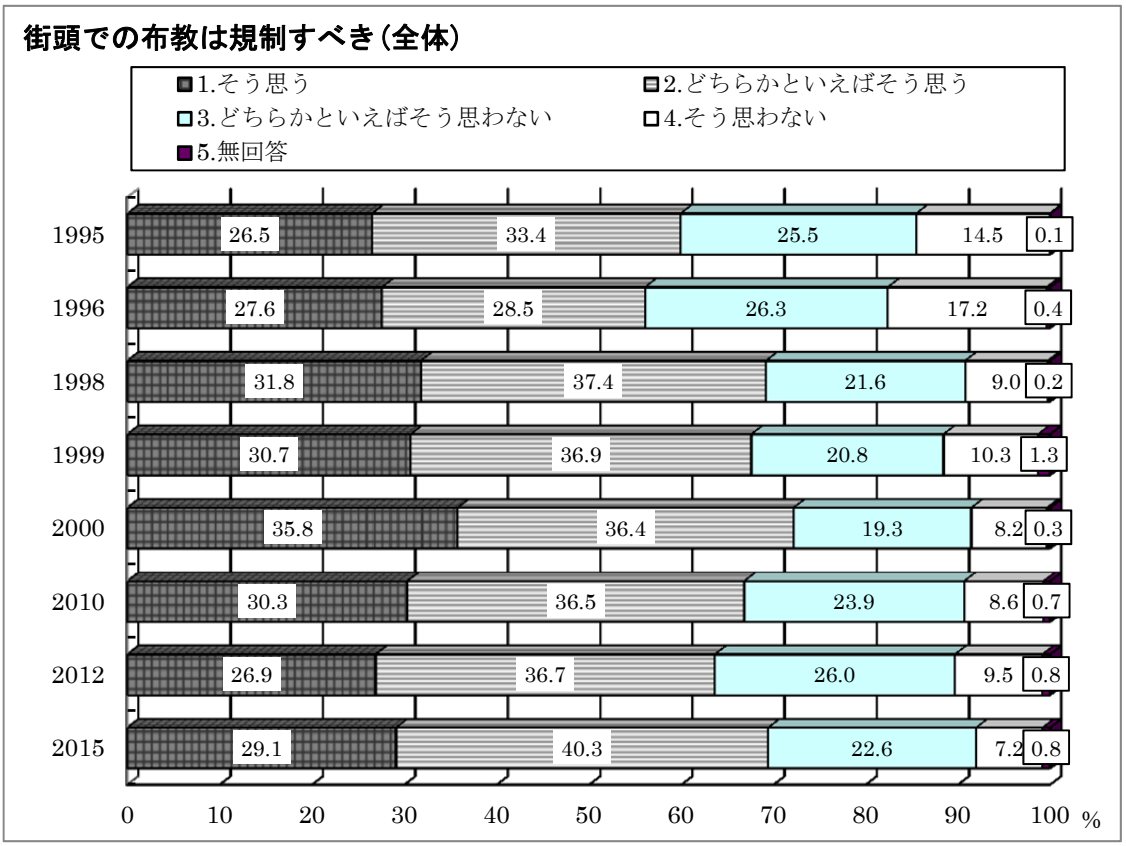
5.「街頭での布教は迷惑だから、法律によって規制すべきだ。」　　[　　]

＜全体＞

表 5b1

	1995	1996	1998	1999	2000	2010	2012	2015
1.そう思う	26.5	27.6	31.8	30.7	35.8	30.3	26.9	29.1
2.どちらかといえばそう思う	33.4	28.5	37.4	36.9	36.4	36.5	36.7	40.3
3.どちらかといえばそう思わない	25.5	26.3	21.6	20.8	19.3	23.9	26.0	22.6
4.そう思わない	14.5	17.2	9.0	10.3	8.2	8.6	9.5	7.2
5.無回答	0.1	0.4	0.2	1.3	0.3	0.7	0.8	0.8

グラフ 5b1

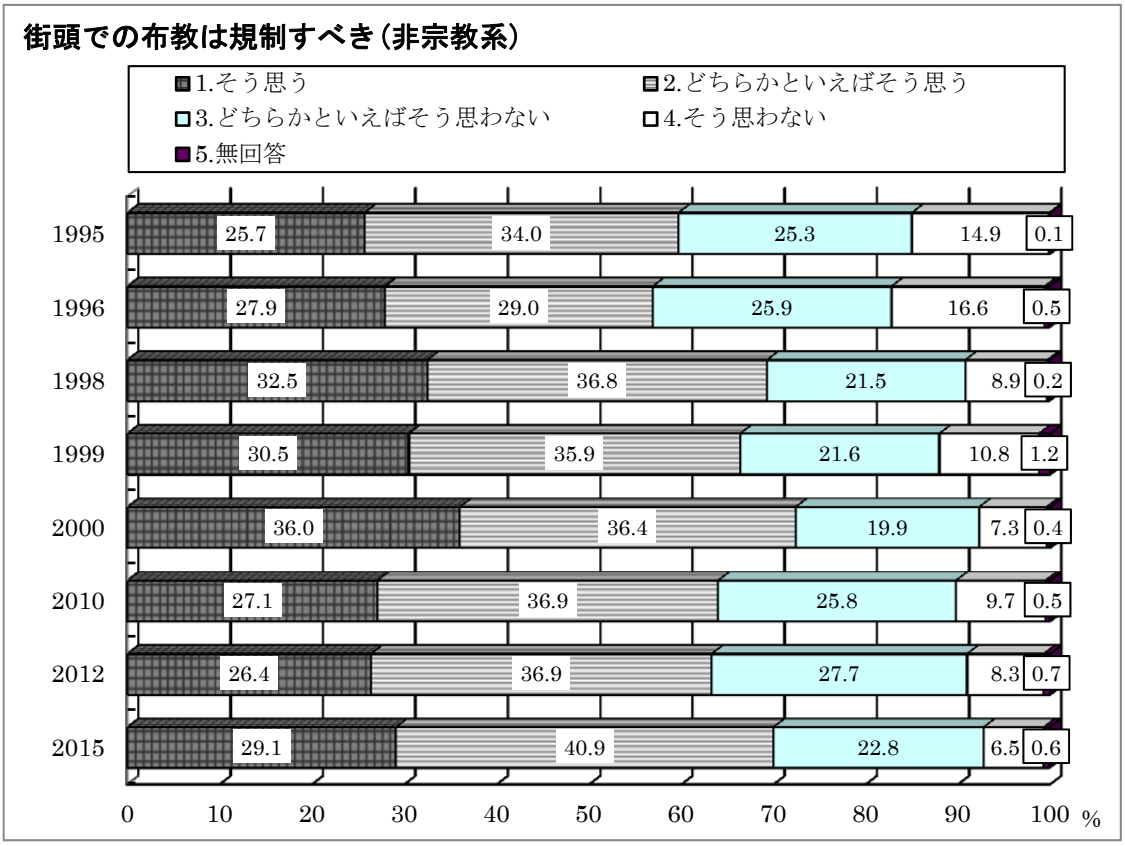


＜非宗教系＞

表 5b2

	1995	1996	1998	1999	2000	2010	2012	2015
1.そう思う	25.7	27.9	32.5	30.5	36.0	27.1	26.4	29.1
2.どちらかといえばそう思う	34.0	29.0	36.8	35.9	36.4	36.9	36.9	40.9
3.どちらかといえばそう思わない	25.3	25.9	21.5	21.6	19.9	25.8	27.7	22.8
4.そう思わない	14.9	16.6	8.9	10.8	7.3	9.7	8.3	6.5
5.無回答	0.1	0.5	0.2	1.2	0.4	0.5	0.7	0.6

グラフ 5b2



c) カルト問題

質問内容

大学が主催して、新入生などを対象に「カルト対策」の教育をすることについてどう思いますか。次の1～5から1つ選んで○をつけてください。

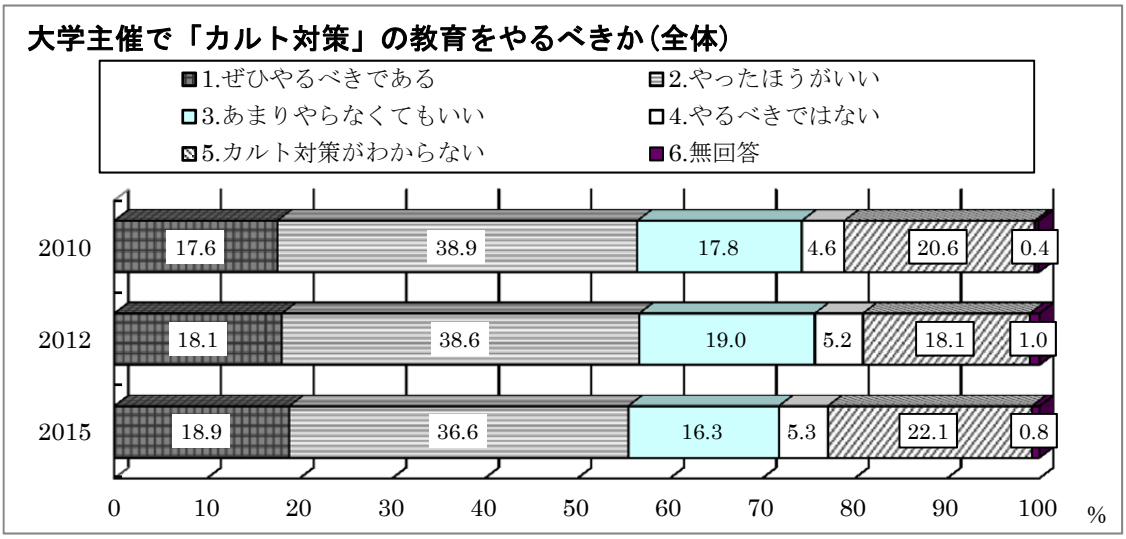
1.ぜひやるべきである　2.やったほうがいい　3.あまりやらなくてもいい
4.やるべきではない　5.「カルト対策」というのが何のことか分らない

＜全体＞

表５ｃ１

	2010	2012	2015
1.ぜひやるべきである	17.6	18.1	18.9
2.やったほうがいい	38.9	38.6	36.6
3.あまりやらなくてもいい	17.8	19.0	16.3
4.やるべきではない	4.6	5.2	5.3
5.カルト対策がわからない	20.6	18.1	22.1
6.無回答	0.4	1.0	0.8

グラフ５ｃ１

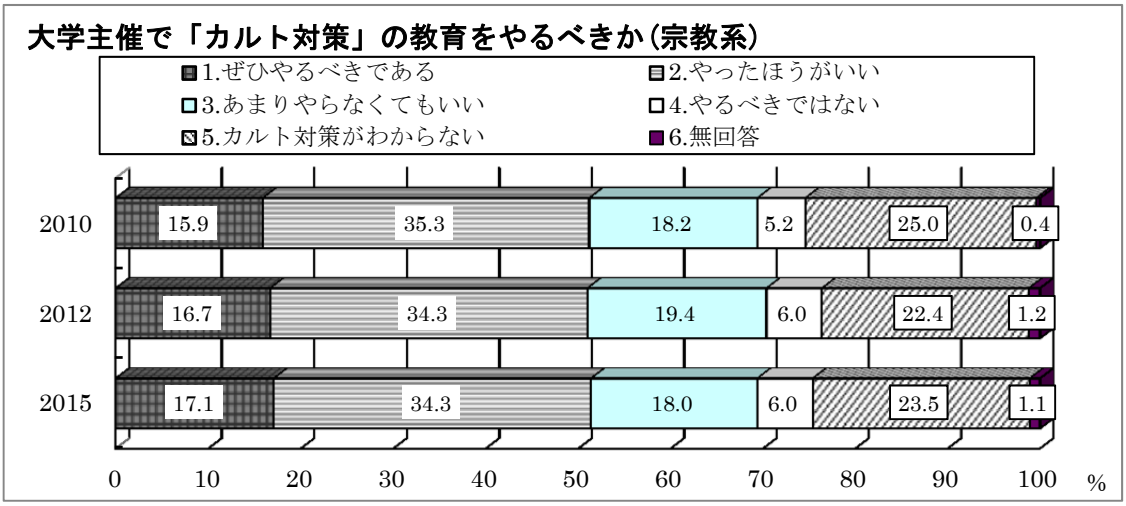


＜宗教系＞

表５ｃ２

	2010	2012	2015
1.ぜひやるべきである	15.9	16.7	17.1
2.やったほうがいい	35.3	34.3	34.3
3.あまりやらなくてもいい	18.2	19.4	18.0
4.やるべきではない	5.2	6.0	6.0
5.カルト対策がわからない	25.0	22.4	23.5
6.無回答	0.4	1.2	1.1

グラフ５ｃ２

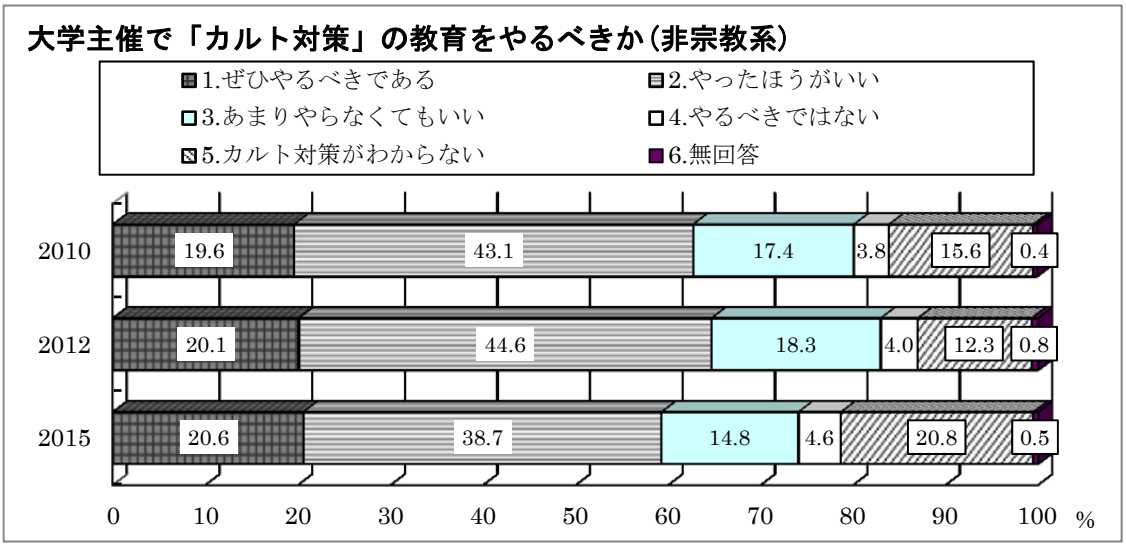


＜非宗教系＞

表５ｃ３

	2010	2012	2015
1.ぜひやるべきである	19.6	20.1	20.6
2.やったほうがいい	43.1	44.6	38.7
3.あまりやらなくてもいい	17.4	18.3	14.8
4.やるべきではない	3.8	4.0	4.6
5.カルト対策がわからない	15.6	12.3	20.8
6.無回答	0.4	0.8	0.5

グラフ５ｃ３



d）公的な相談窓口の設置の必要性

質問内容

次の事柄について、「1.そう思う　2.どちらかといえばそう思う　3.どちらかといえばそう思わない　4.そう思わない」のいずれかの番号で答えて下さい。

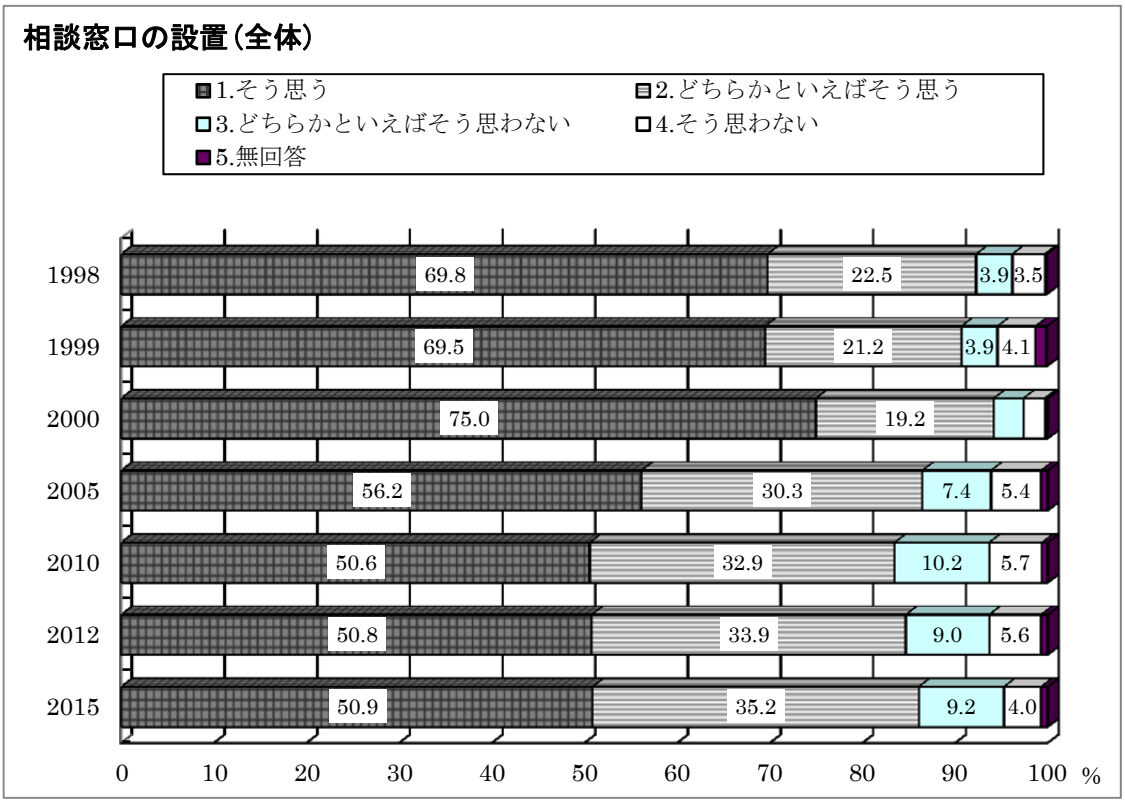
1.宗教的トラブルがあったときに相談できるような公的な窓口の設置が必要だ。　［　］

＜全体＞

表５ｄ１

	1998	1999	2000	2005	2010	2012	2015
1.そう思う	69.8	69.5	75.0	56.2	50.6	50.8	50.9
2.どちらかといえばそう思う	22.5	21.2	19.2	30.3	32.9	33.9	35.2
3.どちらかといえばそう思わない	3.9	3.9	3.2	7.4	10.2	9.0	9.2
4.そう思わない	3.5	4.1	2.3	5.4	5.7	5.6	4.0
5.無回答	0.2	1.2	0.3	0.7	0.6	0.8	0.7

グラフ５ｄ１

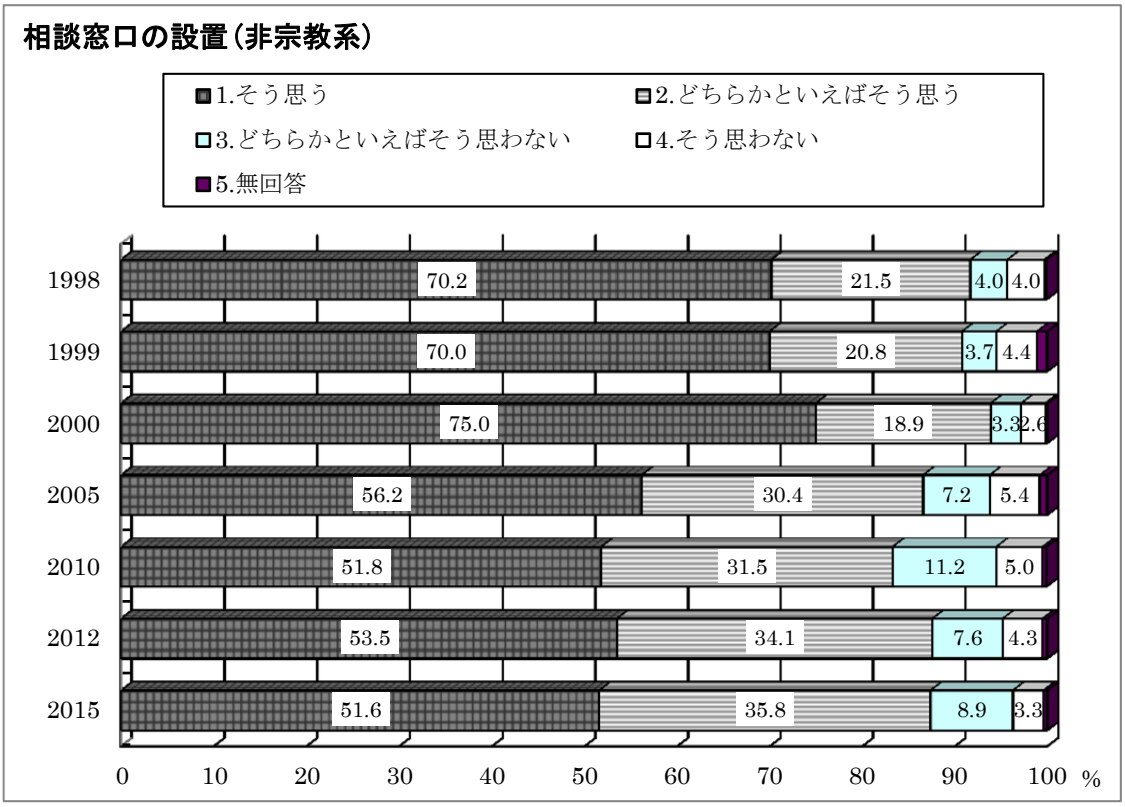


＜非宗教系＞

表５ｄ２

	1998	1999	2000	2005	2010	2012	2015
1.そう思う	70.2	70.0	75.0	56.2	51.8	53.5	51.6
2.どちらかといえばそう思う	21.5	20.8	18.9	30.4	31.5	34.1	35.8
3.どちらかといえばそう思わない	4.0	3.7	3.3	7.2	11.2	7.6	8.9
4.そう思わない	4.0	4.4	2.6	5.4	5.0	4.3	3.3
5.無回答	0.2	1.1	0.3	0.9	0.4	0.6	0.5

グラフ５ｄ２



e) ジェンダー問題

ジェンダー問題は宗教における役職や地位での差別、神聖な場所への女人禁制、そして同性愛について質問した。いずれも男女差が顕著であったので、男女別の表とグラフを作成した。

①役職や地位での差別

質問内容

（1999年、2000年）

宗教によっては女性が教団の特定の役職や地位につけないところがあります。これについてあなたはどう思いますか。

1.その宗教の決まりにもとづくものだからそれでよい。

2.たとえ宗教の決まりであっても、そのようなことは問題である。

3.このような問題には関心がない。

（2001年、2005年、2010年、2012年）

宗教によっては、女性が教団の特定の役職や地位につけないことがあります。これは差別だと思いますか。

1.差別だと思う

2.差別だと思わない

3.わからない

＜男性＞

表 5e1

	1999	2000
1.決まりだからそれでよい	39.3	39.4
2.そのようなことは問題である	20.3	21.3
3.関心がない	39.8	38.3
4.無回答	0.5	1.0

グラフ 5e1

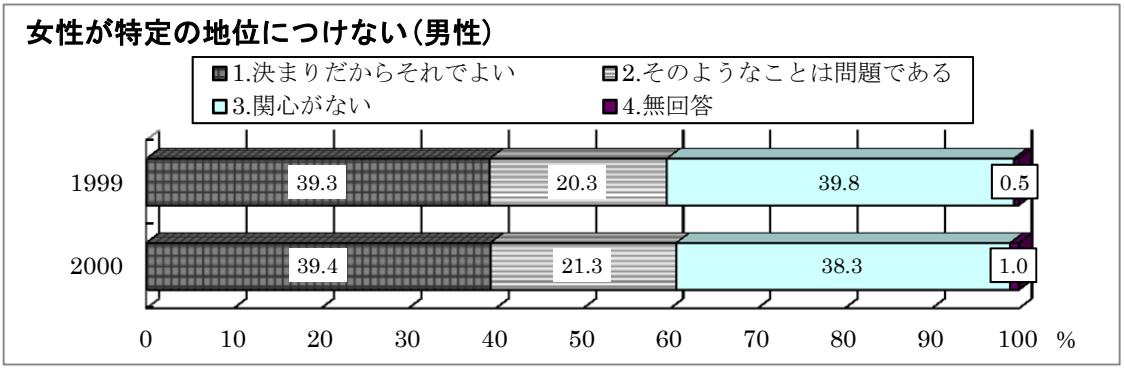
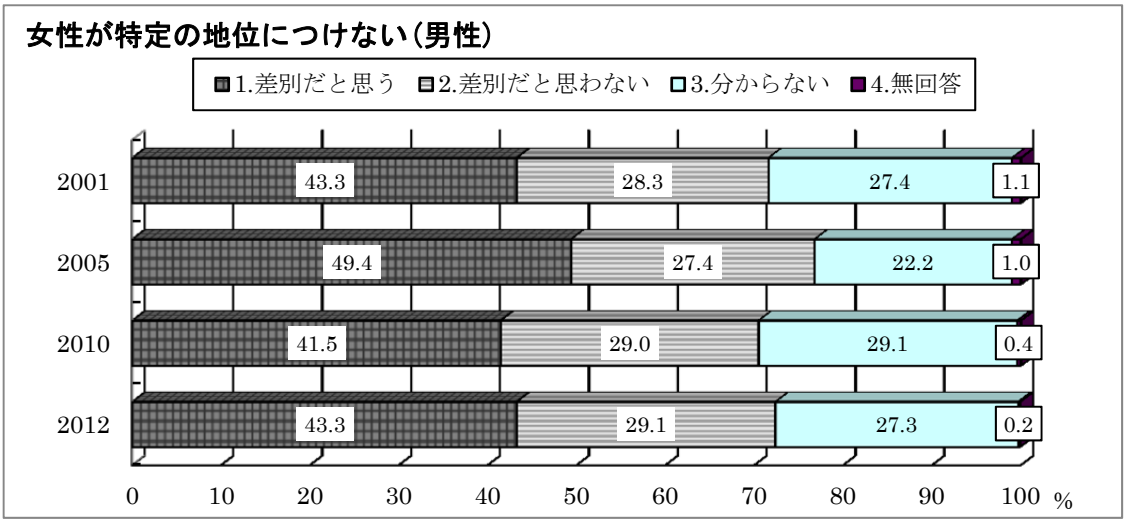


表 5e2

	2001	2005	2010	2012
1.差別だと思う	43.3	49.4	41.5	43.3
2.差別だと思わない	28.3	27.4	29.0	29.1
3.分からない	27.4	22.2	29.1	27.3
4.無回答	1.1	1.0	0.4	0.2

グラフ 5e2



＜女性＞

表 5e3

	1999	2000
1.決まりだからそれでよい	26.7	29.4
2.そのようなことは問題である	33.5	31.4
3.関心がない	39.5	38.4
4.無回答	0.4	0.8

グラフ 5e3

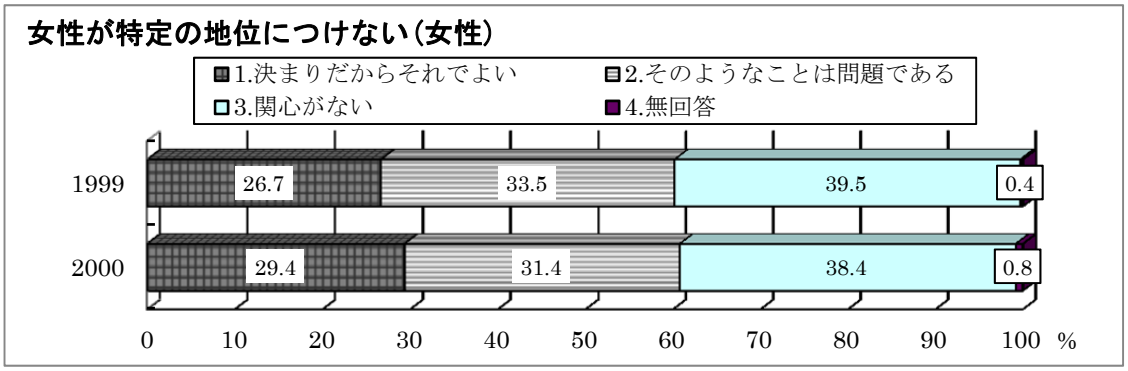
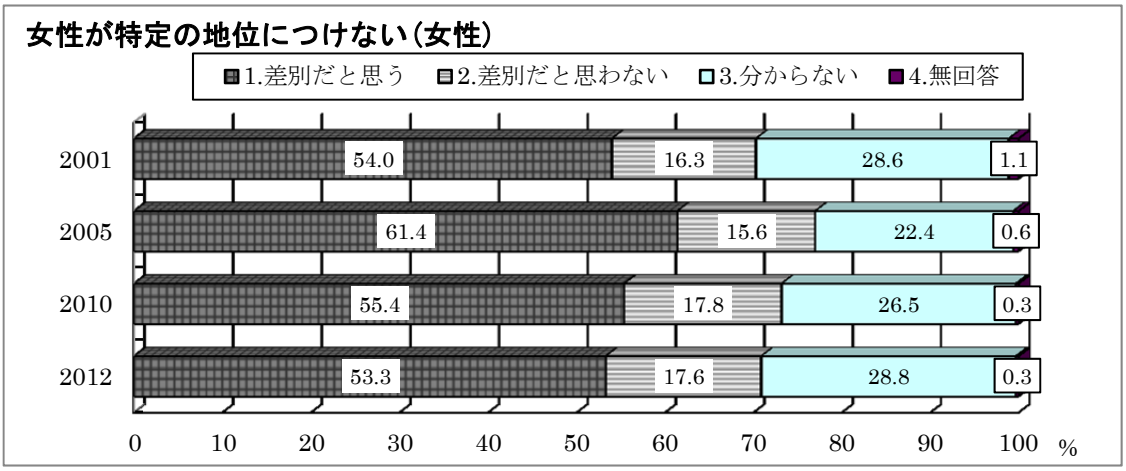


表 5e4

	2001	2005	2010	2012
1.差別だと思う	54.0	61.4	55.4	53.3
2.差別だと思わない	16.3	15.6	17.8	17.6
3.分からない	28.6	22.4	26.5	28.8
4.無回答	1.1	0.6	0.3	0.3

グラフ 5e4



②聖地などへの女人禁制

質問内容

（1999年、2000年）

宗教によっては、山などの一部の神聖な場所には、女性が入ってはいけないとするところがありますが、これについてあなたはどう思いますか。

1.その宗教の決まりにもとづくものだからそれでよい。

2.たとえ宗教の決まりであっても、そのようなことは問題である。

3.このような問題には関心がない。

（2001年、2005年、2010年、2012年）

宗教によっては、山など一部の神聖な場所には、女性が入ってはいけないとするところがありますが、これは差別だと思いますか。

1.差別だと思う

2.差別だと思わない

3.わからない

＜男性＞

表 5e5

	1999	2000
1.決まりだからそれでよい	41.2	42.4
2.そのようなことは問題である	21.3	23.2
3.関心がない	36.9	33.6
4.無回答	0.6	0.9

グラフ 5e5

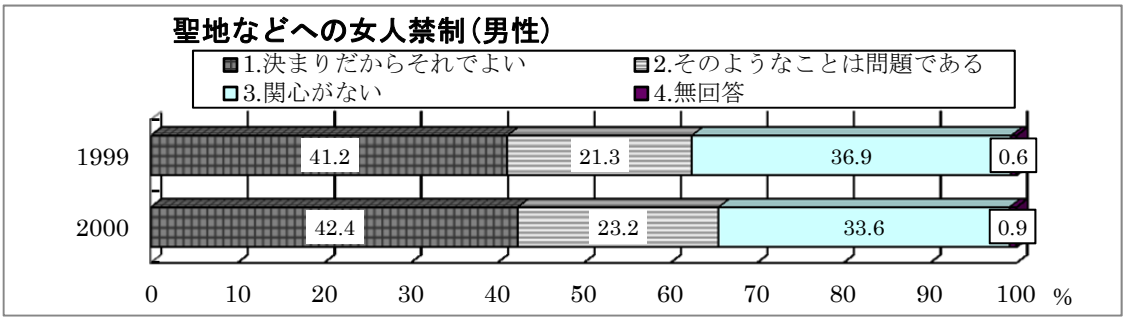
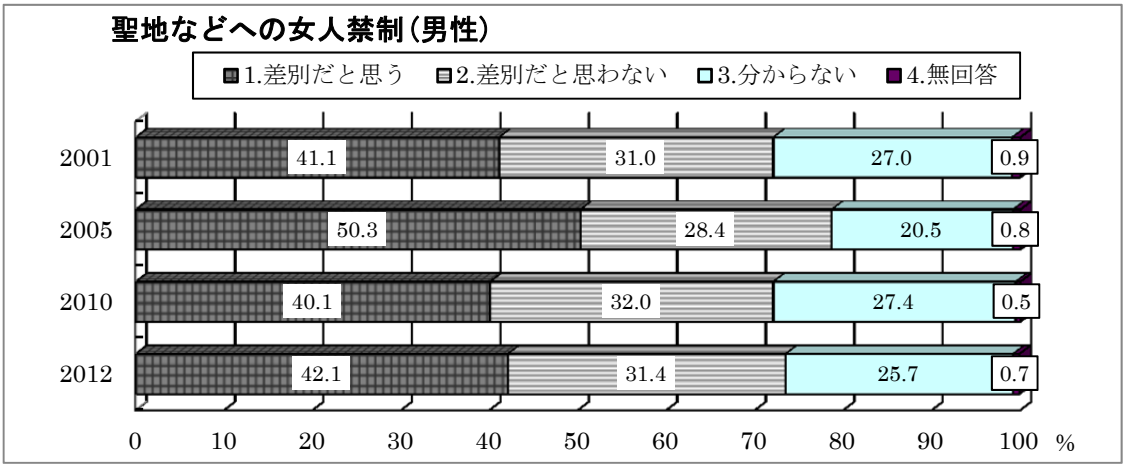


表 5e6

	2001	2005	2010	2012
1.差別だと思う	41.1	50.3	40.1	42.1
2.差別だと思わない	31.0	28.4	32.0	31.4
3.分からない	27.0	20.5	27.4	25.7
4.無回答	0.9	0.8	0.5	0.7

グラフ 5e6



＜女性＞

表 5e7

	1999	2000
1.決まりだからそれでよい	28.9	32.5
2.そのようなことは問題である	38.0	36.9
3.関心がない	32.6	29.7
4.無回答	0.5	0.9

グラフ 5e7

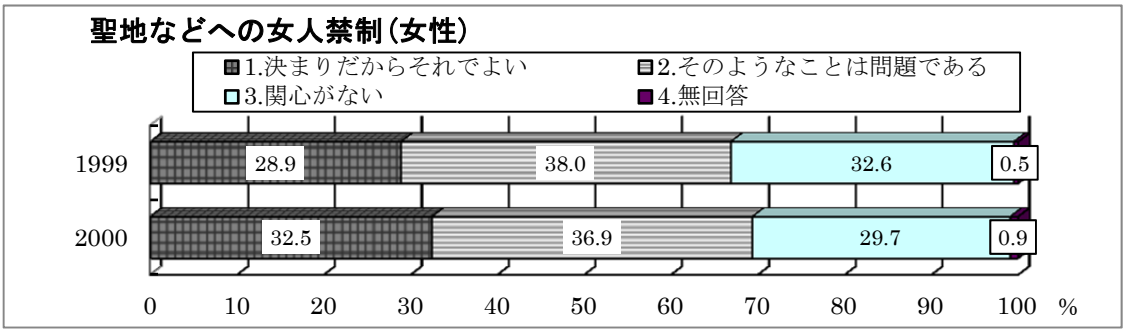
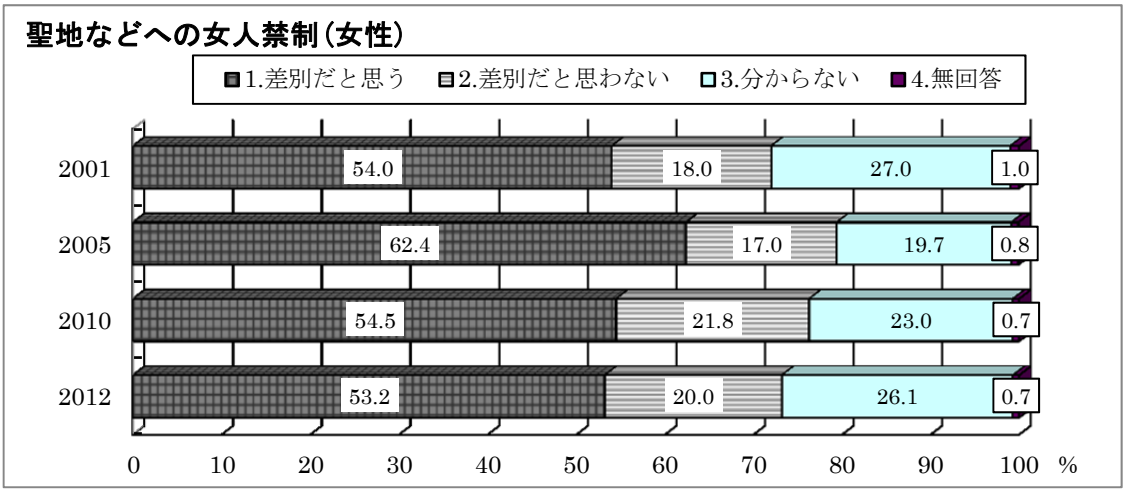


表 5e8

	2001	2005	2010	2012
1.差別だと思う	54.0	62.4	54.5	53.2
2.差別だと思わない	18.0	17.0	21.8	20.0
3.分からない	27.0	19.7	23.0	26.1
4.無回答	1.0	0.8	0.7	0.7

グラフ 5e8



③同性愛の禁止

質問内容

（1999年、2000年）

宗教によっては、同性愛を禁じているところがあります。これについて、あなたはどう思いますか。

1.その宗教の決まりにもとづくものだからそれでよい。

2.たとえ宗教であっても、このような問題に口だしすべきではない。

3.このような問題には関心がない。

（2001年、2005年、2010年、2012年）

宗教によっては、同性愛を禁じているところがあります。これについてあなたはどう思いますか。

1.宗教もそういうことに関与していい

2.宗教はそういうことに関与すべきではない

3.わからない

＜男性＞

表 5e9

	1999	2000
1.決まりだからそれでよい	41.1	42.0
2.口だしすべきではない	17.6	17.1
3.関心がない	40.7	39.9
4.無回答	0.6	1.0

グラフ 5e9

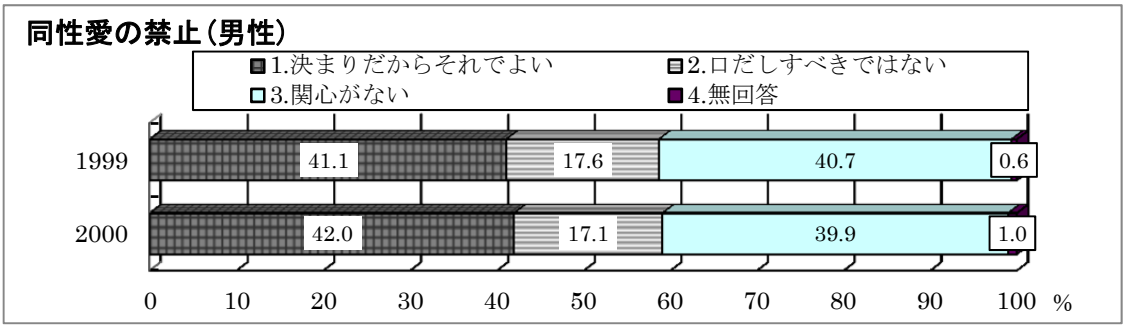
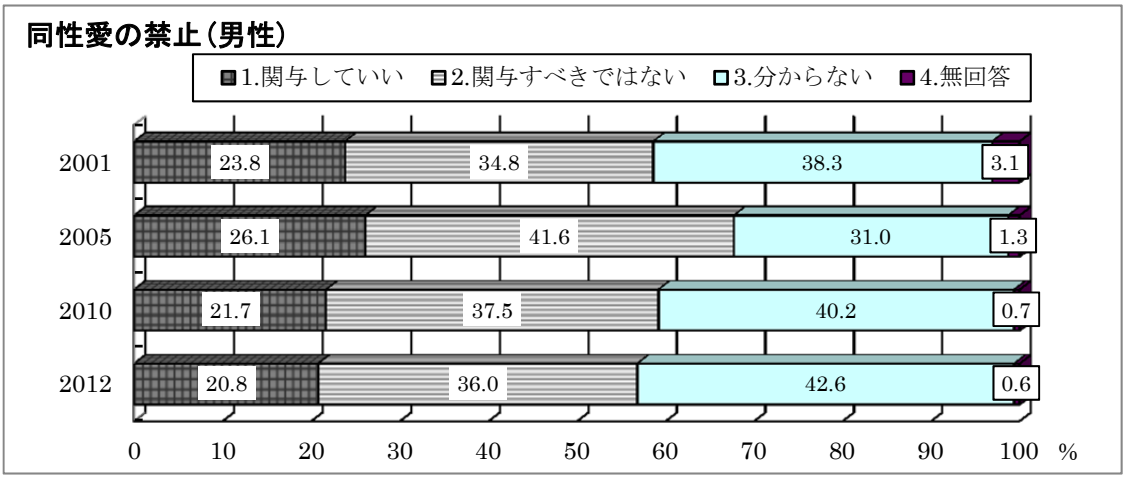


表 5e10

	2001	2005	2010	2012
1.関与していい	23.8	26.1	21.7	20.8
2.関与すべきではない	34.8	41.6	37.5	36.0
3.分からない	38.3	31.0	40.2	42.6
4.無回答	3.1	1.3	0.7	0.6

グラフ 5e10



＜女性＞

表 5e11

	1999	2000
1.決まりだからそれでよい	28.1	33.4
2.口だしすべきではない	34.9	26.3
3.関心がない	36.7	39.3
4.無回答	0.4	1.1

グラフ 5e11

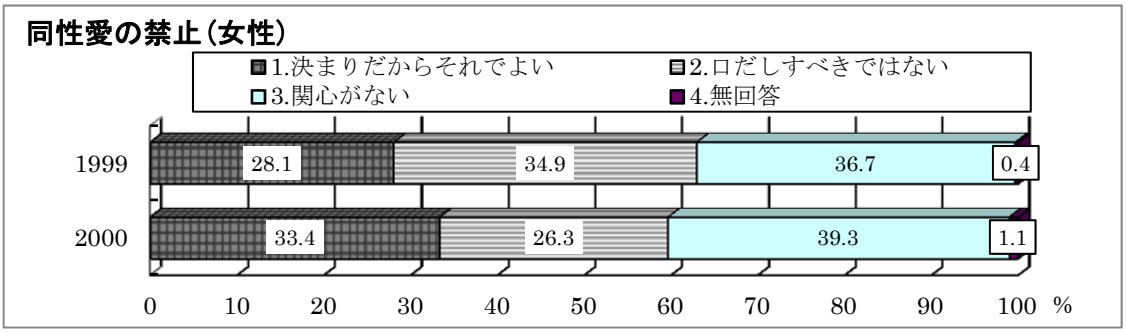
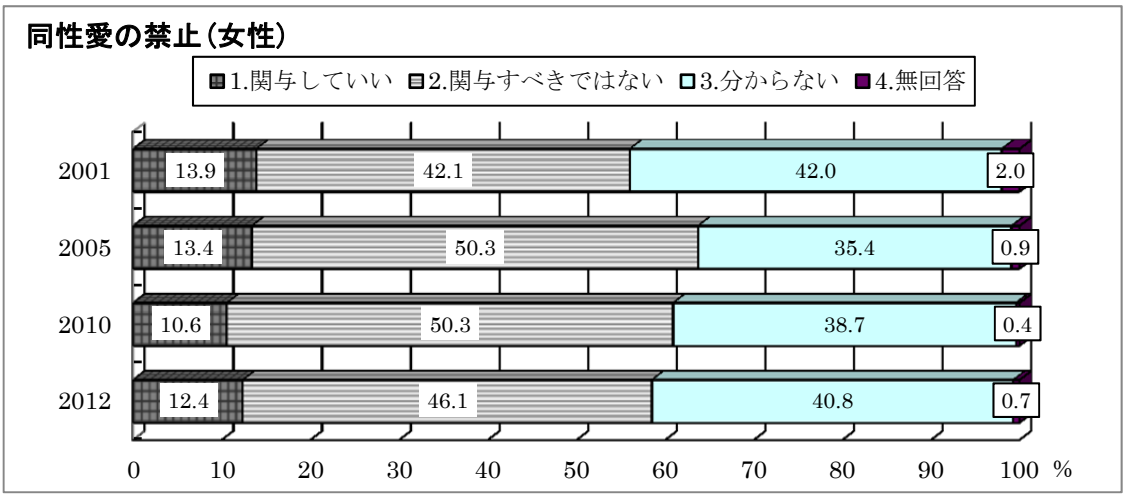


表 5e12

	2001	2005	2010	2012
1.関与していい	13.9	13.4	10.6	12.4
2.関与すべきではない	42.1	50.3	50.3	46.1
3.分からない	42.0	35.4	38.7	40.8
4.無回答	2.0	0.9	0.4	0.7

グラフ 5e12



f) 宗教と政治

質問内容

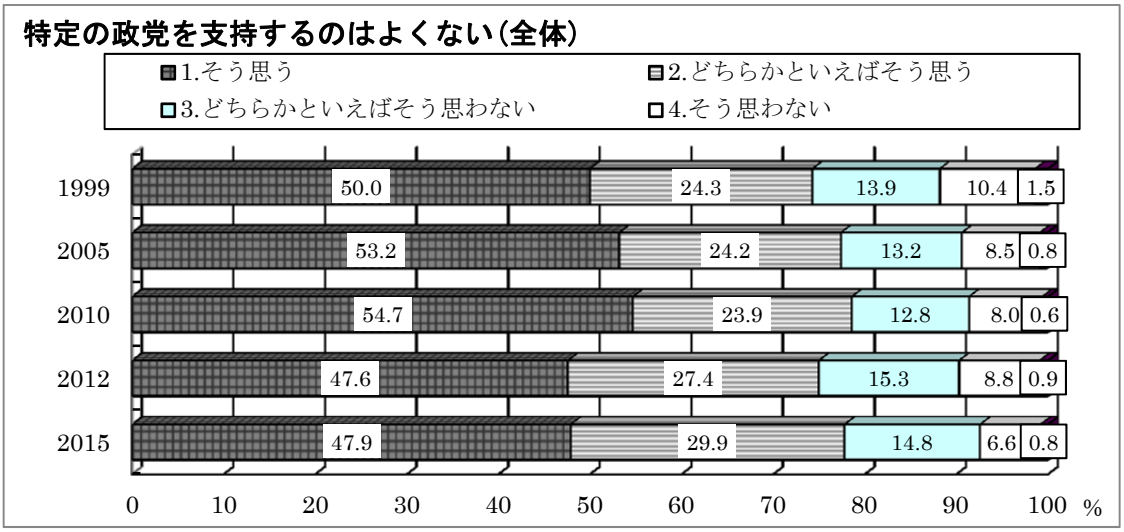
次の事柄について、「1.そう思う 2.どちらかといえばそう思う 3.どちらかといえばそう思わない 4.そう思わない」のいずれかの番号で答えて下さい。

特定の宗教団体が特定の政党を支持するのはよくない。　　[　　]

表５ｆ１

	1999	2005	2010	2012	2015
1.そう思う	50.0	53.2	54.7	47.6	47.9
2.どちらかといえばそう思う	24.3	24.2	23.9	27.4	29.9
3.どちらかといえばそう思わない	13.9	13.2	12.8	15.3	14.8
4.そう思わない	10.4	8.5	8.0	8.8	6.6
5.無回答	1.5	0.8	0.6	0.9	0.8

グラフ５ｆ１



g) 宗教施設への課税

この質問は 1996 年、1997 年と 1999 年、2000 年とでは回答の選択肢が二択と四択というふうに異なっている。二択と四択の違いが見てとれるので並べて示す。

質問内容

（1996年、1997年）

次の事柄について、あなたが同意できる意見にすべて〇をして下さい。

神社、寺院、教会などの宗教施設は現在税金がかかっていないが、一般の建物と同じように課税すべきだ。

[　]

（1999年、2000年）

次の事柄について、「1.そう思う 2.どちらかといえばそう思う 3.どちらかといえばそう思わない 4.そう思わない」のいずれかの番号で答えて下さい。

神社、寺院、教会などの宗教施設は現在税金がかかっていないが、一般の建物と同じように課税すべきだ。

[　]

表５ｇ１

	1996	1997
1.同意する	46.1	36.4
2.無回答	53.9	63.6

グラフ５ｇ１

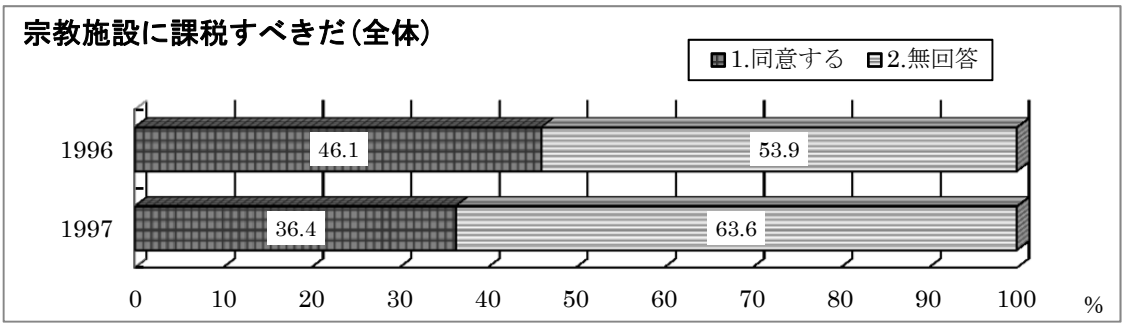
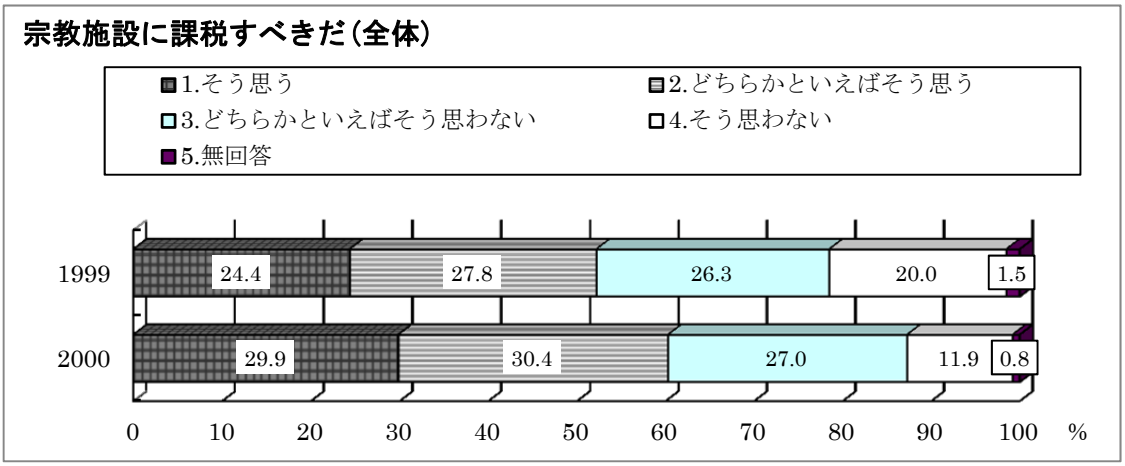


表５ｇ2

	1999	2000
1.そう思う	24.4	29.9
2.どちらかといえばそう思う	27.8	30.4
3.どちらかといえばそう思わない	26.3	27.0
4.そう思わない	20.0	11.9
5.無回答	1.5	0.8

グラフ５ｇ2



第6章 オウム真理教問題

a) オウム真理教についての報道

オウム真理教についての報道にどの程度関心があるかは、地下鉄サリン事件の翌々年(1997 年)から質問をした。事件から 20 年を経た 2015 年まで質問している。

質問内容

現在あなたは、オウム真理教についての報道に対して、どれくらい関心がありますか。次の中から選んで下さい。

1.非常に関心をもっている　　2.多少関心をもっている

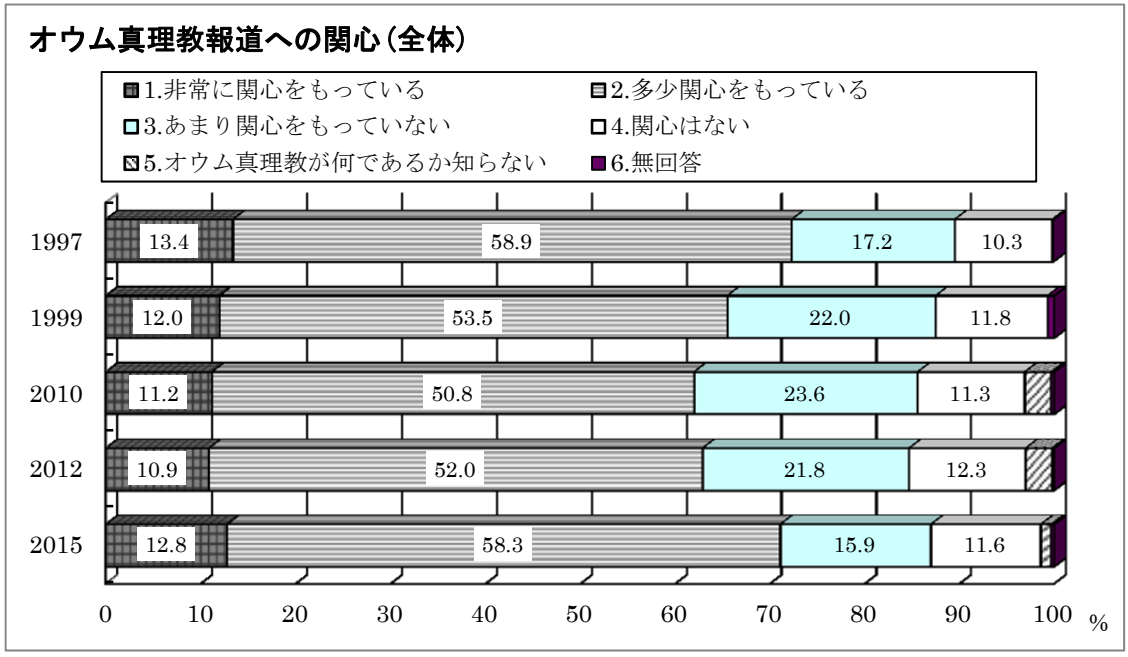
3.あまり関心をもっていない　　4.関心はない

(2010年からは「5.オウム真理教が何であるか知らない」を加えた。)

表 6a1

	1997	1999	2010	2012	2015
1.非常に関心をもっている	13.4	12.0	11.2	10.9	12.8
2.多少関心をもっている	58.9	53.5	50.8	52.0	58.3
3.あまり関心をもっていない	17.2	22.0	23.6	21.8	15.9
4.関心はない	10.3	11.8	11.3	12.3	11.6
5.オウム真理教が何であるか知らない	—	—	2.8	2.8	1.1
6.無回答	0.1	0.7	0.3	0.3	0.3

グラフ 6a1



b）関心の内容

この質問は年により問の形式が少し異なる。1997 年、1999 年は、オウム真理教報道に対して関心を持っているかの質問に続き、その内容を問うものである。

2005 年は、オウム真理教について知っている事項の質問に続き、オウム真理教について関心を持っているものを問うものなので、質問の文脈がやや異なる。

2005 年の「2.今でも信者である人たちのようす」は、正確には「2.今も信者である人と彼らが住んでいる地域住民とのトラブル」となっている。

質問内容

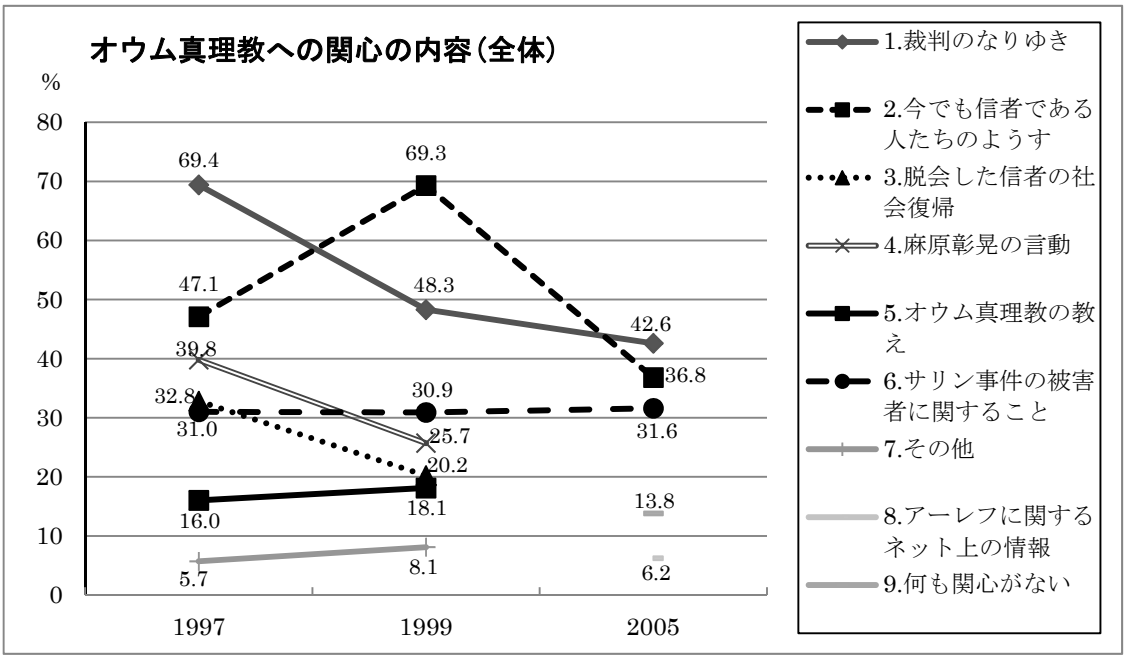
（上記の問で）1.～3.を選んだ人（オウム真理教に関心ある人）はその関心の内容について次から選んで下さい。（複数に○をしてもかまいません）

1.裁判のなりゆき
2.今でも信者である人たちのようす
3.脱会した信者の社会復帰
4.麻原彰晃（松本智津夫）の言動
5.オウム真理教の教え
6.サリン事件の被害者に関すること
7.その他［具体的に:　　］

表 6a2

	1997	1999	2005
1.裁判のなりゆき	69.4	48.3	42.6
2.今でも信者である人たちのようす	47.1	69.3	36.8
3.脱会した信者の社会復帰	32.8	20.2	—
4.麻原彰晃の言動	39.8	25.7	—
5.オウム真理教の教え	16.0	18.1	—
6.サリン事件の被害者に関すること	31.0	30.9	31.6
7.その他	5.7	8.1	—
8.アーレフに関するネット上の情報	—	—	6.2
9.何も関心がない	—	—	13.8

グラフ 6a2



c) オウム真理教についての知識

この質問も一部選択肢の内容が異なる。「3.アレフ」については、2005 年が「現在はアーレフと名乗って活動している」、2010 年以降は「オウム真理教の元信者の一部は、現在アレフという団体に所属している。」これは団体名が変わったことによる。

2015 年の「1.サリン事件を起こした」と「8.数千人の被害者が出た」については、「1995 年に東京で地下鉄サリン事件を起こし、10 名以上の死者を含む数千人の被害者が出た」として一文でまとめて表現されている。

<u>質問内容</u>

オウム真理教について、以下のうちあなたが知っているものに〇をしてください。［複数回答可］

1.1995年に地下鉄サリン事件を起こした

2.教祖は麻原彰晃（本名松本智津夫）である。

3.現在はアーレフと名乗って活動している

4.修行によって空中浮揚など超能力が得られると主張した

5.信者たちが修行していたところはサティアンと呼ばれていた

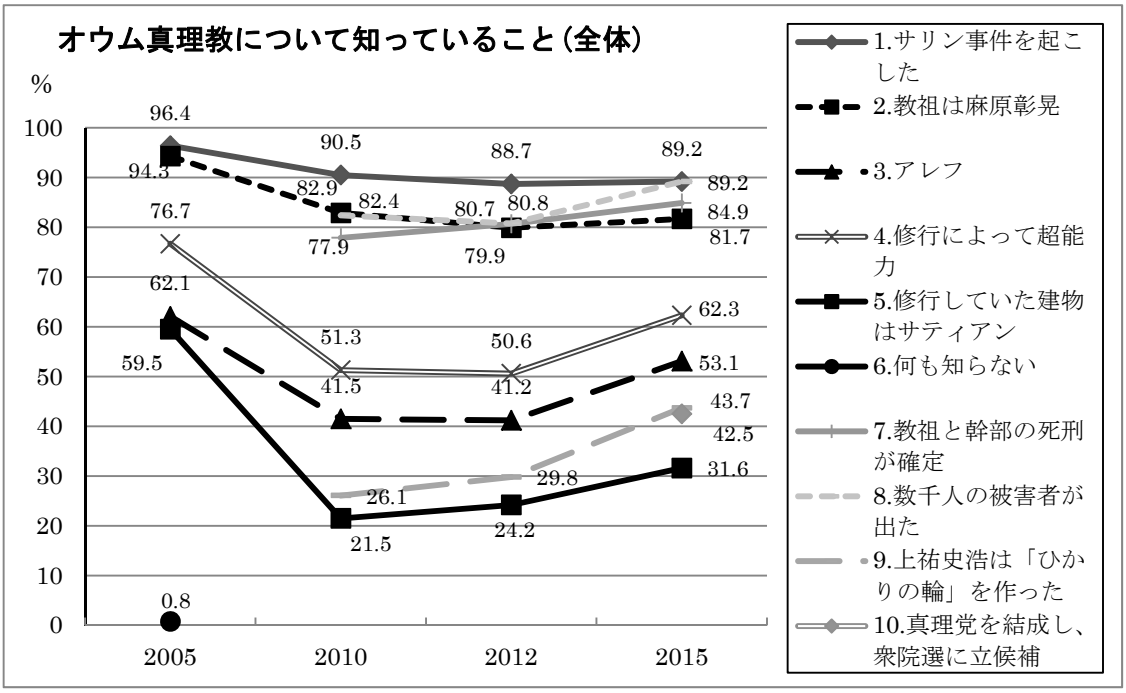
6.オウム真理教については何も知らない

表６ｃ１

	2005	2010	2012	2015
1.サリン事件を起こした	96.4	90.5	88.7	89.2
2.教祖は麻原彰晃	94.3	82.9	79.9	81.7
3.アレフ	62.1	41.5	41.2	53.1
4.修行によって超能力	76.7	51.3	50.6	62.3
5.修行していた建物はサティアン	59.5	21.5	24.2	31.6
6.何も知らない	0.8	—	—	—
7.教祖と幹部の死刑が確定	—	77.9	80.7	84.9
8.数千人の被害者が出た	—	82.4	80.8	89.2
9.上祐史浩は「ひかりの輪」を作った	—	26.1	29.8	43.7
10.真理党を結成し、衆院選に立候補	—	—	—	42.5

＊2015年は1と8が一つの選択肢にまとめられているので、同じ数値を記入した。

グラフ 6c1



第7章 イスラム教関連

イスラム教については、2005 年、2012 年、2015 年に質問している。イスラム教との関わりに関しては3回とも質問しているが、モスクに関しては2012 年と 15 年の 2 回しか質問していない。しかし、3 年間でかなりの変化が生じたことが分かる。

a) イスラム教徒との関わり

質問内容

あなたのイスラム教徒(ムスリム)とのかかわりで、次のうちあてはまるものがあったら選んでください。

[複数回答可]

1.自分はイスラム教徒である

2.日本にイスラム教徒の友人がいる

3.国外にイスラム教徒の友人がいる

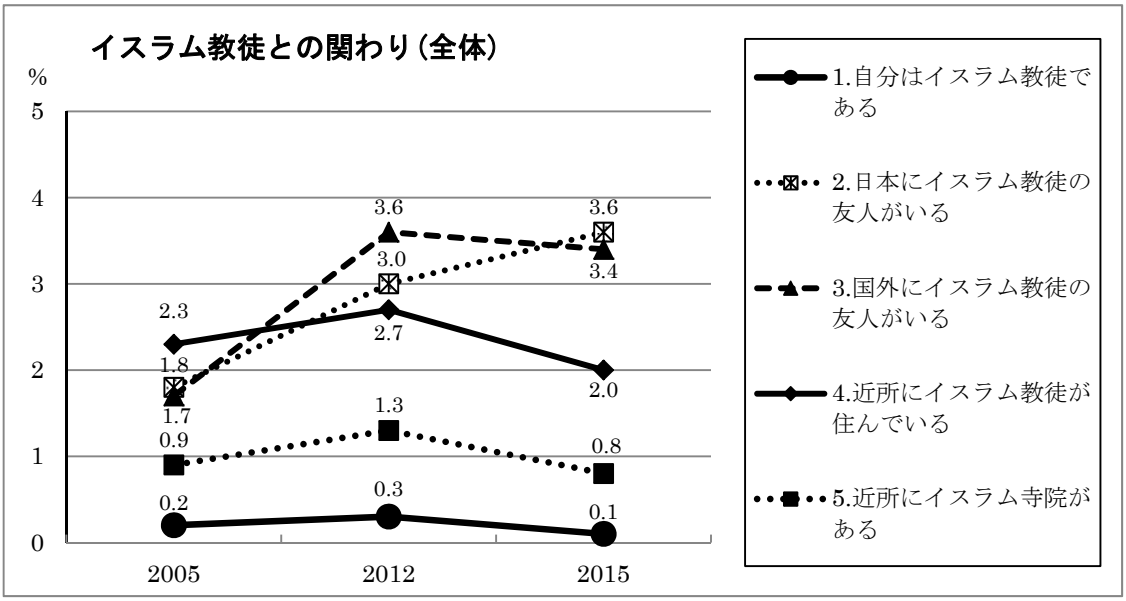
4.近所にイスラム教徒が住んでいる

5.近所にイスラム寺院(モスク)がある。

表 7a1

	2005	2012	2015
1.自分はイスラム教徒である	0.2	0.3	0.1
2.日本にイスラム教徒の友人がいる	1.8	3.0	3.6
3.国外にイスラム教徒の友人がいる	1.7	3.6	3.4
4.近所にイスラム教徒が住んでいる	2.3	2.7	2.0
5.近所にイスラム寺院がある	0.9	1.3	0.8

グラフ 7a1



b) イスラム教への関心

質問内容

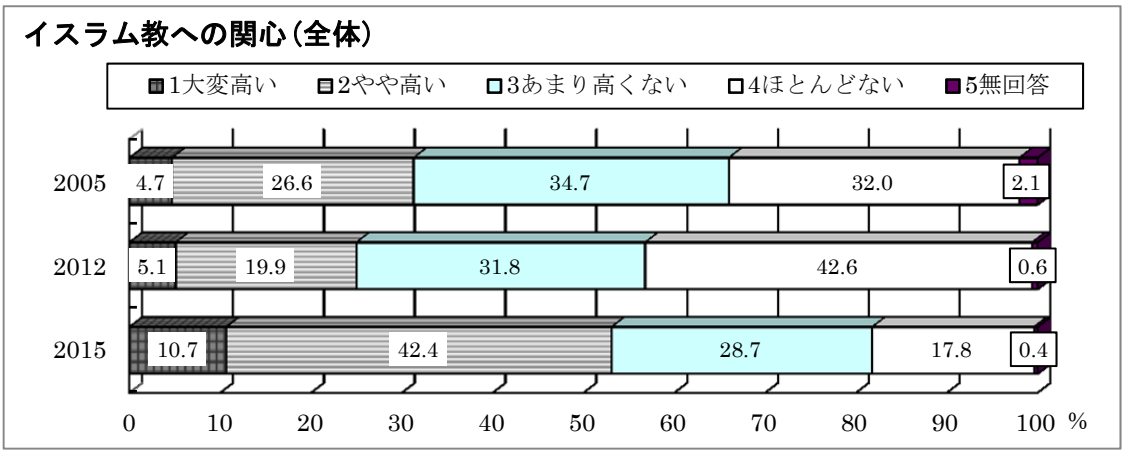
最近のあなたのイスラム教への関心は次のうちどれですか

1.大変高い　2.やや高い　3.あまり高くない　4.ほとんどない

表 7b1

	2005	2012	2015
1.大変高い	4.7	5.1	10.7
2.やや高い	26.6	19.9	42.4
3.あまり高くない	34.7	31.8	28.7
4.ほとんどない	32.0	42.6	17.8
5.無回答	2.1	0.6	0.4

グラフ７b１



c) モスクの設立について

質問内容

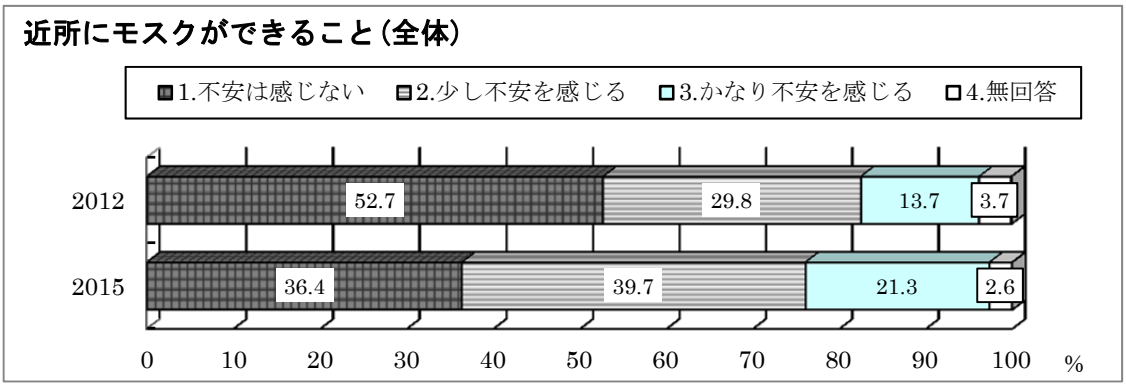
モスク（イスラム寺院）が近所にできることになったとするとあなたは不安を感じますか

1.不安は感じない　2.少し不安を感じる　3.かなり不安を感じる

表 7c1

	2012	2015
1.不安は感じない	52.7	36.4
2.少し不安を感じる	29.8	39.7
3.かなり不安を感じる	13.7	21.3
4.無回答	3.7	2.6

グラフ７c１



第8章 宗教教育関連

a）宗教教育の必要性

高校までの授業において宗教教育の必要性を感じるかどうかについては年度によって 2 回小さな変更が加えられ、都合 3 種類の質問がなされた。質問の変化に伴って、回答結果も大きく異なった。

質問内容

（1996年～1999年）

次のような意見について、「1.そう思う　2.どちらかといえばそう思う　3.どちらかといえばそう思わない 4.そう思わない」のいずれかの番号で答えて下さい。

「高校までにもっと宗教についての基礎知識を教えるべきだ。」　　［　］

（2005年）

宗教についての次の意見について、「1.そう思う　2.どちらかといえばそう思う　3.どちらかといえばそう思わない　4.そう思わない」のいずれかの番号で答えて下さい。

「高校までにもっと世界の宗教についての基礎知識を教えるべきだ。」　　［　］

（2007年～2015年）

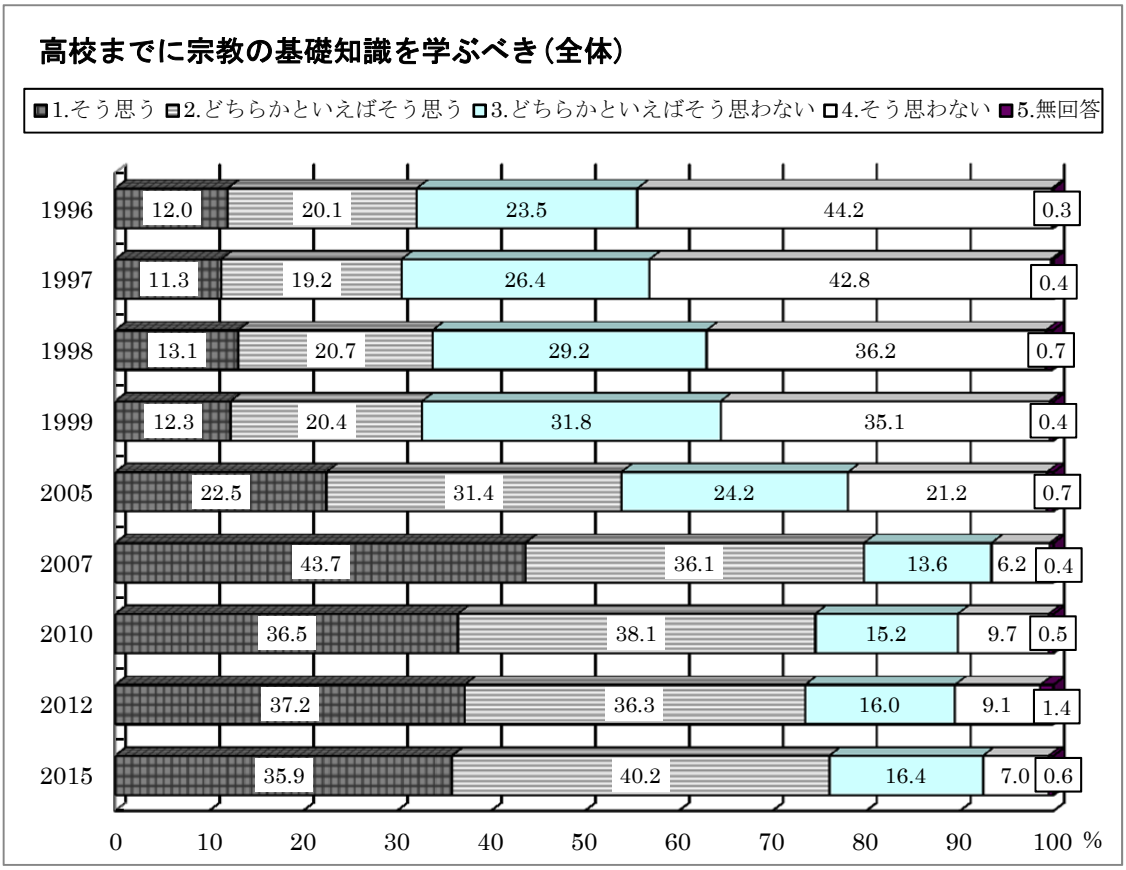
宗教と教育に関する次の意見について、「1.そう思う　2.どちらかといえばそう思う　3.どちらかといえばそう思わない　4.そう思わない」のいずれかの番号で答えて下さい。

「高校までに日本や世界の宗教文化についての基礎的な知識を学んだ方がいい。」　　［　］

表 8a1

	1996	1997	1998	1999	2005	2007	2010	2012	2015
1.そう思う	12.0	11.3	13.1	12.3	22.5	43.7	36.5	37.2	35.9
2.どちらかといえばそう思う	20.1	19.2	20.7	20.4	31.4	36.1	38.1	36.3	40.2
3.どちらかといえばそう思わない	23.5	26.4	29.2	31.8	24.2	13.6	15.2	16.0	16.4
4.そう思わない	44.2	42.8	36.2	35.1	21.2	6.2	9.7	9.1	7.0
5.無回答	0.3	0.4	0.7	0.4	0.7	0.4	0.5	1.4	0.6

グラフ 8a1



b）宗教文化教育への意見

高校の授業に関して 2007 年から 2015 年までの 4 回質問した。2007 年に下記の選択肢の 1～4 を設け、2010 年に 5 の選択肢を加え、2012 年に 6 の選択肢を加えた。また 2007 年と 10 年には「学校では受験や就職に必要な知識や技能を教えるだけでいい」という選択肢を設けていたが、これに「そう思う」と回答した割合はもっとも低かった。

1、5、6 の選択肢が宗教文化教育の内容に含めうるものと想定して設けられたものであった。

<u>質問内容</u>

宗教と教育に関する次の意見について、＜　＞内の1～4のどれになるか、番号で答えて下さい。

＜1.そう思う　2.どちらかといえばそう思う　3.どちらかといえばそう思わない　4.そう思わない＞

1.「高校までに日本や世界の宗教文化についての基礎的な知識を学んだ方がいい。」　[　]

2.「高校までの教育で、愛国心を深めるための工夫をした方がいい。」　[　]

3.「道徳の授業をもっと充実させた方がいい。」　[　]

4.「いのちの大切さを教える授業を充実させた方がいい。」　[　]

5.「神社や寺院など、日本の伝統的宗教施設を見学する機会を設けた方がいい。」　[　]

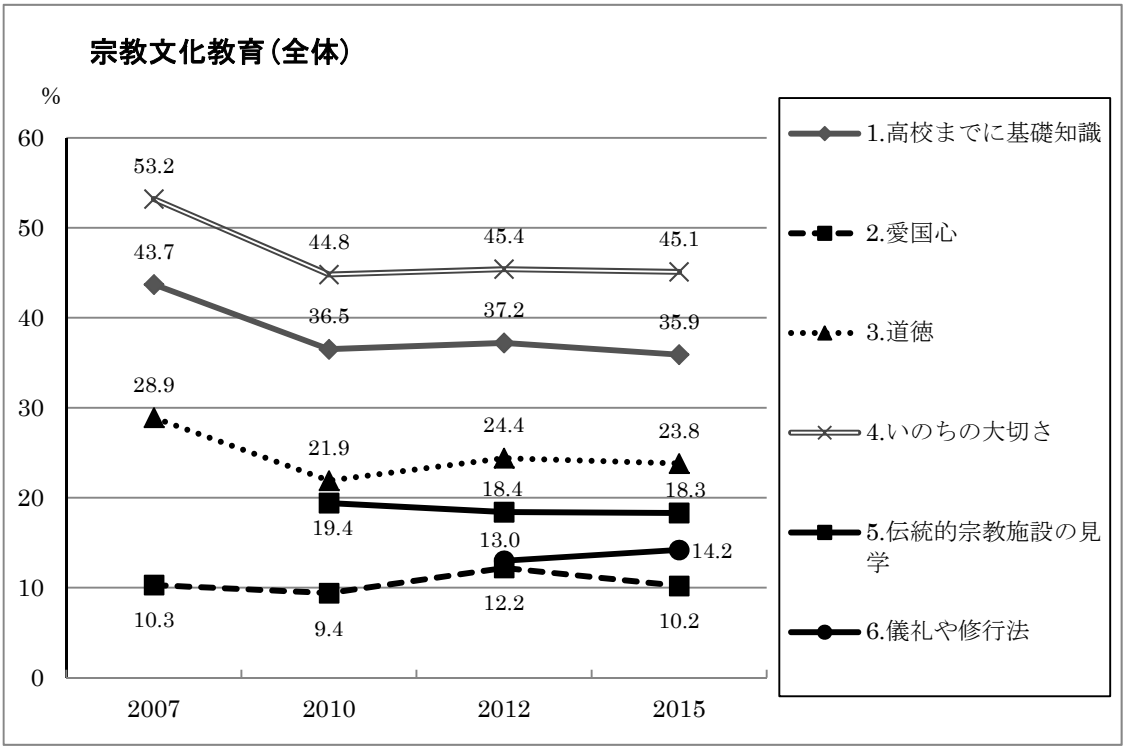
6.「坐禅や礼拝の作法など、各宗教の儀礼や修行法を体験する機会を設けた方がいい。」　[　]

1～6 のそれぞれの選択肢に「そう思う」と答えた人の割合を比較する。

表 8b1

	2007	2010	2012	2015
1.高校までに基礎知識	43.7	36.5	37.2	35.9
2.愛国心	10.3	9.4	12.2	10.2
3.道徳	28.9	21.9	24.4	23.8
4.いのちの大切さ	53.2	44.8	45.4	45.1
5.伝統的宗教施設の見学	—	19.4	18.4	18.3
6.儀礼や修行法	—	—	13.0	14.2

グラフ 8b1



＊「いのちの大切さを教える授業を充実させた方がいい」という意見が4回とももっとも多く、次いで「高校までに日本や世界の宗教文化についての基礎的な知識を学んだ方がいい」という意見がそれに次ぐ。宗教施設や儀礼を見学するようなことは、道徳教育と愛国心の教育との中間に位置する。

第9章　サブカルチャー、その他

サブカルチャー、その他としたが、ここでは宗教の周辺にあると思われるいくつかの設問への回答を比較する。具体的には占い、姓名判断、星占い、コンピュータ占いなどの各種の占い、20 世紀末に話題となったノストラダムスの予言、超常現象と呼ばれているものへの関心である。どの程度関心をもっているかという視点と、どの程度信じているのかという視点を交えて質問してある。

a）占いへの関心や信頼度

①手相

質問内容

次にあげた占いについて「1.かなり当たると思う 2.当たることもあると思う 3.当たらない 4.関心がないのでどんなことをするのか知らない」のなかから、番号で答えて下さい。

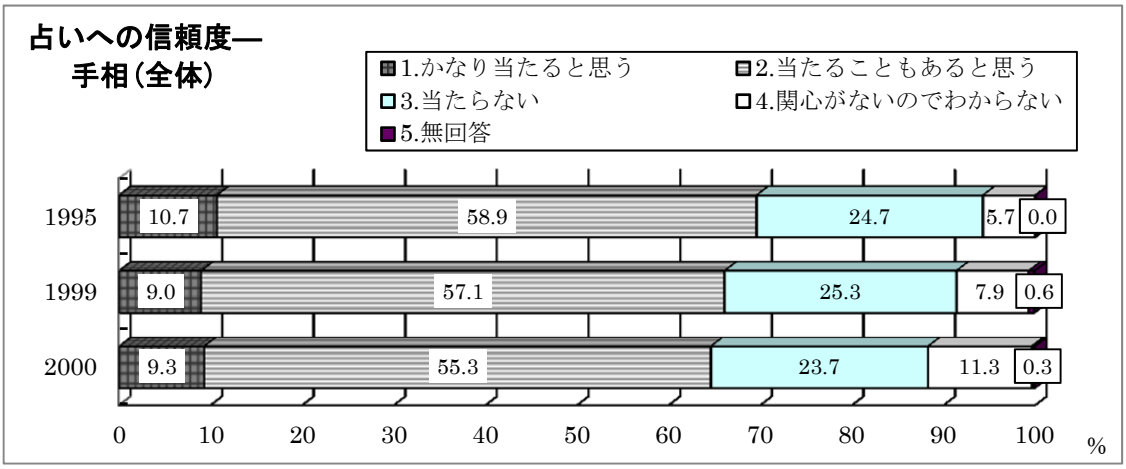
手相　　［　］

＜全体＞

表 9a1

	1995	1999	2000
1.かなり当たると思う	10.7	9.0	9.3
2.当たることもあると思う	58.9	57.1	55.3
3.当たらない	24.7	25.3	23.7
4.関心がないのでわからない	5.7	7.9	11.3
5.この占いがどんなものか知らない	0.0	0.6	0.3

グラフ 9a1



②姓名判断

質問内容

次にあげた占いについて「1.かなり当たると思う 2.当たることもあると思う 3.当たらない 4.関心がないのでどんなことをするのか知らない」のなかから、番号で答えて下さい。

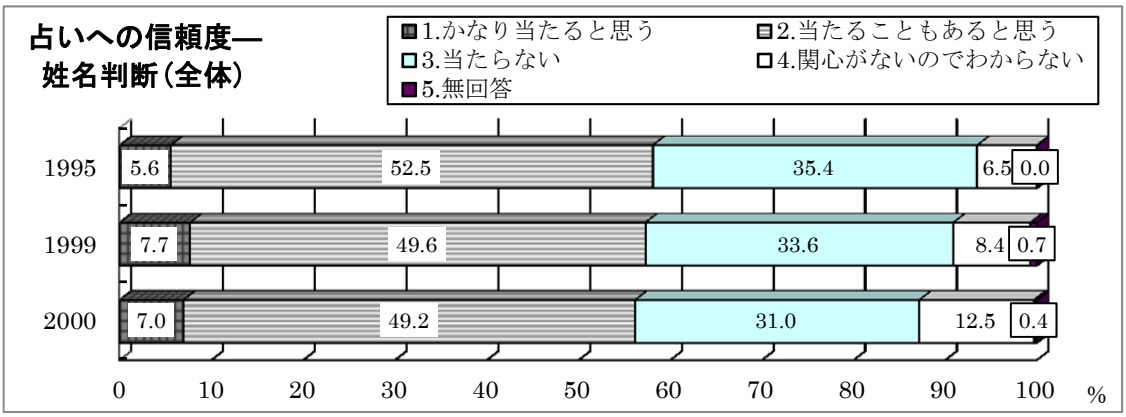
姓名判断　　[　]

＜全体＞

表 9a2

	1995	1999	2000
1.かなり当たると思う	5.6	7.7	7.0
2.当たることもあると思う	52.5	49.6	49.2
3.当たらない	35.4	33.6	31.0
4.関心がないのでわからない	6.5	8.4	12.5
5.この占いがどんなものか知らない	0.0	0.7	0.4

グラフ 9a2



③血液型による性格判断

質問内容

次にあげた占いについて「1.かなり当たると思う 2.当たることもあると思う 3.当たらない 4.関心がないのでどんなことをするのか知らない」のなかから、番号で答えて下さい。

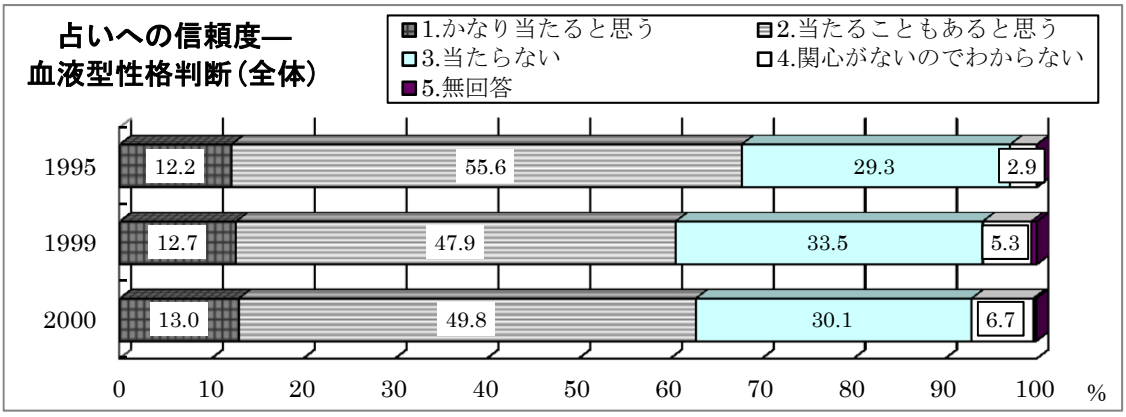
血液型による性格判断　　[　]

＜全体＞

表 9a3

	1995	1999	2000
1.かなり当たると思う	12.2	12.7	13.0
2.当たることもあると思う	55.6	47.9	49.8
3.当たらない	29.3	33.5	30.1
4.関心がないのでわからない	2.9	5.3	6.7
5.この占いがどんなものか知らない	0.0	0.6	0.3

グラフ 9a3



④星占い

質問内容

次にあげた占いについて「1.かなり当たると思う 2.当たることもあると思う 3.当たらない 4.関心がないのでどんなことをするのか知らない」のなかから、番号で答えて下さい。

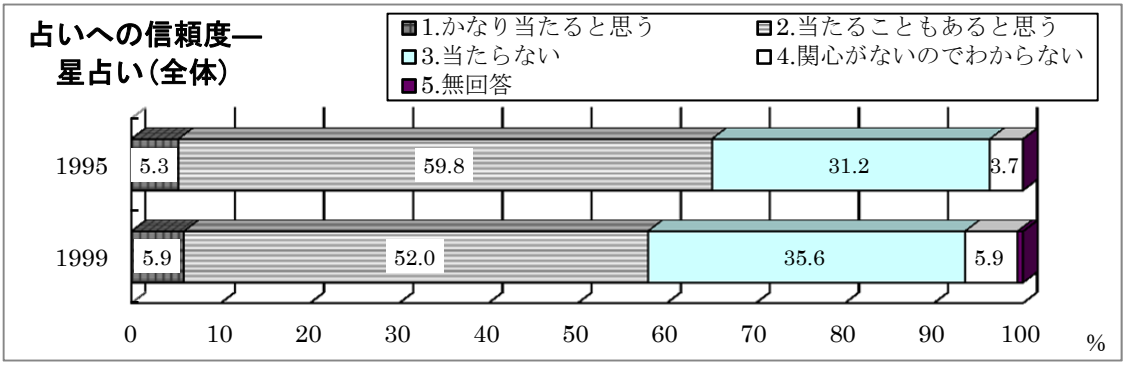
生まれ月による星占い　　[　]

＜全体＞

表 9a4

	1995	1999
1.かなり当たると思う	5.3	5.9
2.当たることもあると思う	59.8	52.0
3.当たらない	31.2	35.6
4.関心がないのでわからない	3.7	5.9
5.この占いがどんなものか知らない	0.1	0.6

グラフ 9a4



⑤コンピュータ占い

質問内容

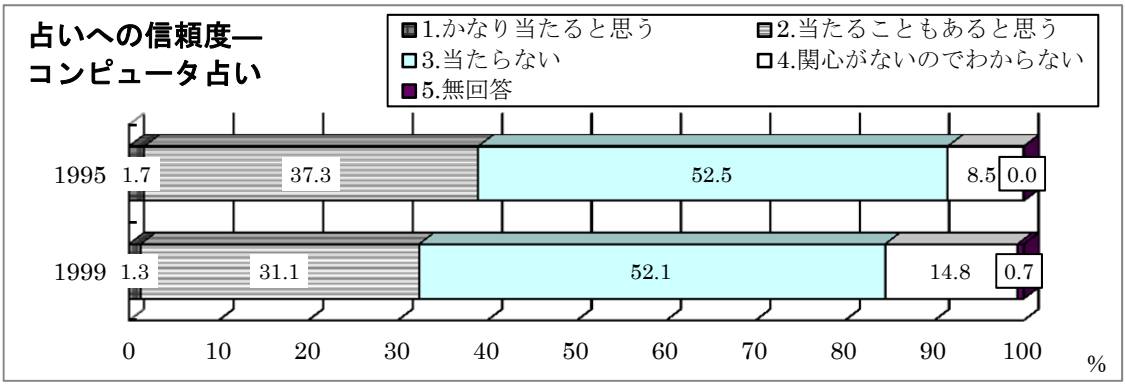
次にあげた占いについて「1.かなり当たると思う 2.当たることもあると思う 3.当たらない 4.関心がないのでどんなことをするのか知らない」のなかから、番号で答えて下さい。

コンピュータ占い　　[　　]

表 9a5

	1995	1999
1.かなり当たると思う	1.7	1.3
2.当たることもあると思う	37.3	31.1
3.当たらない	52.5	52.1
4.関心がないのでわからない	8.5	14.8
5.この占いがどんなものか知らない	0.0	0.7

グラフ 9a5



b) ノストラダムスによる終末予言への関心

質問内容

次の事柄について、「1.信じる 2.ありうると思う 3.あまり信じない 4.否定する 5.その事柄を知らない」のなかから、番号で答えて下さい。

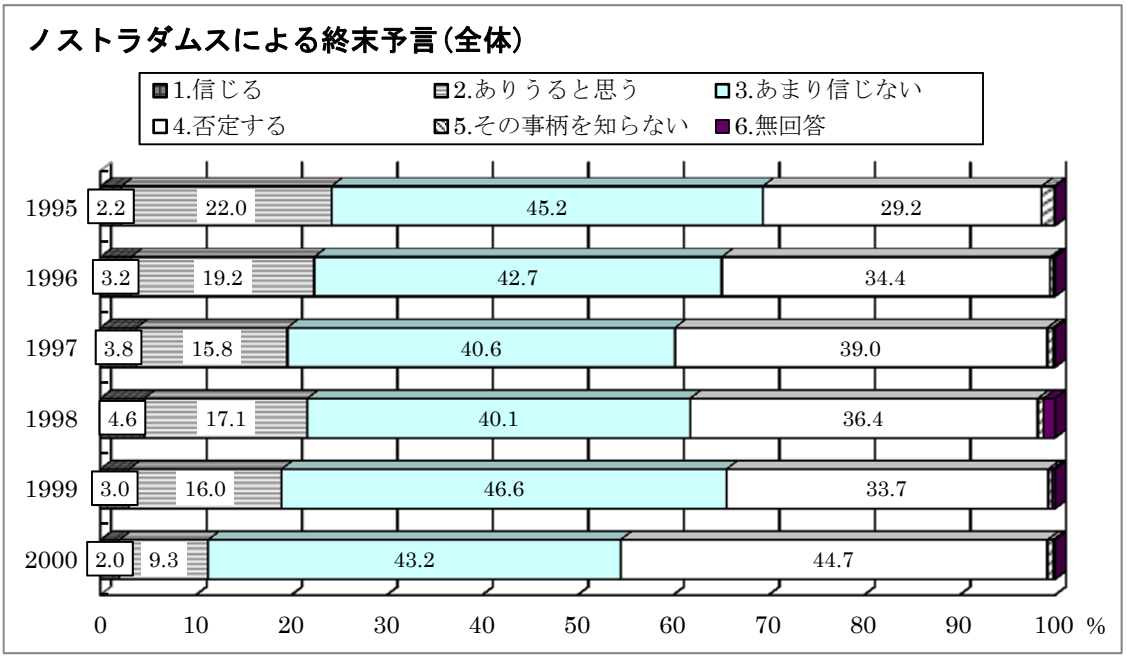
ノストラダムスによる1999年の終末予言　　[　]

＜全体＞

表９b１

	1995	1996	1997	1998	1999	2000
1.信じる	2.2	3.2	3.8	4.6	3.0	2.0
2.ありうると思う	22.0	19.2	15.8	17.1	16.0	9.3
3.あまり信じない	45.2	42.7	40.6	40.1	46.6	43.2
4.否定する	29.2	34.4	39.0	36.4	33.7	44.7
5.その事柄を知らない	1.3	0.3	0.6	0.6	0.4	0.6
6.無回答	0.1	0.2	0.2	1.3	0.3	0.3

グラフ９b１



c) 超常現象への関心

ここに含めたのは、宜保愛子の霊視、臨死体験、前世・生まれ変わり、死後の世界、オーラ、テレパシーといったことに関する質問の結果である。超常現象としてまとめるのはふさわしくないものもあるが、学生の関心からすると似通った事柄であり、実際回答結果もかなり似通った傾向となっている。

①宜保愛子の霊視

質問内容

次の事柄について、「1.信じる 2.ありうると思う 3.あまり信じない 4.否定する 5.その事柄を知らない」のなかから、番号で答えて下さい。

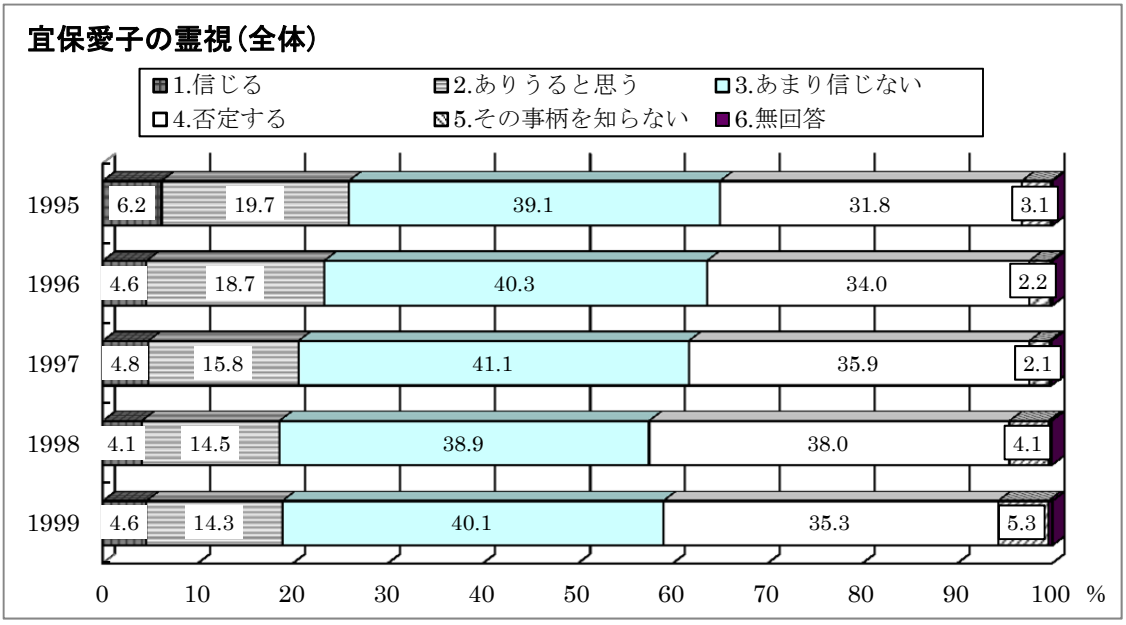
宜保愛子の霊視　　［　］

＜全体＞

表９c１

	1995	1996	1997	1998	1999
1.信じる	6.2	4.6	4.8	4.1	4.6
2.ありうると思う	19.7	18.7	15.8	14.5	14.3
3.あまり信じない	39.1	40.3	41.1	38.9	40.1
4.否定する	31.8	34.0	35.9	38.0	35.3
5.その事柄を知らない	3.1	2.2	2.1	4.1	5.3
6.無回答	0.1	0.2	0.2	0.3	0.4

グラフ９c１



②臨死体験

質問内容

次の事柄について、「1.信じる 2.ありうると思う 3.あまり信じない 4.否定する 5.その事柄を知らない」のなかから、番号で答えて下さい。

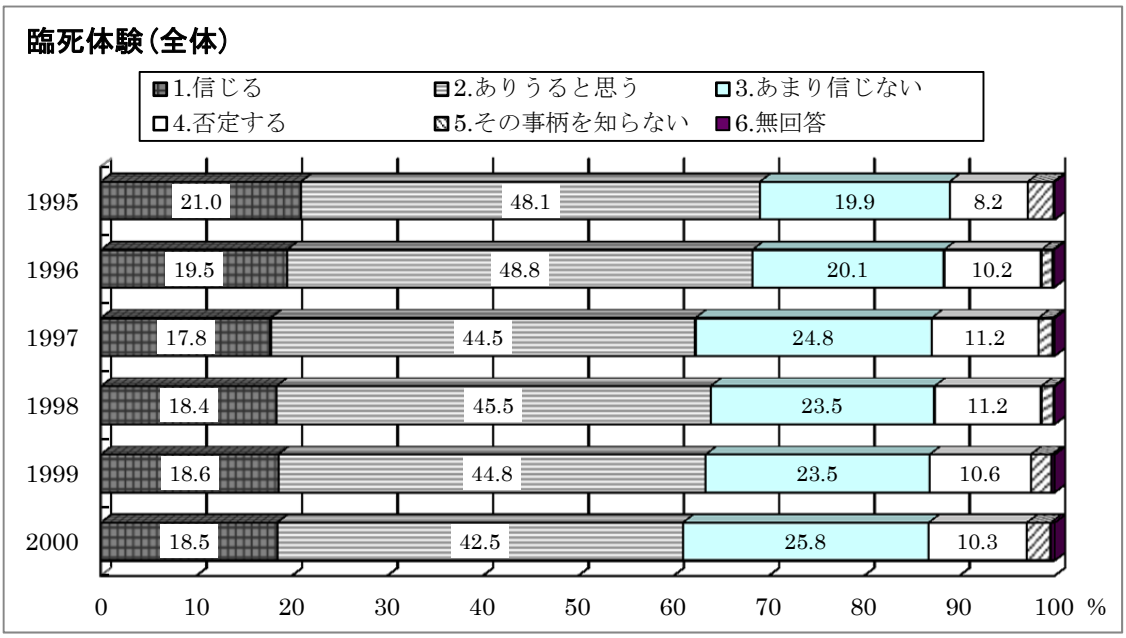
臨死体験　　［　］

＜全体＞

表９ｃ２

	1995	1996	1997	1998	1999	2000
1.信じる	21.0	19.5	17.8	18.4	18.6	18.5
2.ありうると思う	48.1	48.8	44.5	45.5	44.8	42.5
3.あまり信じない	19.9	20.1	24.8	23.5	23.5	25.8
4.否定する	8.2	10.2	11.2	11.2	10.6	10.3
5.その事柄を知らない	2.7	1.2	1.5	1.3	2.2	2.5
6.無回答	0.1	0.1	0.2	0.3	0.3	0.4

グラフ９ｃ２



③前世・生まれ変わり

質問内容

次の事柄について、「1.信じる 2.ありうると思う 3.あまり信じない 4.否定する 5.その事柄を知らない」のなかから、番号で答えて下さい。

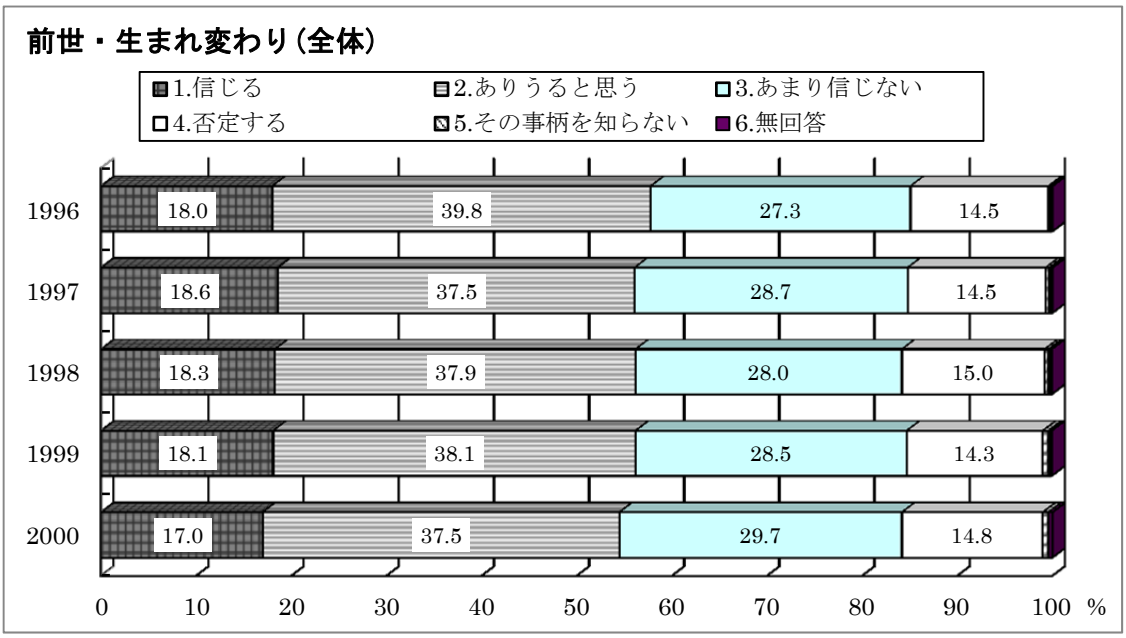
前世･生まれ変わり　　［　］

＜全体＞

表９ｃ３

	1996	1997	1998	1999	2000
1.信じる	18.0	18.6	18.3	18.1	17.0
2.ありうると思う	39.8	37.5	37.9	38.1	37.5
3.あまり信じない	27.3	28.7	28.0	28.5	29.7
4.否定する	14.5	14.5	15.0	14.3	14.8
5.その事柄を知らない	0.3	0.4	0.4	0.6	0.6
6.無回答	0.1	0.3	0.3	0.3	0.4

グラフ９ｃ３



④死後の世界の存在

質問内容

次の事柄について、「1.信じる 2.ありうると思う 3.あまり信じない 4.否定する 5.その事柄を知らない」のなかから、番号で答えて下さい。

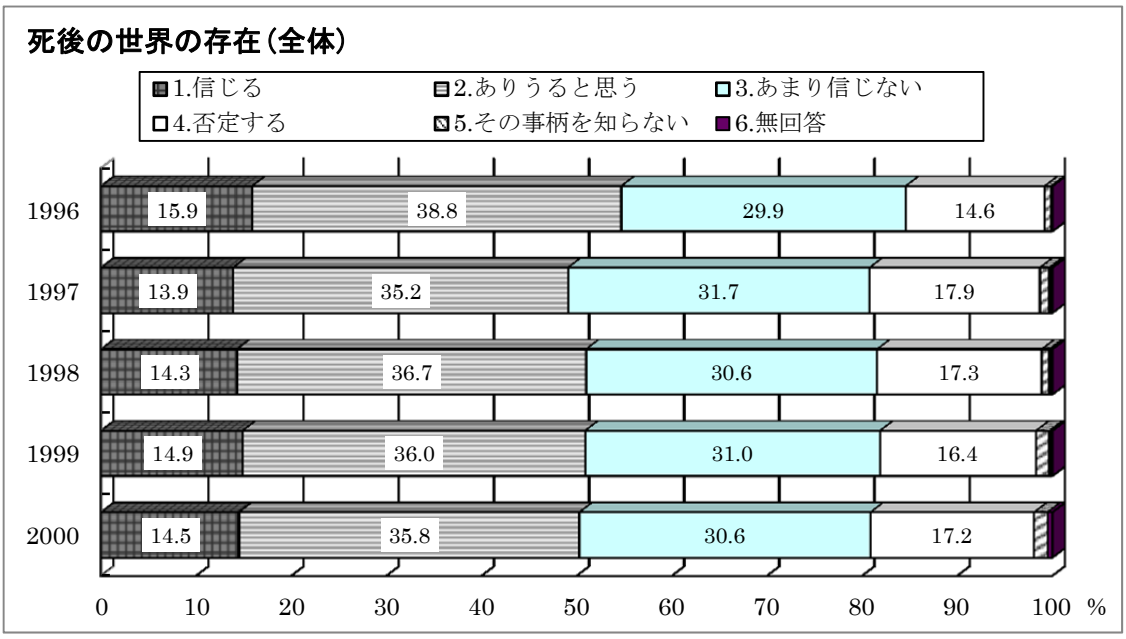
死後の世界の存在　　［　］

＜全体＞

表９c４

	1996	1997	1998	1999	2000
1.信じる	15.9	13.9	14.3	14.9	14.5
2.ありうると思う	38.8	35.2	36.7	36.0	35.8
3.あまり信じない	29.9	31.7	30.6	31.0	30.6
4.否定する	14.6	17.9	17.3	16.4	17.2
5.その事柄を知らない	0.7	1.0	0.8	1.4	1.4
6.無回答	0.1	0.3	0.4	0.3	0.5

グラフ９c４



⑤オーラの存在

質問内容

次の事柄について、「1.信じる 2.ありうると思う 3.あまり信じない 4.否定する 5.その事柄を知らない」のなかから、番号で答えて下さい。

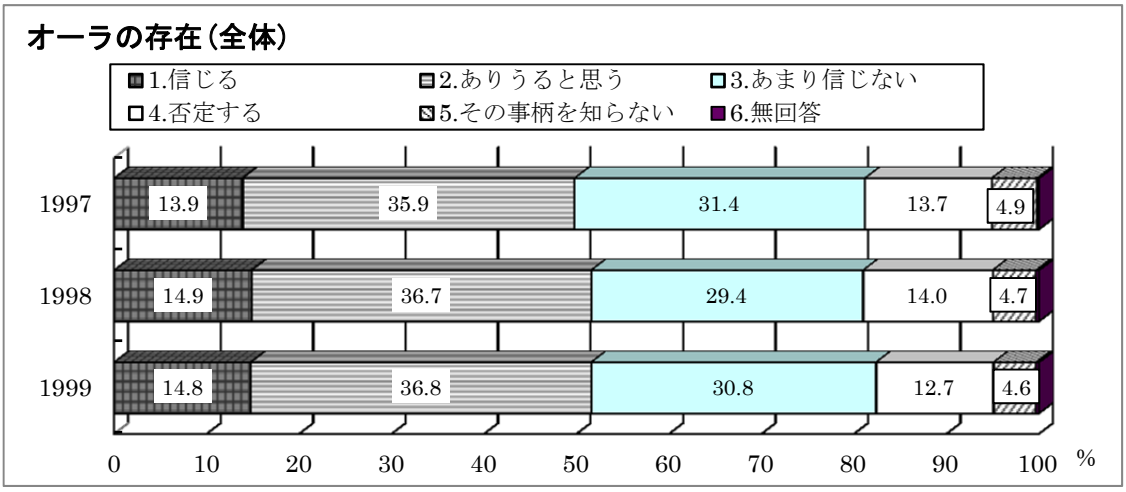
オーラの存在　　［　］

＜全体＞

表９ｃ５

	1997	1998	1999
1.信じる	13.9	14.9	14.8
2.ありうると思う	35.9	36.7	36.8
3.あまり信じない	31.4	29.4	30.8
4.否定する	13.7	14.0	12.7
5.その事柄を知らない	4.9	4.7	4.6
6.無回答	0.2	0.3	0.3

グラフ９ｃ５



⑥テレパシーの存在

質問内容

次の事柄について、「1.信じる 2.ありうると思う 3.あまり信じない 4.否定する 5.その事柄を知らない」のなかから、番号で答えて下さい。

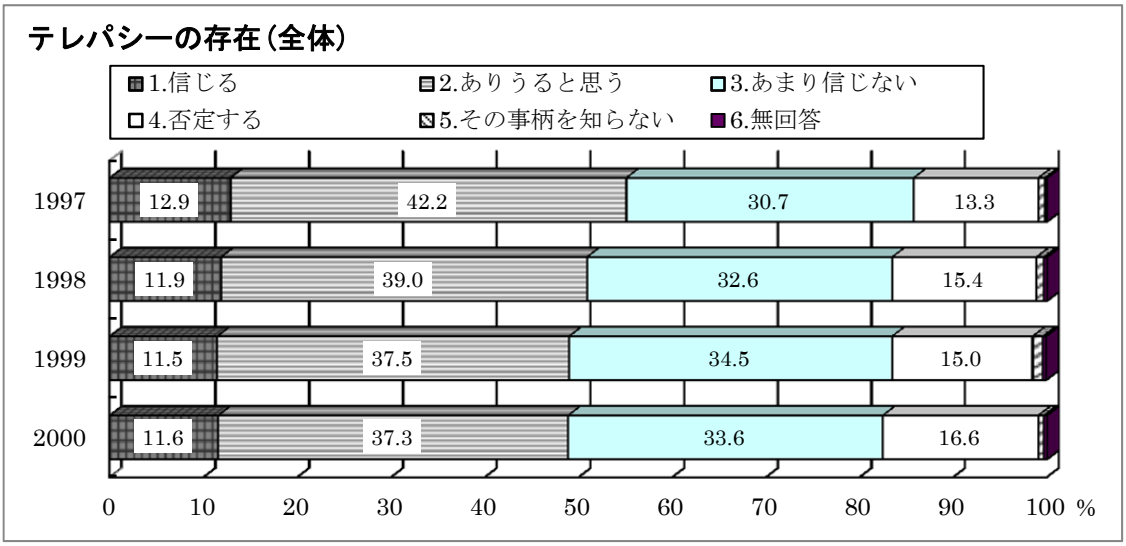
テレパシーの存在　　［　］

＜全体＞

表９c６

	1997	1998	1999	2000
1.信じる	12.9	11.9	11.5	11.6
2.ありうると思う	42.2	39.0	37.5	37.3
3.あまり信じない	30.7	32.6	34.5	33.6
4.否定する	13.3	15.4	15.0	16.6
5.その事柄を知らない	0.7	0.8	1.1	0.6
6.無回答	0.2	0.3	0.3	0.4

グラフ 9c6



d) パワースポット

パワースポットはサブカルチャー的でもあり、超常現象に含めうる側面もあり、分類が難しいので、独立させた。とりわけ 21 世紀になって注目されるようになった現象であるが、2010 年から 2015 年までの 3 回の調査でこれについて質問した。宗教系と非宗教系では少し宗教系の方が信じる割合が高いが、性別による差の方が大きいので、全体の変化の他に、「信じる」、「ありうると思う」について、男女別の経年変化を示す。

質問内容

次の4つのことについて、それぞれ＜　＞内の1～4のどれになるか、番号で答えて下さい。

＜1.信じる 2.ありうると思う 3.あまり信じない 4.否定する＞

パワースポットの存在　　［　］

＜全体＞

表９d１

	2010	2012	2015
1.信じる	16.2	13.8	14.8
2.ありうると思う	37.6	35.1	39.4
3.あまり信じない	27.7	30.8	30.6
4.否定する	17.5	19.2	14.6
5.無回答	1.0	1.1	0.7

グラフ９d１

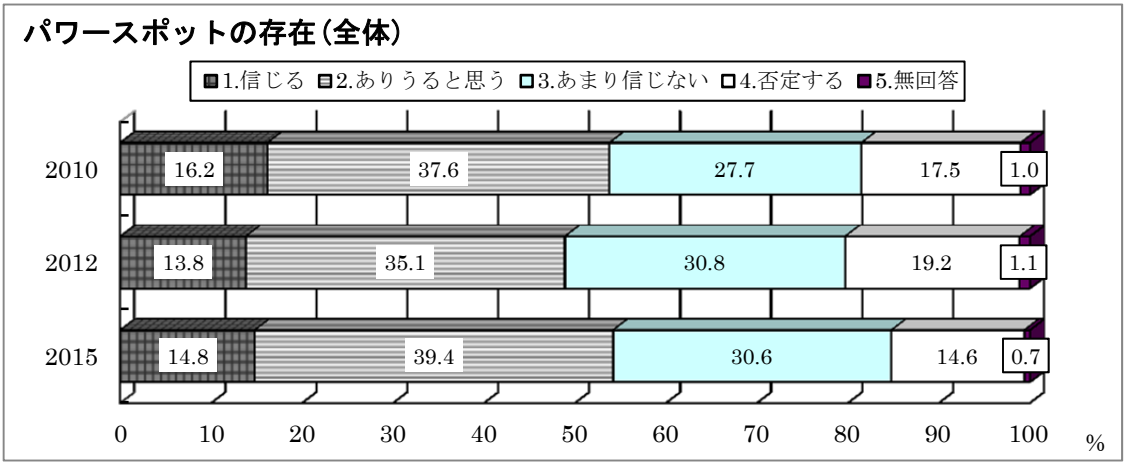


表９d２

＜性別＞

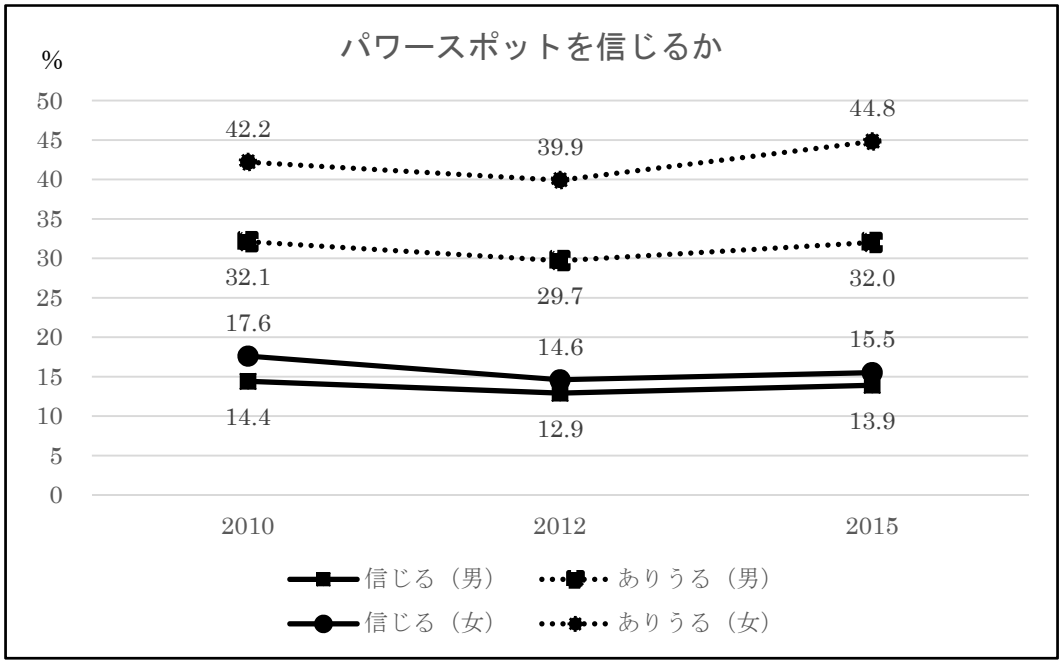
「信じる」の割合

	2010	2012	2015
男性	14.4	12.9	13.9
女性	17.6	14.6	15.5

「ありうると思う」の割合

	2010	2012	2015
男性	32.1	29.7	32.0
女性	42.2	39.9	44.8

グラフ９d2



＊「信じる」、「ありうると思う」の割合とも、それぞれ男女差がはっきりしている。3回の調査を比較して、男性のもっとも高い数値が女性のもっとも低い数値以下である。

第10章　友人の信仰

本人の信仰に加え、友人の中に信仰をもつ人がいるかどうかを 1995 年から 2005 年まで 8 回にわたって質問した。また信仰をもつ友人がいる場合には、そのことが友人関係に影響するかどうかも聞いたが、これは 1995 年から 1999 年までと 2000 年から 2005 年までとは少し回答の選択肢が異なる。

a) 信仰をもつ友人がいるか

まず信仰をもつ友人の割合の変化を見てみる。

質問内容

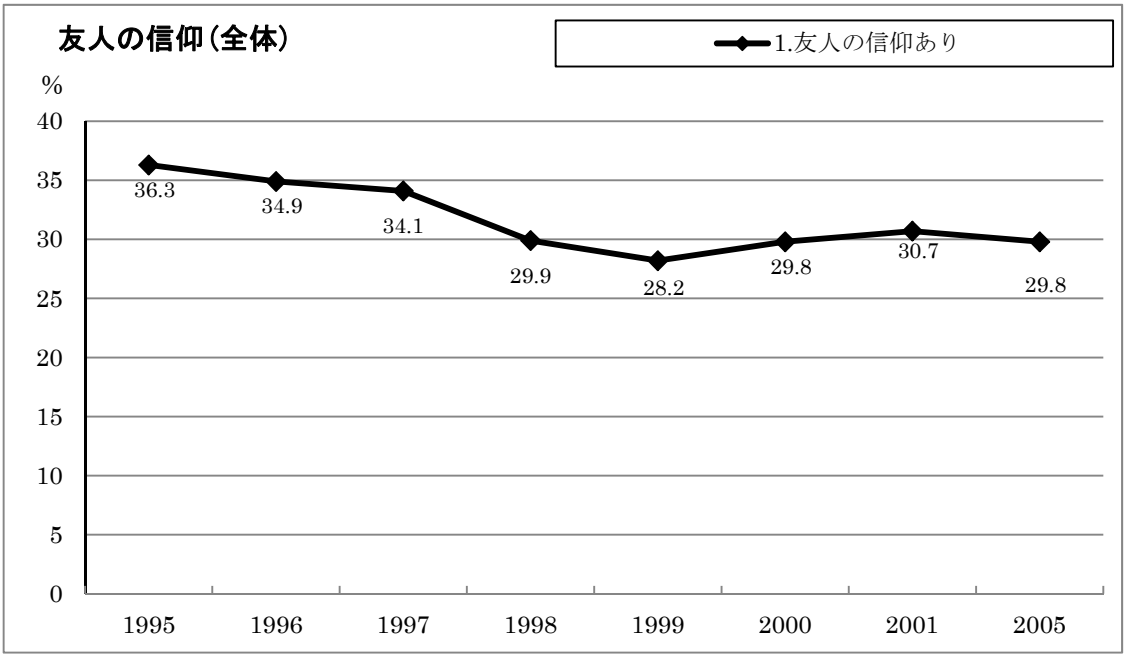
あなたの友だちの中に、信仰をもっている人がいますか。　　1.はい　2.いいえ

＜全体＞

表 10a1

	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2005
1.友人の信仰あり	36.3	34.9	34.1	29.9	28.2	29.8	30.7	29.8

グラフ 10a1



＊10年間の変化ではどちらかというと減少気味と言える。

b) 信仰をもつ友人に対する態度

質問内容

(1995年、1996年、1997年、1998年、1999年)

その友人が宗教を信じているということで、あなたの態度は次のどれになりますか。

1.他の友人と変わらない態度で接している　2.やや気にしながら接している

3.だいぶ気にしながら接している　4.その信仰をやめるように勧めている　5.その他[具体的に:　　]

(2000年、2001年、2005年)

その友人が宗教を信じているということで、あなたの態度は次のどれになりますか。

1.他の友人と変わらない態度で接している。　2.他の友人より親しく接している

3.他の友人よりはちょっと気にして接している　4.その他[具体的に:　　]

(2001年と2005年については、最大で2人の友人についてそれぞれ質問している。)

表 10b1

	1995	1996	1997	1998	1999
1.他の友人と変わらない態度で接している	73.6	73.9	69.5	69.6	74.2
2.やや気にしながら接している	9.6	10.0	7.2	10.0	9.8
3.だいぶ気にしながら接している	1.6	2.2	2.2	2.3	2.6
4.その信仰をやめるように勧めている	0.7	0.9	0.7	0.6	0.7
5.その他	3.1	4.1	4.7	3.4	4.8
6.無回答	11.5	9.0	15.8	14.1	7.9

グラフ 10b1

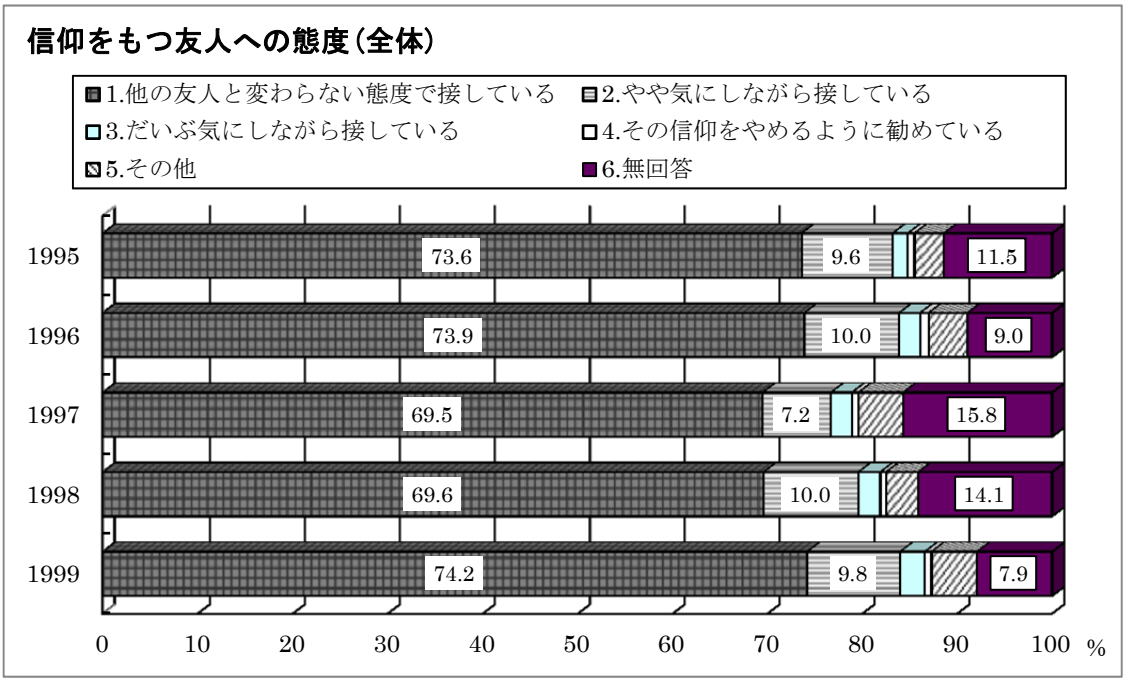
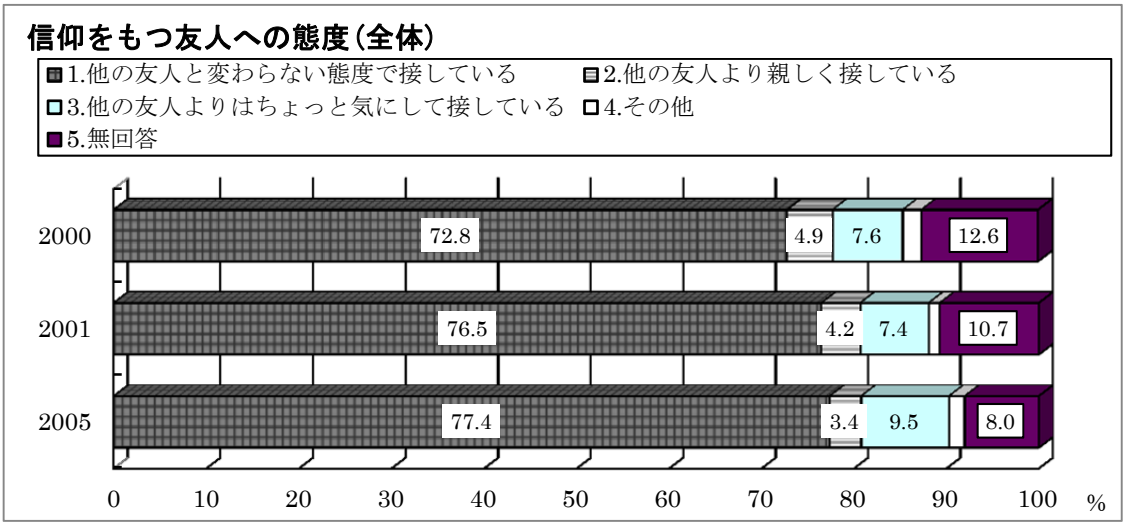


表 10b2

	2000	2001	2005
1.他の友人と変わらない態度で接している	72.8	76.5	77.4
2.他の友人より親しく接している	4.9	4.2	3.4
3.他の友人よりはちょっと気にして接している	7.6	7.4	9.5
4.その他	2.0	1.2	1.7
5.無回答	12.6	10.7	8.0

グラフ 10b2



＊信仰があるかないかが友人関係に影響を及ぼす割合は低く、7～8割は「他の友人と変わらない態度で接している」と回答している。また「他の友人より親しく接している」よりは「他の友人よりはちょっと気にして接している」という割合が少しだけ高い。

第11章　情報化への対応

新しい情報ツールが登場したことが宗教情報へのアクセスにどう影響しているかを調べた。1990 年代末から情報ツールの変化が激しくなったが、21 世紀にはいってから宗教団体がホームページを作ることが多くなってきた。そこで、それに関する質問を 2001 年以降 4 回行った。

a) 1990 年代末の情報ツールの変化

コミュニケーションの手段について詳しく聞いたのは、1998 年と 1999 年である。この 1 年間を見ただけでも当時、情報ツールの変化が激しかったことが分かる。

質問内容

日常的なコミュニケーションの手段として、あなたが用いているものがありましたら、番号に○をして下さい。(複数回答)

1.ポケベル　[　]　2.携帯電話・PHS　[　]

3.電子メール・パソコン通信　[　]　4.手紙(ファクスを含む)　[　]

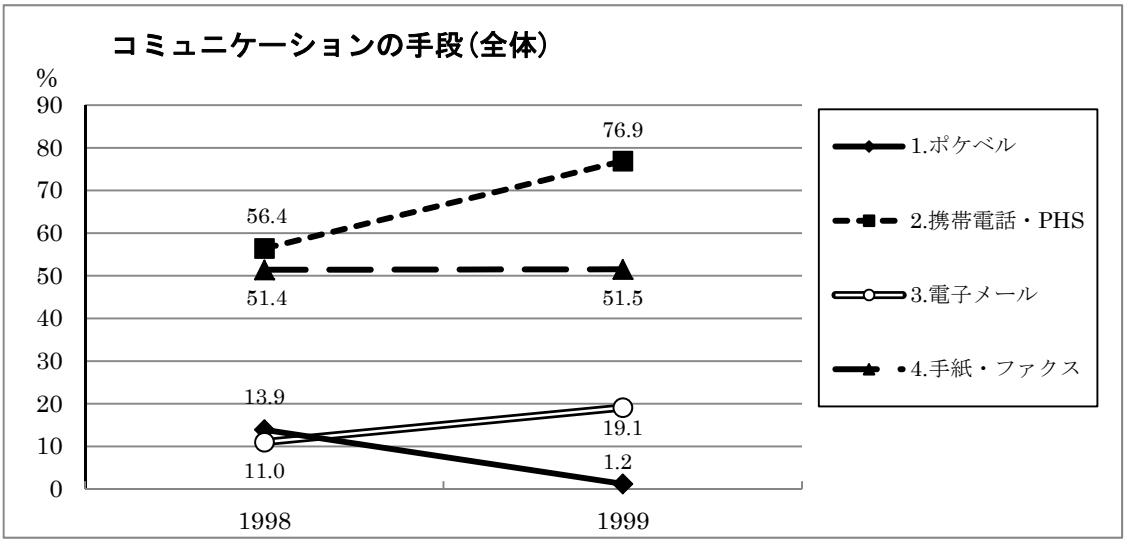
(1999年はファクスと手紙を別々の選択肢とした)

＜全体＞

表 11a1

	1998	1999
1.ポケベル	13.9	1.2
2.携帯電話・PHS	56.4	76.9
3.電子メール・パソコン通信	11.0	19.1
4.手紙・ファクス	51.4	51.5

グラフ 11a1



b）インターネット上の宗教関連情報への関心

インターネットのサイトにあるどのような宗教情報に関心をもっているかを調べるため、宗教に関連するいつかのホームページのタイプを選択肢に掲げ、そこから選んでもらうという形式をとった。これは宗教関連のサイトが増えた 21 世紀にはいってからの調査、2001 年から 2010 年までの 4 回で設問した。

質問内容

インターネットのホームページのうち、あなたが関心をもっているものを、次から選んでください。[複数回答可]

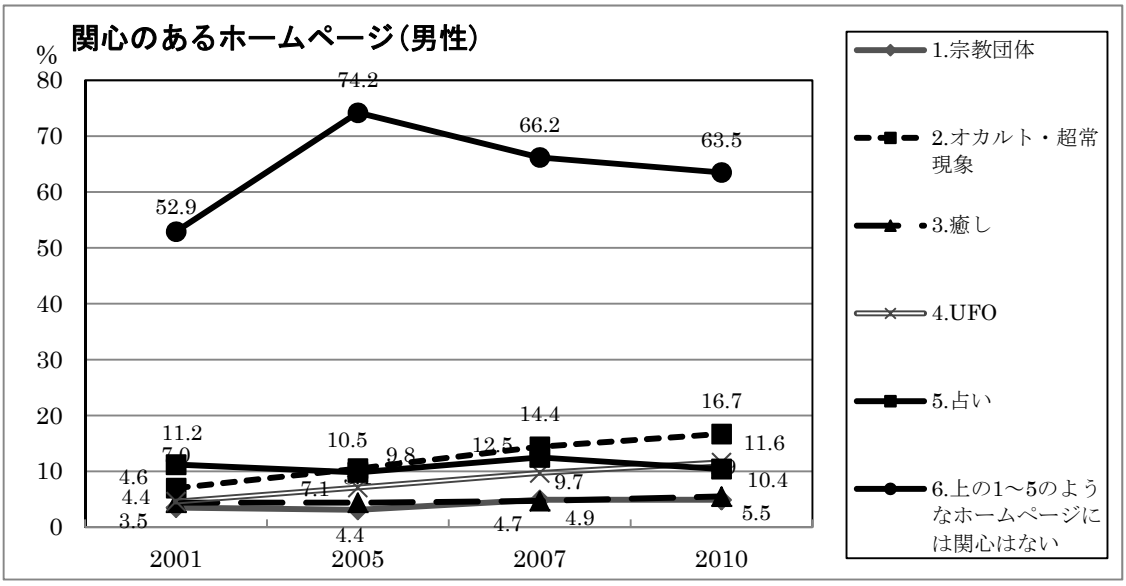
1.宗教団体のホームページ
2.オカルト・超常現象に関するホームページ
3.癒しに関するホームページ
4.UFOに関するホームページ
5.占いに関するホームページ
6.上の1～5のようなホームページには関心はない

＜男性＞

表 11b1

	2001	2005	2007	2010
1.宗教団体	3.5	3.1	4.9	4.9
2.オカルト・超常現象	7.0	10.5	14.4	16.7
3.癒し	4.4	4.4	4.7	5.5
4.UFO	4.6	7.1	9.7	11.6
5.占い	11.2	9.8	12.5	10.4
6.上の 1～5 のようなホームページには関心はない	52.9	74.2	66.2	63.5

グラフ 11b1

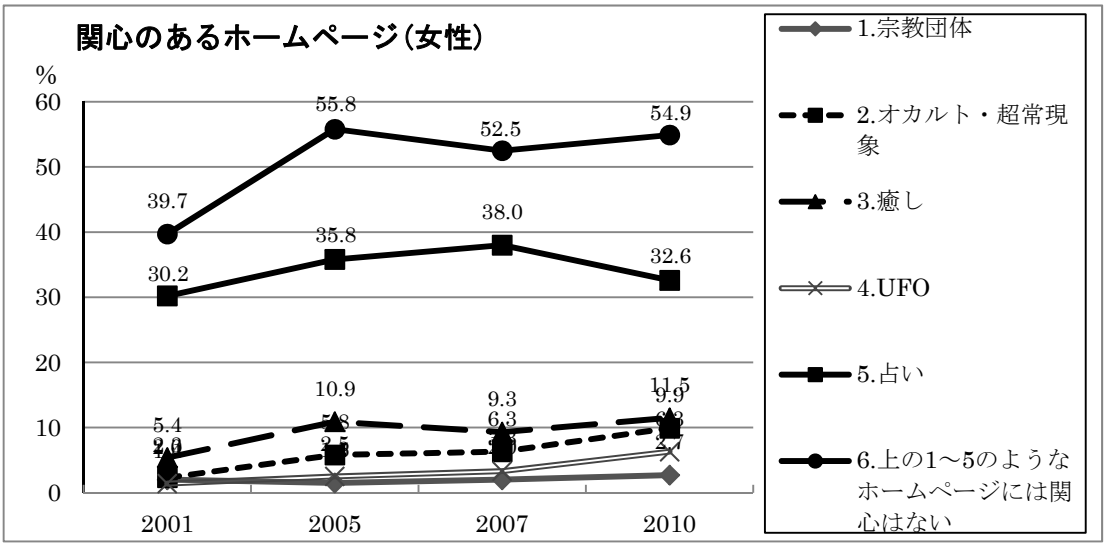


＜女性＞

表 11b2

	2001	2005	2007	2010
1.宗教団体	2.0	1.5	2.0	2.7
2.オカルト・超常現象	2.3	5.8	6.3	9.9
3.癒し	5.4	10.9	9.3	11.5
4.UFO	1.4	2.5	3.3	6.3
5.占い	30.2	35.8	38.0	32.6
6.上の 1～5 のようなホームページには関心はない	39.7	55.8	52.5	54.9

グラフ 11b2



［Ⅱ］クロス集計

第12章 宗教への関心の度合いとの相関

調査では毎回回答者の宗教への関心を聞いているので、この回答結果と他のいくつかの質問への回答結果をクロスさせ、それぞれどの程度の相関関係があるのかを見ていく。「宗教への関心の度合い」とのクロス集計の対象としたのは、「宗教に関する意見」、「神仏、霊魂の存在」、「イスラム教への関心意識」、「宗教教育の必要性」、「パワースポット」である。この節はすべて下記の質問の結果とのクロス集計である。

質問内容

あなたは宗教にどの程度関心がありますか。次のうちから選び、さらにそれぞれの質問に答えて下さい。

1.現在、信仰をもっている（以下「信仰あり」と表記）

2.信仰はもっていないが、宗教に関心がある（以下「関心あり」と表記）

3.信仰はもっていないし、宗教にもあまり関心がない（以下「あまり関心なし」と表記）

4.信仰はもっていないし、宗教にもまったく関心がない（以下「まったく関心なし」と表記）

a）宗教に関する意見

①宗教の必要性に関する意見

宗教への関心への回答と次の質問の回答とをクロス集計した。この質問は2001年を除いて11回実施している。

質問内容

次のような意見について、「1.そう思う 2.どちらかといえばそう思う 3.どちらかといえばそう思わない 4.そう思わない」のいずれかの番号で答えて下さい。

「どんなに科学が発達しても、宗教は人間に必要だ。」　　［　］

回答の選択肢の略記号（以下同じ）

1.＋＋：そう思う	2.＋　：どちらかといえばそう思う
3.－　：どちらかといえばそう思わない	4.－－：そう思わない
5.無回答	

以下のグラフは宗教への関心の 4 つのタイプ（「信仰あり」、「関心あり」、「あまり関心なし」、「まったく関心なし」）を横に並べている。

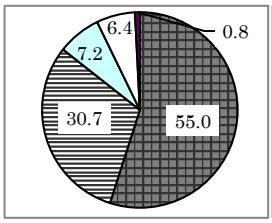
そして縦に並べたのは年度順の変化であるが、それぞれの円グラフの数値は、宗教の必要性について、それぞれ「そう思う」、「どちらかといえばそう思う」、「どちらかといえばそう思わない」、「そう思わない」、「無回答」の割合を示したものである。

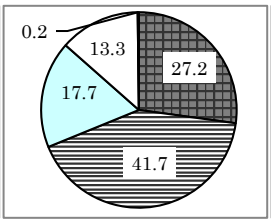
宗教への関心の回答と宗教の必要性についての回答がどれほどの相関性をもっていることを視覚的に分かりやすくするために、このようなグラフを作成した。

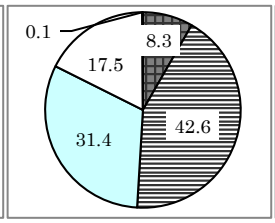
グラフ 12a1

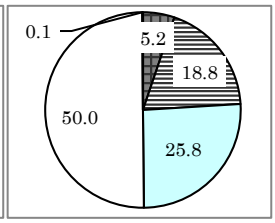
①信仰あり　②関心あり　③あまり関心なし　④まったく関心なし

95

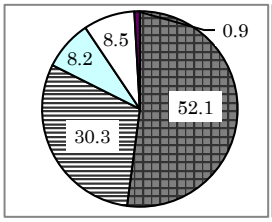


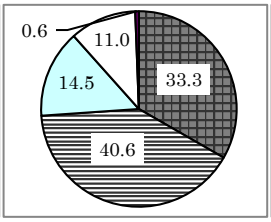


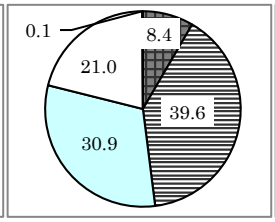


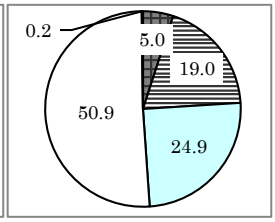


96

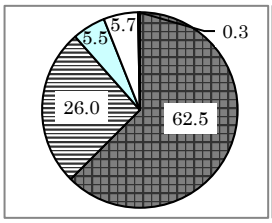


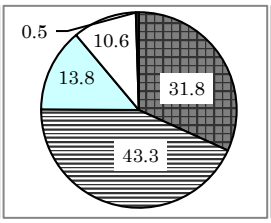


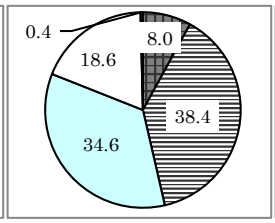


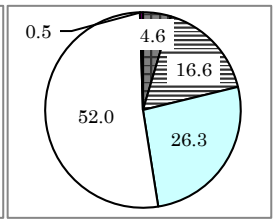


97

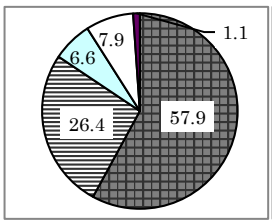


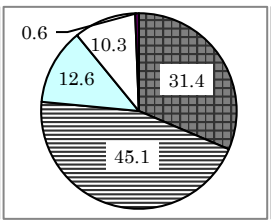


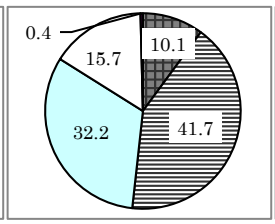


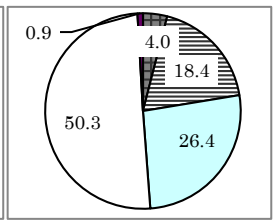


98

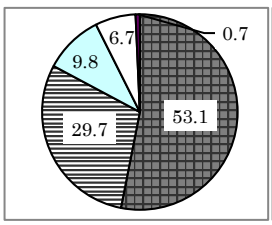


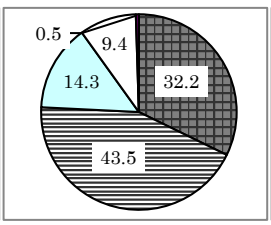


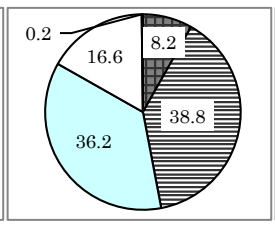


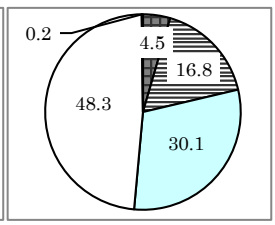


99

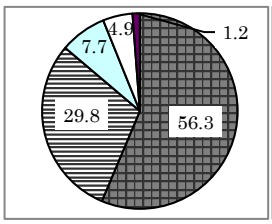


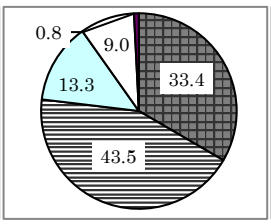


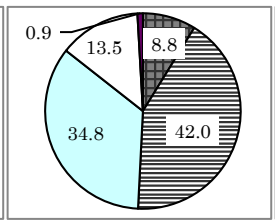


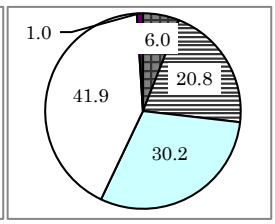


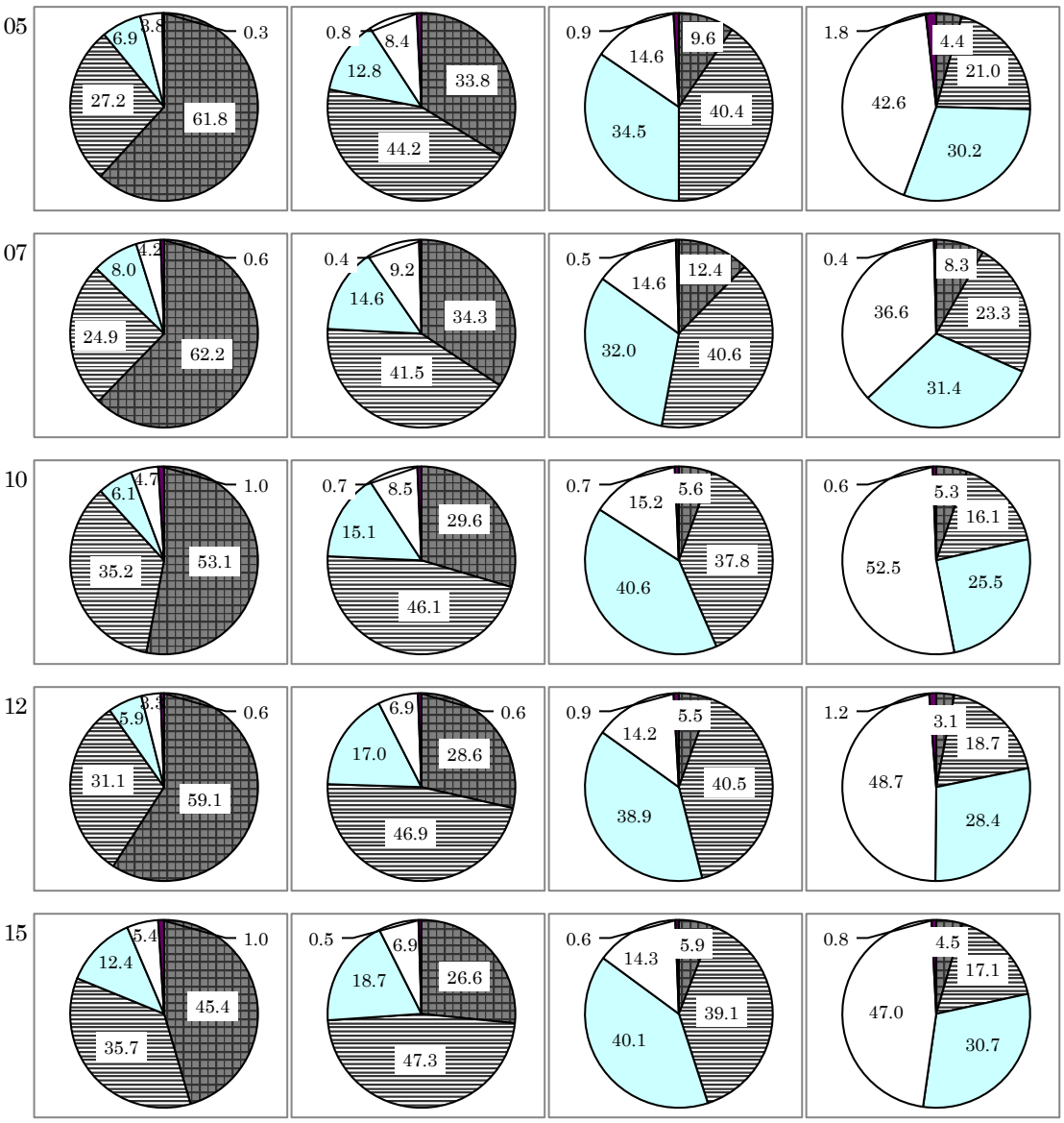
00











＊「宗教は人間に必要だ」とする割合は、どの年度においても「信仰あり」、「関心あり」、「あまり関心なし」、「まったく関心なし」の順に多い。

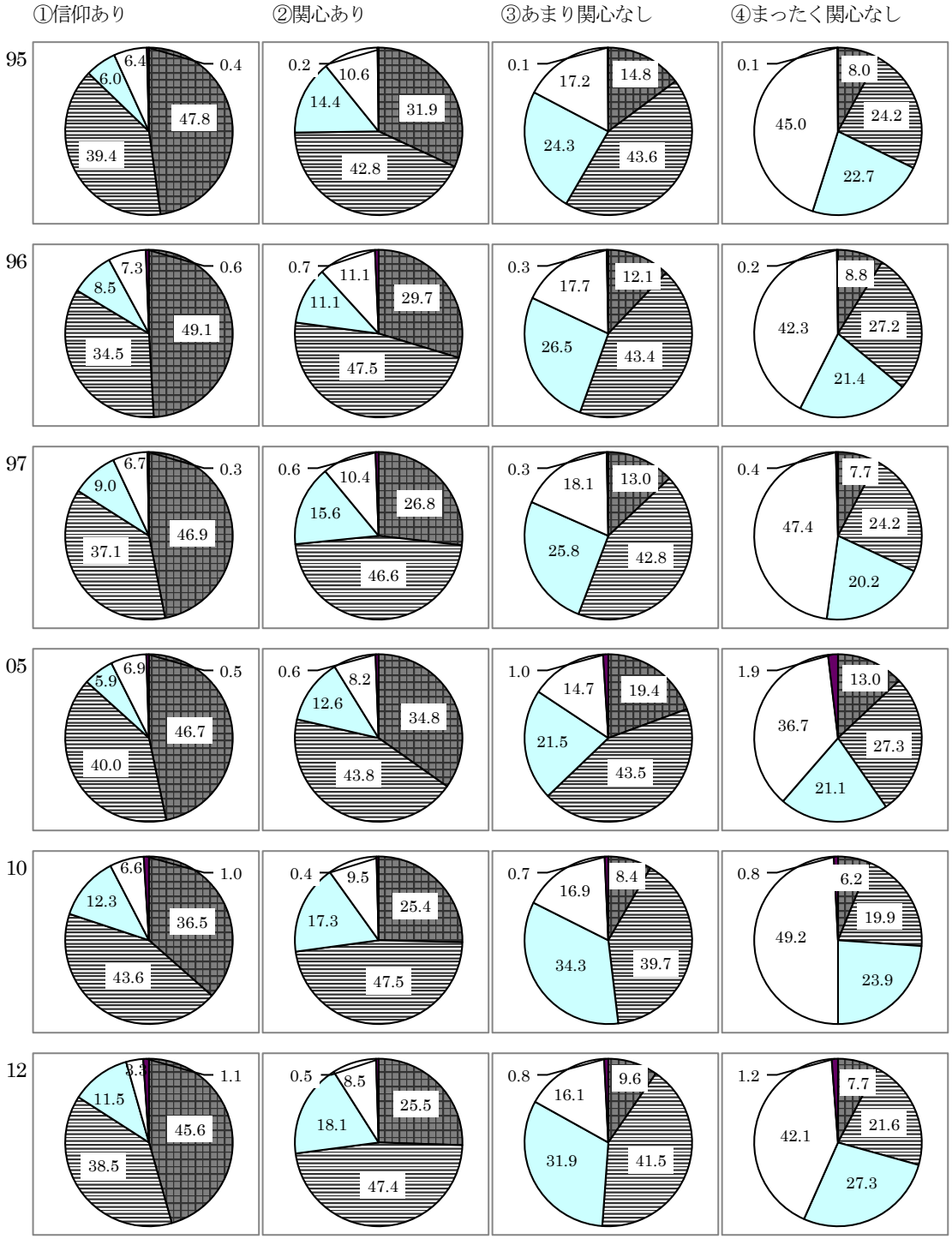
② 宗教は心のよりどころになるかどうかについての意見

質問内容

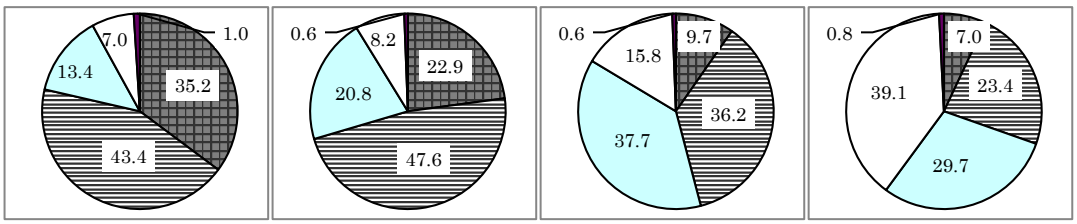
次のような意見について、「1.そう思う　2.どちらかといえばそう思う　3.どちらかといえばそう思わない　4.そう思わない」のいずれかの番号で答えて下さい。

「宗教を信じると、心のよりどころができる。」　　[　　]

グラフ 12a2


①信仰あり
②関心あり
③あまり関心なし
④まったく関心なし
95
0.4
47.8
39.4
6.0
6.4
0.2
10.6
31.9
42.8
14.4
0.1
17.2
14.8
24.3
43.6
0.1
8.0
24.2
22.7
45.0
96
0.6
49.1
34.5
8.5
7.3
0.7
11.1
29.7
47.5
11.1
0.3
17.7
12.1
26.5
43.4
0.2
8.8
27.2
21.4
42.3
97
0.3
46.9
37.1
9.0
6.7
0.6
10.4
26.8
46.6
15.6
0.3
18.1
13.0
25.8
42.8
0.4
7.7
24.2
20.2
47.4
05
0.5
46.7
40.0
5.9
6.9
0.6
8.2
34.8
43.8
12.6
1.0
14.7
19.4
21.5
43.5
1.9
13.0
27.3
21.1
36.7
10
1.0
36.5
43.6
12.3
6.6
0.4
9.5
25.4
47.5
17.3
0.7
8.4
16.9
34.3
39.7
0.8
6.2
19.9
23.9
49.2
12
1.1
45.6
38.5
11.5
0.5
8.5
25.5
47.4
18.1
0.8
9.6
16.1
31.9
41.5
1.2
7.7
21.6
27.3
42.1

15



＊この問に関しても、「宗教は心のよりどころになる」と回答する割合は、どの年度においても「信仰あり」、「関心あり」、「あまり関心なし」、「まったく関心なし」の順に多い。

③ 宗教はアブナイと思うか

宗教への関心への回答を、宗教はアブナイと思うかという、宗教に対する否定的な評価を含む質問の回答とでクロス集計した。

質問内容

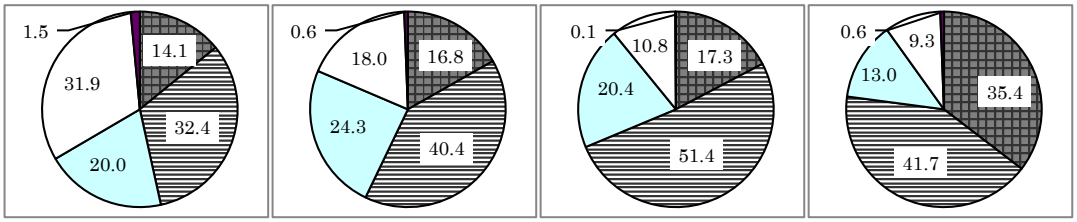
次のような意見について、「1.そう思う　2.どちらかといえばそう思う　3.どちらかといえばそう思わない　4.そう思わない」のいずれかの番号で答えて下さい。

「一般的に宗教は、アブナイというイメージがある」　　[　　]

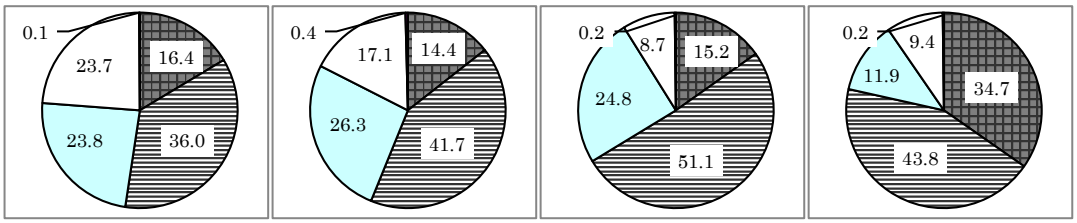
グラフ 12a3

①信仰あり　②関心あり　③あまり関心なし　④まったく関心なし

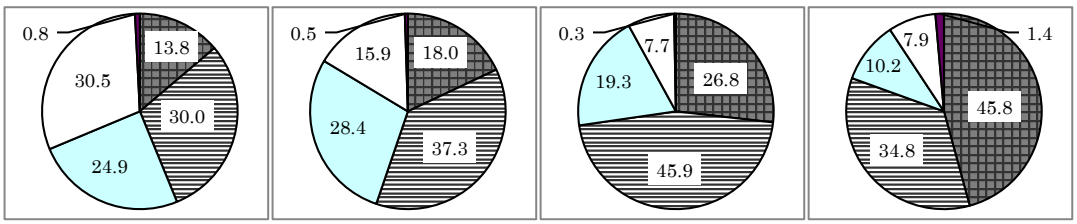
98



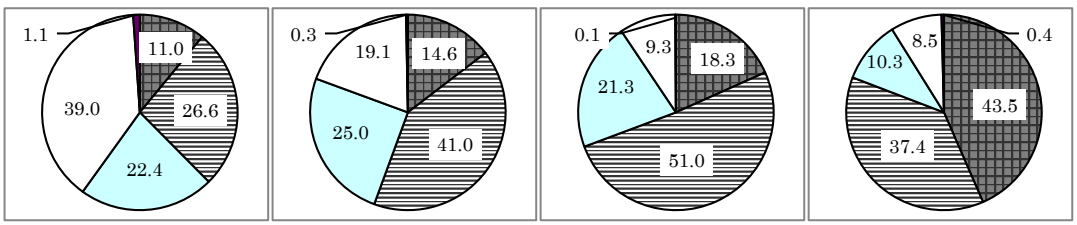
99

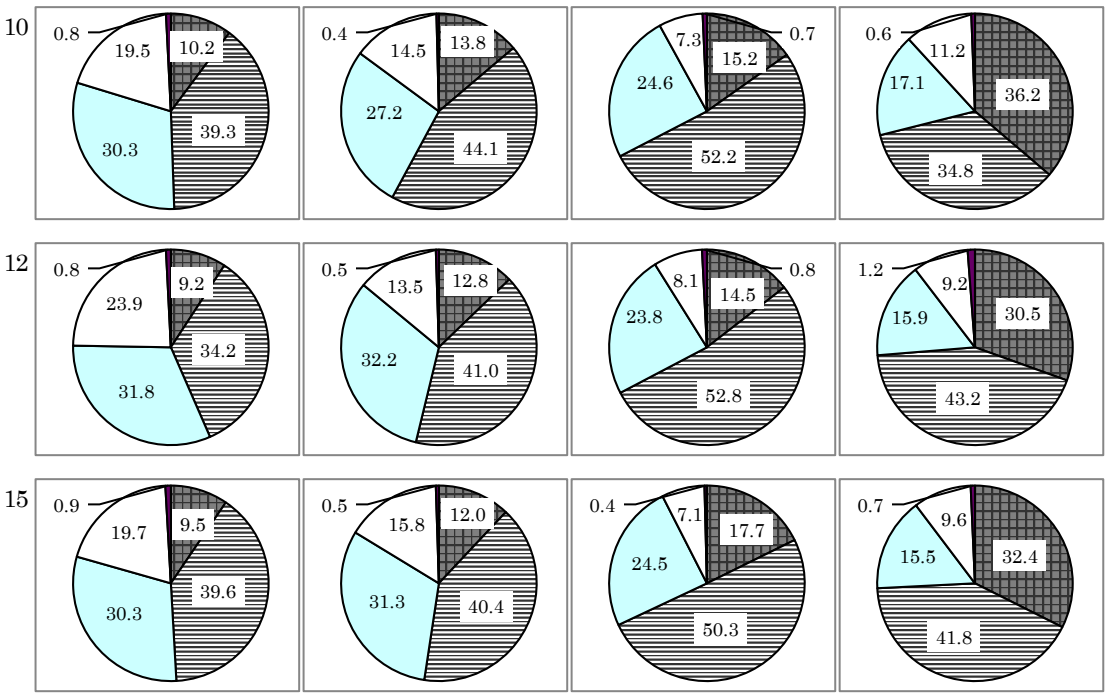


05



07





＊宗教にまったく関心ない人が、宗教はアブナイと思う割合がもっとも高いということだけは共通している。

b）神仏、霊魂の存在

①神の存在

質問内容

神や仏の存在について、あなたはどう思いますか。「1.信じる　2.ありうると思う　3.あまり信じない　4.否定する」のなかから、番号で答えて下さい。

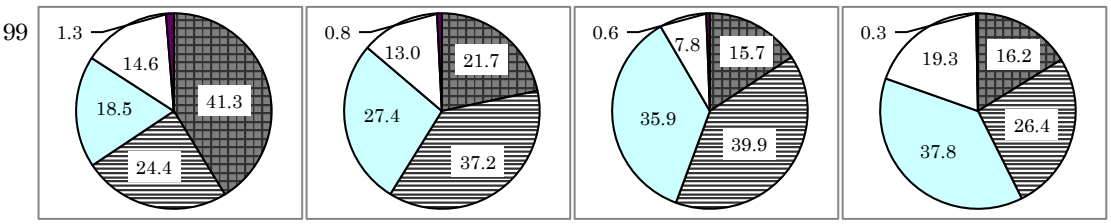
1.神の存在[　]　2.仏の存在[　]　3.霊魂の存在[　]

回答の選択肢

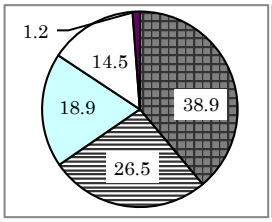
1.＋＋：信じる	2.＋　：ありうると思う
3.－　：あまり信じない	4.－－：否定する
5.無回答	

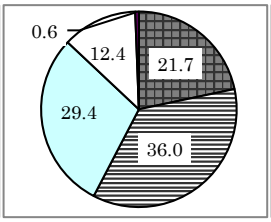
グラフ 12b1

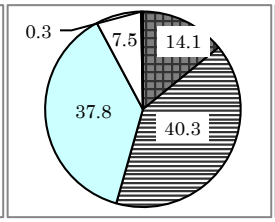
①信仰を持っている　②関心あり　③あまりなし　④全くなし

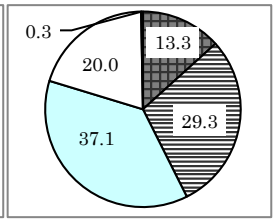


00

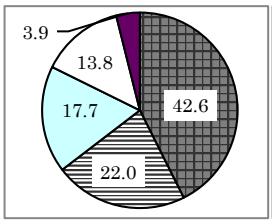


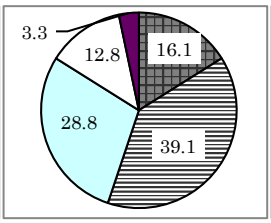


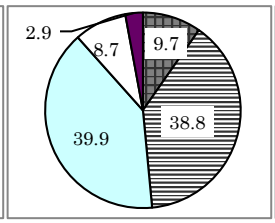


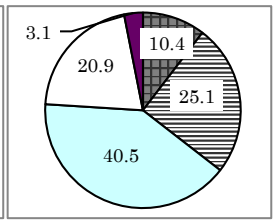


01

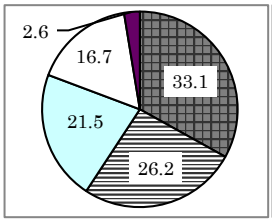


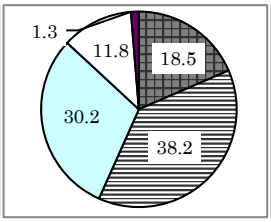


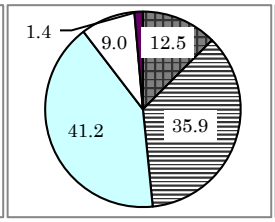


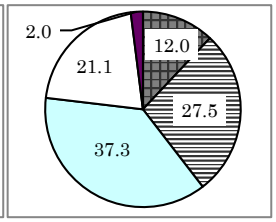


05

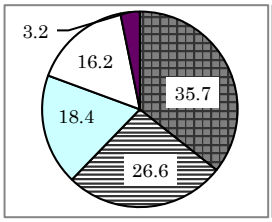


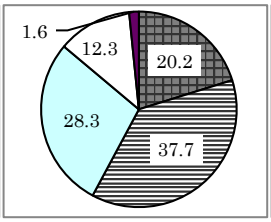


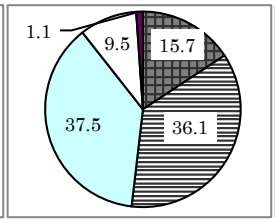


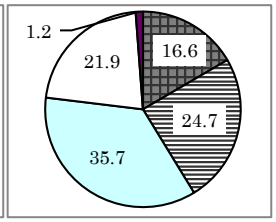


07

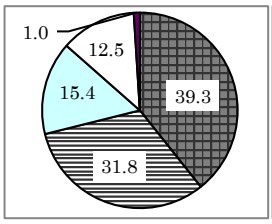


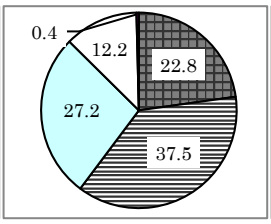


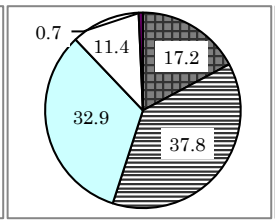


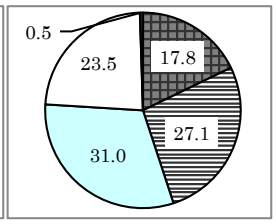


10

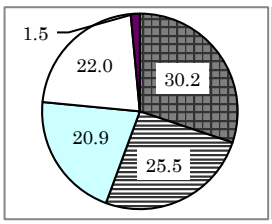


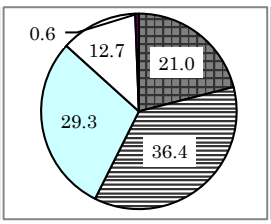


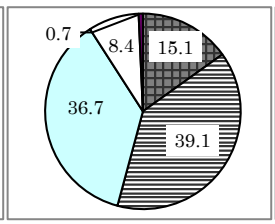


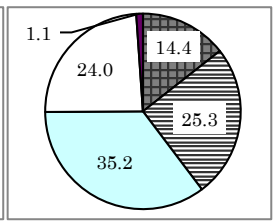


12

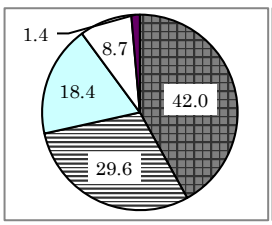


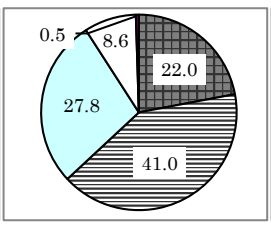


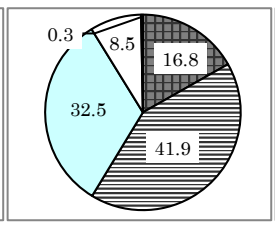


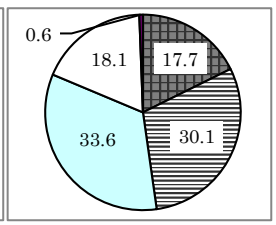


15







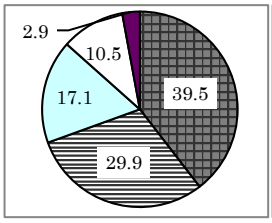


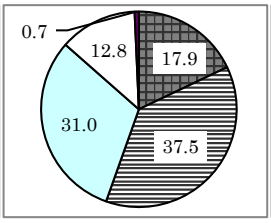
②仏の存在

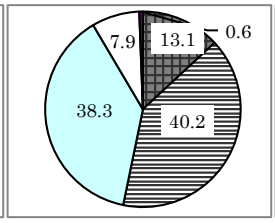
グラフ 12b2

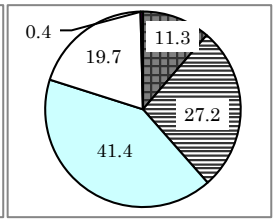
①信仰を持っている　②関心あり　③あまりなし　④全くなし

99

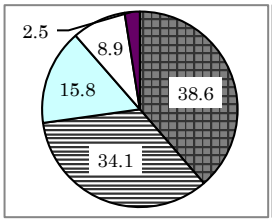


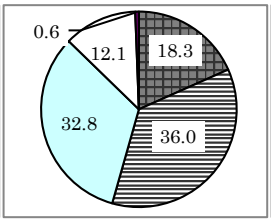


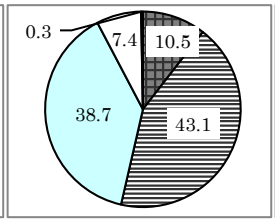


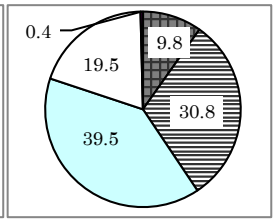


00

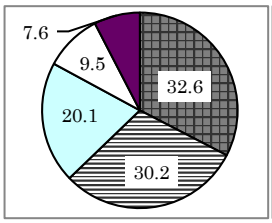


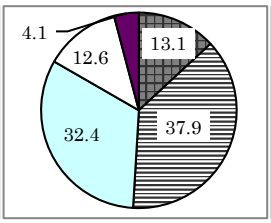


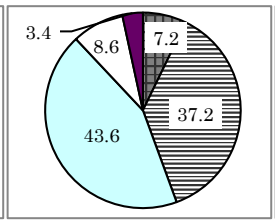


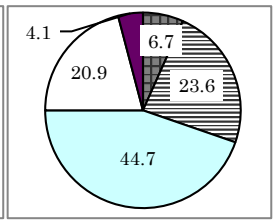


01

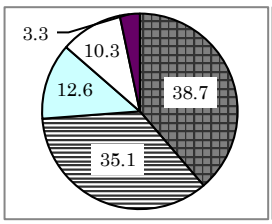


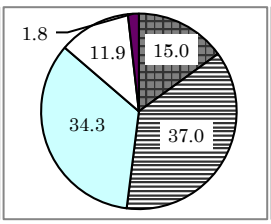


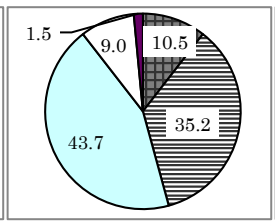


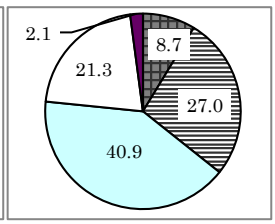


05

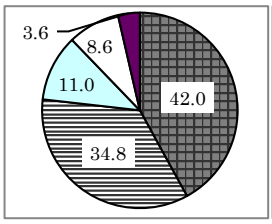


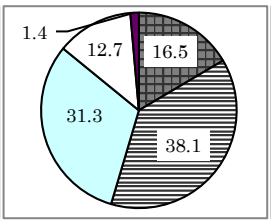


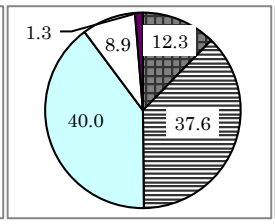


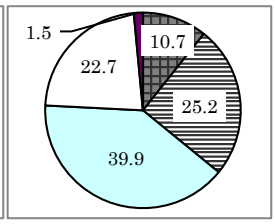


07

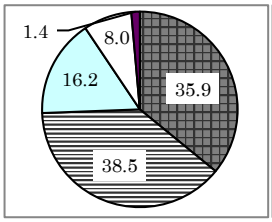


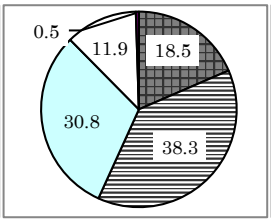


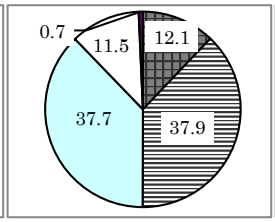


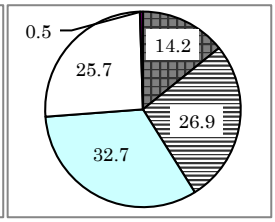


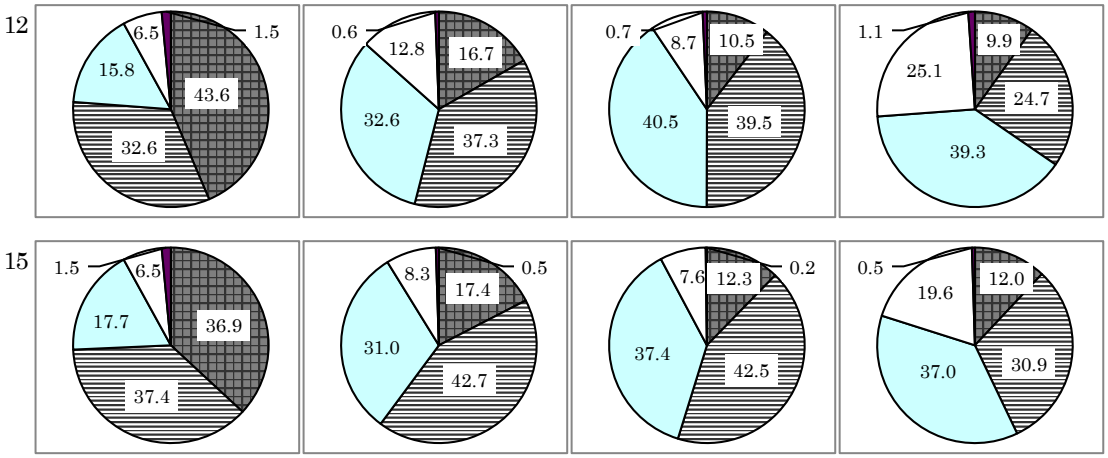
10







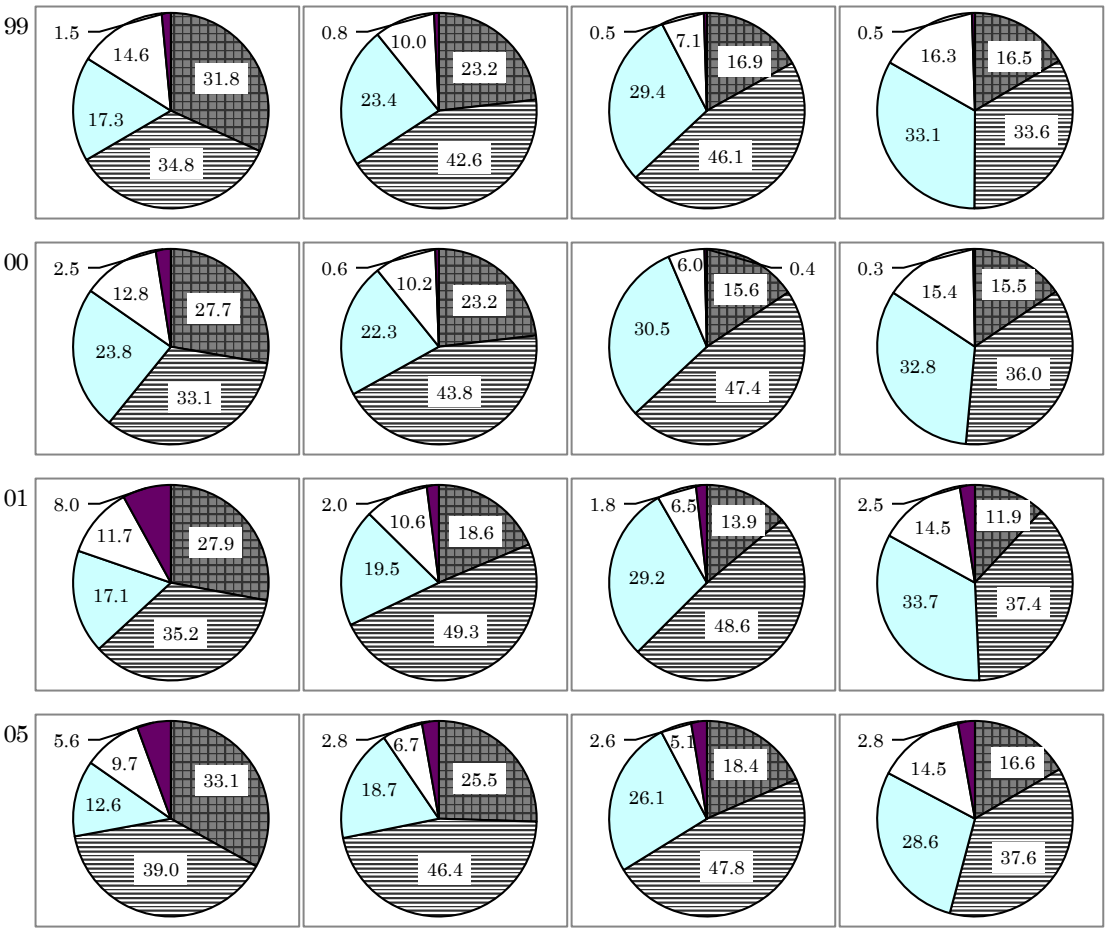


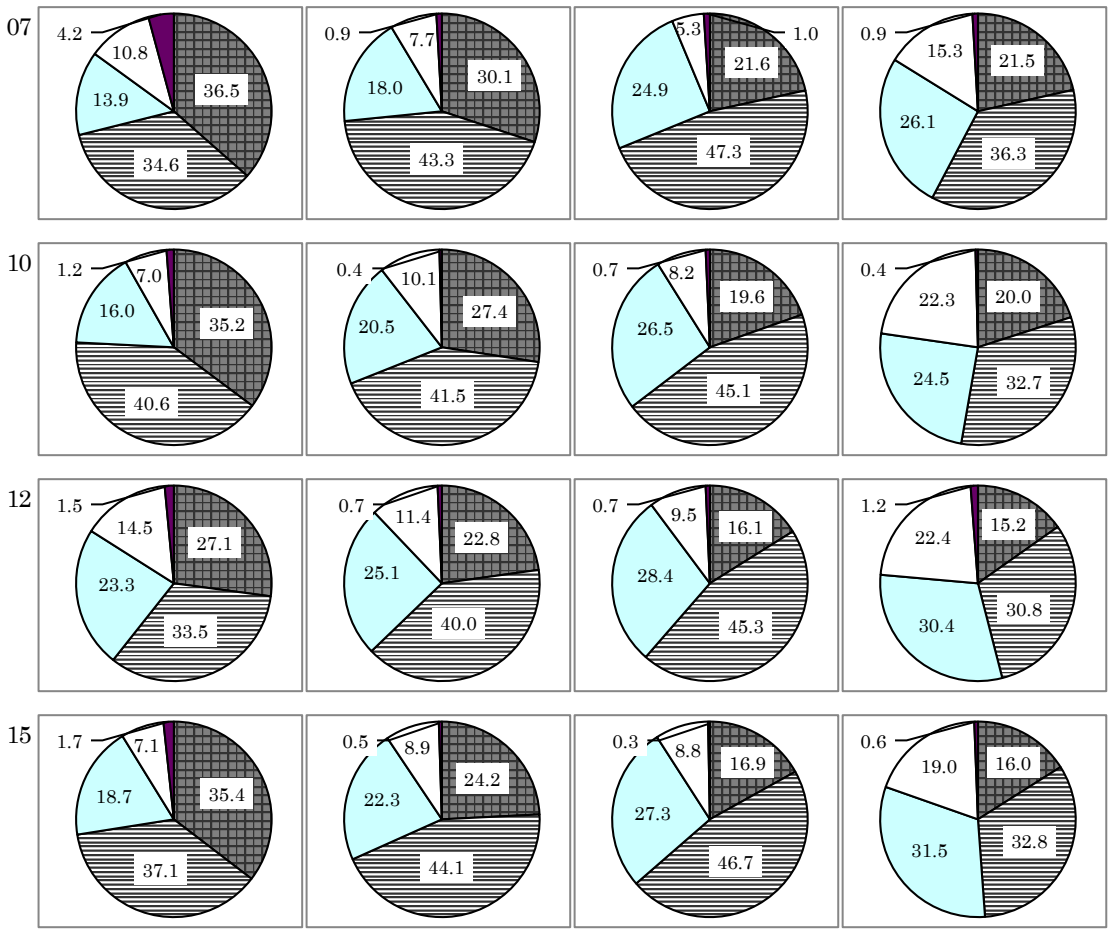


③霊魂の存在

グラフ 12b3

①信仰を持っている　②関心あり　③あまりなし　④全くなし





＊霊魂の存在を信じる割合も信仰をもつ人がもっとも高いが、その差は神仏の存在を信じる割合に比べると小さい。

c) イスラム教への関心・意識

イスラム教に関しては、イスラム教との関わり、イスラム教への関心、日本にあるモスクに対する意識などを問う設問がある。ここでは、このうちイスラム教への関心への回答と、近所にモスクがあることに対する意識についての回答結果が、宗教への関心の度合いによってどう違うかを見る。

①イスラム教への関心

質問内容

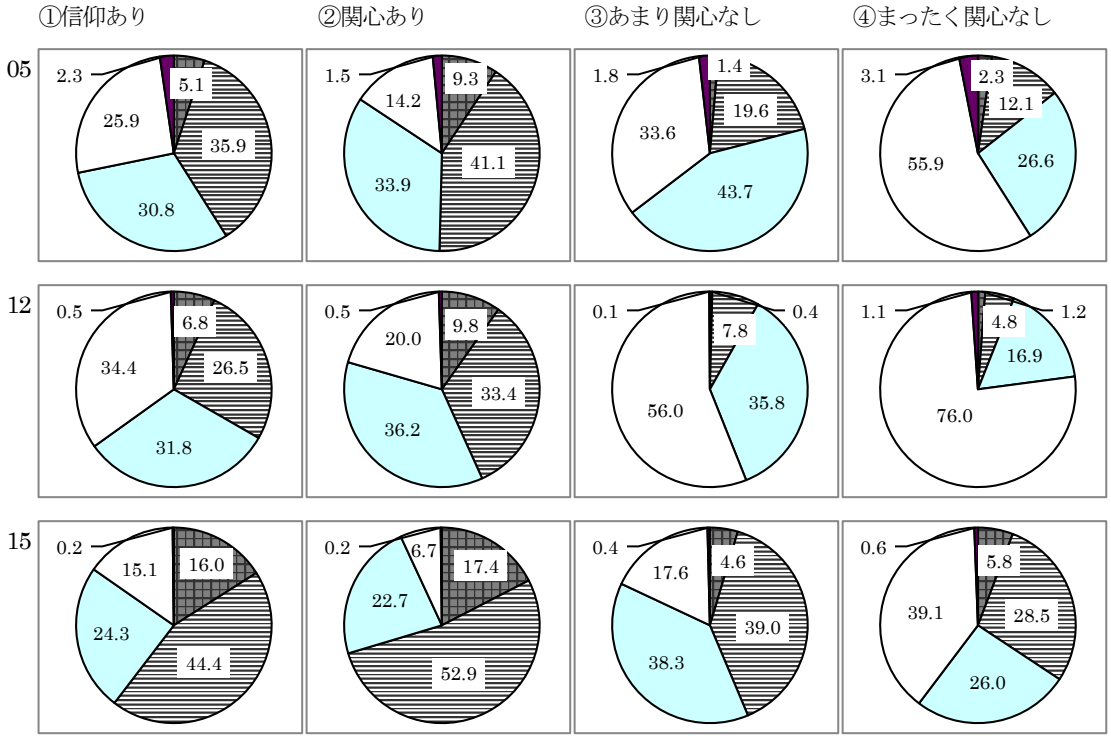
最近のあなたのイスラム教への関心は次のうちどれですか

1.大変高い　2.やや高い　3.あまり高くない　　4.ほとんどない

回答の選択肢

1.＋＋：大変高い	2.＋　：やや高い
3.－　：あまり高くない	4.－－：ほとんどない
5.無回答	

グラフ 12c1



＊「信仰をもつ」と回答した人が「イスラム教に関心をもつ」と回答した割合でもっとも高いわけではないことが分かる。むしろ「宗教に関心がある」と答えた人の方が、イスラム教にも関心をもっている。

②近所のモスクへの意識

質問内容

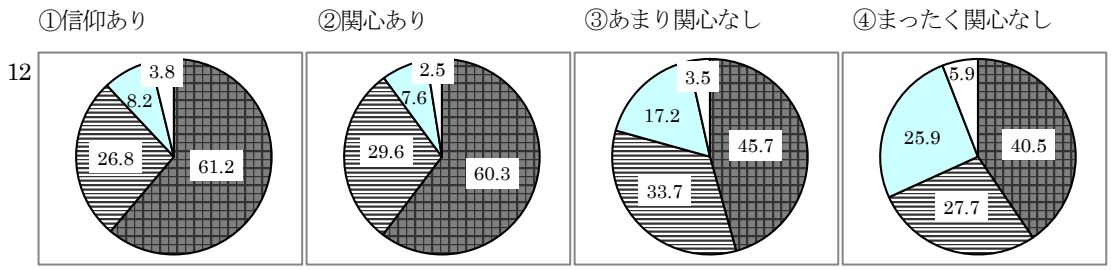
モスク（イスラム寺院）が近所にできることになったとするとあなたは不安を感じますか

1. 不安は感じない　2. 少し不安を感じる　3. かなり不安を感じる

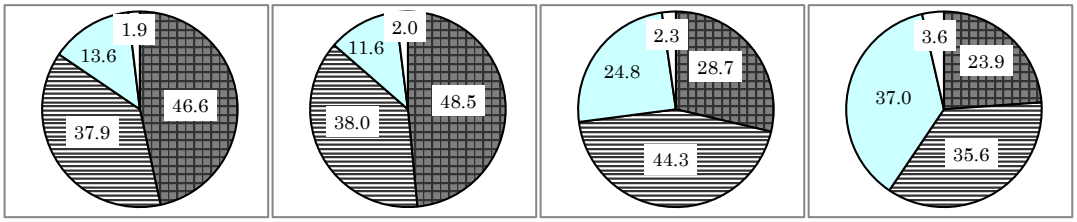
上記選択肢のグラフ内での模様

1.不安は感じない	2.少し不安を感じる
3.かなり不安を感じる	4.無回答

グラフ 12c2



15



d) 宗教教育の必要性

宗教教育に関しては 9 回の質問を行ったが、内容的に少し異なる 3 種類がある。それぞれの質問に対してのクロス集計を見ていく。

質問内容

次のような意見について、「1.そう思う　2.どちらかといえばそう思う　3.どちらかといえばそう思わない　4.そう思わない」のいずれかの番号で答えて下さい。

(1996～1999 年)

「高校までにもっと宗教についての基礎知識を教えるべきだ」　[　　]

(2005 年)

「高校までにもっと世界の宗教についての基礎知識を教えるべきだ」　[　　]

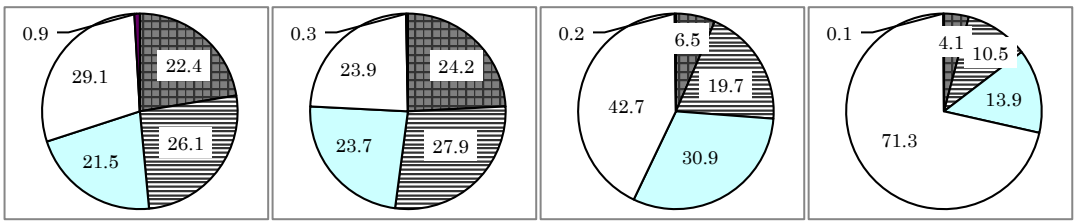
(2007～2015 年)

「高校までに日本や世界の宗教文化についての基礎的な知識を学んだ方がいい」[　　]

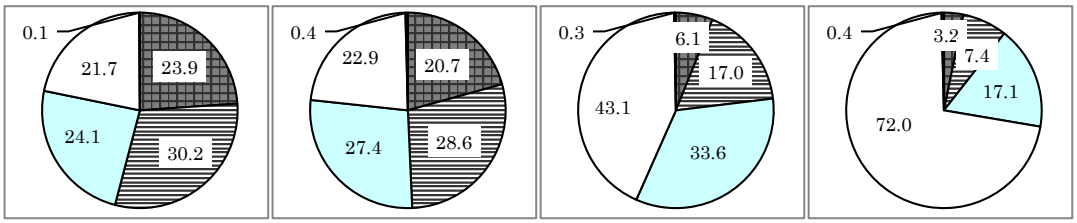
グラフ 12d1

①信仰あり　②関心あり　③あまり関心なし　④まったく関心なし

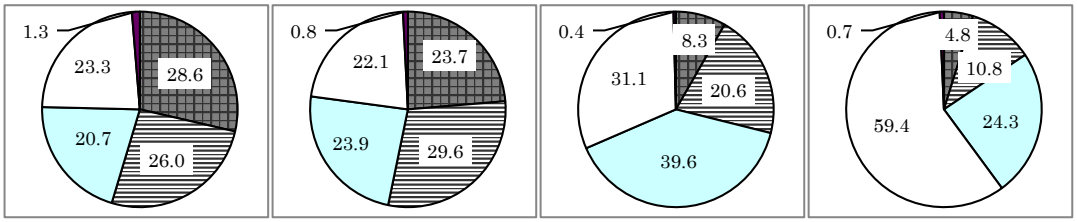
96

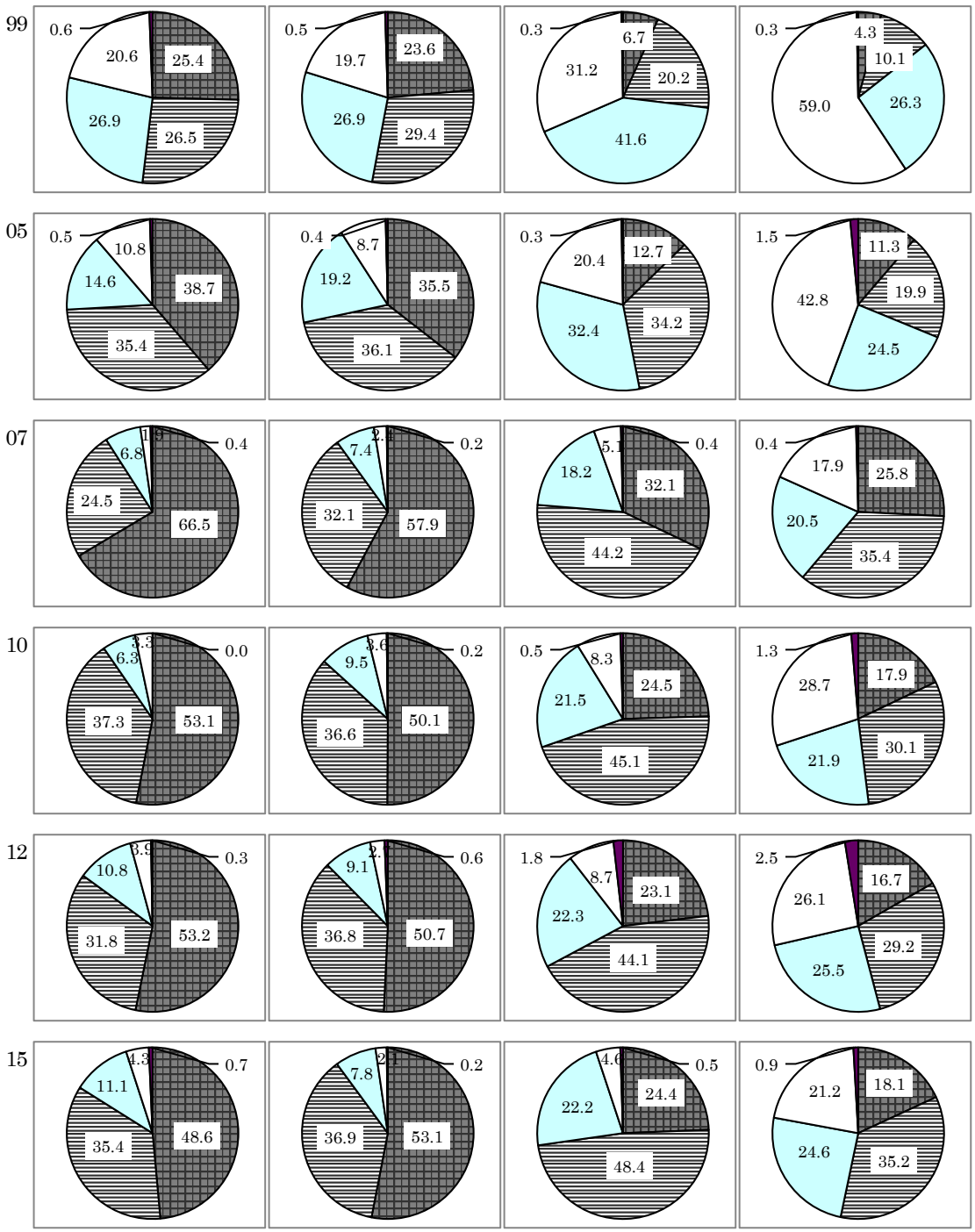


97



98





＊宗教教育の必要性との相関で特徴的なのは、「信仰をもつ人」と「宗教に関心がある人」との間であまり差がないというだけでなく、宗教文化教育に当たるような宗教教育の必要性を質問した2007年以降は、「宗教に関心がある」と回答した人の方が、必要性を認める割合が高くなる年があったという点である。

e) パワースポット

パワースポットについては2010年から2015年まで3回質問している。

質問内容

神、仏、霊魂の存在について、それぞれ＜　＞内の1～4のどれになるか、番号で答えて下さい。

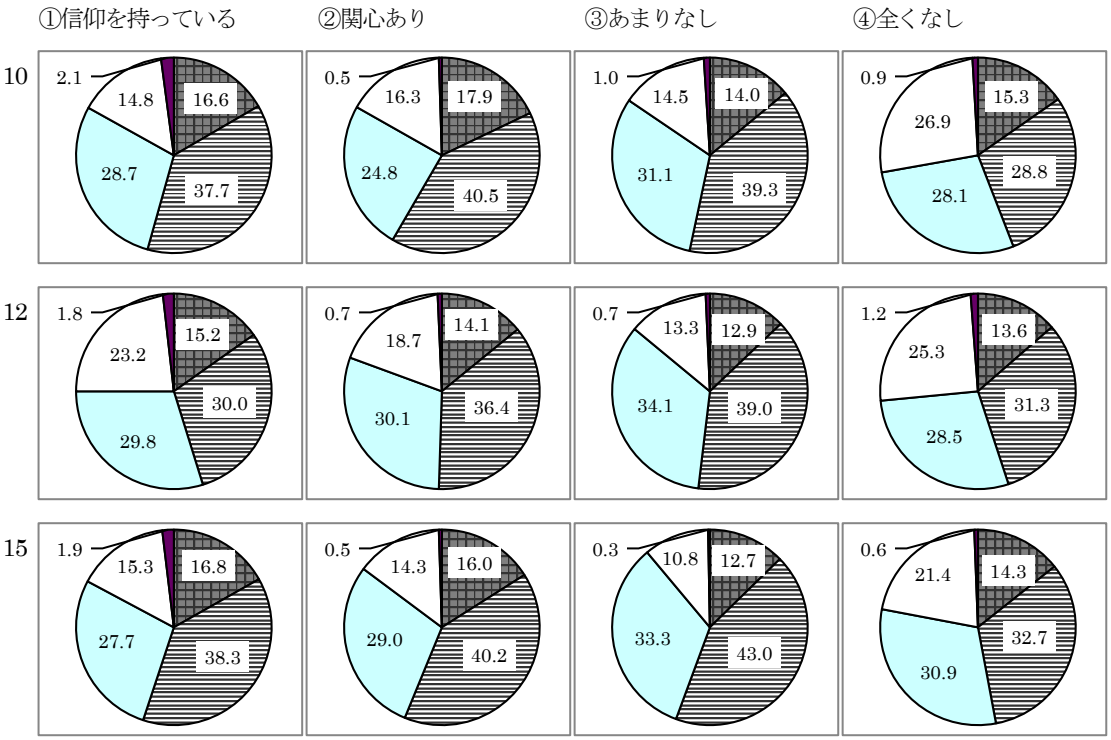
＜1.信じる　2.ありうると思う　3.あまり信じない　4.否定する＞

パワースポットの存在［　］

回答の選択肢の記号

1.＋＋：信じる　2.＋　：ありうると思う
3.－　：あまり信じない　4.－－：否定する
5.無回答

グラフ 12e1



＊パワースポットを信じるかどうかは、信仰の有無や宗教への関心とはほとんど相関がない。パワースポットを信じる割合は、「宗教にまったく関心がない」と回答した人と「信仰をもつ」と回答した人との間でも、1～2%程度の差があるだけである。

第13章 両親の信仰の有無との相関

ここでは両親の信仰の有無と回答者の宗教観との間にどのような相関があるかを調べた。クロス集計したのは、宗教への関心、宗教が必要だと思うかどうか、そして宗教はアブナイというイメージをもつかどうかという点である。父母の信仰については別々に質問してある。

質問内容

あなたのお父さんは個人で信仰をもっていますか。　1.はい 2.いいえ

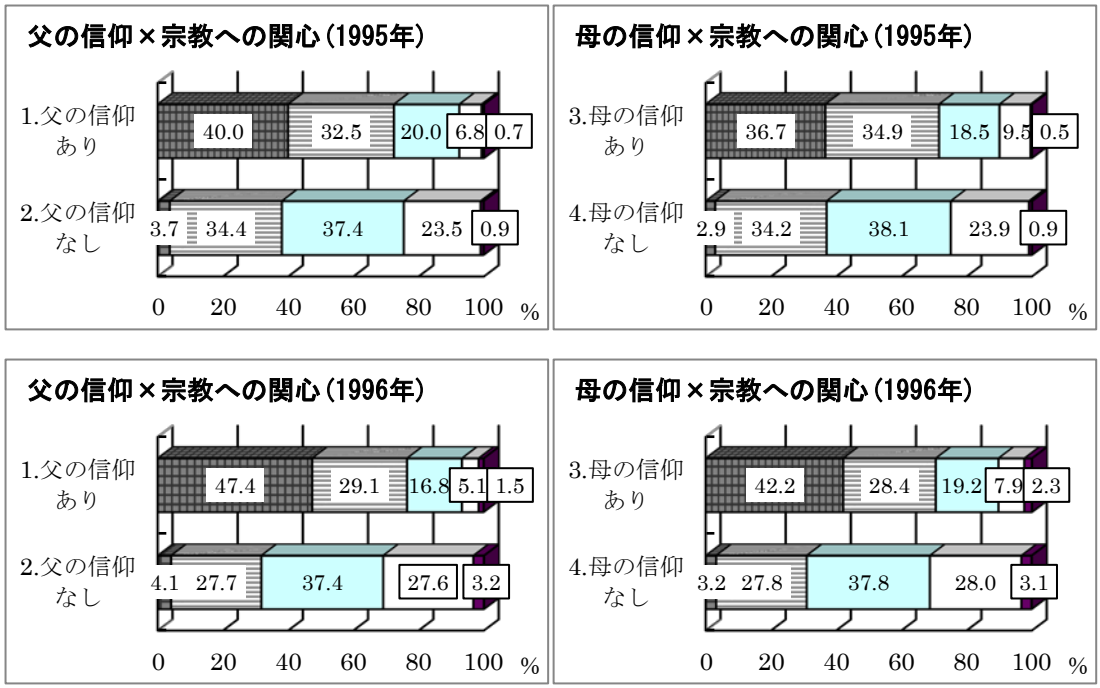
あなたのお母さんは個人で信仰をもっていますか。　1.はい 2.いいえ

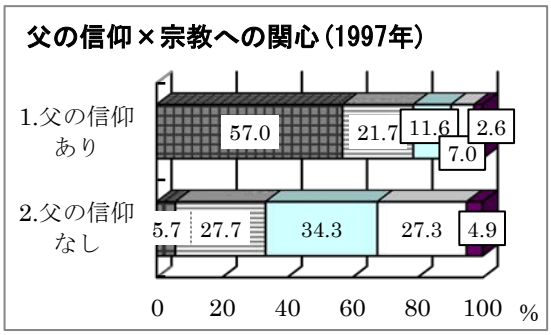
a）宗教への関心

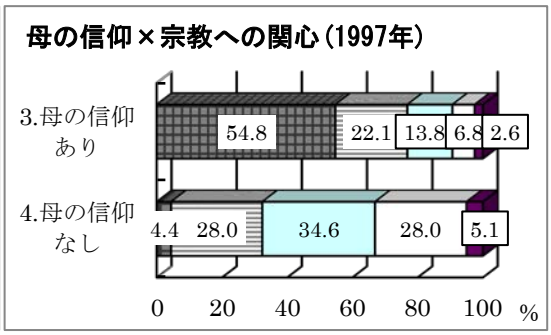
「あなたは宗教にどの程度関心がありますか」という質問への回答の選択肢

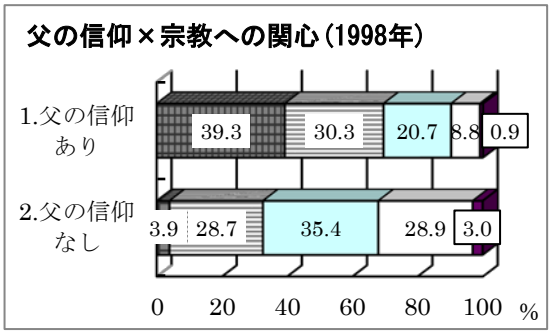
- 1.信仰を持っている
- 2.関心がある
- 3.あまり関心がない
- 4.まったく関心がない
- 5.無回答

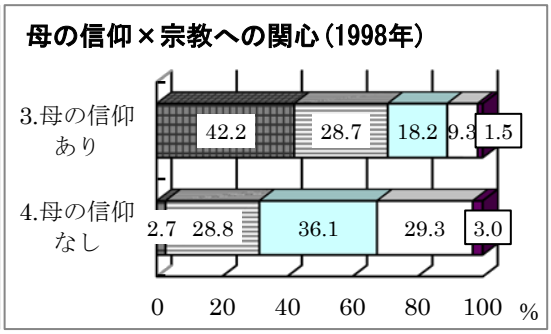
グラフ 13a1

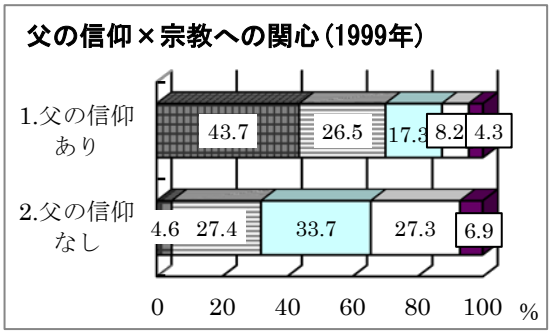


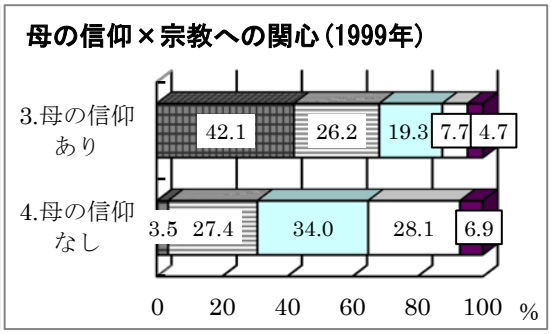

父の信仰×宗教への関心(1997年)
1.父の信仰あり
2.父の信仰なし
57.0
21.7
11.6
7.0
2.6
5.7
27.7
34.3
27.3
4.9
0 20 40 60 80 100 %

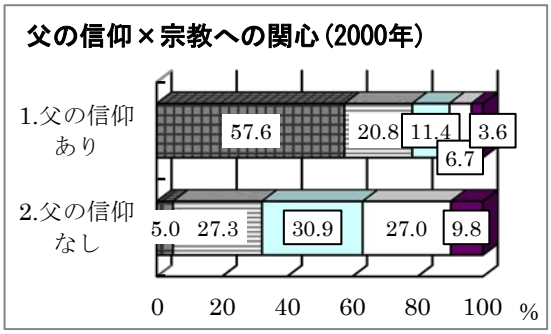

母の信仰×宗教への関心(1997年)
3.母の信仰あり
4.母の信仰なし
54.8
22.1
13.8
6.8
2.6
4.4
28.0
34.6
28.0
5.1
0 20 40 60 80 100 %

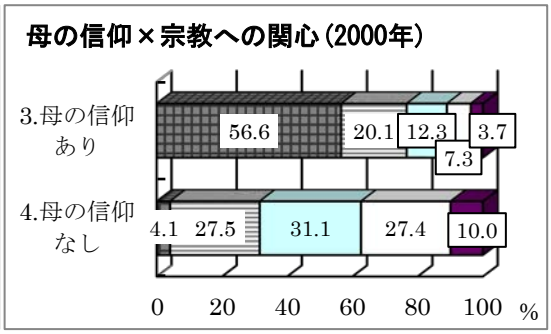

父の信仰×宗教への関心(1998年)
1.父の信仰あり
2.父の信仰なし
39.3
30.3
20.7
8.8
0.9
3.9
28.7
35.4
28.9
3.0
0 20 40 60 80 100 %

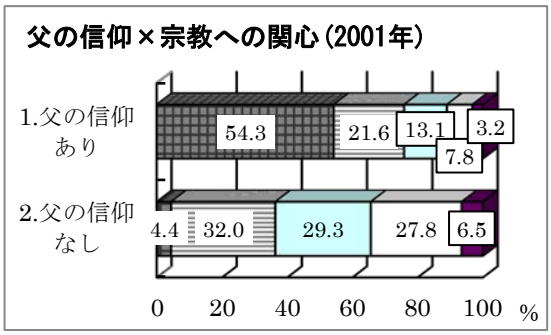

母の信仰×宗教への関心(1998年)
3.母の信仰あり
4.母の信仰なし
42.2
28.7
18.2
9.3
1.5
2.7
28.8
36.1
29.3
3.0
0 20 40 60 80 100 %

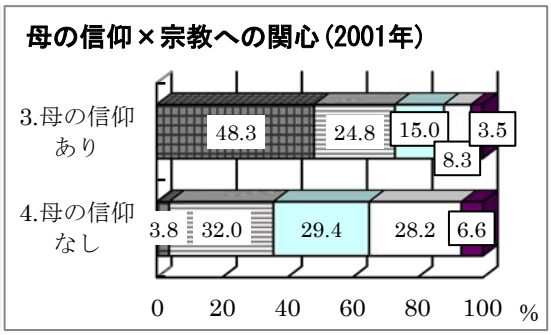

父の信仰×宗教への関心(1999年)
1.父の信仰あり
2.父の信仰なし
43.7
26.5
17.3
8.2
4.3
4.6
27.4
33.7
27.3
6.9
0 20 40 60 80 100 %

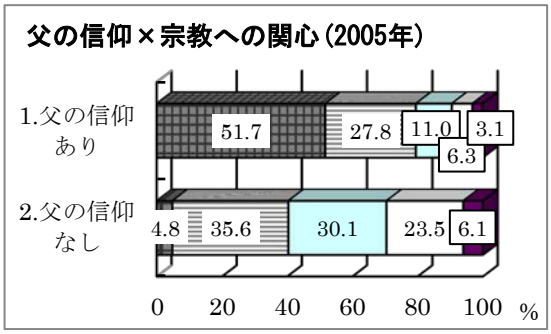

母の信仰×宗教への関心(1999年)
3.母の信仰あり
4.母の信仰なし
42.1
26.2
19.3
7.7
4.7
3.5
27.4
34.0
28.1
6.9
0 20 40 60 80 100 %

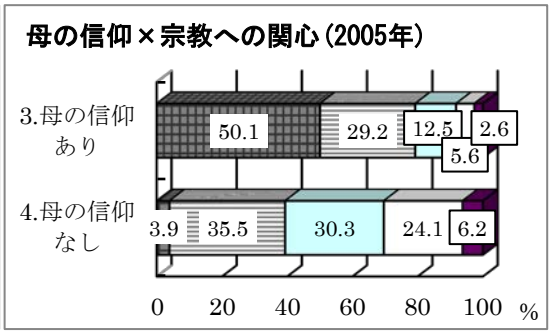

父の信仰×宗教への関心(2000年)
1.父の信仰あり
2.父の信仰なし
57.6
20.8
11.4
6.7
3.6
5.0
27.3
30.9
27.0
9.8
0 20 40 60 80 100 %

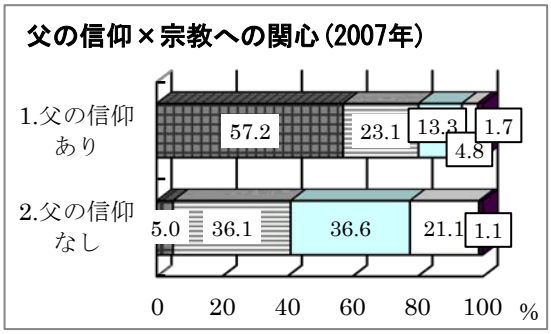

母の信仰×宗教への関心(2000年)
3.母の信仰あり
4.母の信仰なし
56.6
20.1
12.3
7.3
3.7
4.1
27.5
31.1
27.4
10.0
0 20 40 60 80 100 %

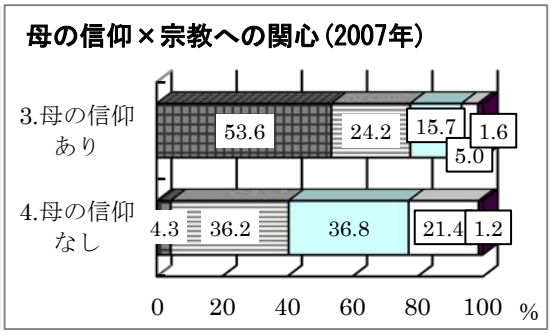

父の信仰×宗教への関心(2001年)
1.父の信仰あり
2.父の信仰なし
54.3
21.6
13.1
7.8
3.2
4.4
32.0
29.3
27.8
6.5
0 20 40 60 80 100 %

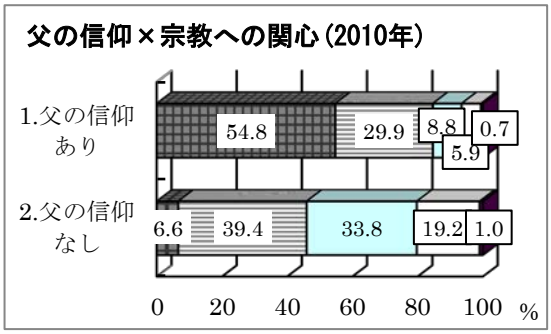

母の信仰×宗教への関心(2001年)
3.母の信仰あり
4.母の信仰なし
48.3
24.8
15.0
8.3
3.5
3.8
32.0
29.4
28.2
6.6
0 20 40 60 80 100 %

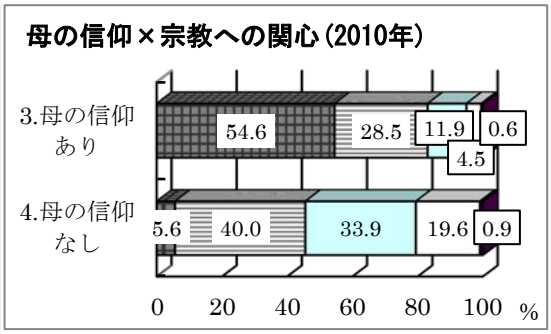

父の信仰×宗教への関心(2005年)
1.父の信仰あり
2.父の信仰なし
51.7
27.8
11.0
6.3
3.1
4.8
35.6
30.1
23.5
6.1
0 20 40 60 80 100 %

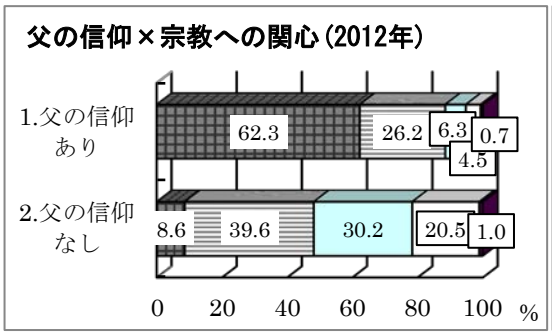

母の信仰×宗教への関心(2005年)
3.母の信仰あり
4.母の信仰なし
50.1
29.2
12.5
5.6
2.6
3.9
35.5
30.3
24.1
6.2
0 20 40 60 80 100 %

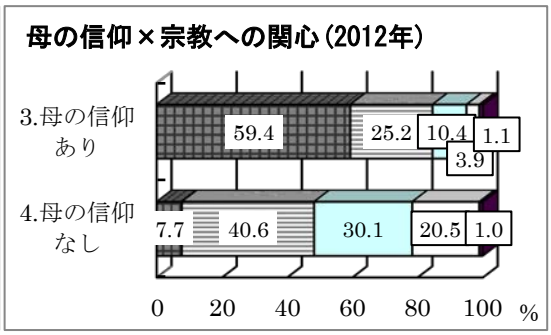

父の信仰×宗教への関心(2007年)
1.父の信仰あり
2.父の信仰なし
57.2
23.1
13.3
4.8
1.7
5.0
36.1
36.6
21.1
1.1
0 20 40 60 80 100 %

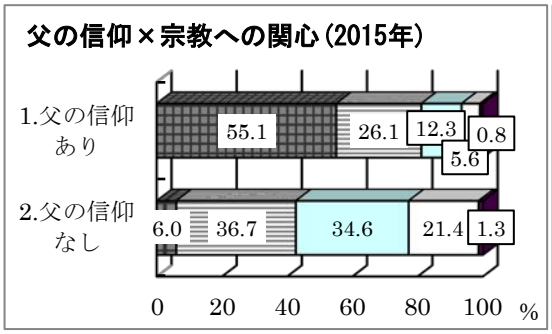

母の信仰×宗教への関心(2007年)
3.母の信仰あり
4.母の信仰なし
53.6
24.2
15.7
5.0
1.6
4.3
36.2
36.8
21.4
1.2
0 20 40 60 80 100 %

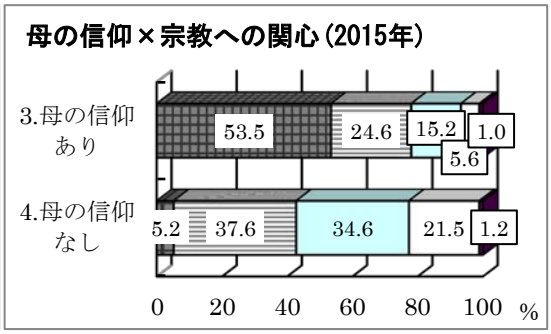

父の信仰×宗教への関心(2010年)
1.父の信仰あり
2.父の信仰なし
54.8
29.9
8.8
5.9
0.7
6.6
39.4
33.8
19.2
1.0
0 20 40 60 80 100 %


母の信仰×宗教への関心(2010年)
3.母の信仰あり
4.母の信仰なし
54.6
28.5
11.9
4.5
0.6
5.6
40.0
33.9
19.6
0.9
0 20 40 60 80 100 %





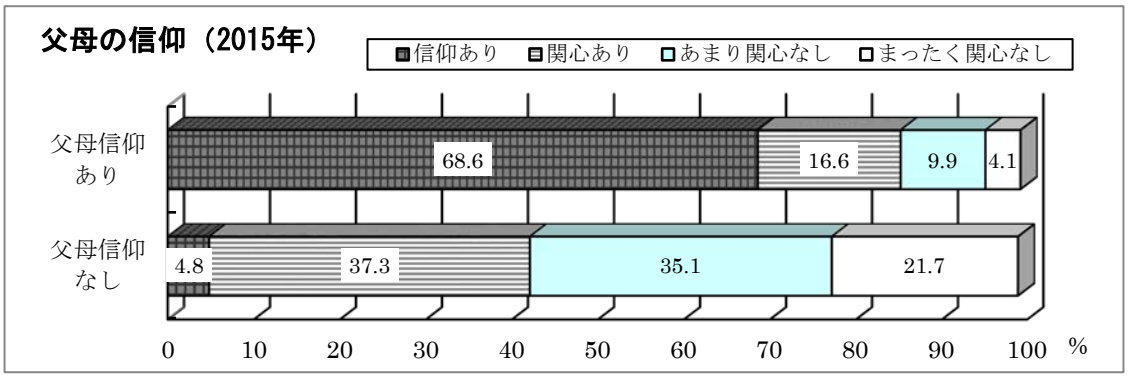




＊父母が信仰をもっている場合に、回答者が信仰をもつ割合は明らかに高く、強い相関性があることが見てとれる。年によっては父母が信仰をもっていない場合に比べて10倍ほどの違いが出ている。これは父母が信仰をもっているかどうかが、回答者が信仰をもつかどうかに関してきわめて強い影響力を及ぼしているということを示している。

このクロス集計では父母別々に相関を調べたが、「父母とも信仰あり」と「父母とも信仰なし」になると、その対比はより明確になるので、2015年に関してそのグラフを作成した。父母とも信仰があると、父母とも信仰がない場合にくらべて学生が信仰をもつ割合が14.3倍多くなっている。

グラフ 13a2



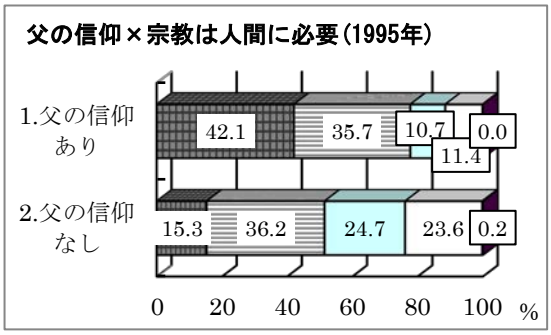
＊父母とも信仰があるかないかで、回答者が信仰をもつ割合は14.3倍もの開きがある。

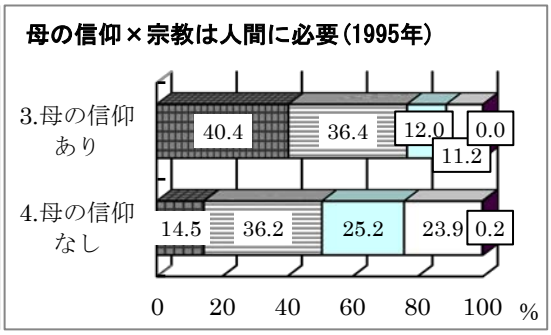
b) 宗教は人間に必要と思うか

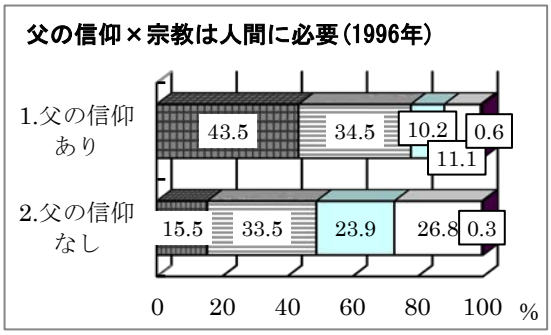
「どんなに科学が発達しても、宗教は人間に必要だ。」という意見への回答の選択肢と記号

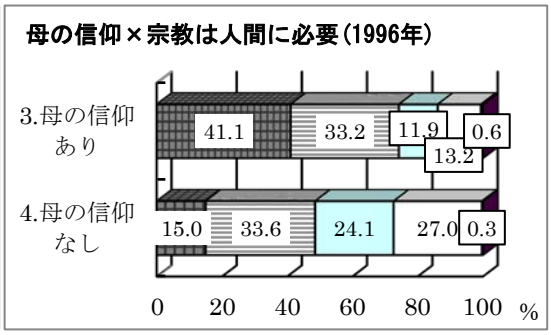
1.＋＋：そう思う	2.＋　：どちらかといえばそう思う
3.－　：どちらかといえばそう思わない	4.－－：そう思わない
5.無回答	

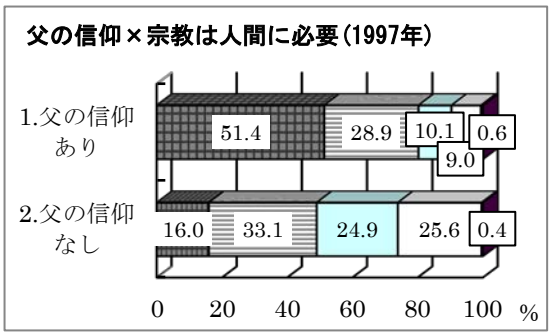
グラフ 13b1

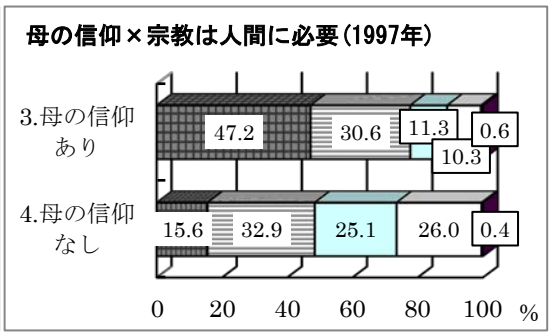


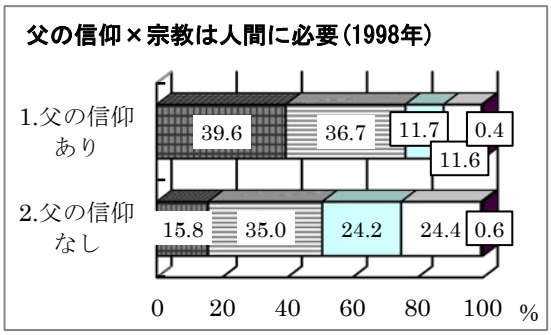


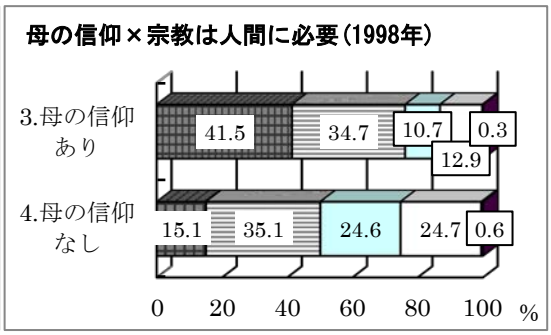


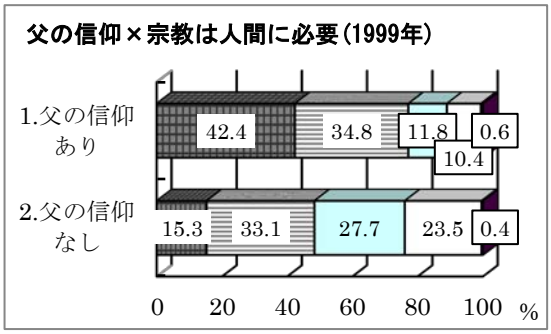


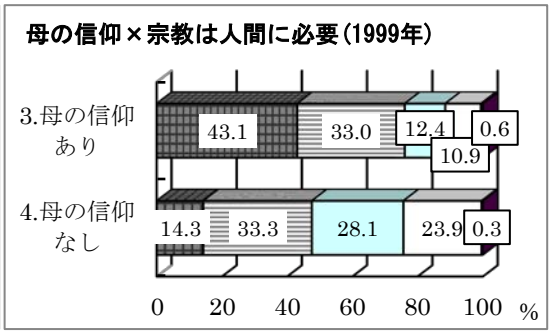


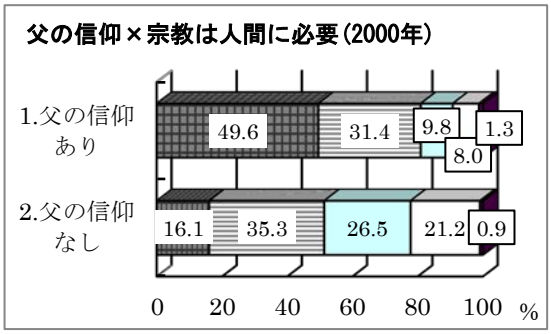


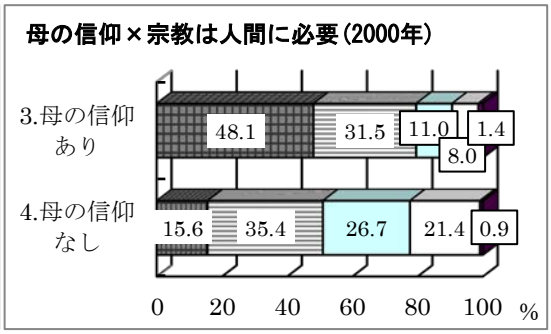

父の信仰×宗教は人間に必要(1998年)
1.父の信仰あり
2.父の信仰なし
39.6
36.7
11.7
0.4
11.6
15.8
35.0
24.2
24.4
0.6
0
20
40
60
80
100
%

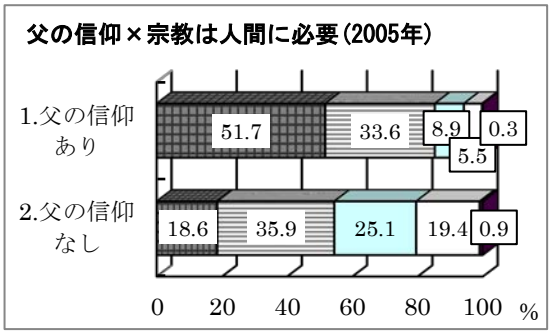

母の信仰×宗教は人間に必要(1998年)
3.母の信仰あり
4.母の信仰なし
41.5
34.7
10.7
0.3
12.9
15.1
35.1
24.6
24.7
0.6
0
20
40
60
80
100
%

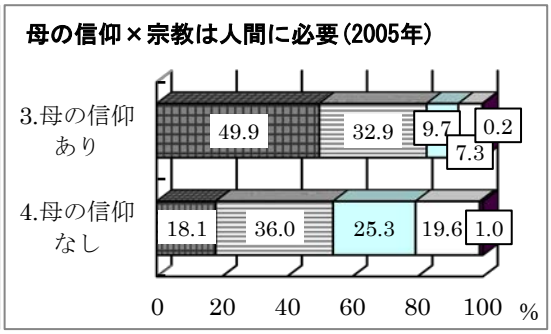

父の信仰×宗教は人間に必要(1999年)
1.父の信仰あり
2.父の信仰なし
42.4
34.8
11.8
0.6
10.4
15.3
33.1
27.7
23.5
0.4
0
20
40
60
80
100
%

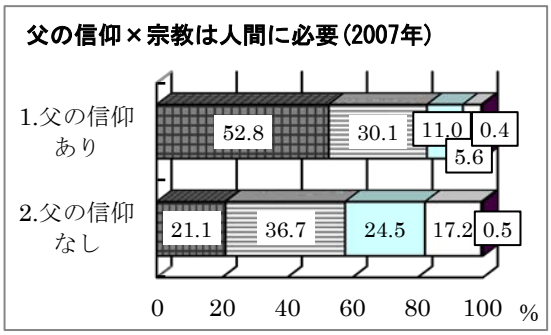

母の信仰×宗教は人間に必要(1999年)
3.母の信仰あり
4.母の信仰なし
43.1
33.0
12.4
0.6
10.9
14.3
33.3
28.1
23.9
0.3
0
20
40
60
80
100
%

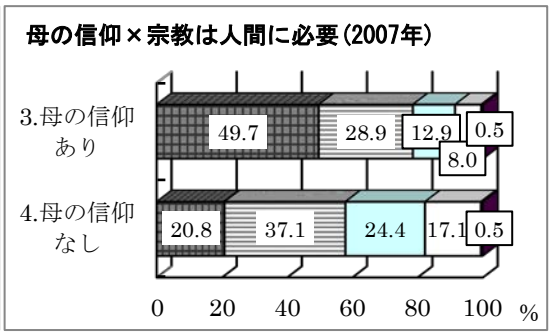

父の信仰×宗教は人間に必要(2000年)
1.父の信仰あり
2.父の信仰なし
49.6
31.4
9.8
1.3
8.0
16.1
35.3
26.5
21.2
0.9
0
20
40
60
80
100
%

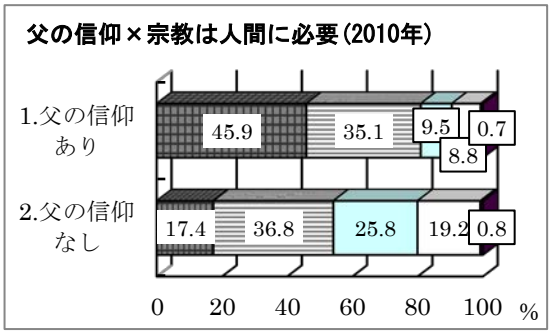

母の信仰×宗教は人間に必要(2000年)
3.母の信仰あり
4.母の信仰なし
48.1
31.5
11.0
1.4
8.0
15.6
35.4
26.7
21.4
0.9
0
20
40
60
80
100
%

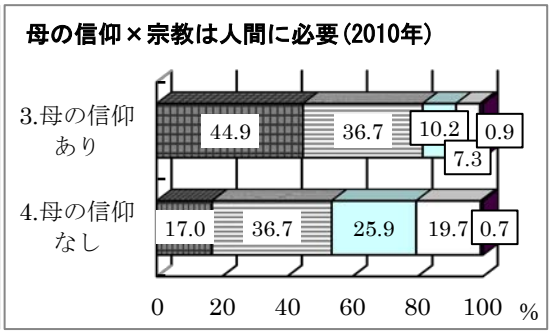

父の信仰×宗教は人間に必要(2005年)
1.父の信仰あり
2.父の信仰なし
51.7
33.6
8.9
0.3
5.5
18.6
35.9
25.1
19.4
0.9
0
20
40
60
80
100
%

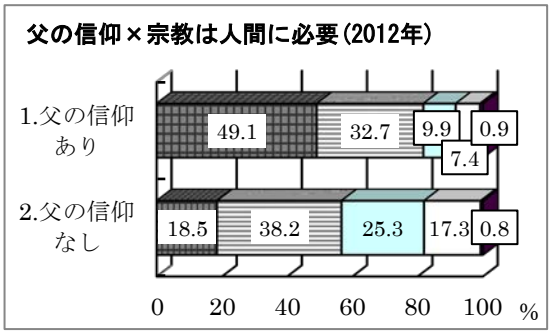

母の信仰×宗教は人間に必要(2005年)
3.母の信仰あり
4.母の信仰なし
49.9
32.9
9.7
0.2
7.3
18.1
36.0
25.3
19.6
1.0
0
20
40
60
80
100
%

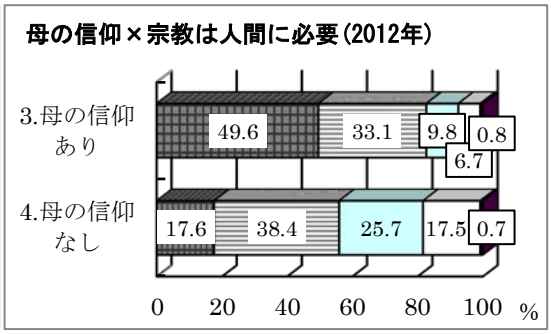


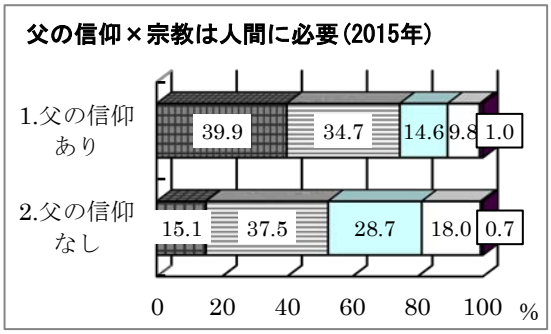


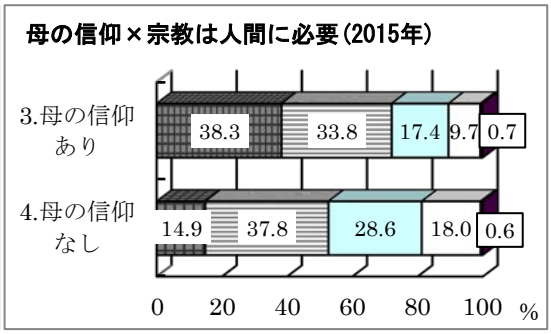










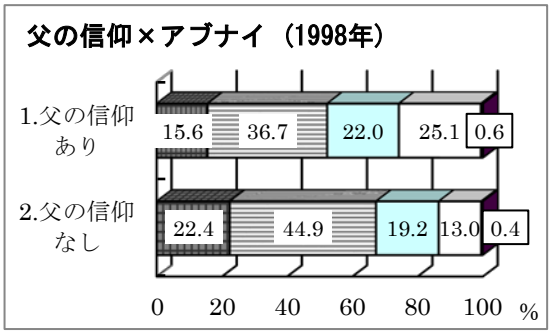


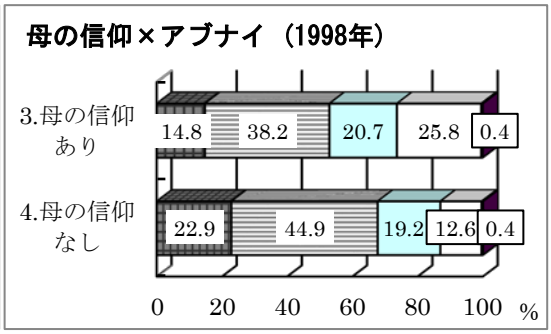
＊「宗教は人間に必要と思う」と回答する割合も、父母の信仰の有無との間に相関が見いだされる。

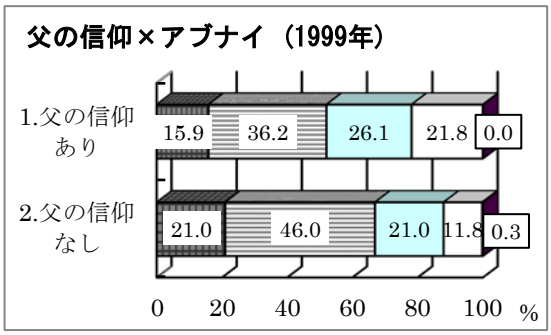
c) 宗教はアブナイと思うか

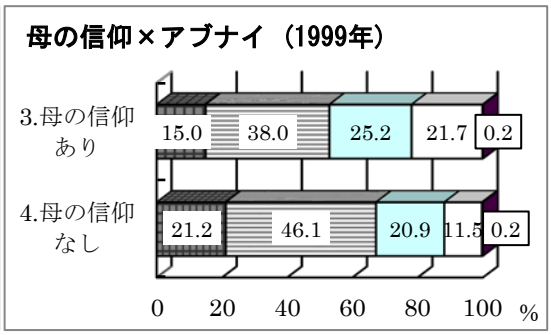
回答の選択肢と記号はｂと同じである。

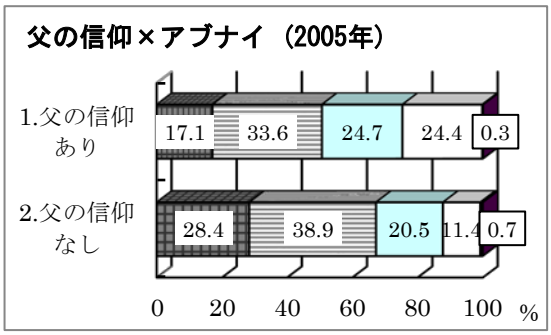
グラフ 13c1

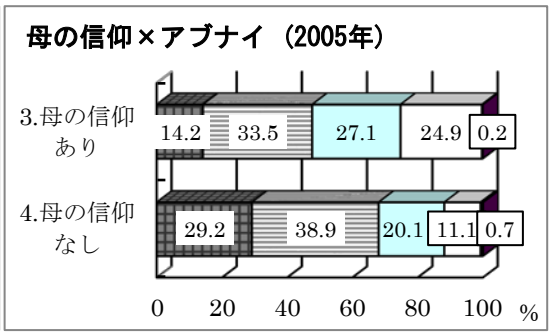


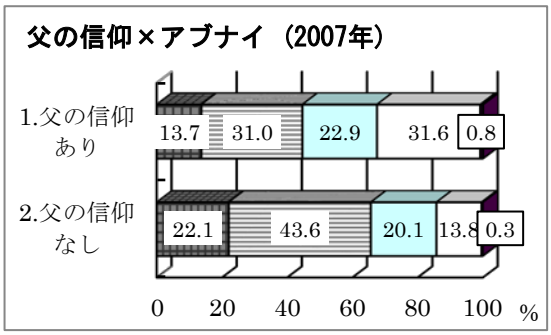


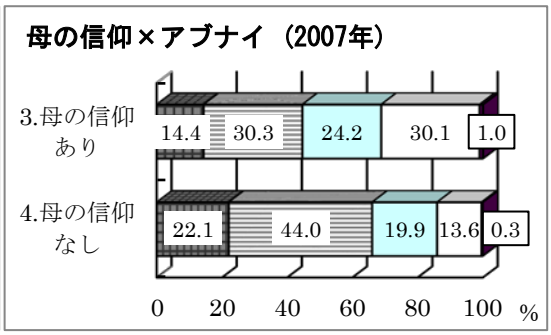


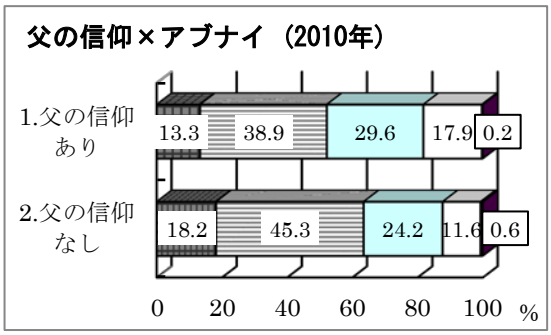


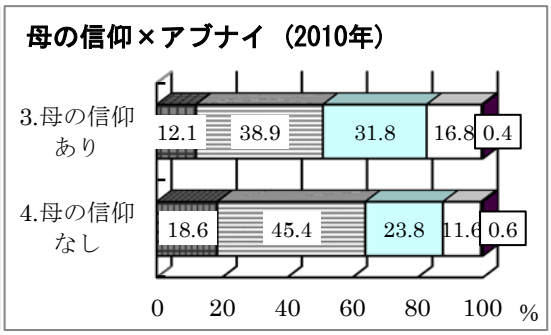


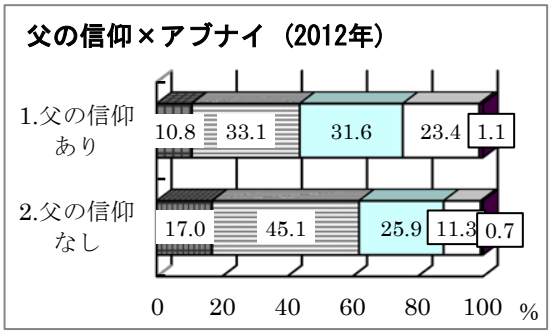


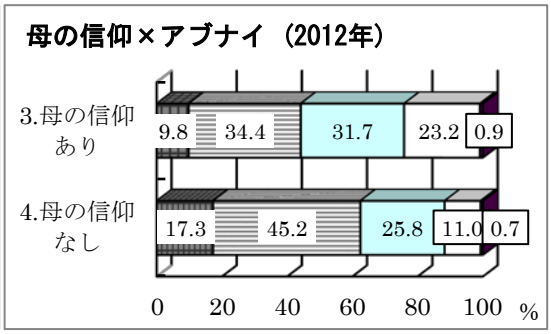


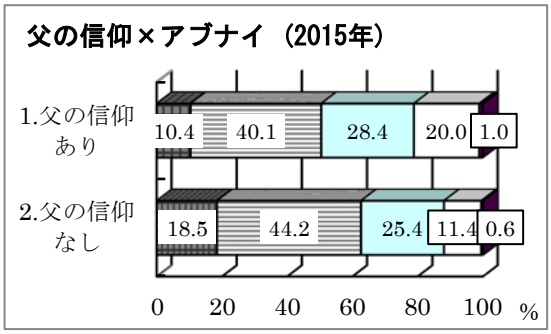


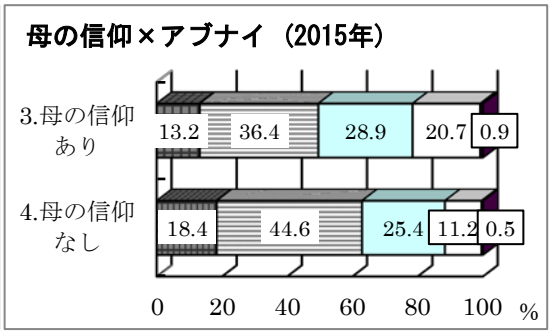












＊父母に信仰がある場合はそうでない場合に比べて、「宗教はアブナイ」と思う割合が低くなる、という逆の相関が見られる。ただ学生が信仰をもつ割合や宗教は人間に必要と思う割合との間の相関度に比べるとかなり弱い相関である。

第14章 性別との相関

占いに関しては性別による差が大きいので、どの程度の差があるかが分かりやすいように性別によるクロス集計を行った。星占い、手相、姓名判断、コンピュータ占い、血液型による性格判断について相関性を見ていく。

占いの場合、質問の形式が年によって異なっている。回答の選択肢の中の用語を変えた場合や、判断の基準を変えた場合がある。それぞれの項目で質問形式や回答の選択肢が変わった場合には、異なる表とグラフで示した。

質問内容

次にあげた占いについて「1.かなり当たると思う 2.当たることもあると思う 3.当たらない 4.関心がないのでどんなことをするのか知らない」のなかから、番号で答えて下さい。

（1995 年の場合）

1.生まれ月による星占い [ ]
2.手相 [ ]
3.姓名判断 [ ]
4.コンピュータ占い [ ]
5.血液型による性格判断 [ ]

以下の表で++等の記号は年度によって次の通りである。

1995 年、1999 年、2000 年

1.＋＋：かなり当たると思う	2.＋ ：当たることもあると思う
3.－－：当たらない	4.？ ：関心がないのでわからない
5.無回答	

2005 年

1.＋＋：信じる	2.＋ ：やや信じる
3.－－：あまり信じない	4.－－：信じない
5.？ ：この占いがどんなものか知らない	6.無回答

a）星占い

回答の選択肢の文言は年度によって次の通り少しずつ変えた。

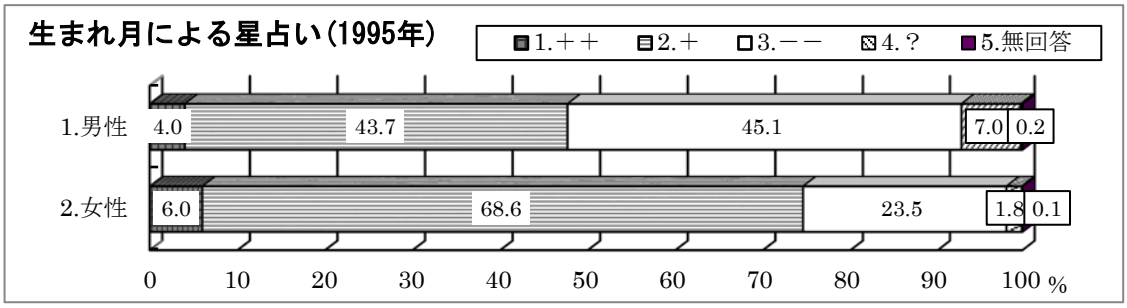
1995 年、1999 年は「生まれ月による星占い」

2000 年は「西洋星占い」

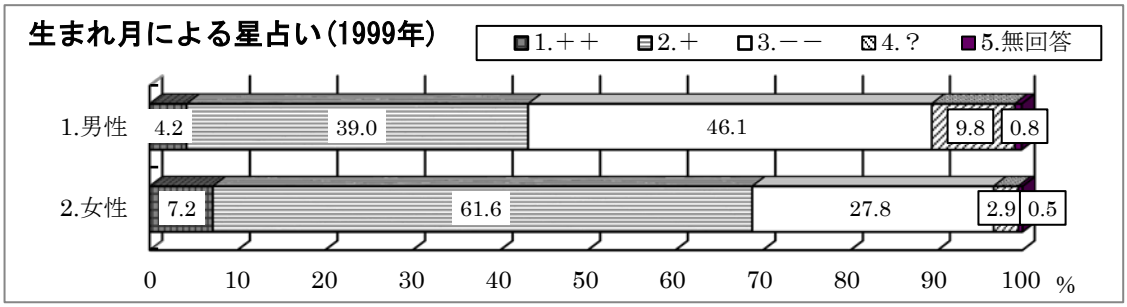
2005 年は「毎日テレビでやる星占い」

グラフ 14a1

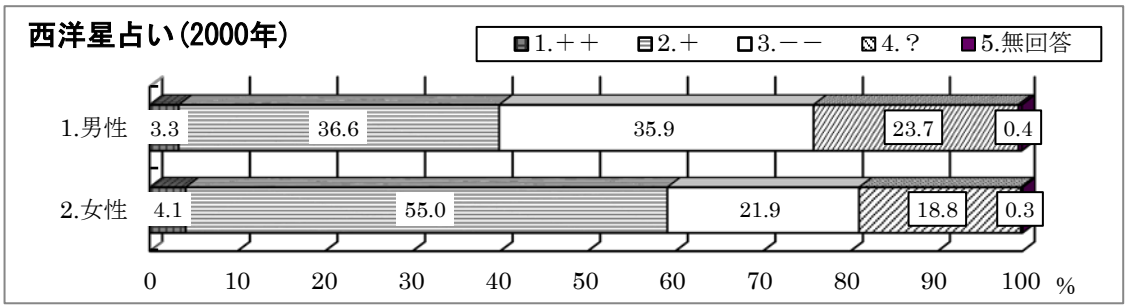
1995 年



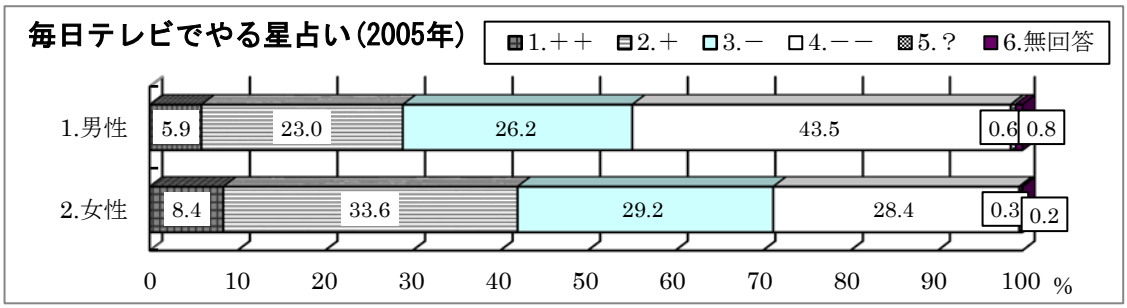
1999 年



2000 年



2005 年

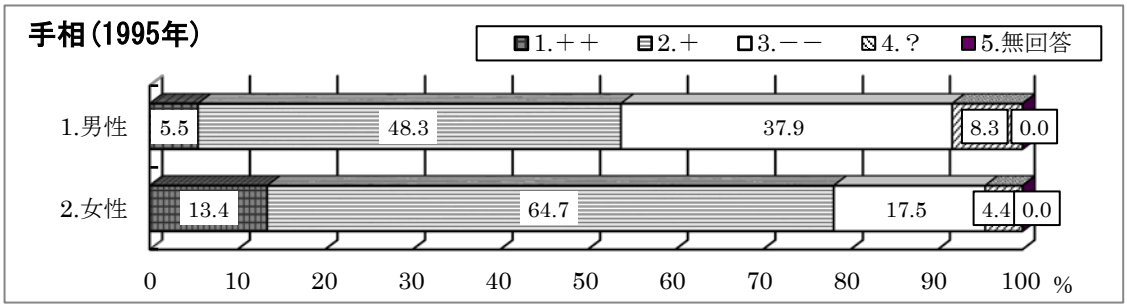


＊「++」で比較しても「++」と「+」を合わせて比較しても、男女差は常に一定程度ある。2倍まではいかないが、1.5倍前後はある。以下の占いでも似たような結果となった。

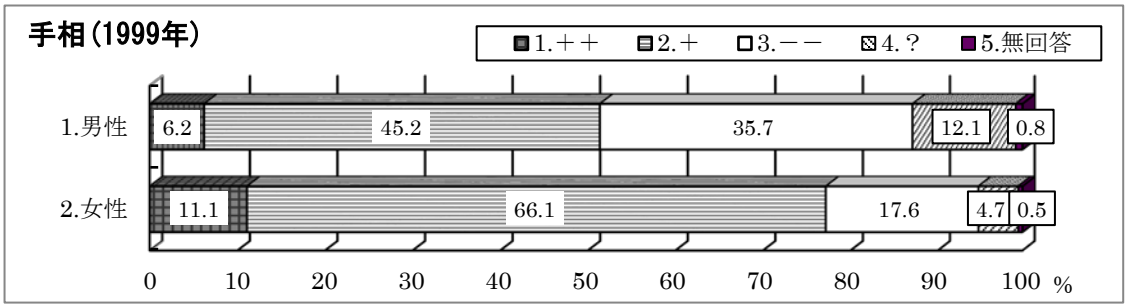
b) 手相

グラフ 14b1

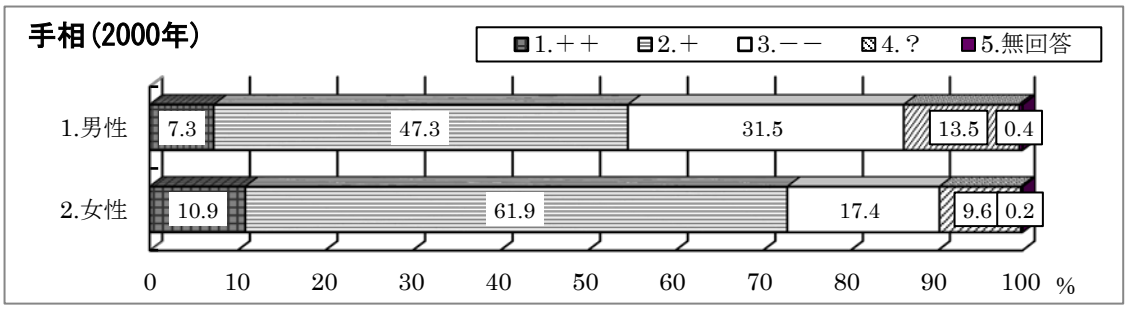
1995 年



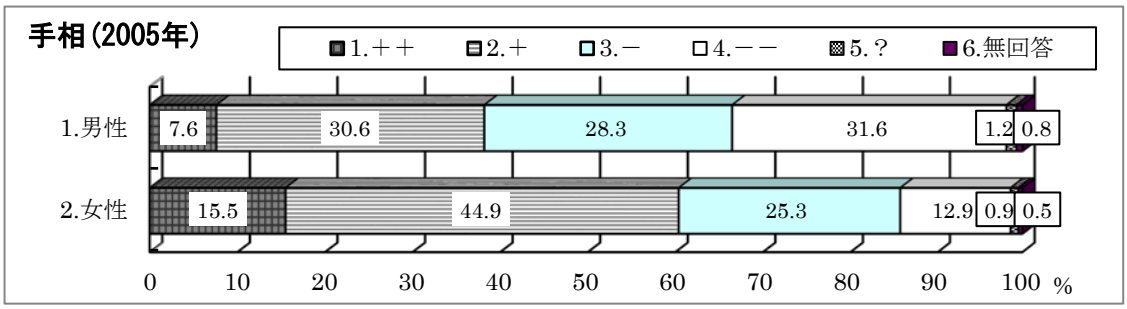
1999 年



2000 年



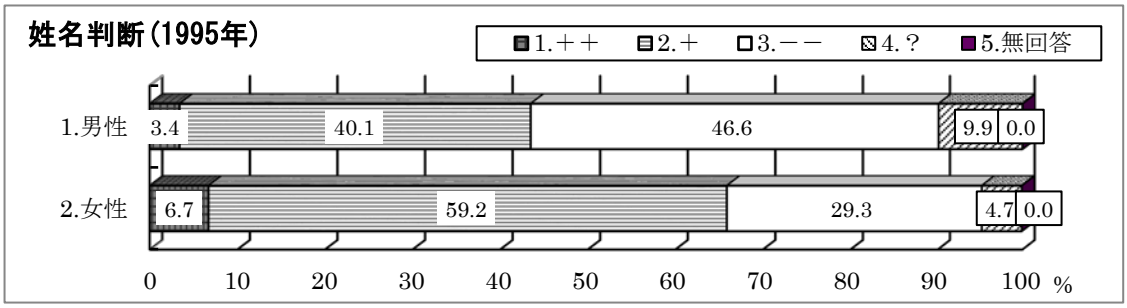
2005 年



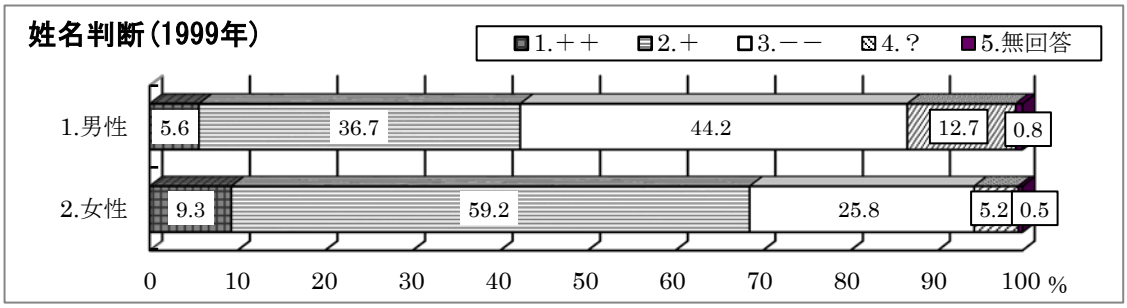
c) 姓名判断

グラフ 14c1

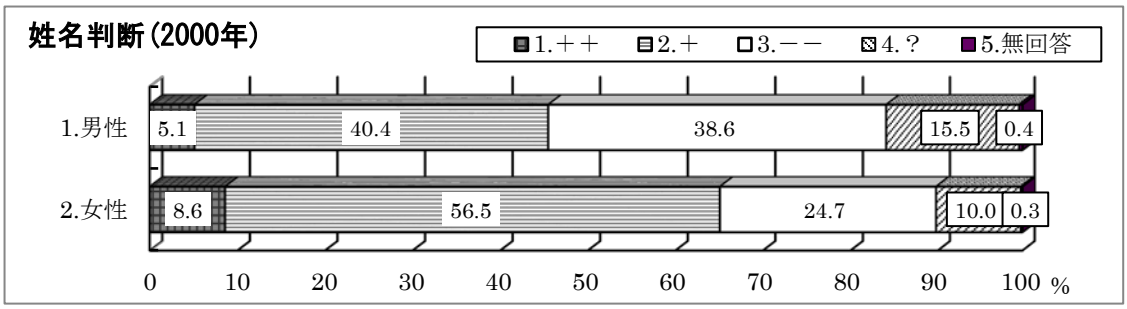
1995 年



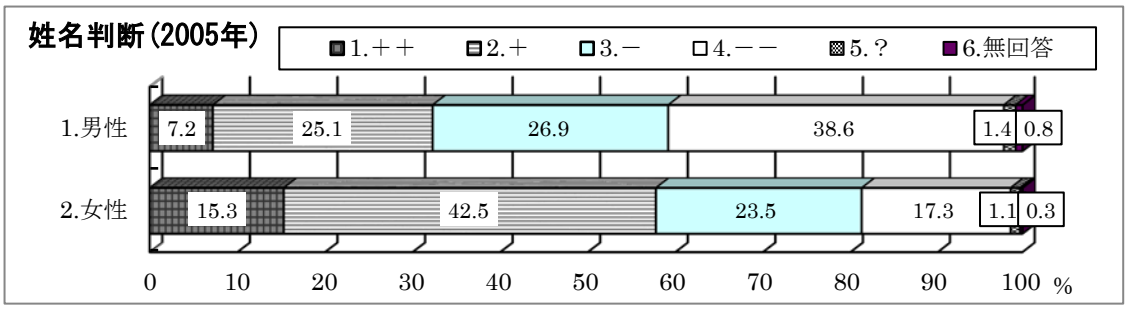
1999 年



2000 年



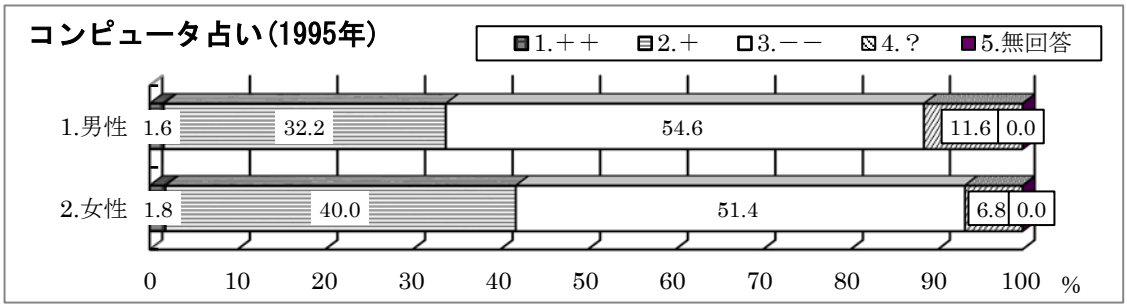
2005 年



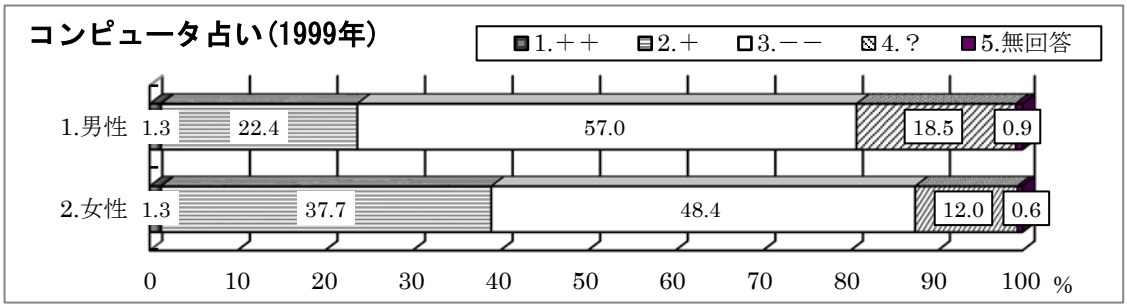
d) コンピュータ占い

グラフ 14d1

1995 年



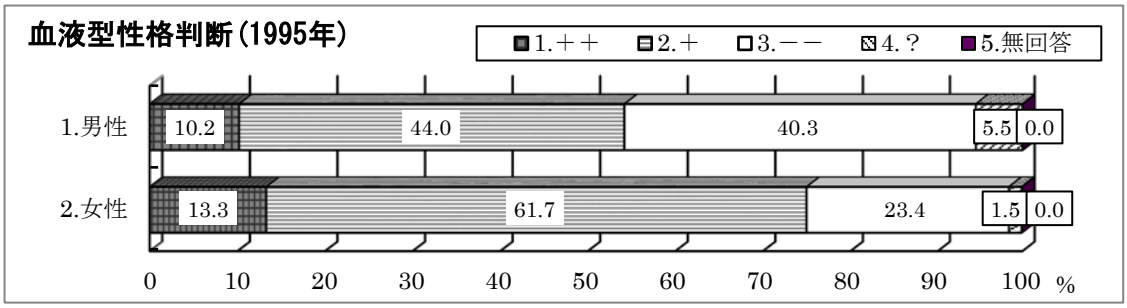
1999 年



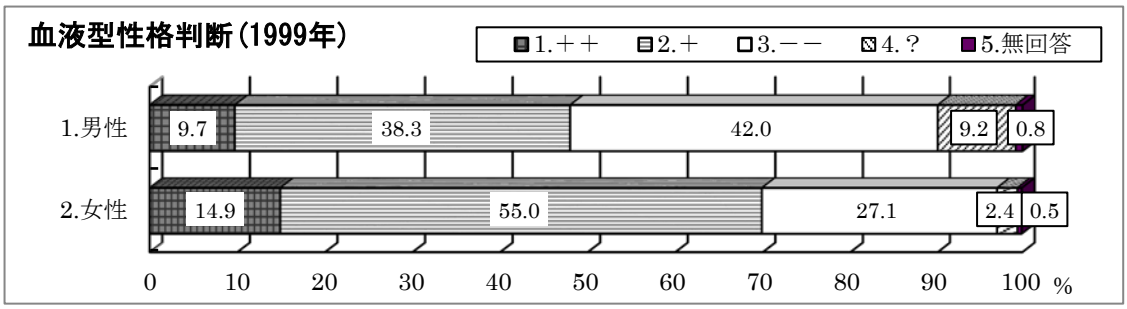
e) 血液型による性格判断

グラフ 14e1

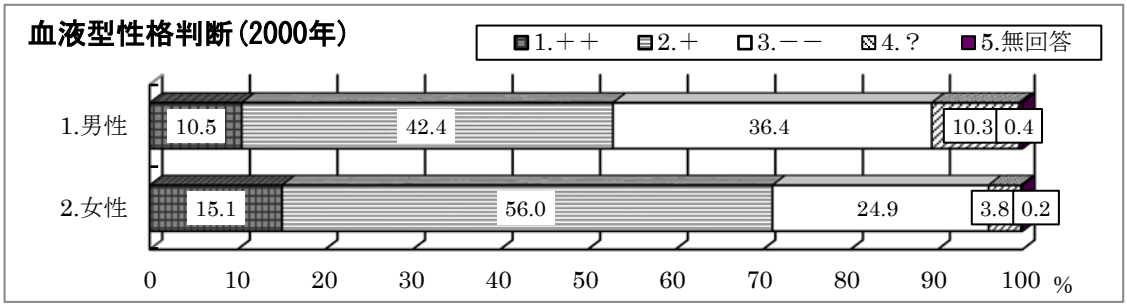
1995 年



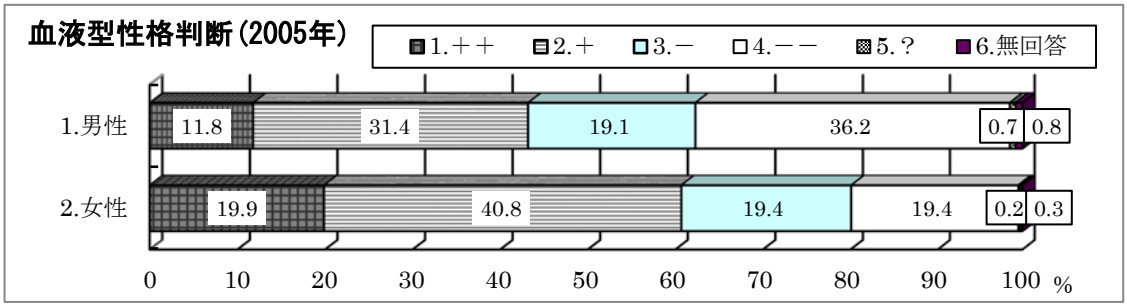
1999 年



2000 年


血液型性格判断(2000年)
1.＋＋
2.＋
3.－－
4.？
5.無回答
1.男性
10.5
42.4
36.4
10.3
0.4
2.女性
15.1
56.0
24.9
3.8
0.2
0
10
20
30
40
50
60
70
80
90
100
%

2005 年


血液型性格判断(2005年)
1.＋＋
2.＋
3.－
4.－－
5.？
6.無回答
1.男性
11.8
31.4
19.1
36.2
0.7
0.8
2.女性
19.9
40.8
19.4
19.4
0.2
0.3
0
10
20
30
40
50
60
70
80
90
100
%

第15章 卒業した高校の宗教系・非宗教系の別との相関

a) 宗教への関心

1996 年から 2015 年まで 11 回の調査結果でクロス集計した。宗教への関心の質問は 1995 年も行っているが、この年は卒業した高校の宗教系か非宗教系かが不明なので、96 年からのデータでクロス集計した。

高校が宗教系であったかそうでないかによる違いがある程度見られるものとそうでないものとがある。宗教への関心や宗教が必要と思うかどうかは明らかに差がある。霊魂の存在を信じるかには、若干の差が見られる。しかし、墓参り、あるいは占いに関してはほとんど違いが見られない。この点を確認する。

質問内容

あなたは宗教にどの程度関心がありますか。次のうちから選び、さらにそれぞれの質問に答えて下さい。

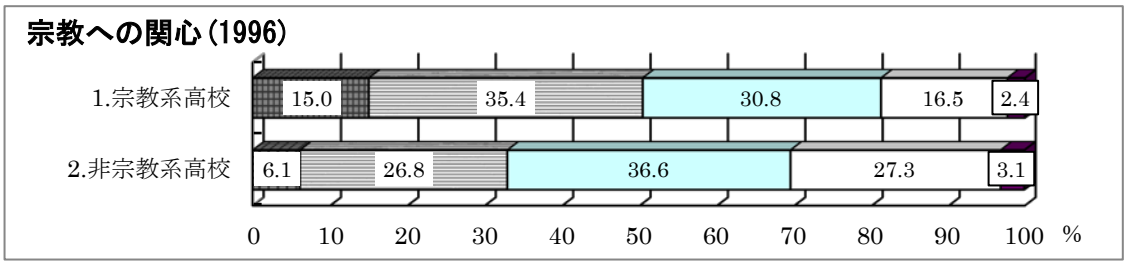
1.現在、信仰をもっている

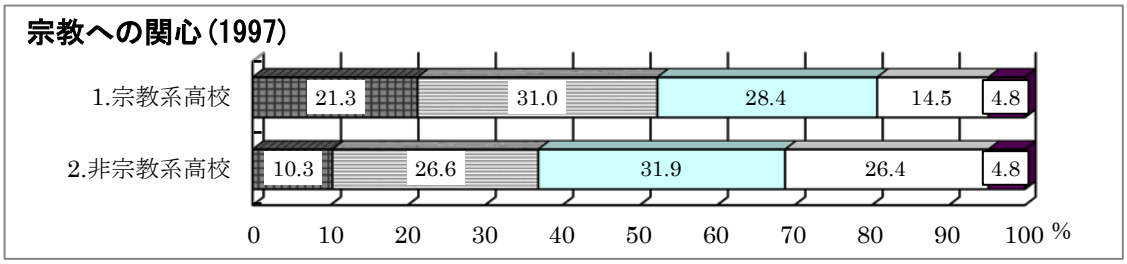
2.信仰はもっていないが、宗教に関心がある

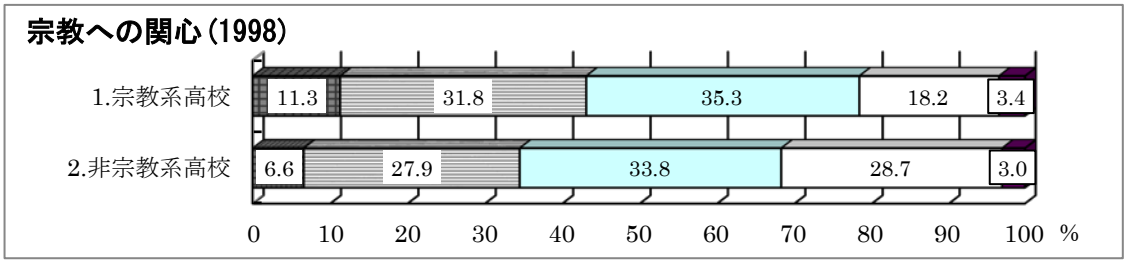
3.信仰はもっていないし、宗教にもあまり関心がない

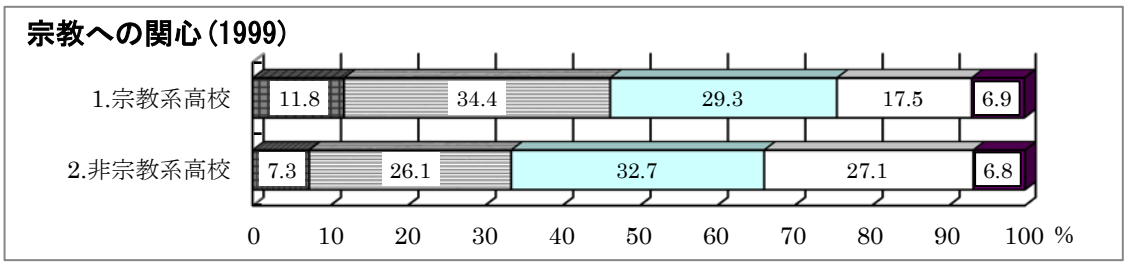
4.信仰はもっていないし、宗教にもまったく関心がない

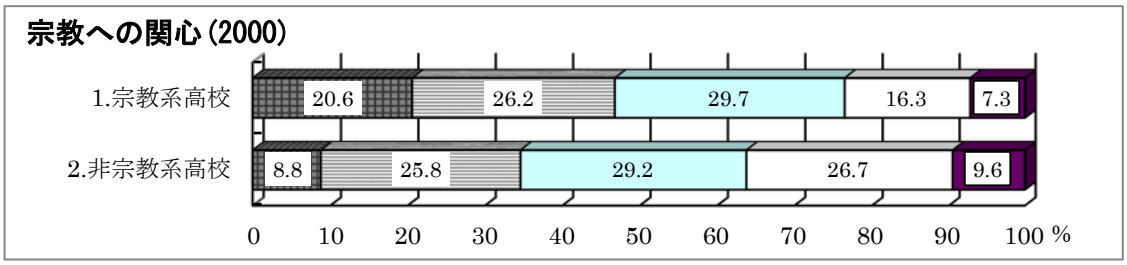
グラフ 15a1

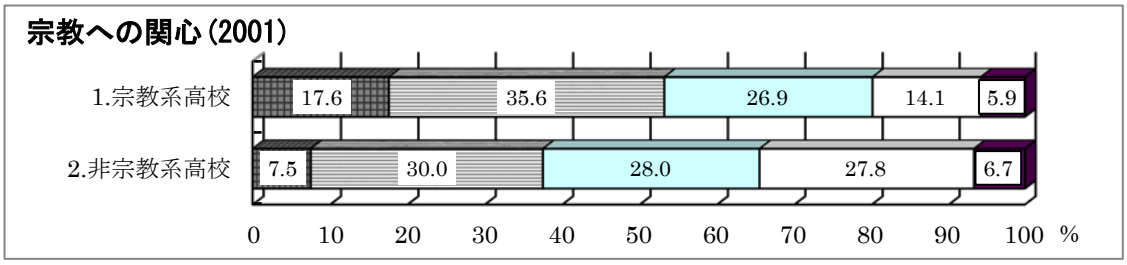


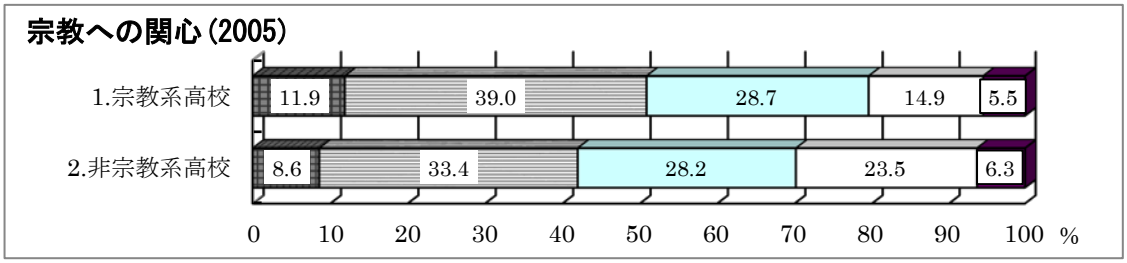


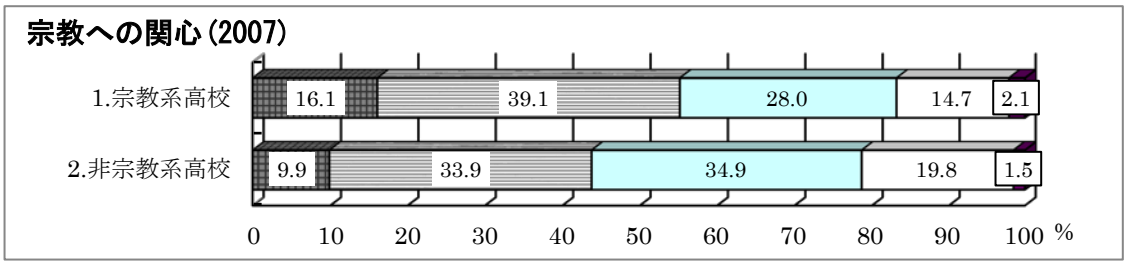


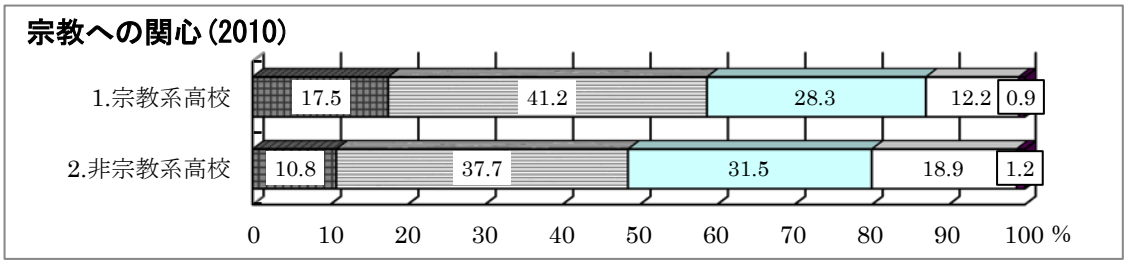

宗教への関心(1999)
1.宗教系高校
11.8
34.4
29.3
17.5
6.9
2.非宗教系高校
7.3
26.1
32.7
27.1
6.8
0 10 20 30 40 50 60 70 80 90 100 %

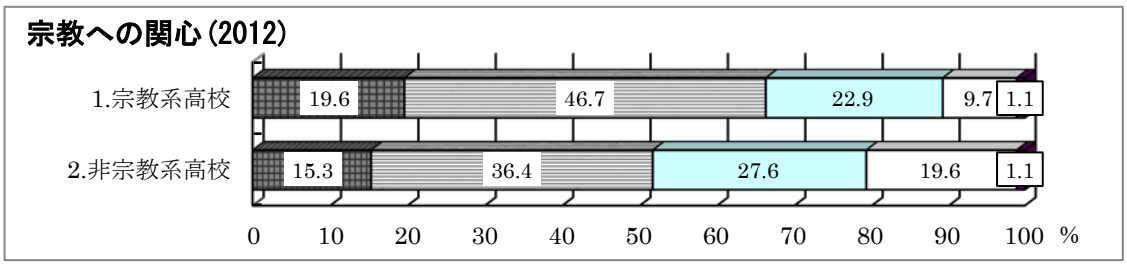

宗教への関心(2000)
1.宗教系高校
20.6
26.2
29.7
16.3
7.3
2.非宗教系高校
8.8
25.8
29.2
26.7
9.6
0 10 20 30 40 50 60 70 80 90 100 %

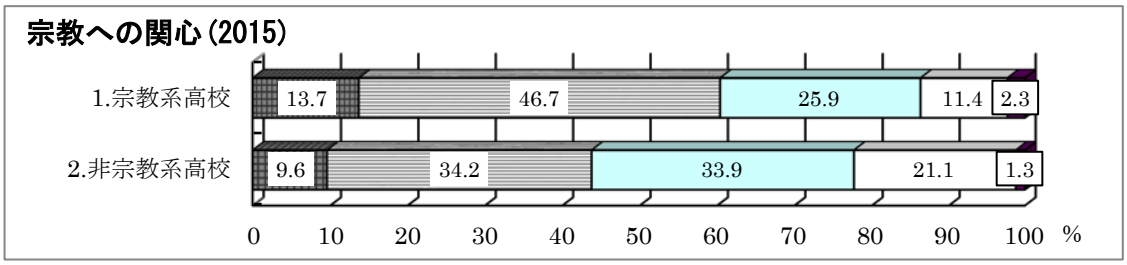

宗教への関心(2001)
1.宗教系高校
17.6
35.6
26.9
14.1
5.9
2.非宗教系高校
7.5
30.0
28.0
27.8
6.7
0 10 20 30 40 50 60 70 80 90 100 %


宗教への関心(2005)
1.宗教系高校
11.9
39.0
28.7
14.9
5.5
2.非宗教系高校
8.6
33.4
28.2
23.5
6.3
0 10 20 30 40 50 60 70 80 90 100 %


宗教への関心(2007)
1.宗教系高校
16.1
39.1
28.0
14.7
2.1
2.非宗教系高校
9.9
33.9
34.9
19.8
1.5
0 10 20 30 40 50 60 70 80 90 100 %


宗教への関心(2010)
1.宗教系高校
17.5
41.2
28.3
12.2
0.9
2.非宗教系高校
10.8
37.7
31.5
18.9
1.2
0 10 20 30 40 50 60 70 80 90 100 %





＊「現在、信仰をもっている」割合でみると、宗教系高校を卒業した回答者は非宗教系高校を卒業した回答者の平均の約1.8倍である。逆に「信仰はもっていないし、宗教にもまったく関心がない」割合は、非宗教系が宗教系の平均で約1.7倍である。

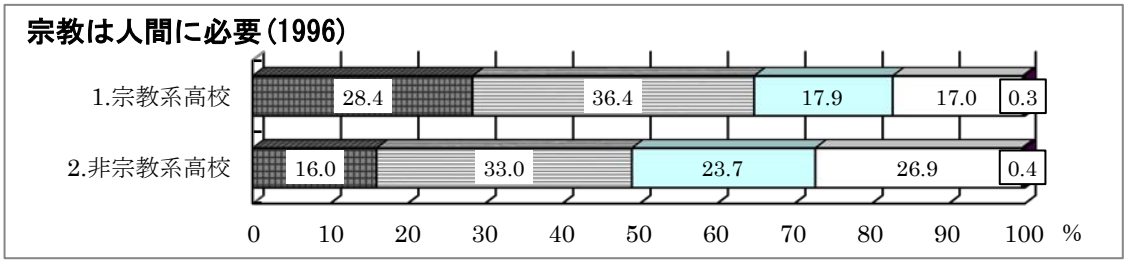
b) 宗教は人間に必要

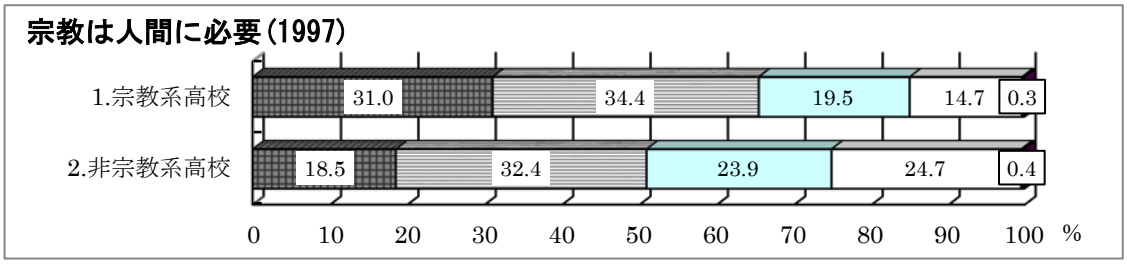
質問内容

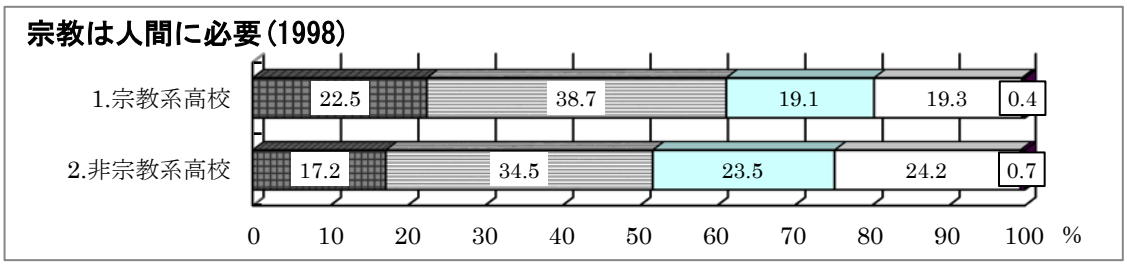
次のような意見について、「1.そう思う　2.どちらかといえばそう思う　3.どちらかといえばそう思わない　4.そう思わない」のいずれかの番号で答えて下さい。

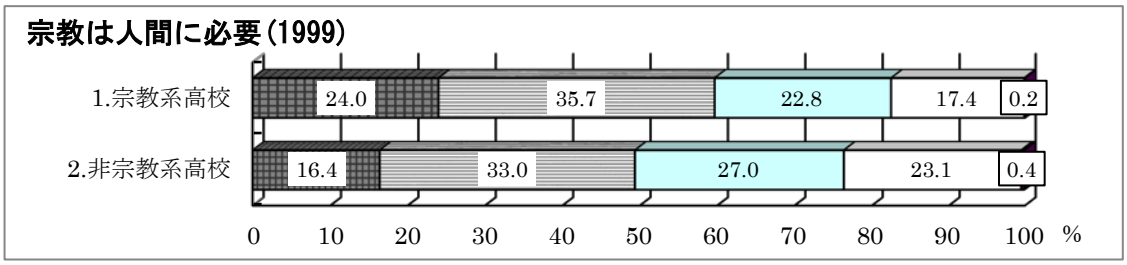
「どんなに科学が発達しても、宗教は人間に必要だ。」　　[　]

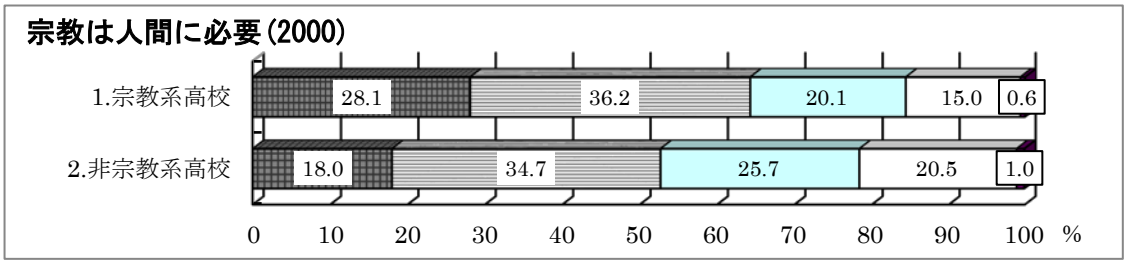
グラフ 15b1

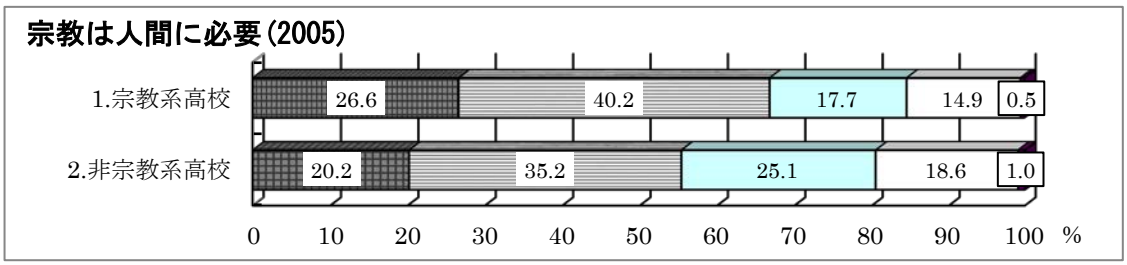


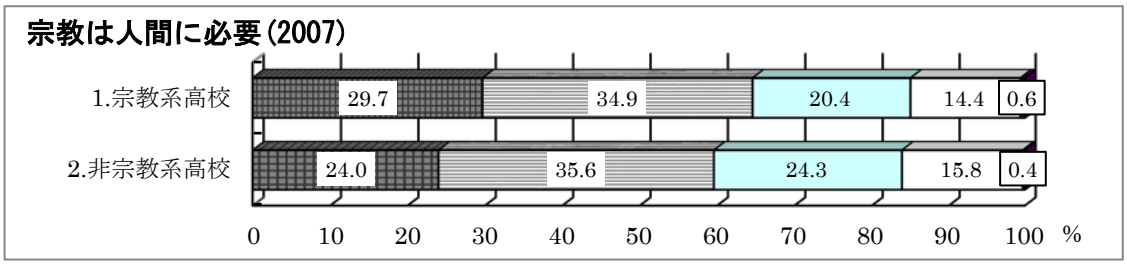


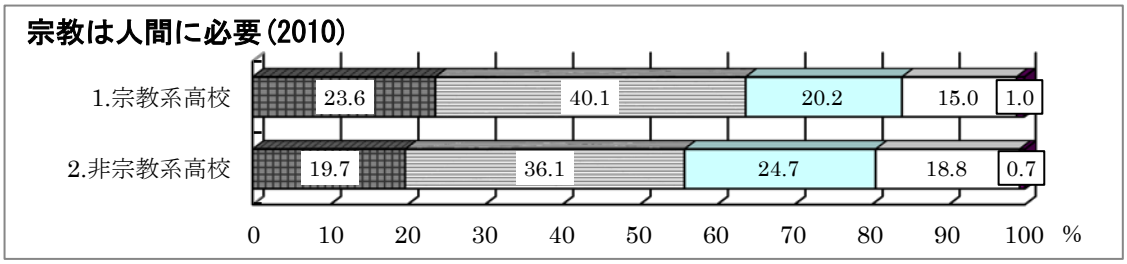

宗教は人間に必要(1998)
1.宗教系高校
22.5
38.7
19.1
19.3
0.4
2.非宗教系高校
17.2
34.5
23.5
24.2
0.7
0 10 20 30 40 50 60 70 80 90 100 %

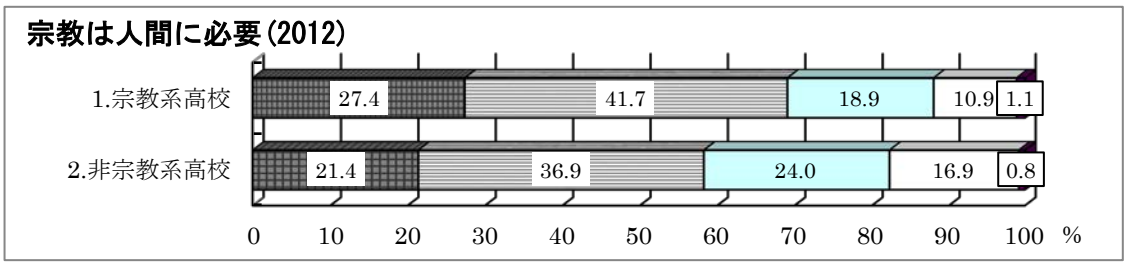

宗教は人間に必要(1999)
1.宗教系高校
24.0
35.7
22.8
17.4
0.2
2.非宗教系高校
16.4
33.0
27.0
23.1
0.4
0 10 20 30 40 50 60 70 80 90 100 %

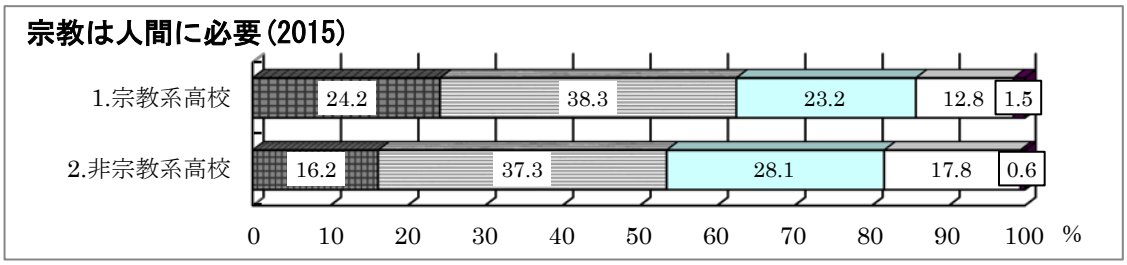

宗教は人間に必要(2000)
1.宗教系高校
28.1
36.2
20.1
15.0
0.6
2.非宗教系高校
18.0
34.7
25.7
20.5
1.0
0 10 20 30 40 50 60 70 80 90 100 %


宗教は人間に必要(2005)
1.宗教系高校
26.6
40.2
17.7
14.9
0.5
2.非宗教系高校
20.2
35.2
25.1
18.6
1.0
0 10 20 30 40 50 60 70 80 90 100 %


宗教は人間に必要(2007)
1.宗教系高校
29.7
34.9
20.4
14.4
0.6
2.非宗教系高校
24.0
35.6
24.3
15.8
0.4
0 10 20 30 40 50 60 70 80 90 100 %


宗教は人間に必要(2010)
1.宗教系高校
23.6
40.1
20.2
15.0
1.0
2.非宗教系高校
19.7
36.1
24.7
18.8
0.7
0 10 20 30 40 50 60 70 80 90 100 %





＊「どんなに科学が発達しても、宗教は人間に必要だ」と思う割合は、宗教系高校を卒業した学生の方が非宗教系高校を卒業した学生に比べ、平均で約1.4倍多い。

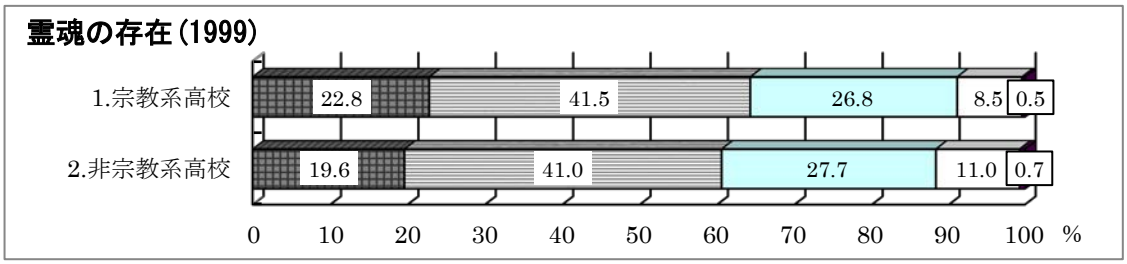
c) 霊魂の存在

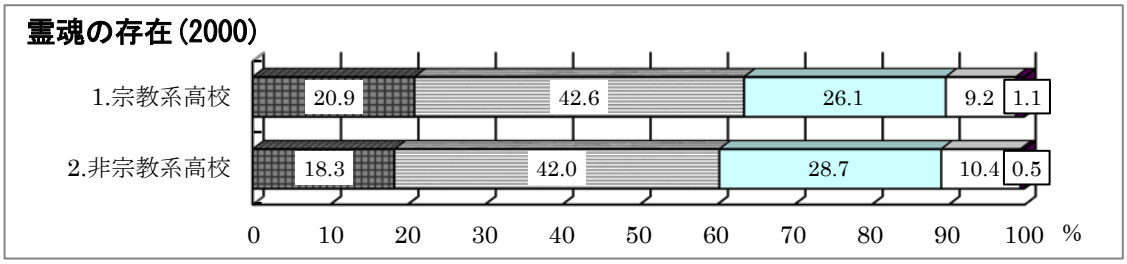
質問内容

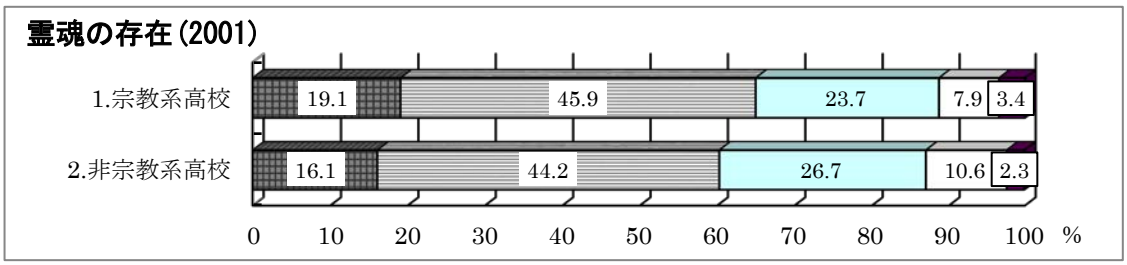
神や仏の存在について、あなたはどう思いますか。「1.信じる　2.ありうると思う　3.あまり信じない　4.否定する」のなかから、番号で答えて下さい。

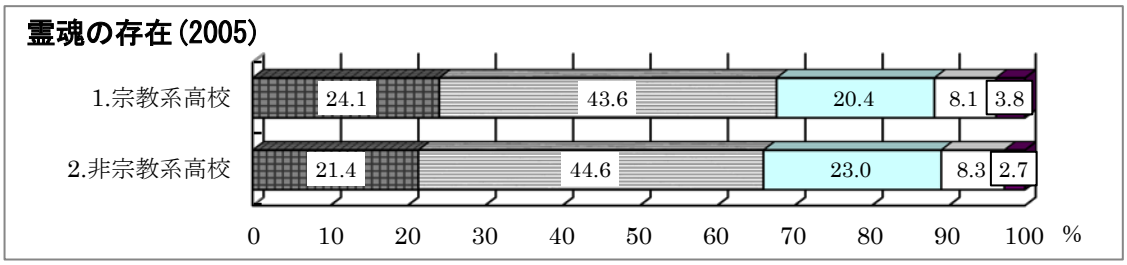
霊魂の存在[　　]

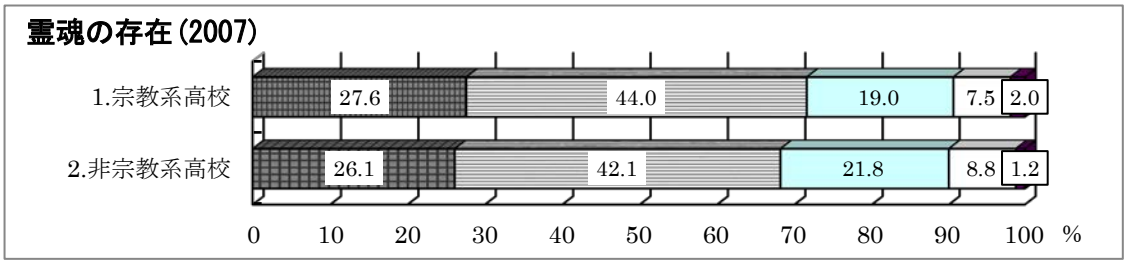
グラフ 15c1

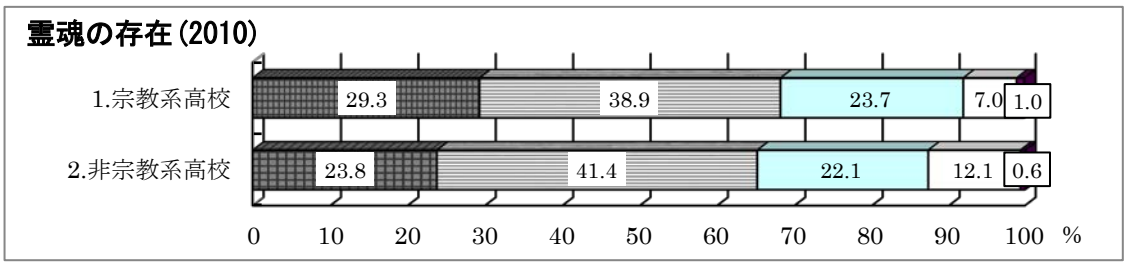


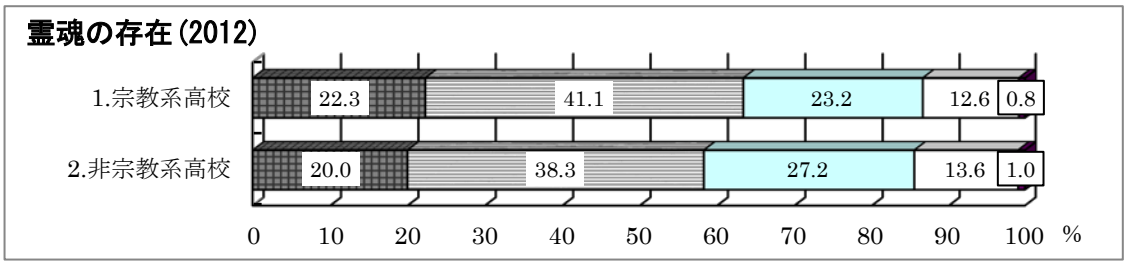


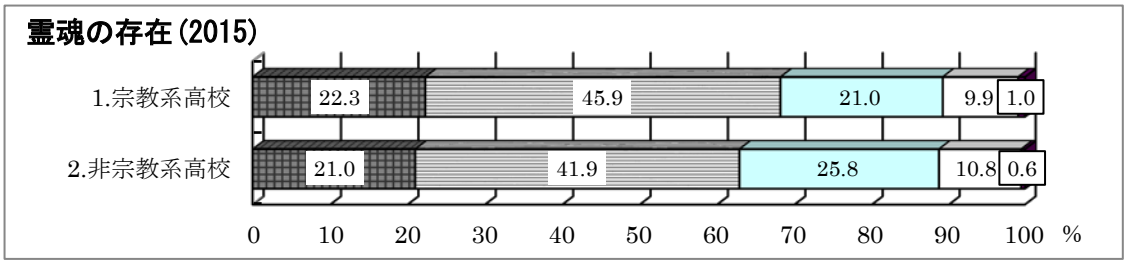

霊魂の存在(2001)
1.宗教系高校
19.1
45.9
23.7
7.9
3.4
2.非宗教系高校
16.1
44.2
26.7
10.6
2.3
0 10 20 30 40 50 60 70 80 90 100 %


霊魂の存在(2005)
1.宗教系高校
24.1
43.6
20.4
8.1
3.8
2.非宗教系高校
21.4
44.6
23.0
8.3
2.7
0 10 20 30 40 50 60 70 80 90 100 %


霊魂の存在(2007)
1.宗教系高校
27.6
44.0
19.0
7.5
2.0
2.非宗教系高校
26.1
42.1
21.8
8.8
1.2
0 10 20 30 40 50 60 70 80 90 100 %


霊魂の存在(2010)
1.宗教系高校
29.3
38.9
23.7
7.0
1.0
2.非宗教系高校
23.8
41.4
22.1
12.1
0.6
0 10 20 30 40 50 60 70 80 90 100 %


霊魂の存在(2012)
1.宗教系高校
22.3
41.1
23.2
12.6
0.8
2.非宗教系高校
20.0
38.3
27.2
13.6
1.0
0 10 20 30 40 50 60 70 80 90 100 %


霊魂の存在(2015)
1.宗教系高校
22.3
45.9
21.0
9.9
1.0
2.非宗教系高校
21.0
41.9
25.8
10.8
0.6
0 10 20 30 40 50 60 70 80 90 100 %

＊霊魂の存在を信じるかどうかの割合は、宗教系高校と非宗教系高校での差が小さく、「信じる」という回答で比較すると、平均で宗教系高校が非宗教系の約1.1倍でしかない。

d) 墓参り

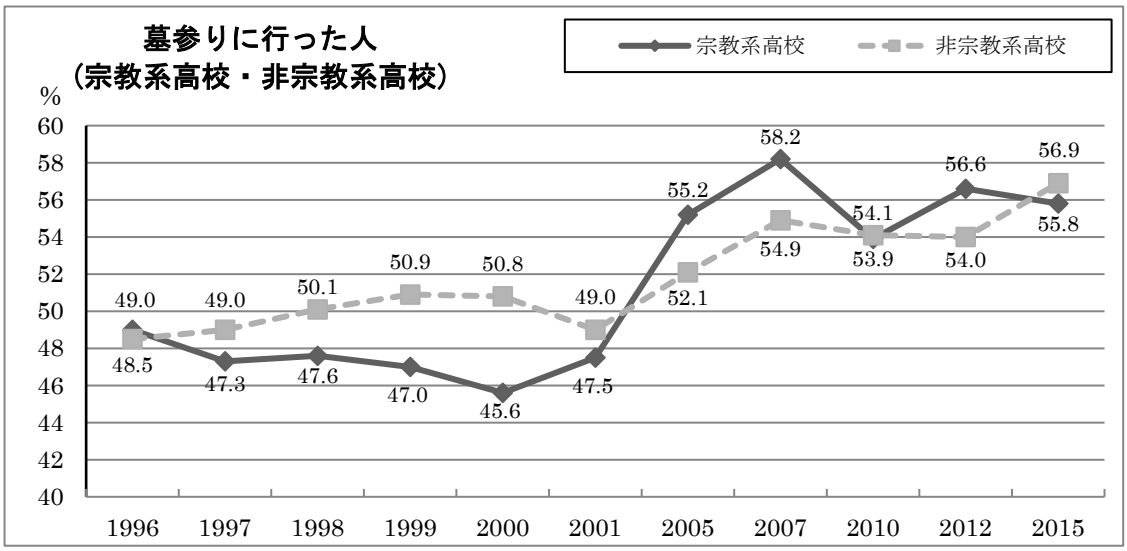
質問内容

あなたは去年のお盆の墓参りはどうしましたか。次のうちから選んで下さい。

1.家族と行った　2.行った家族もいるが自分は行かなかった　3.家族とは別に自分だけで行った

4.家族の誰も行かなかった　5.その他　[　]

グラフ 15d1



e) 占いの経験

占いについては質問形式がすべて統一されているわけではないので、同じ質問のもので比較する。

質問内容

(1996 年)

次にあげた占いについて、やったことがあるものすべてに○をつけて下さい。

1.学校や家などで友達と「こっくりさん」(または「エンゼルさん」「キューピットさん」)をやったことがある。

2.血液型による性格判断などの本を買ったことがある。

3.街頭や店でプロの占い師に手相、人相などを占ってもらったことがある。

4.店などでプロの占い師にタロット占いをしてもらったことがある。

5.お金を払って、姓名判断をしてもらったことがある。

6.店などでコンピュータ占いをしたことがある。

7.星占いをするために定期的に読む本や雑誌がある。

8.以上の他にお金を払ってやってもらった占いがある。[具体的に　]

(1999 年)

次にあげた占いについて、あなたがやったことのあるものすべてに○をつけて下さい。

1. 学校や家などで友達と「こっくりさん」(または「エンゼルさん」「キューピッドさん」)をやったことがある。

2. 街頭や店でプロの占い師に手相、人相などを占ってもらったことがある。

3. 店などでプロの占い師にタロット占いをしてもらったことがある。

4. 星占いをするために定期的に読む本や雑誌がある。
5. 一日の運勢をみるために定期的にみるテレビ番組がある。
6. 神社・仏閣のおみくじをひいたことがある。
7. 店などでコンピューター占いをしたことがある。
8. インターネット上の有料の占いをしたことがある。

＜宗教系高校＞

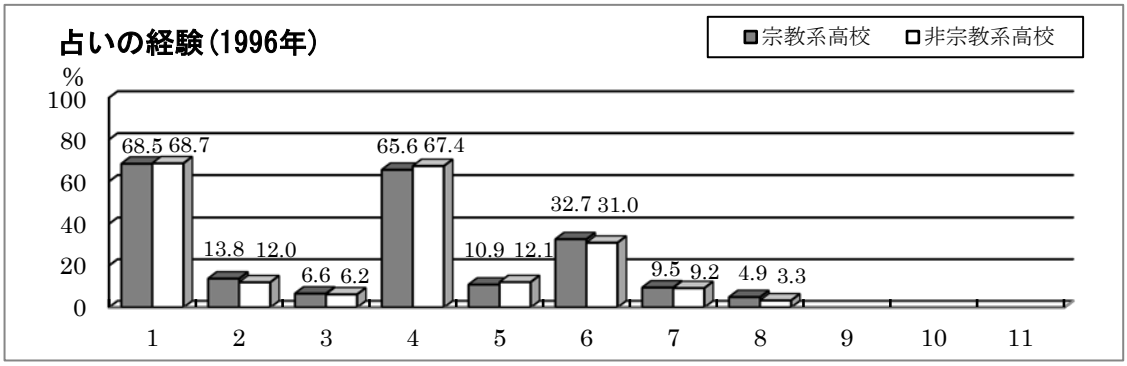
表 15e1

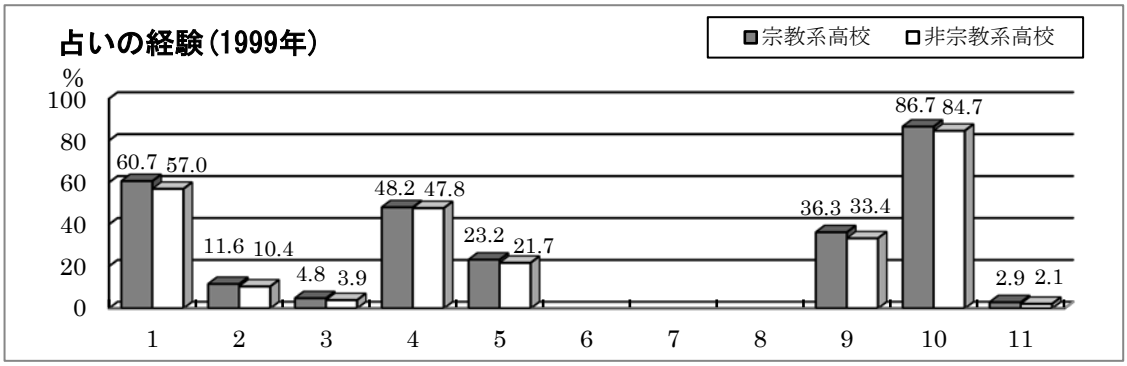
	1996	1999
1.こっくりさん	68.5	60.7
2.手相、人相	13.8	11.6
3.タロット	6.6	4.8
4.コンピュータ占い	65.6	48.2
5.星占い	10.9	23.2
6.血液型性格判断	32.7	—
7.姓名判断	9.5	—
8.その他	4.9	—
9.テレビ番組	—	36.3
10.神社仏閣のおみくじ	—	86.7
11.インターネット上の有料の占い	—	2.9

＜非宗教系高校＞

	1996	1999
1.こっくりさん	68.7	57.0
2.手相、人相	12.0	10.4
3.タロット	6.2	3.9
4.コンピュータ占い	67.4	47.8
5.星占い	12.1	21.7
6.血液型性格判断	31.0	—
7.姓名判断	9.2	—
8.その他	3.3	—
9.テレビ番組	—	33.4
10.神社仏閣のおみくじ	—	84.7
11.インターネット上の有料の占い	—	2.1

グラフ 15e1





第16 章 学年別との相関

回答者は大半が大学の 1 年生から 4 年生までであるが、留年して 5 年以上在学している人や大学院生も若干含まれている。ここでは大学 1 年生～4 年生の学年別をいくつかの質問項目とクロスさせて相関がどの程度あるか調べた。これは大学に在籍していることで変わっていく意見や行動があるかについての参考となるデータとすることを目的としている。

学年別の回答者数では各調査とも 1 年生がもっとも多い。具体的な数値は「調査の概要」の「6. 回答者の学年」に一覧表を掲げておいた。2001 年の 35.2%を除いた 11 回の調査において、1 年生が占める割合は 40～50%である。学年があがるにつれて割合が下がり、4 年生では 10%未満になる。しかし 4 年生の人数がもっとも少ない 1998 年でも 230 人が回答しており、比較も意味があると考える。

学年別とのクロス集計の対象とした質問項目は、宗教の勧誘に関することがら、霊魂の存在、死後の世界という宗教観、勧誘の経験、宗教についての意見、宗教教育についての意見である。

a) 宗教の勧誘の経験

2000 年と 2005 年には宗教の勧誘を受けた経験に関する質問をした。当然のことながら、学年があがるにつれて経験した割合が増えている。

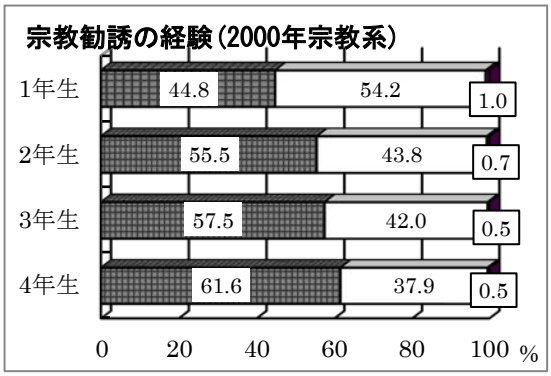
質問内容

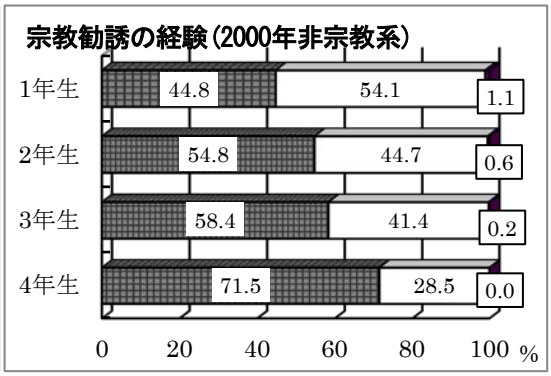
あなたは見知らぬ人から宗教の勧誘を受けたことがありますか。　1.はい　　2.いいえ

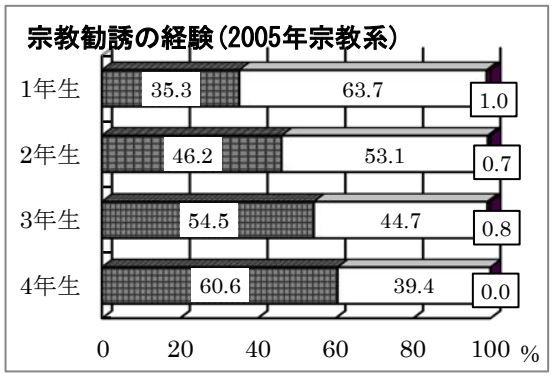
回答の選択肢

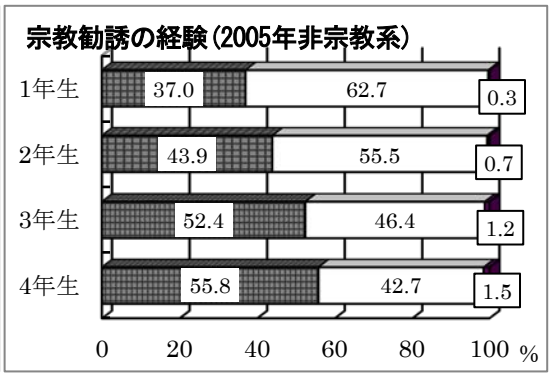
1.はい　2.いいえ　3.無回答

グラフ 16a1









b）宗教は人間に必要か

経年比較で示した通り、宗教の必要性については2001年を除く11回の調査で質問している。これについての学年別の変化を見ることで、大学における教育の影響を推測できる。1年生の場合は、ほぼ高校までの経験に基づいて答えていることになるが、4年生の場合は大学での経験が少なくとも3年は加わっていることになる。

質問内容

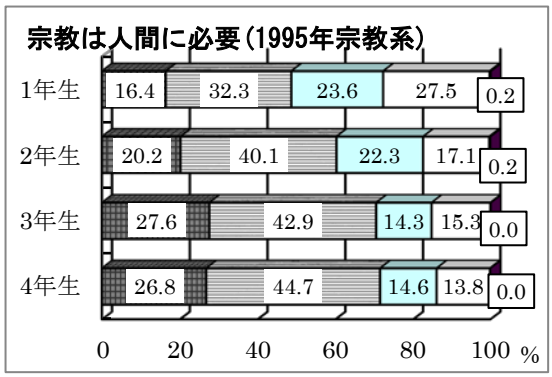
次のような意見について、「1.そう思う　2.どちらかといえばそう思う　3.どちらかといえばそう思わない　4.そう思わない」のいずれかの番号で答えて下さい。

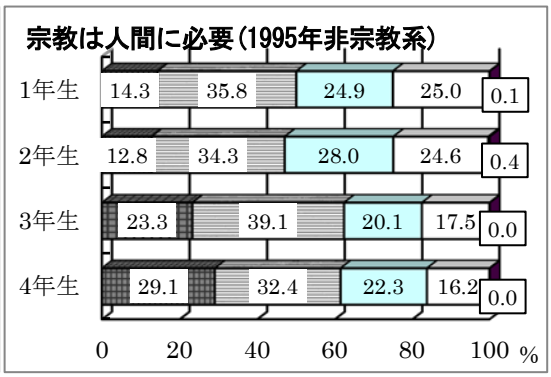
「どんなに科学が発達しても、宗教は人間に必要だ。」　［　］

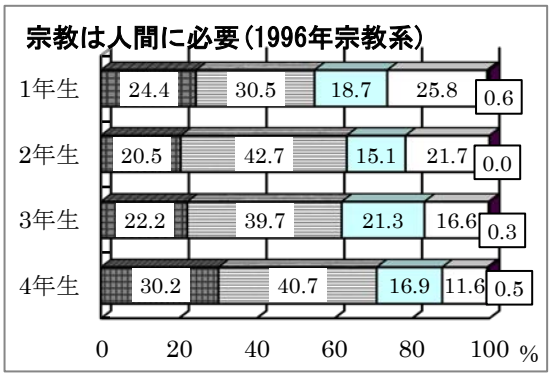
回答の選択肢

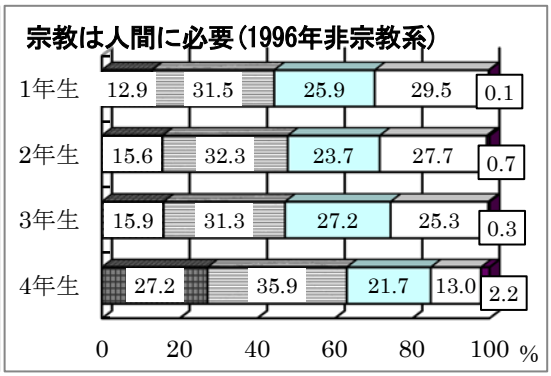
1.そう思う　2.どちらかといえばそう思う
3.どちらかといえばそう思わない　4.そう思わない
5.無回答

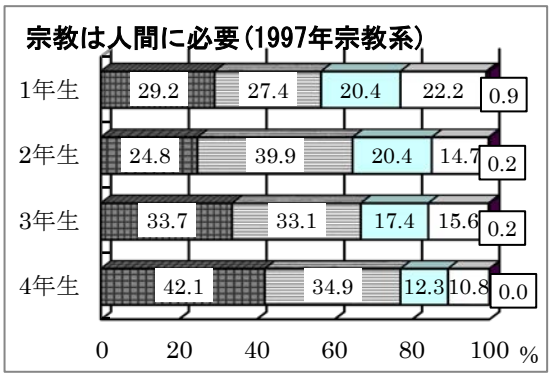
グラフ16b1

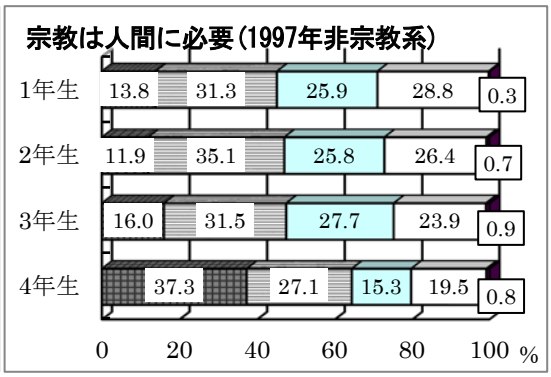


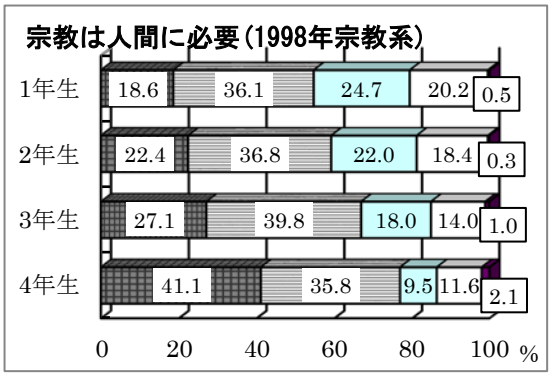


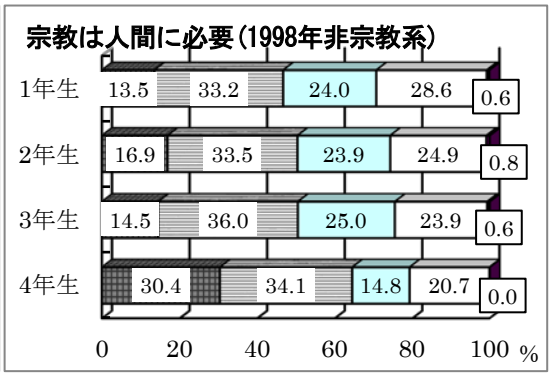

宗教は人間に必要（1996年宗教系）
1年生 24.4 30.5 18.7 25.8 0.6
2年生 20.5 42.7 15.1 21.7 0.0
3年生 22.2 39.7 21.3 16.6 0.3
4年生 30.2 40.7 16.9 11.6 0.5
0 20 40 60 80 100 %

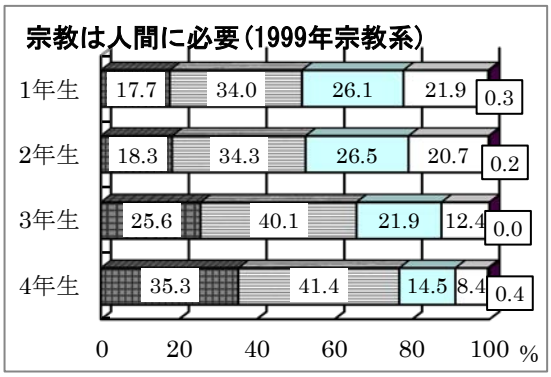

宗教は人間に必要（1996年非宗教系）
1年生 12.9 31.5 25.9 29.5 0.1
2年生 15.6 32.3 23.7 27.7 0.7
3年生 15.9 31.3 27.2 25.3 0.3
4年生 27.2 35.9 21.7 13.0 2.2
0 20 40 60 80 100 %

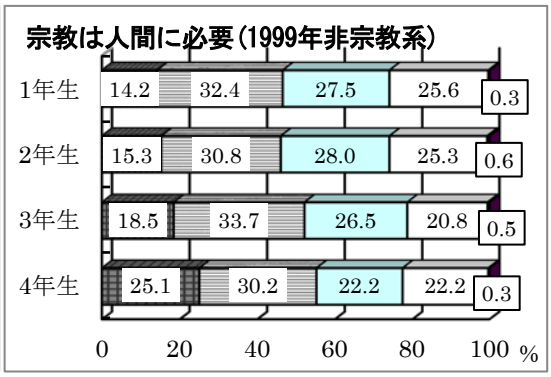

宗教は人間に必要（1997年宗教系）
1年生 29.2 27.4 20.4 22.2 0.9
2年生 24.8 39.9 20.4 14.7 0.2
3年生 33.7 33.1 17.4 15.6 0.2
4年生 42.1 34.9 12.3 10.8 0.0
0 20 40 60 80 100 %

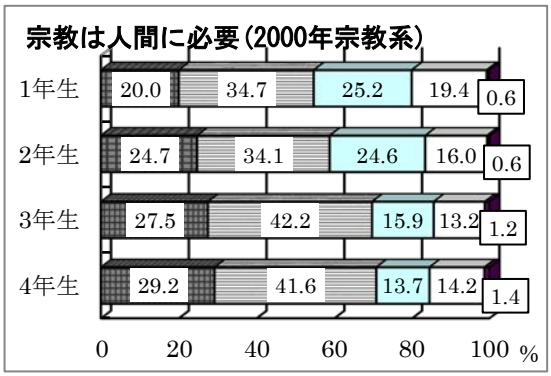

宗教は人間に必要（1997年非宗教系）
1年生 13.8 31.3 25.9 28.8 0.3
2年生 11.9 35.1 25.8 26.4 0.7
3年生 16.0 31.5 27.7 23.9 0.9
4年生 37.3 27.1 15.3 19.5 0.8
0 20 40 60 80 100 %

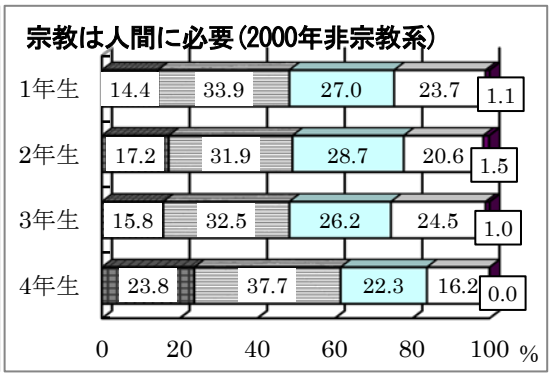

宗教は人間に必要（1998年宗教系）
1年生 18.6 36.1 24.7 20.2 0.5
2年生 22.4 36.8 22.0 18.4 0.3
3年生 27.1 39.8 18.0 14.0 1.0
4年生 41.1 35.8 9.5 11.6 2.1
0 20 40 60 80 100 %

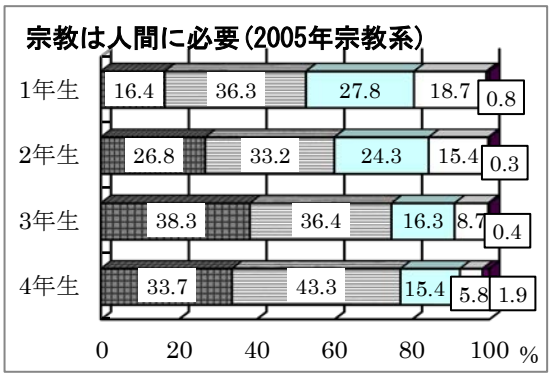

宗教は人間に必要（1998年非宗教系）
1年生 13.5 33.2 24.0 28.6 0.6
2年生 16.9 33.5 23.9 24.9 0.8
3年生 14.5 36.0 25.0 23.9 0.6
4年生 30.4 34.1 14.8 20.7 0.0
0 20 40 60 80 100 %

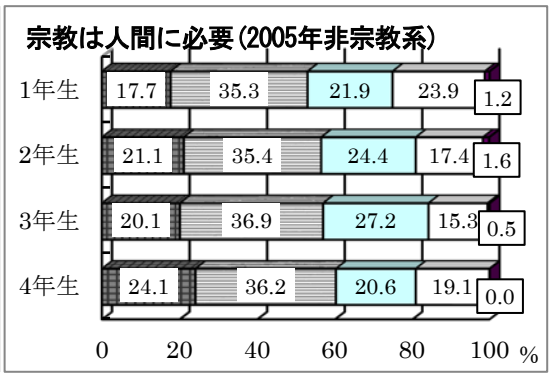

宗教は人間に必要（1999年宗教系）
1年生 17.7 34.0 26.1 21.9 0.3
2年生 18.3 34.3 26.5 20.7 0.2
3年生 25.6 40.1 21.9 12.4 0.0
4年生 35.3 41.4 14.5 8.4 0.4
0 20 40 60 80 100 %

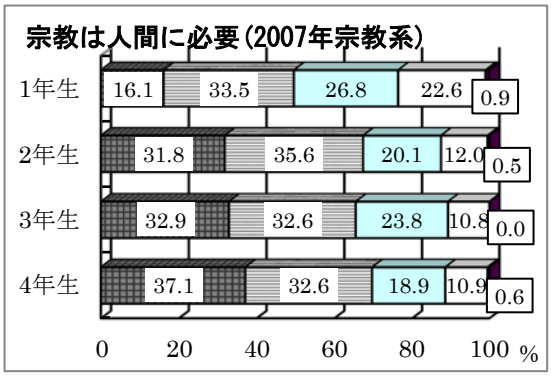

宗教は人間に必要（1999年非宗教系）
1年生 14.2 32.4 27.5 25.6 0.3
2年生 15.3 30.8 28.0 25.3 0.6
3年生 18.5 33.7 26.5 20.8 0.5
4年生 25.1 30.2 22.2 22.2 0.3
0 20 40 60 80 100 %

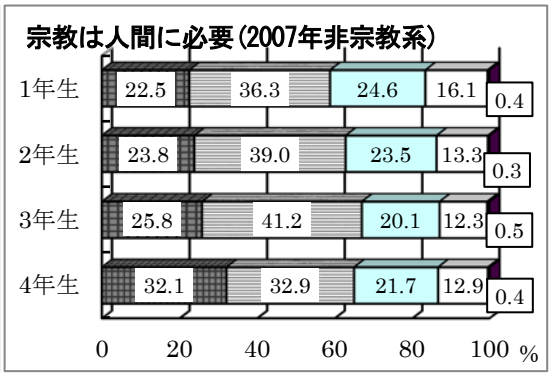

宗教は人間に必要(2000年宗教系)
1年生 20.0 34.7 25.2 19.4 0.6
2年生 24.7 34.1 24.6 16.0 0.6
3年生 27.5 42.2 15.9 13.2 1.2
4年生 29.2 41.6 13.7 14.2 1.4
0 20 40 60 80 100 %

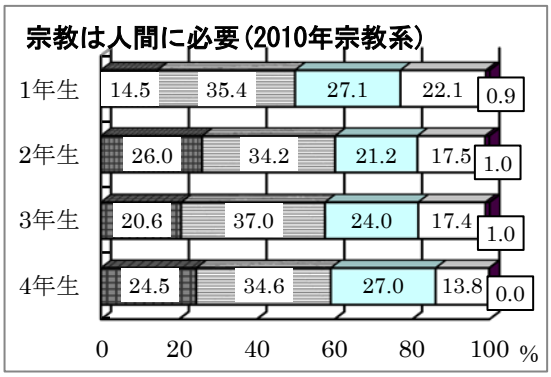

宗教は人間に必要(2000年非宗教系)
1年生 14.4 33.9 27.0 23.7 1.1
2年生 17.2 31.9 28.7 20.6 1.5
3年生 15.8 32.5 26.2 24.5 1.0
4年生 23.8 37.7 22.3 16.2 0.0
0 20 40 60 80 100 %

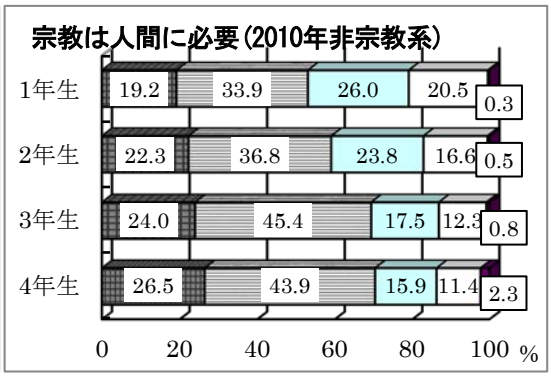

宗教は人間に必要(2005年宗教系)
1年生 16.4 36.3 27.8 18.7 0.8
2年生 26.8 33.2 24.3 15.4 0.3
3年生 38.3 36.4 16.3 8.7 0.4
4年生 33.7 43.3 15.4 5.8 1.9
0 20 40 60 80 100 %

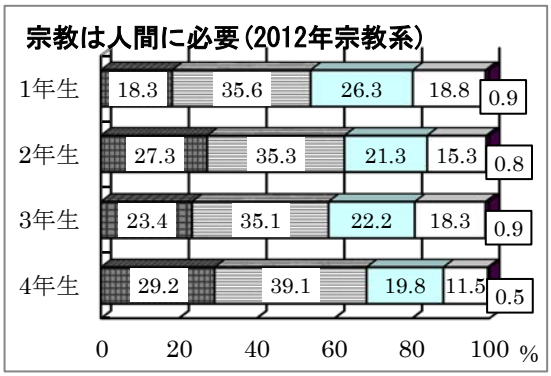

宗教は人間に必要(2005年非宗教系)
1年生 17.7 35.3 21.9 23.9 1.2
2年生 21.1 35.4 24.4 17.4 1.6
3年生 20.1 36.9 27.2 15.3 0.5
4年生 24.1 36.2 20.6 19.1 0.0
0 20 40 60 80 100 %

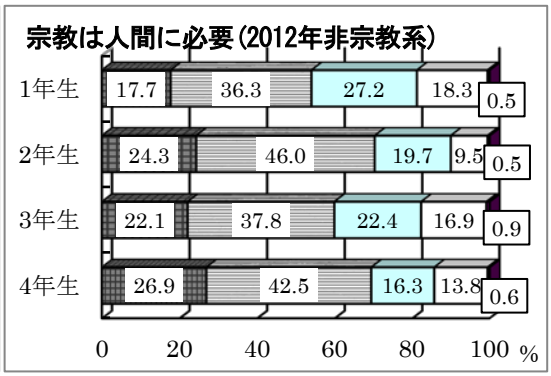

宗教は人間に必要(2007年宗教系)
1年生 16.1 33.5 26.8 22.6 0.9
2年生 31.8 35.6 20.1 12.0 0.5
3年生 32.9 32.6 23.8 10.8 0.0
4年生 37.1 32.6 18.9 10.9 0.6
0 20 40 60 80 100 %

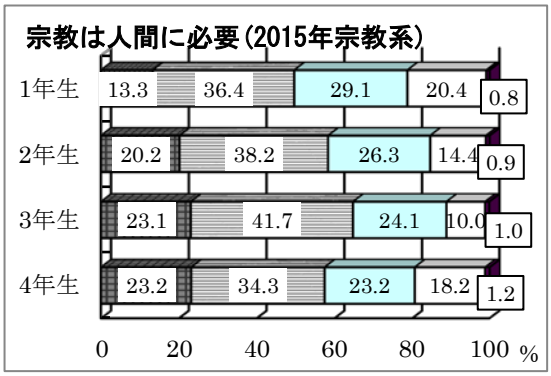

宗教は人間に必要(2007年非宗教系)
1年生 22.5 36.3 24.6 16.1 0.4
2年生 23.8 39.0 23.5 13.3 0.3
3年生 25.8 41.2 20.1 12.3 0.5
4年生 32.1 32.9 21.7 12.9 0.4
0 20 40 60 80 100 %

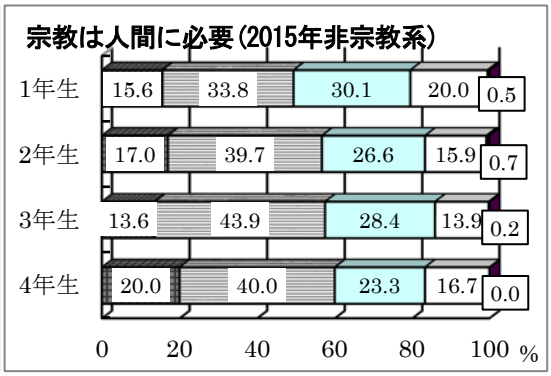

宗教は人間に必要(2010年宗教系)
1年生 14.5 35.4 27.1 22.1 0.9
2年生 26.0 34.2 21.2 17.5 1.0
3年生 20.6 37.0 24.0 17.4 1.0
4年生 24.5 34.6 27.0 13.8 0.0
0 20 40 60 80 100 %


宗教は人間に必要(2010年非宗教系)
1年生 19.2 33.9 26.0 20.5 0.3
2年生 22.3 36.8 23.8 16.6 0.5
3年生 24.0 45.4 17.5 12.3 0.8
4年生 26.5 43.9 15.9 11.4 2.3
0 20 40 60 80 100 %









＊学年を経るごとに、「科学が発達しても宗教は人間に必要」と思う割合は少しずつ増加の傾向にある。学年が上がるとともに、この問に対し肯定的回答をする割合が高くなるが、例外的な年もある。ただし3年生、4年生となると回答者の絶対数が少なくなるので、誤差も大きくなる。

c) 宗教はアブナイと思うか

宗教をネガティブにとらえる割合については、1998 年以降、7 回の調査で質問している。これが大学生活の中でどう変化したかを見る上での参考にするためにクロス集計である。

質問内容

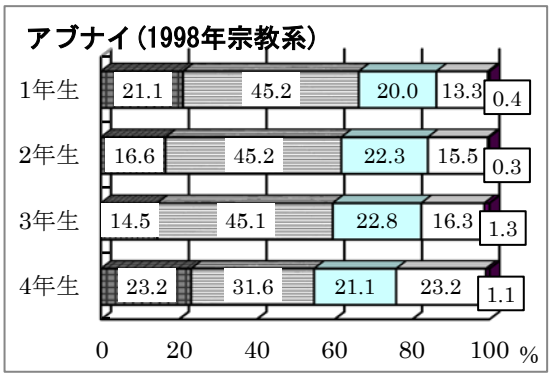
次のような意見について、「1.そう思う 2.どちらかといえばそう思う 3.どちらかといえばそう思わない 4.そう思わない」のいずれかの番号で答えて下さい。

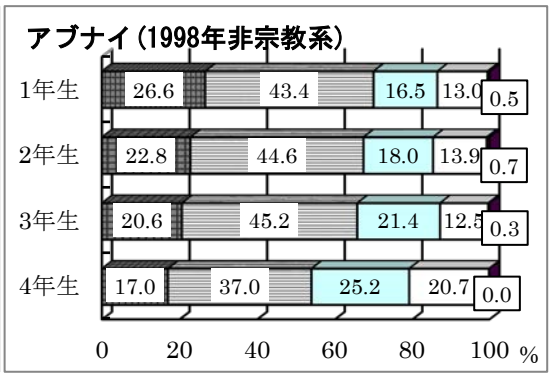
「一般的に宗教は、アブナイというイメージがある」 [ ]

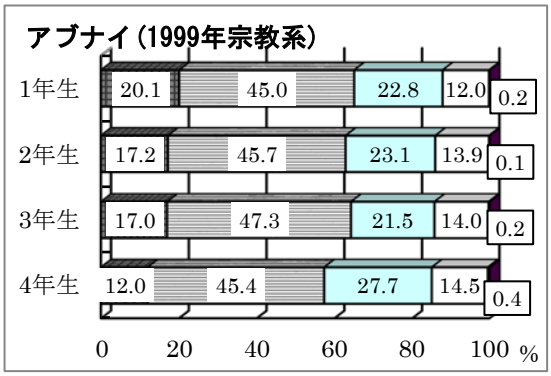
回答の選択肢

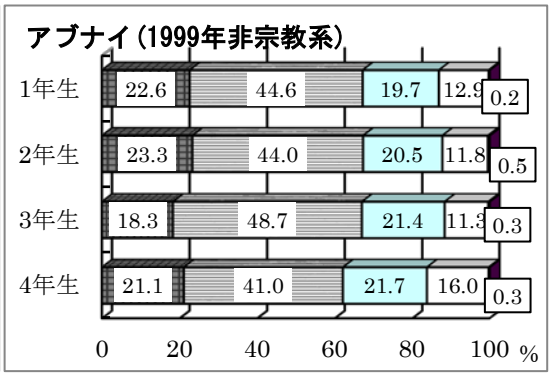
1.そう思う	2.どちらかといえばそう思う
3.どちらかといえばそう思わない	4.そう思わない
5.無回答	

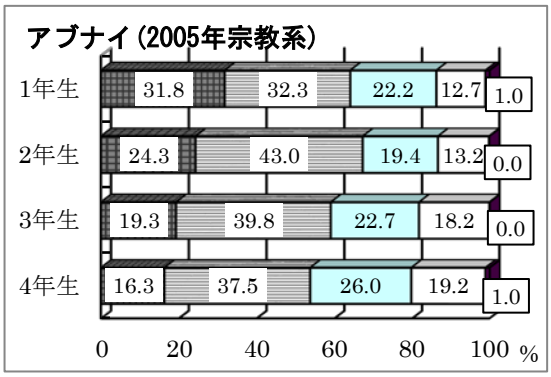
グラフ 16c1

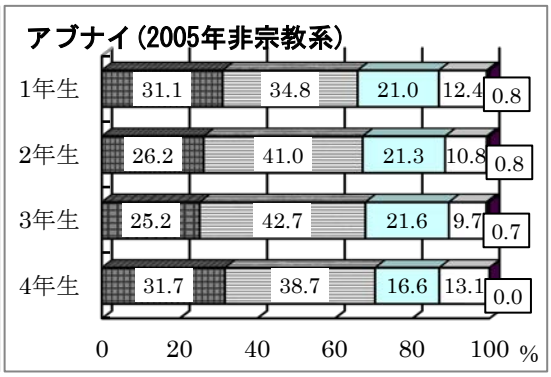

アブナイ (1998年宗教系)
1年生 21.1 45.2 20.0 13.3 0.4
2年生 16.6 45.2 22.3 15.5 0.3
3年生 14.5 45.1 22.8 16.3 1.3
4年生 23.2 31.6 21.1 23.2 1.1
0 20 40 60 80 100 %

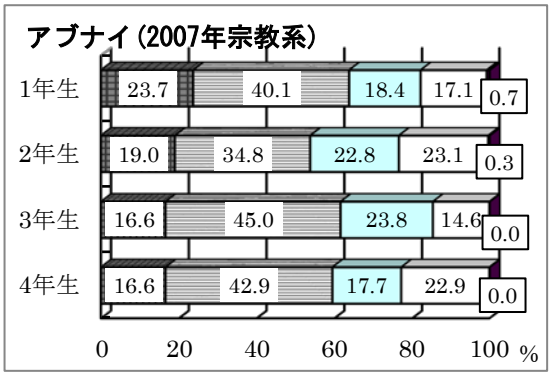

アブナイ (1998年非宗教系)
1年生 26.6 43.4 16.5 13.0 0.5
2年生 22.8 44.6 18.0 13.9 0.7
3年生 20.6 45.2 21.4 12.5 0.3
4年生 17.0 37.0 25.2 20.7 0.0
0 20 40 60 80 100 %

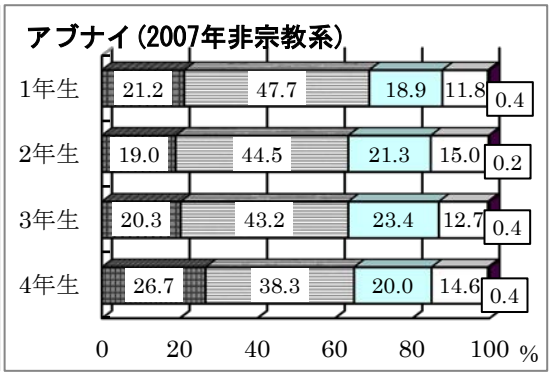

アブナイ (1999年宗教系)
1年生 20.1 45.0 22.8 12.0 0.2
2年生 17.2 45.7 23.1 13.9 0.1
3年生 17.0 47.3 21.5 14.0 0.2
4年生 12.0 45.4 27.7 14.5 0.4
0 20 40 60 80 100 %

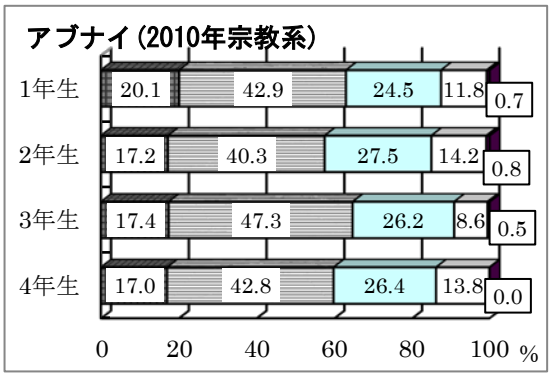

アブナイ (1999年非宗教系)
1年生 22.6 44.6 19.7 12.9 0.2
2年生 23.3 44.0 20.5 11.8 0.5
3年生 18.3 48.7 21.4 11.3 0.3
4年生 21.1 41.0 21.7 16.0 0.3
0 20 40 60 80 100 %

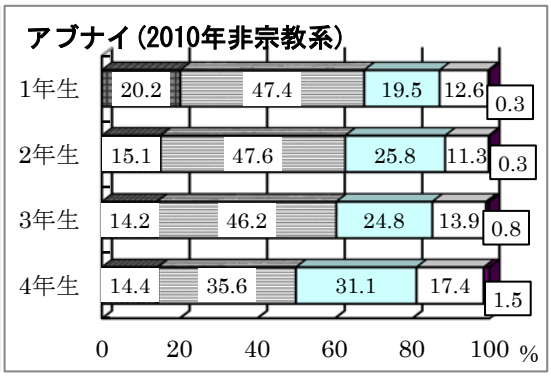

アブナイ (2005年宗教系)
1年生 31.8 32.3 22.2 12.7 1.0
2年生 24.3 43.0 19.4 13.2 0.0
3年生 19.3 39.8 22.7 18.2 0.0
4年生 16.3 37.5 26.0 19.2 1.0
0 20 40 60 80 100 %

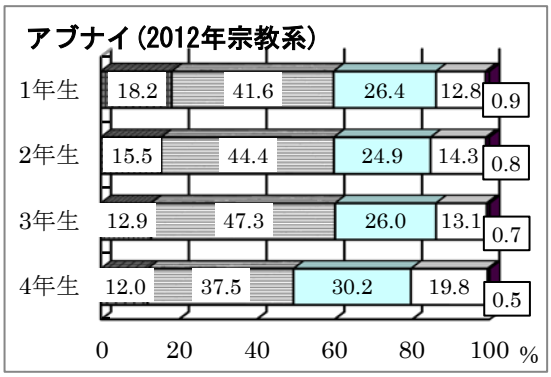

アブナイ (2005年非宗教系)
1年生 31.1 34.8 21.0 12.4 0.8
2年生 26.2 41.0 21.3 10.8 0.8
3年生 25.2 42.7 21.6 9.7 0.7
4年生 31.7 38.7 16.6 13.1 0.0
0 20 40 60 80 100 %

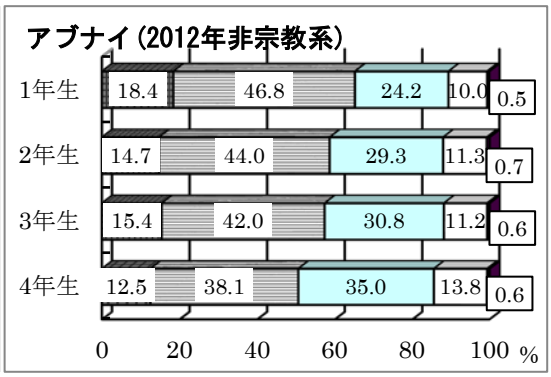

アブナイ (2007年宗教系)
1年生 23.7 40.1 18.4 17.1 0.7
2年生 19.0 34.8 22.8 23.1 0.3
3年生 16.6 45.0 23.8 14.6 0.0
4年生 16.6 42.9 17.7 22.9 0.0
0 20 40 60 80 100 %

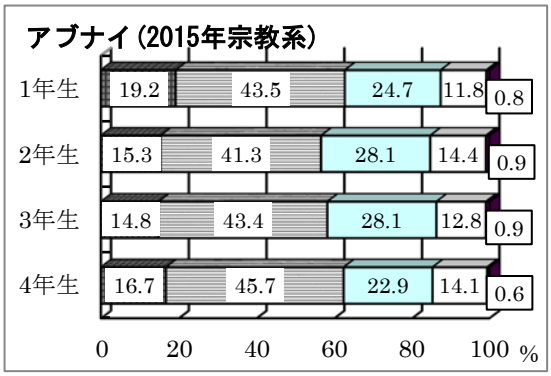

アブナイ (2007年非宗教系)
1年生 21.2 47.7 18.9 11.8 0.4
2年生 19.0 44.5 21.3 15.0 0.2
3年生 20.3 43.2 23.4 12.7 0.4
4年生 26.7 38.3 20.0 14.6 0.4
0 20 40 60 80 100 %

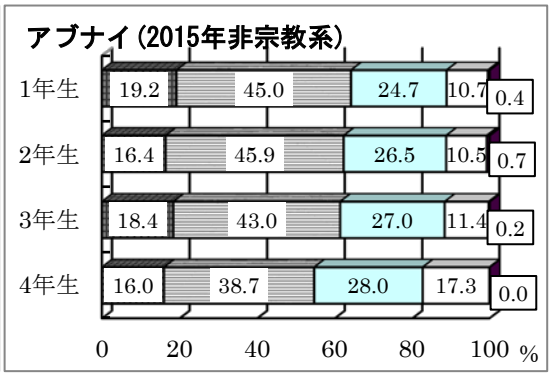












＊1990年代後半は学年があがることと「宗教はアブナイと思う」ことの間の相関は弱いが、2005年以降の調査では、学年があがると「宗教はアブナイと思う」割合が減る傾向にある。誤差の範囲かもしれないが、一応参考にすべき変化と考えられる。

d) 高校までの宗教教育をどう思うか

宗教教育に関する質問は回答の選択肢が途中で 2 度変わったので、データが 3 種類ある。選択肢が変わったことの影響は大きく、これは韓国でも同様であった（日韓比較を参照）。回答の選択肢を変えたことが、学年別でどう違いがあらわれるかを調べた。

質問内容

次のような意見について、「1.そう思う 2.どちらかといえばそう思う 3.どちらかといえばそう思わない 4.そう思わない」のいずれかの番号で答えて下さい。

（1996～1999 年）

「高校までにもっと宗教についての基礎知識を教えるべきだ」

（2005 年）

「高校までにもっと世界の宗教についての基礎知識を教えるべきだ」

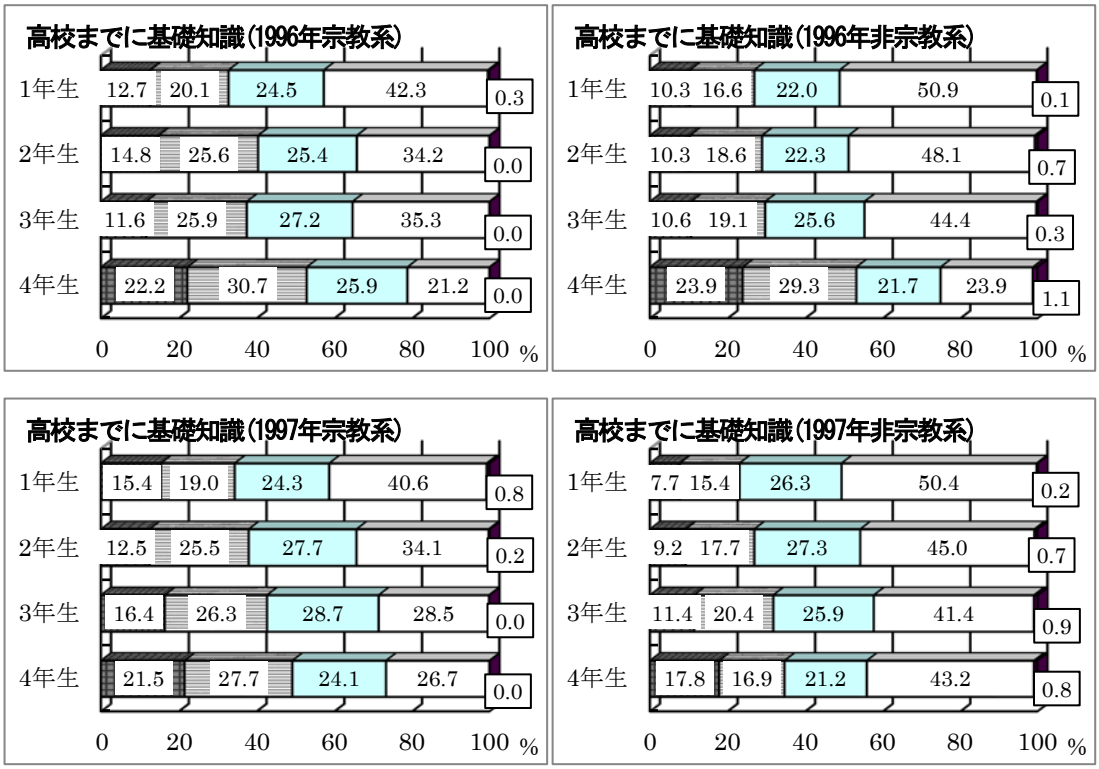
（2007～2015 年）

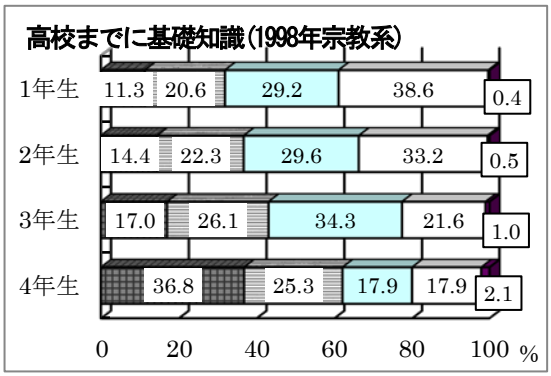
「高校までに日本や世界の宗教文化についての基礎的な知識を学んだ方がいい」

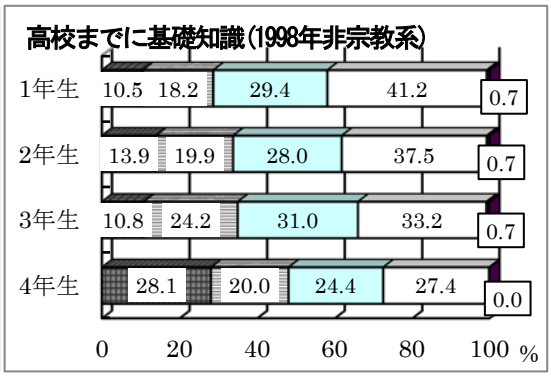
回答の選択肢

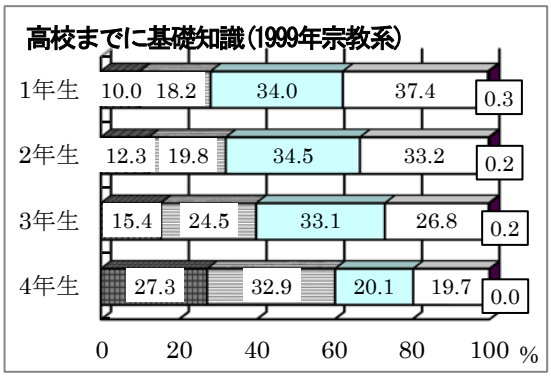
- 1.そう思う
- 2.どちらかといえばそう思う
- 3.どちらかといえばそう思わない
- 4.そう思わない
- 5.無回答

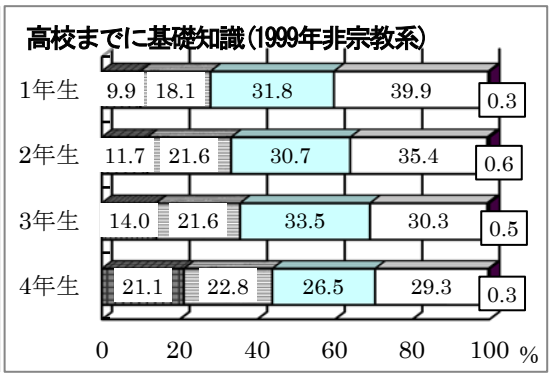
グラフ 16d1

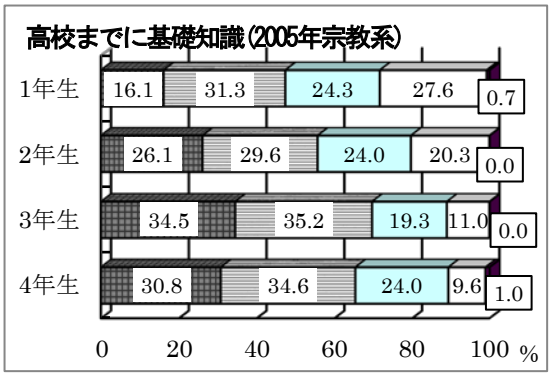


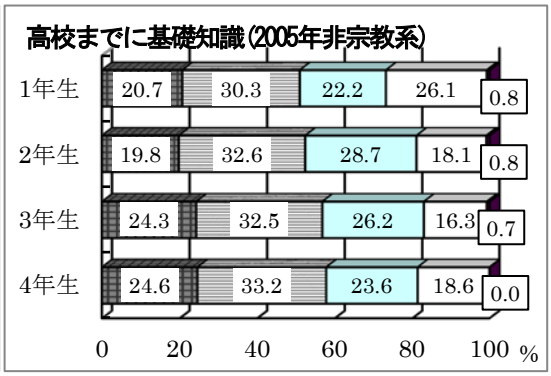

高校までに基礎知識(1998年宗教系)
1年生 11.3 20.6 29.2 38.6 0.4
2年生 14.4 22.3 29.6 33.2 0.5
3年生 17.0 26.1 34.3 21.6 1.0
4年生 36.8 25.3 17.9 17.9 2.1
0 20 40 60 80 100 %

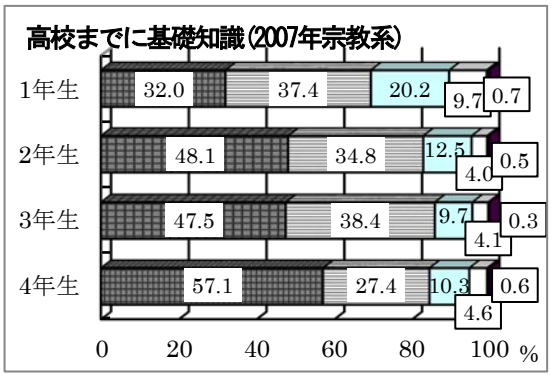

高校までに基礎知識(1998年非宗教系)
1年生 10.5 18.2 29.4 41.2 0.7
2年生 13.9 19.9 28.0 37.5 0.7
3年生 10.8 24.2 31.0 33.2 0.7
4年生 28.1 20.0 24.4 27.4 0.0
0 20 40 60 80 100 %

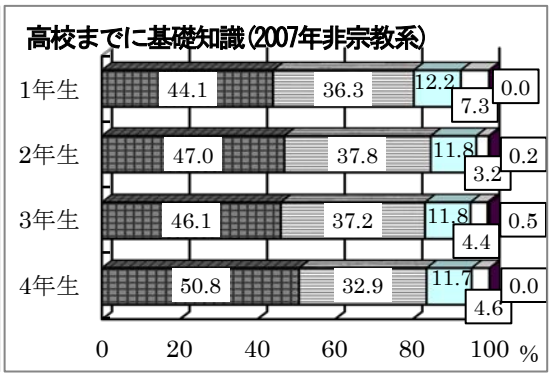

高校までに基礎知識(1999年宗教系)
1年生 10.0 18.2 34.0 37.4 0.3
2年生 12.3 19.8 34.5 33.2 0.2
3年生 15.4 24.5 33.1 26.8 0.2
4年生 27.3 32.9 20.1 19.7 0.0
0 20 40 60 80 100 %

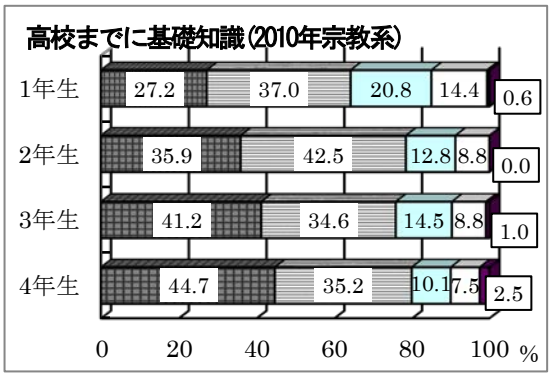

高校までに基礎知識(1999年非宗教系)
1年生 9.9 18.1 31.8 39.9 0.3
2年生 11.7 21.6 30.7 35.4 0.6
3年生 14.0 21.6 33.5 30.3 0.5
4年生 21.1 22.8 26.5 29.3 0.3
0 20 40 60 80 100 %

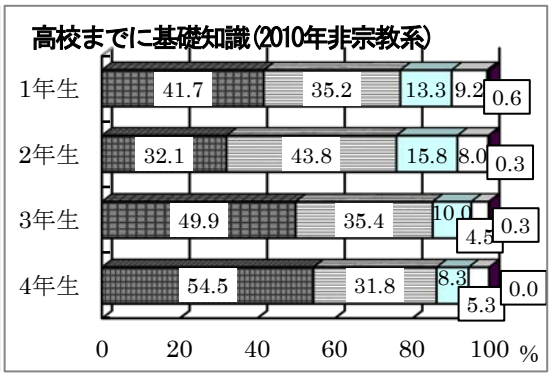

高校までに基礎知識(2005年宗教系)
1年生 16.1 31.3 24.3 27.6 0.7
2年生 26.1 29.6 24.0 20.3 0.0
3年生 34.5 35.2 19.3 11.0 0.0
4年生 30.8 34.6 24.0 9.6 1.0
0 20 40 60 80 100 %

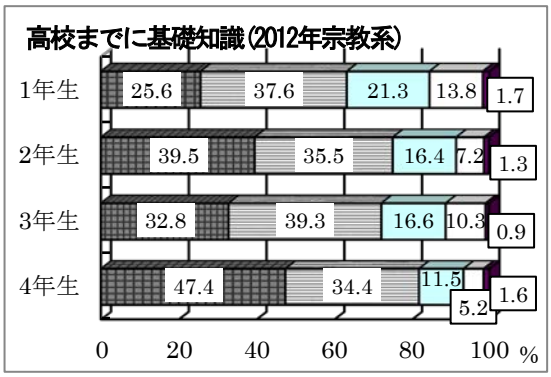

高校までに基礎知識(2005年非宗教系)
1年生 20.7 30.3 22.2 26.1 0.8
2年生 19.8 32.6 28.7 18.1 0.8
3年生 24.3 32.5 26.2 16.3 0.7
4年生 24.6 33.2 23.6 18.6 0.0
0 20 40 60 80 100 %

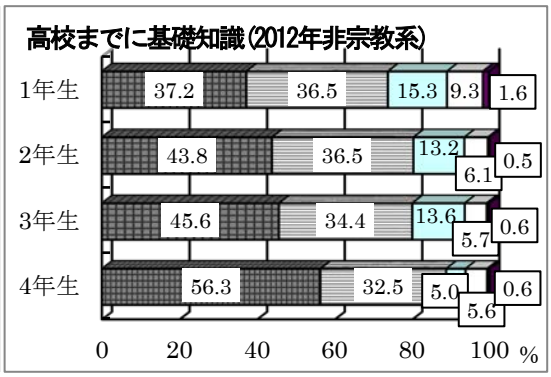

高校までに基礎知識(2007年宗教系)
1年生 32.0 37.4 20.2 9.7 0.7
2年生 48.1 34.8 12.5 4.0 0.5
3年生 47.5 38.4 9.7 4.1 0.3
4年生 57.1 27.4 10.3 4.6 0.6
0 20 40 60 80 100 %

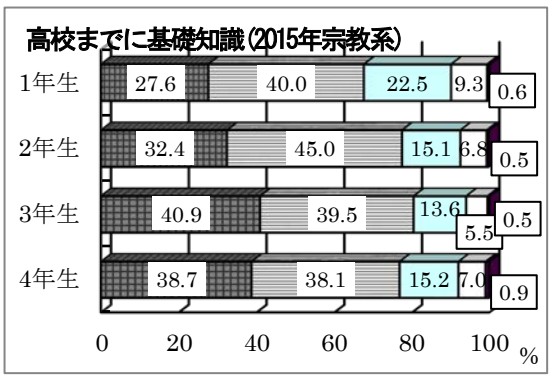

高校までに基礎知識(2007年非宗教系)
1年生 44.1 36.3 12.2 7.3 0.0
2年生 47.0 37.8 11.8 3.2 0.2
3年生 46.1 37.2 11.8 4.4 0.5
4年生 50.8 32.9 11.7 4.6 0.0
0 20 40 60 80 100 %

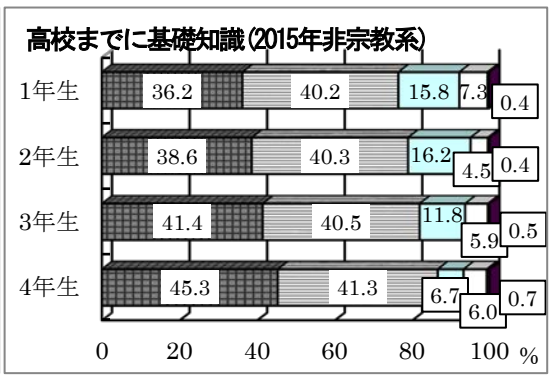












＊どの学年においても、回答の選択肢を変えたことが、それぞれの回答の割合の違いとしてあらわれている。

e) 霊魂の存在

霊魂の存在を信じるかどうかは、宗教系と非宗教系で差があまり大きくなく、また信仰をもつかどうかでもあまり大きくない。では学年別にみるとどうであるか。大学での経験は影響するのであろうか。宗教系の大学では学年を経るごとに宗教関連の講義を多く受講している可能性が高いと推測される。そのことが影響を与えているかどうかである。

質問内容

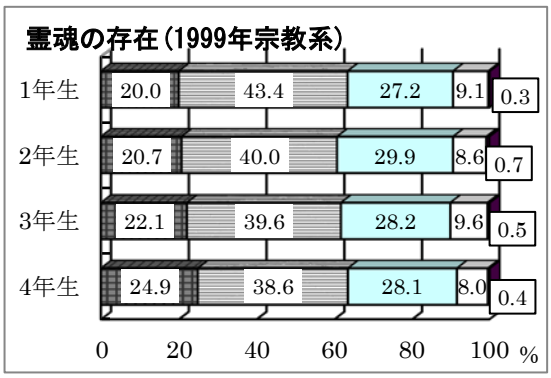
神や仏の存在について、あなたはどう思いますか。「1.信じる　2.ありうると思う　3.あまり信じない　4.否定する」のなかから、番号で答えて下さい。

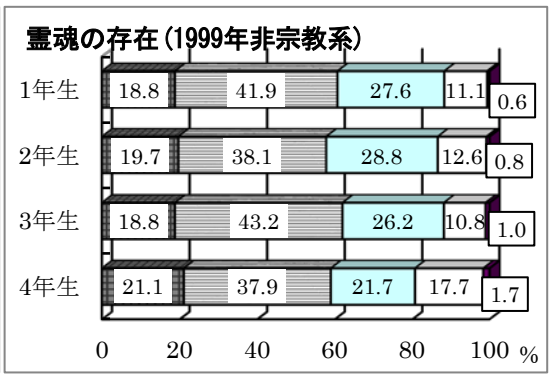
霊魂の存在[　　]

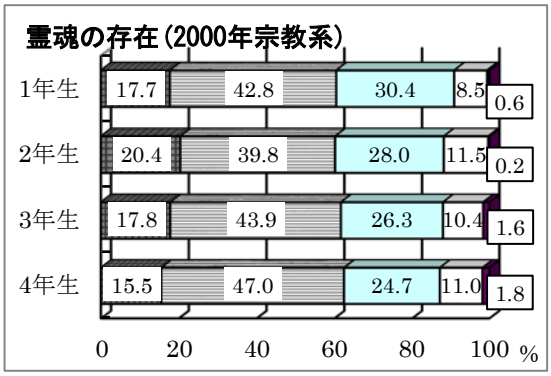
グラフ 16e1

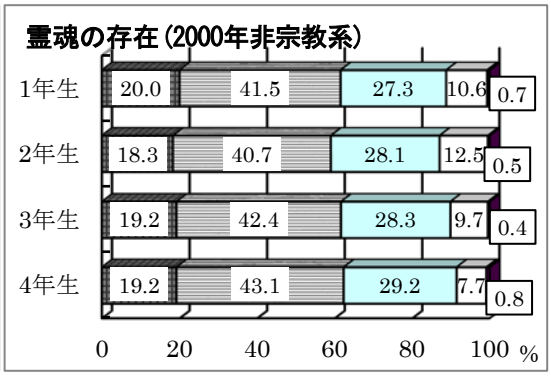
回答の選択肢

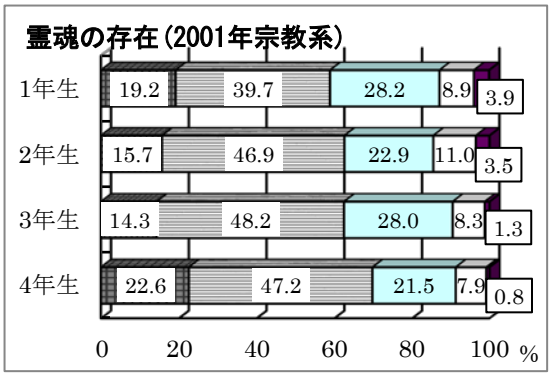
- 1.信じる
- 2.ありうると思う
- 3.あまり信じない
- 4.否定する
- 5.無回答

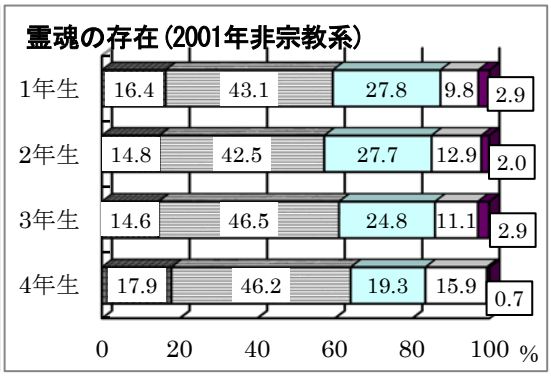


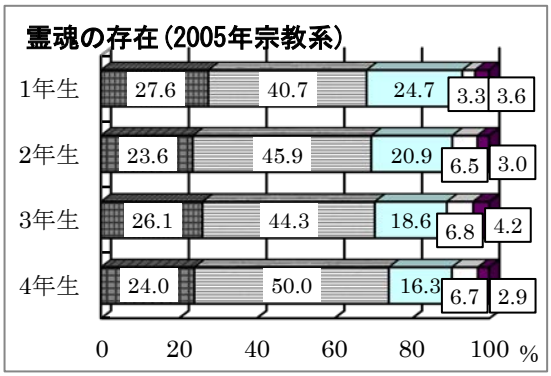


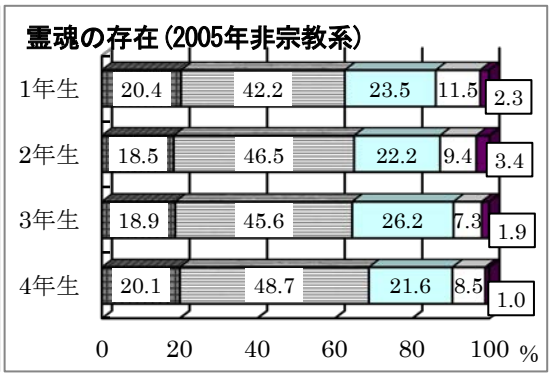


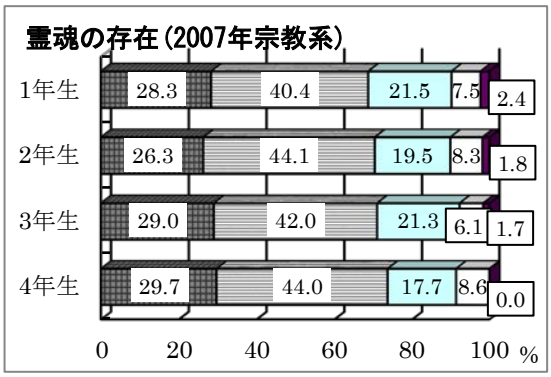


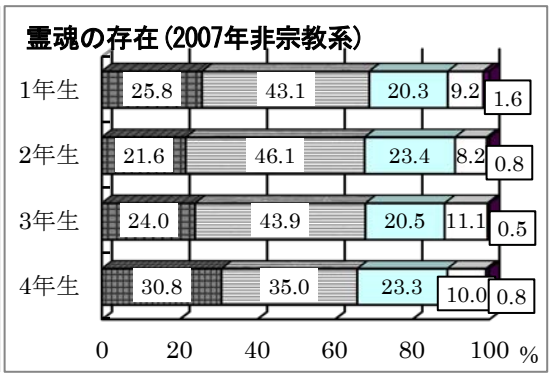


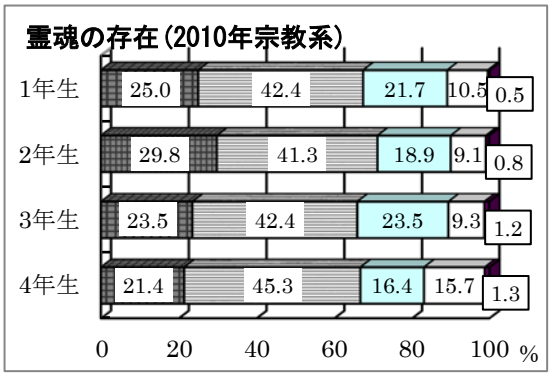


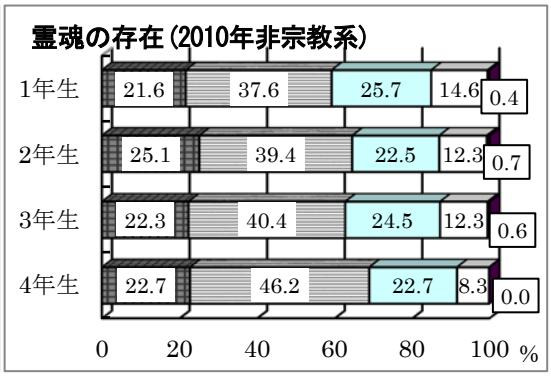

霊魂の存在(2005年宗教系)
1年生 27.6 40.7 24.7 3.3 3.6
2年生 23.6 45.9 20.9 6.5 3.0
3年生 26.1 44.3 18.6 6.8 4.2
4年生 24.0 50.0 16.3 6.7 2.9
0 20 40 60 80 100 %

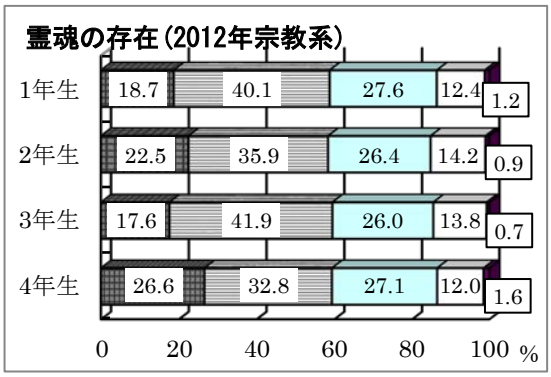

霊魂の存在(2005年非宗教系)
1年生 20.4 42.2 23.5 11.5 2.3
2年生 18.5 46.5 22.2 9.4 3.4
3年生 18.9 45.6 26.2 7.3 1.9
4年生 20.1 48.7 21.6 8.5 1.0
0 20 40 60 80 100 %

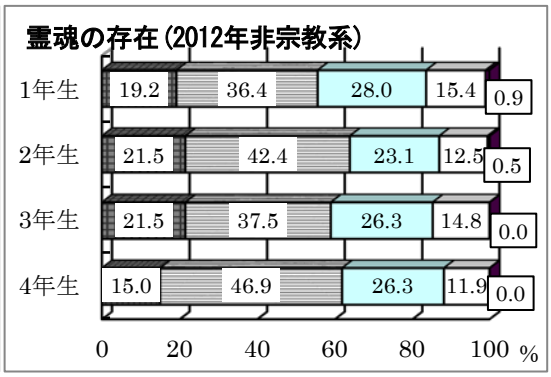

霊魂の存在(2007年宗教系)
1年生 28.3 40.4 21.5 7.5 2.4
2年生 26.3 44.1 19.5 8.3 1.8
3年生 29.0 42.0 21.3 6.1 1.7
4年生 29.7 44.0 17.7 8.6 0.0
0 20 40 60 80 100 %

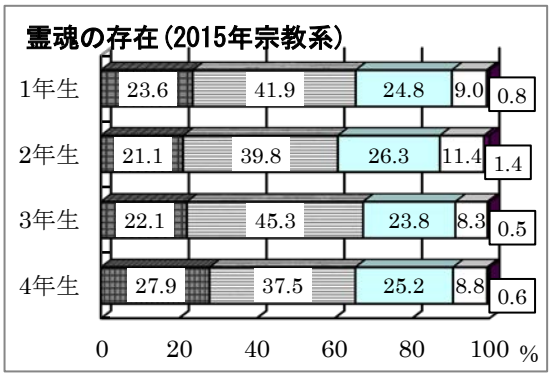

霊魂の存在(2007年非宗教系)
1年生 25.8 43.1 20.3 9.2 1.6
2年生 21.6 46.1 23.4 8.2 0.8
3年生 24.0 43.9 20.5 11.1 0.5
4年生 30.8 35.0 23.3 10.0 0.8
0 20 40 60 80 100 %

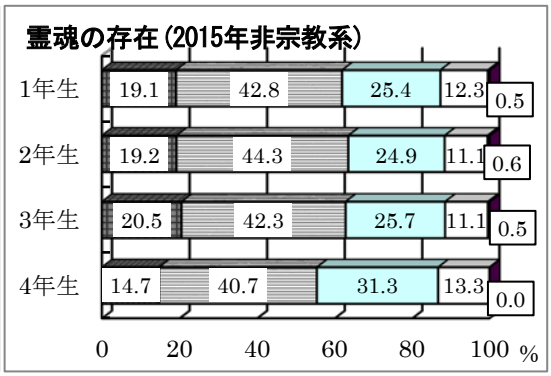

霊魂の存在(2010年宗教系)
1年生 25.0 42.4 21.7 10.5 0.5
2年生 29.8 41.3 18.9 9.1 0.8
3年生 23.5 42.4 23.5 9.3 1.2
4年生 21.4 45.3 16.4 15.7 1.3
0 20 40 60 80 100 %


霊魂の存在(2010年非宗教系)
1年生 21.6 37.6 25.7 14.6 0.4
2年生 25.1 39.4 22.5 12.3 0.7
3年生 22.3 40.4 24.5 12.3 0.6
4年生 22.7 46.2 22.7 8.3 0.0
0 20 40 60 80 100 %


霊魂の存在(2012年宗教系)
1年生 18.7 40.1 27.6 12.4 1.2
2年生 22.5 35.9 26.4 14.2 0.9
3年生 17.6 41.9 26.0 13.8 0.7
4年生 26.6 32.8 27.1 12.0 1.6
0 20 40 60 80 100 %


霊魂の存在(2012年非宗教系)
1年生 19.2 36.4 28.0 15.4 0.9
2年生 21.5 42.4 23.1 12.5 0.5
3年生 21.5 37.5 26.3 14.8 0.0
4年生 15.0 46.9 26.3 11.9 0.0
0 20 40 60 80 100 %





＊いずれの年においても、学年別に何らかの傾向が生じているようには見えない。つまりこうした観念は大学入学時点である程度かたまっており、大学の教育もそれに大きな影響を与えていないのではないか、という推測が生じる。

［III］自由記述に示された意見

自由記述のうち、学生の宗教意識を探る手がかりとなる回答や、宗教や宗教に深く関わる事柄に対する考え方を知るために参考となる回答を記載する。全体の傾向とともに、実際にどのような記述であったかを、代表的なものや特徴的なものについて示す。

自由記述は各設問に対して回答の選択肢以外の「その他」として、具体的に書かれていたものである。あらかじめ設けられていた選択肢とほぼ重なるような内容のものもあったが、あまり想定しなかったような記述もあった。無記名アンケートであるので、ふざけて書いたものもあると考えられるが、それでも当人がそう思っていたことの一端であるので参考にすべきである。

以下で示すのは、信仰に関わる事柄、宗教の社会的問題、脳死状態での臓器移植問題、靖国問題、オウム真理教問題、イスラム問題である。どのような設問に対する自由記述であったかは、それぞれの冒頭に記してある。

第17章　信仰・宗教に関わる問題

a）宗教及び関連事象への関心内容

宗教についての関心の具体的内容については、1995年の第1回調査から2005年の第8回調査まで、次のような内容で8回質問した。いずれも「信仰はもっていないが、宗教に関心がある」と回答した人を対象としたものである。予め設けた選択肢以外にどのようなことが記述されていたかを示す。

<u>質問内容</u>

次のうち、あなたが関心をもっているものに、すべて○をして下さい。

1.聖書や仏教経典などの宗教書

2.宗教を扱った小説やノンフィクション

3.宗教教団や世界の宗教などを扱ったテレビ番組

4.神社や仏閣などの宗教施設の見学

5.その他［具体的に　　］

①1995 年

この年は具体的な記述をした人が 3,773 名の全回答者のうち 305 名（8.1%）であった。最も多かったのは、やはりオウム真理教事件の直後とあって、オウム真理教に関することであり、これを挙げた人が 40 名。次いで多かったのは、「宗教画」、「宗教美術」、「宗教音楽」「宗教の文化的背景」など、宗教文化に関することを挙げた人で 16 名。あまり予想していなかったことであるが、「宗教学」という回答も 13 名いた。「なぜ宗教を信じるか」という類のものも 12 名。新宗教（新興宗教）を挙げた人や、キリスト教、チベット仏教、イスラム教などの宗教名を挙げた人も数名ずついた。その他、神話、宗教心理、宗教思想、宗教紛争なども複数あった。

少し特徴的な回答を以下に示す。

「神とは何か。神とはどういうものか。神は全ての善悪を知りつくしているのか」

「宗教に必要性を感じず、なくすべきだと思うので、まずは敵と知るところから始めたい」

「日本に宗教が根付きにくいことと日本人の民族性とのかかわり」

「信仰をすることによって内面から引き出される能力について」

「人生とは、幸福とは何か的な内容の本」

②1996 年

1996 年は 4,344 の回答者のうち 306 名（7.0%）が自由記述をしている。「宗教を信じている人」に関心がある、といった内容の記述が 10 名ほどいた。また宗教文化への関心も前年同様一定数見出される。ただ宗教に懐疑的あるいは批判的な記述も若干あった。

「それぞれの宗教の基本的な教えかたを知ること」
「それぞれの宗教の教義など、なぜ宗教があるのか」
「何故、世界に数え切れないほどの宗教があるのか」
「なぜ人間は神を信じるようになったか」
「何故人は宗教に心の拠り所を求めるのであろうか．建築に見る宗教構造」
「何であんな宗教にひっかかるのか知りたい」
「古代宗教」
「宗教が誘因となる社会運動」

③1997 年

1997 年は 5,718 の回答者のうち 300 名（5.2%）が自由記述をしている。オウム真理教に関心があると記述した者も依然として一定数いる。宗教と社会、国家との関わりなど、宗教学的な関心が少し増えている。宗教には関心があるが、宗教団体には警戒しているような記述も若干ある。

「キリスト教における Death Education について」
「人間が宗教にひかれる理由を知りたい　宗教の役割を知りたい」
「様々な宗教などで語られる神や悪魔など伝説の生き物」
「人はどれくらい宗教にお金を使うか」
「ちなみに宗教に興味はあるが宗教団体は嫌いだ！！」
「何故人は宗教が必要か、何故政治に利用されてきたかとか、他宗教への攻撃など」
「宗教に名を借りた詐欺や金儲けについて」
「宗教団体に入る気はないが、それぞれの宗教の教え」

④1998 年

1998 年は回答者 6,248 名のうち 710 名（11.4%）が自由記述をしている。割合としてはもっとも記述が多かった年である。大きな傾向の差はないが、多様性に富んでいる。マニアックなものもある。

「何故、宗教が人間になければならないのか」
「ドイツにおける宗教と歴史」
「ヨーロッパの魔女狩りや黒魔術」
「聖書は歴史書であるということに関わる本」
「宗教家の語録」
「宗教を信仰する人の思考」
「新興宗教」
「宗教にはまる人」
「オウム問題」
「いわゆる”怪しい宗教”オウム、創価学会 etc.」
「雑学を無視した宗教の真の真理のみを個人で学ぶ」
「戒律、社会構造（特にイスラム教）」
「宗教によって引き起こされる紛争」
「世紀末終末思想」
「仏像、石窟寺院など、仏教美術」

「オカルト集団」
「宗教と政治・軍事など」

⑤1999 年

この年は回答者が 10,941 人いた年であるが、自由記述をした人は 710 名（6.5%）である。やはり多様な内容にわたるが、少し珍しいものを示す。

「説教やどのような教えや祈り方をしているか」
「ニューギニア等の原始宗教」
「なぜ神様は目に見えないのにいると分かるのか」
「地理学的に見た世界の宗教分布」
「宗教によって分けられる男女の立場の違い」
「ユタ州のモルモン教の家庭に一年ほどホームステイしていたので、宗教を信仰している人々の生活様式に興味を持つようになった」
「住職さんのおはなし」
「無宗教の哲学」

⑥2000 年

この年の回答者は 6,483 名で自由記述は 325 名（5.0%）である。

「神道の特異性」
「哲学、否定神学」
「宗教の歴史と中近東での宗教の争い」
「仏壇のことを家では仏様というが、一般の人々はそれは祖先にお祈りしているのか、それとも、仏にお祈りしているのか、ということなど」
「宗教を持つことで現れる人間」
「五行思想」
「宗教かぶれのフィクション小説、マンガなど」
「幸福の科学」
「平安時代の陰陽師などの小説が好きです」
「チベット仏教の崇高さ」

⑦2001 年

この年の回答者は 5,759 名で自由記述は 337 名（5.9%）であった。

「宗教に関する祭り」
「宗教的な見方のできる映画」
「特選！怪しい宗教家」
「宗教団体による福祉活動」
「キリスト教の歴史」
「古代文明の宗教。信仰の対象とその世界観」
「神や悪魔の伝説や神話」
「讃美歌で歌う歌に興味がある」
「宗教を扱ったマンガ」
「中東やユーゴスラヴィアなどの紛争」
「宗教によってどんな制約を受けて暮らしているかとか、宗教一つ一つの違いは何なのかなど」
「シャーマニズム、儀礼の構造など」

⑧2005 年

この年の全回答者は4,252名で、自由記述は216名（5.1%）。
「宗教的伝統行事」
「宗教団体の仕組み」
「宗教と革命の類似性」
「信仰のある人にとって死とは何なのか」
「宗教がもたらす利害について」
「信者の言い分」
「宗教と政党の関係」
「宗教と文明・価値観の関係」
「宗教と犯罪」

b）友人の信仰に関して

友人の信仰に対する態度については1995年から2000年まで毎年質問した。回答の内容にあまり大きな変化はないので、1997年と98年のものは省略する。

質問内容

もしある友人が宗教を信じていると分かったらどうしますか。
1.今までと変わらず接する
2.友人が信じている宗教によってはつきあい方を変える
3.その友人とはつきあいをやめる
4.その他［具体的に　　］

どの年も「今までと変わらず接する」が圧倒的に多く、友人が信仰をもっているかどうかにはあまり左右されないことが分かる。

①1995年

回答者3,773名のうち、113名（3.0%）が自由記述している。ただし、そのうちのいくつかはすでに用意された選択肢に当てはまるものであった。そうでないもので目につくのは、強要されたり、しつこく勧められたら、付き合い方を変えたり、付き合いを止めるというもので、7名がそれに類する回答であった。またその宗教について質問するという趣旨の回答も6名いた。「日本的無宗教の素晴らしさを徹底的に説いて説得する」というような少し変わった回答も1つあった。主だったものを以下に示す。
「基本的に接し方は変らないと思うが、よくなさそうな宗教だと思えば説得すると思う」
「私にその宗教を勧めるようだったらつき合いをやめる」
「新興宗教等の場合はつきあいをやめる。（実際そうした。統一教会に入信した人が居て、お金をかしてほしいと言われた）」
「友人が宗教を私にまで強制するならば考えるが、そうでなければ尊重してあげたい」
「オウムのように異常でない限りは全く問題にしないが異常と思われたら考えると思う」
「オウムなどのカルト教団でない限り、付き合い方は変えない。」
「よりいっそう仲良くする」

②1996年

回答者4,344名のうち132名（3.0%）が記述。傾向はあまり変わらないので、代表的なものを二、三示す。
「その宗教に何故入ったのか入ってどうするのかということを聞く」
「おまえバカだという」

「その宗教によってその人が変わってないのなら、変わらずに接する」
「それによって性格などが変わったらつき合い方を変える」
「私にも教義などを教えてほしい」

③1997 年

回答者 5,718 名のうち 165 名（2.9%）が記述。具体例をいくつか示す。
「この宗教が友人にとって悪影響を及ぼしていると判断したら説得する」
「熱狂的信者で、こわい思想の宗教ならこれからのつきあいを考え直す」
「理想としては、今までと変わらず接するけれど、現実には、つきあい方を変えると思う」
「理由を聞く」
「話を聞いてみる」
「友人の宗教を勉強する」

⑥2000 年

回答者 6,483 名のうち 213 名（3.3%）が記述。これまで大きな違いはないが、具体例を少し示す。
「想像つかない」
「周りを巻きこんだら注意してやめろと言う」
「なぜその宗教を信仰しているのか、友人に論理的説明を求める」
「とまどいを感じるかもしれない」

c) スピリチュアリティについて

スピリチュアリティについては 2007 年と 2015 年に質問しているが、テレビの影響をまざまざとみせつけるような結果となった。

質問内容

「スピリチュアルな」という表現であなたが感じるのは次のどれですか。

1. 精神的に深みのあることを感じる。
2. 宗教的というのに比べると、近づきやすく感じる。
3. あやしさを感じる。
4. なんのことだか、よくわからない。
5. その他（具体的に　　）

記述内容はあらかじめ設けられていた 1～4 に重なるものもあったが、記述した内容をあらためて整理すると、おおよそどのようにこの言葉を受け止めているかが分かる。1～4 の選択肢を選んだ結果では 2007 年には「精神的に深みのあることを感じる」が 42.2%いたが、2015 年には 38.0%に少し減少している。逆に「あやしさを感じる」は 2007 年の 26.8%が 2015 年には 33.5%に増えている。この間にいくらか否定的イメージが強まっている。自由記述もやや否定的あるいは懐疑的な表現が増えている。連想される内容にも顕著な違いがでている。

①2007 年

2007 年の調査で自由記述があったのは 255 名（5.9%）である。そのうち江原啓之の名前を挙げたのが 60 名、美輪明宏の名前を挙げたのが 15 名である。二人が出ていた「オーラの泉」というテレビ番組名を挙げたのが 19 名である。当時は「オーラの泉」は人気があり、若い世代にも影響があったことがわかる。また「神秘的」という表現を用いたのが 8 名、「霊的」という表現を用いたのが 8 名いた。他方で否定的な言葉を用いたものもあり、「うさんくさい」が 7 名、「いんちき」が 9 名いた。

具体的な記述を肯定的・否定的に分けていくつか示すが、自由記述の中にはどちらかと言えば否定的なものの方が多い。

＜肯定的評価＞
「魂に深みのあることを感じる」
「なんだかよくわからないが、良さそうだなあというイメージ」
「宗教などとは別の次元のその人の在り方みたいなものだと思います」
＜否定的評価＞
「テレビに出るようなやつはフェイク」
「「スピリチュアル」という単語自体が、そもそも言葉遊びにしか感じない」
「なんだかインチキな感じがする」
「金もうけ。新しいビジネス」
「最近のメディアなどで、本来の意味よりも占い的要素で用いられているため、あまり印象はよくない」
「最近の流行に乗っかったうそっぱちに聞こえる」
「最近使われすぎていて軽く感じてしまう」
「風水とか占いっぽい感じ」

②2015 年

2015 年の調査では 226 名が自由記述している。2007 年との違いは江原という名前を挙げた人が 1 人もいないことである。美輪さんとか、美輪明宏と書いた人は 4 名いるが、これも数はずいぶん減っている。8 年の間にテレビ番組の影響が如実にあらわれている。「オーラの泉」という番組は 2005 年から 2009 年まで放映された。2007 年はその最中であり、2015 年は放送終了してから 6 年経っている。その違いがよくあらわれている。

替わって登場したのが、「ラブライブ！」であり、東條希（とうじょうのぞみ）という架空のキャクラター名を挙げたのが 10 名いる。東條希は不思議系スピリチュアルガールとされているが、その愛称である「のんたん」と書いた人が 5 名いる。「ラブライブ」と書いた人も 12 名いる。アニメと書いた人が 6 名いる。神秘的という言葉は 38 名が使い、神聖という言葉は 6 名が使っている。またオーラは 4 名が使っている。他方で「うさんくさい」といった否定的な用語も多い。肯定的、否定的、その他に分けて示す。

＜肯定的＞
「パワースポットのように，雰囲気があること清らかで澄み渡った感じ」
「不思議である。科学では説明できない」
「精神に働きかけのある人の手のおよばないもの」
「興味を感じたり美しさのようなものを感じる」

＜否定的＞
「テレビ業界が作り出した用語、やらせ。本当の意味と離れて 1 人歩きしている。」
「TV 的な感じがしてうさんくさい」
「うさんくさい。お金取られそう。外来語にしてあやふやにしてごまかしていそう。」
「スピリチュアルという言葉 1 つで表現されるものがどれも具体性、可視性、再現性を持たない」
「とんでも理論を振りかざす」
「よく考えない人は引っかかるかもという疑惑の念、疑い」
「以前は精神世界の探求を感じるものだったが現在は言葉が使われすぎて、安易さ、あやしさを感じる表現に変化した」
「緩和ケアに必要な」
「最近は多用されすぎて軽い表現のように感じられてしまう」

「宗教的よりもうさんくさい感じがする」
「都合のいいふれこみを使ったサギまがいの商売」
「本当に信仰している人々や正規の寺院よりも、お手軽な流行、消費、商業性を感じる」
＜その他＞
「ラブライブ！の東條のぞみちゃんが「スピリチュアルやで～」ってよく言ってるけどよくわかりません」
「宗教的概念を近づきやすくする意図を感じる」
「神秘的な響ではあるが魅力は感じない」

d）東日本大震災の心理的影響

2011 年 3 月に起こった東日本大震災（「3.11」）から受けた心理的影響については 2012 年と 15 年に質問した。

質問内容

今回の災害によって、自分の生き方や考え方で大きく変わったことがありますか。次の中にあてはまるものがあったら○をしてください。［複数を選んでかまいません］また、とくになかった人は 6 を選んでください。

1. 人と人のつながりの大切さを再確認した。
2. 生きることの意味について真剣に考えるようになった。
3. 自然の力の大きさをあらためて感じた。
4. 死というものを身近な問題として考えるようになった。
5. その他［具体的に:　　］
6. とくに変わったことはない。

両年とも「自然の力の大きさをあらためて感じた」という回答がもっとも多く、2012 年が 68.9%、2015 年が 67.8%と 7 割近くを占めた。次いで「人と人のつながりの大切さを再確認した」がそれぞれ 50.7%、44.4%であった。

①2012 年

2012 年は自由記述は 165 名（4.0%）であった。家族の大切さに言及したのが 10 名。7 名が原発問題に言及しているが、わかっていたはずだというやや突き放したような意見もある。何もできないことへの苛立ちも若干ある。

「もっと家族とすごす時間を大切にしようと思った」
「日本は安全だという考えが崩れた」
「大きな災害があってショックを受けても、人間は忘れやすいと思った」
「いつ何が起きるかわからないから、今を一生懸命生きようと思った」
「何にも出来ない自分に腹が立った」
「こんなに大変なことがおきたのにどうして自分は何の行動もとっていないのか、これからどうやって関わっていくべきか考えた」
「友人が何人か死んだけど人間死ぬ時は死ぬんだと思った」
「雲行流水の理を理解した」
「海外のニュースで日本人は冷静だ、ということが言われていて、日本人は強いんだと思った」
「改めて「絆」と連呼する人が増えたことにいらだちを感じた」
「建前では皆心配するそぶりをみせているが自分の身を削ろうとしないのにはすごくがっかりした。これは日本の宗教性が関わっていると思う」

②2015 年

2015 年は具体的な記述は 148 名（2.6%）であった。2012 年同様、当たり前のことが幸せとか貴重だということに気づいたとか、家族の大切さをあらためて感じたという人が 5 名いた。原発の怖さ、危険性への言及も 9 名いた。ネット情報への不信感、その他、辛辣な意見も若干ある。

「「あたりまえ」がどれだけ貴重で大切なことかを知った」

「何もなかった日、いつも通り、平凡に対するマイナスなイメージがプラスになった。それに対する感謝の念が強くなった」

「家族を守りたいという思いが強まった」

「彼らの悲しみ、辛さ、そして逆に前向きな人は彼らの希望、輝き」

「災害において人が如何に行動すべきかを考えるようになった」

「自分たちの無力さを知った」

「命の尊さと誕生の奇跡が当たり前ではないと感じるようになった」

「どんな人でも死んだら悲しむ人がいる」

「辛い時は泣くより馬鹿笑いをした方が良い」

「仏教の無常観に近いものを感じた」

「九州で生活して不自由なく過ごしていて SNS やテレビのニュースが騒がしいなと落ち着いて冷めているような自分と支援する気持ちを持つ自分を確認した」

「電力を使いすぎていることを感じた。人間は電気がなくても生きていける」

「土木技術者としてできること、やるべきことがあると強く確信した」

「政府行政の無責任さ、もしくは準備不足があること」

「日本は責任を取らない国なのだと再認識した」

「科学者に対する不信感が増大した」

「ネットの情報をうのみにできない、あまり真剣に信じなくなった。デマや噂の広がり方の考えが変わった。」

「人間の愚かさも感じられた（福島という言葉で過剰に敏感になる）」

「ボランティアと称して役にも立たないのに被災地に行き、さらにそれを SNS にのせる人間の多さに驚いた」

「生きるか死ぬかとなった時、自分のことばかり考える人しかいないのだと思った」

「自分がみにくい人間だと思った」

e) 霊魂のイメージ

霊魂については 2000 年と 2005 年に自由記述の欄があった。

質問内容

信じる信じないにかかわらず、あなたの持っている霊魂のイメージについて、あてはまるものを選んで下さい。（複数選んでもかまいません）

1.生きている人間の中にあるもの

2.死んだ人の霊

3.動物の霊

4.樹木や草花の霊

5.その他［具体的に:　　］

6.特定のイメージがわかない

①2000 年

2000 年には 213 名（3.3%）が記述をしている。「生命のすべてにある」、「すべての生物のもって

いるもの」に類する記述がもっとも多い。
「粒子」
「全てのものにやどるもの、やどつていたもの」
「不滅のもの、人間の根幹」
「地球上の全ての生命、森・川・山・動物・草含む」
「全ての生物に宿っているもの」
「人の頭脳の電気信号の集合体」
「残存思念」
「偶発的なエネルギー」
「光のかたまり」
「気のせい」
「死んですぐの人の霊」
「炎みたいな形」
②2005 年
2005 年は 209 名（4.9%）が記述している。2000 年とさほど目立った変化はない。
「輪廻するもの」
「幽子という物体」
「万物に宿るもの」
「他人の意識の模倣」
「世が変わっても変わらずにあるもの」
「守護霊・背後霊」
「まだ知られていない粒子」
「あらゆるものに宿っているエネルギー」
「科学では説明できないもの」
「ある関係成態を実態視して現象説明のための概念として社会的に共有される存在了解のやり方」

第18章 宗教の社会的問題

ここでは見知らぬ人から宗教あるいは占いなどの勧誘に対する自由記述と宗教者の社会的役割についての自由記述を示す。

a)見知らぬ人からの勧誘に対して

宗教の勧誘の経験については、複数回質問しているが、2007 年には見知らぬ人からの勧誘に絞って、自由記述もできるような質問をした。どのような内容の声のかけられ方をする場合が多いかを調べるためである。

質問内容

話しかけられたときの内容はどのようなものでしたか。次から選んでください。[複数回答可]

1.「手相の勉強をしています」
2.「あなたの守護霊が見えます」
3.「あなたには特別のオーラを感じます」
4.「このままだと何か不幸なことにあいます」
5.「今、人生の転換期です」
6. その他 [具体的に:]

自由記述をした者は 136 名（3.2%）である。相手をほめるような言い方、どちらかと言えば不安を煽るような言い方、関心をそそるような言い方など、いくつかパターンが見いだされる。

「あなたキレイな目をしてますね」
「人相の勉強をしています。貴方はとてもいい運の顔をしていますね」
「良い手相ですね～」
「あなたと私は前世親子でした」
「以前事故にあったことはありませんか？」
「運を生かしきれていません」
「あなたには今何か悩みがあるはずです…みたいな事」
「以前事故にあったことはありませんか？このツボを買えば…」
「線が細い、人生の目標、将来のことが決まっていないのでは？」
「貴方は今の人生に満足していますか？」
「あなたのご先祖のことでお話があります。」
「水晶玉に興味はありませんか？」
「先生に会って下さい」
「あなたのためにお祈りさせてください」
「具合が悪くて駅でうずくまっていたら、キリスト教に興味ありませんか？と言われた」
「似顔絵を描かせて下さい」
「神のありがたいお言葉を聞きませんか？」
「声をかけられたが、なぜか学生であると言ったら、学生の手相は見ないと言われた」
「あなたは先が無いと言われた」
「占いは科学であるとご存じですか」

b) 宗教者の社会的役割

これについては 2005 年と 2010 年に質問している。

質問内容

宗教者であるならば、やるべきだと思うことが以下にあったら選んでください。(複数回答)

1.差別をなくすための活動

2.被災者・被害者の心のケア

3.死を迎えようとする人の心の支え

4.障害者や高齢者に対する社会福祉活動

5.平和のために祈る

6.その他(具体的に:　)」

その他として記述した中にも予め設けられた選択肢の内容と重なっているようなものもあるが、傾向としては大きく 3 つに分けられる。積極的に何をやるべきかについて記したもの、宗教者だからといって特にやるべきことはないというもの、そしてかなり辛辣な批判的意見である。最後のものがもっとも多かった。肯定的なものは選択肢の中に含まれているので、批判的な内容を書く人が多くなるのは当然かもしれない。ただその内容からは現代の宗教や宗教者のありように対する学生の批判がどこに向けられているかが、よく見えてくる。「信者を犯罪者にしない」というようなオウム真理教を念頭に置いたと思われるものもあるが、おおむね現代の宗教全般に対してのものと考えられる。

①2005 年

2005 年には 278 名（6.5%）が自由記述している。

＜積極的意見＞

「宗教的用語の現代訳の作成」

「社会に対して積極的に行動する。(選挙とか署名活動とか、普段の生活でルールを守って生活するとか。)」

「自分の宗教がどのようなものであるか周りに知らせる活動」

「国の繁栄を祈る」

「やってくる人々の望みを受け入れる」

「その宗教が世界に広まるように活動」

「カルト被害者のためのケア」

「カルト集団などに対する抗議行動や社会問題に対する発言」

「平和のために行動を起こす対話と」

「その宗教によって考え方が異なるので一概に「やるべきだ」とは言えない」

＜消極的意見＞

「自分の思う神様だけ信じていればよい」

「学問的、哲学的な求道」

「真理の追究」

「信仰によって自分の心が満たされるのであれば、やるべきことはない」

＜批判的意見＞

「特別に税金を多く払う」

「金をもらうのをやめる」

「何かするために宗教は必要ない」

「金もうけを考えないこと」

「お布施の要求を止めること」

「質素なくらし（お金を持ってるイメージが強い)」

「無料で人の相談を受ける」

「他の宗教との争いをやめてお互いを理解して譲歩する」
「宗教者同士の争いを止める」
「宗教を戦争の理由にさせない運動をする」
「宗教が原因で起こる紛争や事件をなくす」
「他人をどうこうする前に自分自身をもっと見つめるべき」
「他の宗教にも関心を抱き、境界線をなくす」
「自分の信じる宗教を、誇示しない、表に出さない」
「平和を祈るだけでなく行動」

②2010 年

2010 年は 191 名（4.4%）が自由記述している。2005 年と同様に 3 パターンに分ける。

＜積極的意見＞

「環境保護、教育、子供の保護」
「国際援助協力」
「地域コミュニティの基地になるための活動」
「困っているひとの相談にのる」
「死刑囚に対してもっと説くべき」
「死者遺族に対する心のケア」
「自分がどんな状況でその宗教を信じるようになったのか、それによって精神的に、そして金銭や生活の状況がどう変わったのか公表して布教すればいい」
「運動とまではいかなくとも平和主義者であるべきだと思う」

＜消極的意見＞

「特にやる必要はないと思う」
「修行」
「信仰さえしてればいい」

＜批判的意見＞

「信仰を他人に勧めない」
「自分の信仰を他人に押しつけないこと。個々の考えがあることを理解すべき」
「何もしないで大人しくしていてほしい」
「何もしないようにすべき。人の価値観はそれぞれ違う」
「教主は贅沢しない」
「金を集めず人の心の支えとなる教えを望む人にだけ教える」
「宗教間の戦争、殺人を自覚し、悔いるべき」
「宗教勧誘でお宅訪問はしないという規則作り」
「生活の手段としての宗教者をやめるべき。つまり金を稼ぐことをやめるべき」

以上で分かるように、批判の視点としては、排他性、宗教紛争、金儲け主義、押し付けなどが中心的である。

第19章 脳死状態での臓器移植問題

自分が脳死状態になったときの臓器移植に関する自由記述は、1998 年、2005 年、2012 年、2015 年の調査である。比較的似た記述が多かったので、1998 年の回答から全体的傾向を探り、以下の年は特徴的なもののみ示す。自由記述した人の割合は 1998 年は 3%台であるが、それ以後は 1%台という比較的低い数値である。

質問内容

あなたが脳死状態になった場合、臓器を提供することをどう思いますか。

1.すすんで提供したい

2.提供してもよい

3.あまり提供したくない

4.絶対提供しない

5.その他[　　]

①1998 年

回答者名 6,248 のうち 221 名（3.5%）の自由記述がある。必ずしも設問を的確に理解していないような記述もある。とくに脳死の意味については理解していないと思われるものが少なくない。ただ臓器移植一般に関する学生の考え方を知る上で役立つので理解の程度は度外視して記述されたものを示す。

＜家族等の意見による＞

「家族の意見を聞く」

「親に任せる」

「他の肉親が許可すれば提供してもよい」

「自分自身は良いが、家族、又は、知人の態度を聞いてから」

「身内にまかせる」

＜相手による＞

「子供に提供されるのなら良い」

「相手を指定できれば提供する」

「提供する人を選べて,自分がいいと思った人になら良い」

「相手によっては提供してもよい」

「自分の好きな人になら良い」

「親・兄弟になら良い」

＜臓器による＞

「臓器による」

「臓器は提供しないが、角膜は提供したい」

＜対価を求める＞

「お金で売りたい」、「お金をくれるなら」というような答えもあった。

「親族に金をくれるなら」

＜条件付き＞

「健康であるなら提供してもよい」

「部分による」「部位による」

「外見が変わる部分は提供しづらいと思う」

「提供しても成功する確率が低いので、確率が高くなれば提供したいと思う」
「脳死と診断され、命を断つことになるならば提供してもよい。ただし、臓器をとめるかどうか、本人の意志なしの決定は別問題。復活する可能性があるなら死にたくない」
「一年以上過ぎても目が覚めなかったら、というような条件付で」
「法整備がきちんとしていればよし」
「事前に問題なく合意が成立していること、提供の方法が安全なものと確信できること、という条件がととのっていればすすんで提供したい」

＜その他＞

「可能性があるまで生きたい」
「どこで死の境界線を引くか、答えを見出せない以上、この問いには答えられない」
「でも自分の両親のは提供したくない」
「その時にならないと分からない」
「ドナー登録している」
「不摂生のため、自分の中に他人に提供できる臓器があると思えない」
「脳死を死と考えているので、死んだら何をしてもらってもかまわないが、進んでは提供しない」
「倫理的な面から臓器提供にはあまり賛成できない」
「臓器を移植しろという団体、医者、看護婦がまずやるべきでは？」

②2005 年

回答者 4,252 名のうち 61 名（1.4%）の記述がある。

「死んだ後のことはどうでもいい」
「親族の意見をあらかじめ聞いてお互い提供するかしないかで同意をする」
「考えようとすら思わない」
「親の意見と自分の意志が一致しないことにはわからない」
「自分を大切に思ってくれている人に任せる」

③2010 年

回答者 4,311 名のうち 82 名（1.9%）が記述した。記述の内容は 1998 年の結果と大きな違いは見られなかった。この年も家族に言及した人が比較的目立ち、13 名にのぼる。やや特徴的なものを中心にいくつか示す。

「臓器移植法についての正しい知識が全国民に知れ渡ったら提供してもよい。現在の日本国民の意識では提供したくない」
「四十九日過ぎたら提供していい」
「お金をくれるなら提供しても良い」
「そもそも脳死は人の死ではないと思う」
「配偶者が望むのなら良い」

④2015 年

回答者 5,773 名のうち 85 名（1.5%）が記述した。大きな変化はないが、どの臓器を移植するのかという点にこだわったものがやや目立った。「目以外」というふうに記述したものが 4 名いた。理由はよく分からない。

「胃が弱いのでその他なら提供できます」
「私の臓器は健康ではないと思う」
「心臓と眼球以外の部分臓器提供」
「心臓なら良い」

「親族の場合ならば提供してもよい」
「人を助けたいとも思うし、生まれたままの姿で死にたいとも思うのでよく分かりません」
「生んでくれた親の意見に従う（聞く）」
「提供してもよいが，家族が提供したくないと言ったら提供したくない。悲しみを増やしたくはない」
「脳死から戻れる確率が 2 割を切ったら提供してよい」
「脳死についてもっと研究が進んだら提供してもよい。今の段階では不明瞭すぎる」
「脳死状態を疑問視している」

第20章 靖国問題

2005 年と 2015 年は靖国問題について質問した。そのうち 2005 年の質問では「首相が靖国神社を参拝することをめぐって対立する意見があることを知っていますか。」という質問に「知っている」と答えた人に対して、「参拝に反対する人たちの反対理由について、知っているものを 2 つまで具体的に書いてください。」と自由記述をしてもらった。回答者 4,370 名のうち 2,547 名が少なくとも 1 つの回答をしている。関心が高いと言える。また、2005 年には韓国でも同じような質問をしたので、比較の意味もあって、双方の回答を示す。

a）日本での調査

2 つまで書いてもらったが、自由記述をした 2,547 名のうち、866 名が 2 つの事柄を記入している。従って延べで 3,413 の自由記述がある。なお具体的に記述した内容が「知らない」、「わからない」とだけ記した類は省いてある。大半はいくつかの類型にまとめられるので、それぞれの具体例と共に以下に示す。

＜戦犯を祀っていることへの言及＞

もっとも多かったのは戦犯がまつられているからという内容のものである。「A 級戦犯が祀られている」というように書かれたものも 559 にのぼる。なお、「A 級戦犯」を「永久戦犯」と記したものが 25 名もいた。「一級」と記したのも 4 名いた。「靖国神社には東条英機等戦犯等も祭られている」などと、東条英機の名前をあげたものも 15 名いた。たんに「A 級戦犯がまつられているから」だけでなく、次のようにもう少し詳しく記したものもある。

「A 級戦犯が祀ってある（合祀）のに、参拝することで戦争を正当化していると考えられている」
「靖国神社には戦争で指揮をとった人が祭られているから」
「靖国神社には東条英機等戦犯等も祭られている」
「A級戦犯が合祀されていることへの嫌悪感」
「戦争を指導し、戦後処刑された戦犯もまつられている」
「戦犯者がまつられている神社に参拝する事は戦犯者のやった事を認める事になる」
「戦犯をまつる神社に参拝することは、戦争の被害を受けた人に対して許されない」

＜戦争を肯定することになることへの言及＞

「靖国神社に参拝する事は、戦争をしても良いというようなことを意味するから」
「自国を一つにまとめられないからちょうどよい敵がほしいから」
「戦争を肯定することになる」

＜その他＞

「行政のトップである首相が特定の宗教施設を特別的にあつかうこと」
「アメリカが恐いから」
「お寺ではなく、神社だから（死者を弔うのはお寺。神社は戦死者を神聖化し、戦争を美化するということだから。）
「キリスト教等他宗教の戦犯者も強制的に合祀されているため」
「ただのいやがらせ」
「遺族の意志を無視した合祀」
「なんとなく、気分的に反対している」

b）韓国での調査

2005 年の韓国での調査では、1,288 名の回答者がいたが、そのうち 481 名がこの質問に自由記述をしている。そのうち 258 名が 2 つ回答しているので、延べで 739 件となる。やはり戦犯がまつられているという内容を述べた回答者がもっとも多く 144 名いる。約 2 割を占める。そのうち A 級戦犯という表現をしている人も 6 名いる。一級戦犯という表現が 4 名いる。

＜戦犯を祀っていることに言及＞

「A 級戦犯を参拝することは理解しがたい」

「世界大戦後、戦争犯罪者が祀られていて、日本総理がそれを政治目的で利用しているから」

「戦争犯罪者の神格化」

「戦争の犠牲者といい、実は戦争の主犯まで合祀している」

「靖国神社は戦争を起こした人物たちを祀っているところであるが、彼らたちを尊敬することだなんて、話にならない」

「神として祀る人が日本には歴史的英雄であるが、とても多くの人を殺した戦争英雄だから」

「人を殺した人を祀るということ自体が問題」

＜過去を反省していないという記述＞

韓国の場合は、「過去を反省していない」という趣旨のものが 73 名とかなりの数に上る。具体例をいくつか示す。

「日本は過去の過ちを反省していない」

「戦争を起こした人々を崇拝すること自体が理解しがたい。」

「このような神社に一国の首相の立場で参拝することは、日本が戦争を反省せず、正当化することである」

「罪を犯した人に参拝することは、同じことができるということだから」

「戦争を起こした人たちを参拝することは過去に対する反省がないという意味だから」

＜軍国主義、帝国主義の復活＞

48 名がこうした内容の記述をしている。

「戦争の犯罪者たちを神のようにたてまつる」

「日本は第二の世界征服を狙う」

「当時を回想し、もう一度世界制覇を夢見ているように見える」

「帝国主義の復活」

「過去の極右主義の指向を再び起こす画策」

「侵略戦争の産物である靖国神社」

「未だに軍国主義（帝国主義が残っているという跡）」

「軍国主義復活」

＜外交上の問題の指摘＞

こうした指摘も日本ではあまりなかったが、日韓、あるいは日中韓の外交上の問題になることを指摘しているのも 72 ある。

「韓日・中日の対外関係が悪化する可能性がある」

「中国・韓国の反感を買う」

「周辺国との関係を無視していることが問題」

「国際社会での孤立、外交的問題。」

「国際社会の非難・憂慮」

＜その他＞

あまり関心がなさそうな記述や、戦争の実態について誤解しているような記述も散見される。
「公に参拝するほど良い人物が祀られているところではない。」
「韓国から徴兵された人の中、自殺特攻隊で死んだ人は、靖国神社の参拝名簿に載せられることを望まない。」
「ヒトラーを神として祀ることと同じ意味だ。」
「殺人者を崇拝することは死んだ人に対しては欠礼であるが、戦争には正しいことも違ったこともないので、参拝しても構わない。」
「参拝するのはいいけど、派手にしないで欲しい」
「戦死した韓国人に対する侮辱である」
「聞いたことはあるけど、正直あまり関心がない。やってもやらなくても。」
「靖国神社に参拝することは、韓国にも日本にも得な面はないと思う。」
「首相の右翼にかたよる行為」
「当時韓国と戦った人が日本では英雄として祀られているが、立場を変えて考えると、韓国人が恨む人である」

第21章 オウム真理教問題

オウム真理教については、1996年、1997年、1999年の3回自由記述を求めた項目がある。1997年と1999年は同じ内容である。

a）入信していた人たちについて

質問内容

（1996年）

犯罪にはかかわらなかったが、オウムに入信していた人についてどう思いますか。（1つ○をつけて下さい）

1.こんな宗教に入信した彼らの行動はまったく理解できない。

2.入信したくなった気持ちはある程度理解できる。

3.自分もひょっとしたら入信したかもしれないと思う。

4.自分には関係ないことだから、何とも思わない。

5.その他［　　］

上記の選択肢の5を選んで具体的に記述した人が390名（9.0%）いる。馬鹿にしたり、非難したりするような意見がある一方で、同情するような意見や一定の理解を示すような意見もある。

＜馬鹿にしたり、弱い人たちだというふうにみなす記述＞

「弱い」という表現をした回答者が9人いる。

「あんな宗教を信じて入るなんてばかだと思う」

「だまされていたのでかわいそうだと思う」

「アホ、自業自得」

「あんな宗教に入信する奴は人間的に馬鹿だ」

「おかしいと思わなかったのが不思議」

「最悪最低」

「自分のことしか考えられない馬鹿な人たち」

「ばかの集団」

「こういう人々がいるということは理解できるが、弱い人々だと思う」

「弱い人間の集団」

「宗教に頼らないといけない人々だから、他の宗教に移ればいい」

「人に頼ろうとする根性が気にくわない」

「心の弱い人達が、うまい口車に乗せられたんだと思う」

「人はみんな弱い。すべて人次第」

「自己防衛意識の低い人だと思う」

「全員死刑にすべき」

「人間失格」

＜運が悪い、だまされたのだなど、やや同情するような記述＞

「だまされていた」という表現をした回答者が15人いる。また「かわいそう」という表現をした回答者が11人、「気の毒」という表現も11人いる。

「マスコミに追いかけられてかわいそうだと思う」

「真実全てを知っていて入信したわけではないので同情はするが、自分の行動の責任は全て自分でとるべき」

「運が悪かったのだと思う」

「入信した教団がたまたま犯罪集団だったのはその人の不幸だと思う。」
「オウムは巧みな手段を使うのでしょうがないと思う。」
「そういうことをしているのを知らなかったのだから仕方ない」
「今まで勉強しかしてこなかったので、友人もなく、社会に出てから人間関係にやっていけなくて、不安なところにつけこまれたからしょうがないと思う」
「犯罪について何も知らなかったのならば、仕方ないと思う」
「社会のひずみによって生まれたかわいそうな人達だと思った。」
「入信したくて、入信したのは少ないのでは？たぶん皆い場所がなかったんだと思う」
「いい人なだけにかわいそう」
「かわいそうにとしか思えない」
「よりどころにして信じていたのにこんなことになって気の毒」
「気の毒に思う。自分の信じていることが否定されるのはつらいことだが、早く気づく勇気をもって欲しい」
「信仰していた人は気の毒だ、悪いとは思わない」
「オウムにだまされたかわいそうな人達だと思う。」
「オウムに入信していた人は、心のよりどころをオウムに求めた人達であるのに、だまされていて、かわいそうだ」
「心の拠り所を失ってしまったわけだし，信じていたものに裏切られ少々かわいそうだ」

＜あれこれ言えないというような記述＞

「単純にはいえないと思う。社会的要因もあると思う。」
「自分もひょっとしたら、入信させられたかもしれないと思う」
「サリンなどは上の人が勝手にやったことであるから、それを全く知らなかった入信者は悪くないし、非難しようとも思わない。」
「どの宗教でもそうだが教団組織がしたことについてその宗派に属している人をどうこうは言えないと思う」
「勧誘がよほど上手かったのかもしれないのでなんともいえない」
「信仰の自由だから別にいい」
「彼らの入信の動機のよしあしと犯罪は関係が薄いとおもう」
「いろいろな意図で入信していると思うので人それぞれに思いも違う」
「その人自身が信じているのならよいと思う」

＜知識や洞察の不足といった記述＞

「宗教に対する正しい理解力の低下＝宗教的知識不足」
「他の宗教を全く知らなかったのだと思う.」
「公で宗教をタブーとしたので彼らのように根本的に誤った思想を抱く人が現れたのだと思う。」
「現在の教育制度に問題があると思う」
「本質を見抜く力が乏しいと思った」
「気持ちはわかるが、もう少し教団を第三者的に見る目がほしい」

＜理解できないというような記述＞

「オウムの何が魅力だったのか理解できない」
「何故そんなに客観性が失われてしまうのか不思議」
「入信した気持ちは分かるが、犯罪がわかったあとも信者であるのはわからない」

＜その他＞

「どういうふうに洗脳されたかきいてみたい.」
「どうして入信したのか知りたく思う」
「多分真面目な人達なんだと思う。あと優秀な人が多く、プライドが高く、自分は特別な人間なのだと思い込んでいるという印象があります」
「脱会して気持ちを入れ替えてほしい」

b) オウム報道について

質問内容

(1997 年、99 年)

Q18 現在あなたは、オウム真理教についての報道に対して、どれくらい関心がありますか。次の中から選んで下さい。

1.非常に関心をもっている　2.多少関心をもっている　3.あまり関心をもっていない　4.関心はない

SQ18. Q18 で 1.～3.を選んだ人はその関心の内容について次から選んで下さい。(複数に○をしてもかまいません)

1.裁判のなりゆき
2.今でも信者である人たちのようす
3.脱会した信者の社会復帰
4.麻原彰晃(松本智津夫)の言動
5.オウム真理教の教え
6.サリン事件の被害者に関すること
7.その他[具体的に:　]

①1997 年

1997 年は 289 名（5.1%）の回答者が記述した。麻原彰晃に関することという人が比較的多く 28 名であった。その他、報道のありかたそのものに言及した人が 13 名、指名手配者に触れた人が 9 名、サリン事件に関することを挙げた人が 7 名、マインドコントロールに触れた者が 6 名、上祐史浩の名前を挙げたのが 4 名であった。

＜報道に関して＞

「オウムの起こした事件や行動に興味はあるが、報道はあてにしていない。」
「報道のあり方と、それを支持する一般大衆の心理」
「報道の際の解説のうさんくささ」
「オウム信者、元信者、幹部、教祖たちの生い立ちの事実（芸能レポーターの独断と偏見による解説はいらない)」

＜オウム真理教の現在の活動やその危険性＞

「現在の危険性について」
「またオウムがテロに走るか否か」
「いまだ逃亡中の容疑者のこと」
「サリン事件で死んだ人の家族たちは今どうしているか」
「現在のオウムの活動」

＜事件の背景について＞

「この様な宗教を生み出してしまった時代、社会背景と、信者となる人々の心理の関係について」
「何故宗教が反社会的行動に出るのか」
「何故にインチキ宗教にまで人は救いを求めるのか」

「なぜにオウム真理教のような社会現象が起こったのか？」
「オウム真理教にひかれた人々の性格、人間性」
「信者たちが入信した理由に関すること」
「そこに入ろうとした動機」

＜その他＞

「オウムについての宗教学者の意見」
「上祐に関心がある」
「この事件に対し、一般の人（日本人・外国人）がどのような意見を持っているか」
「どれくらいの刑罪になるか知りたい」
「とにかくすべてに気になる」
「サティアンにいた子供たちの様子や、地域社会の人の受け入れ方、反応」

②1999 年

1999 年に自由記述をした人は 728 名（6.7%）であった。割合で見ても 97 年よりも多い。特徴的なのは破防法に言及したもので 31 名が破防法という言葉を使っていた。オウム真理教の現代の活動状況を知りたいというのが 50 名以上いた。信者の動向といったことを書いた人も 27 名いる。上祐史浩にも 5 名が言及している。マスコミ報道への不信のようなものも 10 名以上が記していた。

＜復活の危惧、活動の規制など＞

「破防法適用、特別立法の制定について」
「逃げつづける 3 人の指名手配者」
「今後どのようにこのような危険な団体の活動を規制すべきか」
「いつか復活しそうな気がする」
「サリン事件が再び起こるのではないかという危惧。もしくは同じ様な事件」
「「オウム復活」という評判だがその事実関係」
「信者の数が増えてきて、全国各地に勢力を拡大させていること」
「今後オウム真理教が再び大きくなることはないのか」
「今でも信者である人たちが住もうとしている市などで反対運動があること、次は何をしようとしているのか」
「オウム真理教の現在行っている活動、地元住民とのトラブル」
「脱会したのにまた戻って来た人達のこと。サリン事件があったにも関わらず信者になる人達のこと」
「上裕の釈放とその後のオウムの活動」
「出所後の幹部の言行やその時の信者の言行」

＜その他＞

「今後の日本社会の宗教に対する考え方」
「オウムの幹部で一流大学を出ながらオウムに入った理由、目的」
「なんで教祖である麻原があんなのに宗教として国がみとめちゃうのはなぞ」
「なぜ彼らはサリンをつくることができたのか」

第22章 イスラム問題

イスラム教については2005年、2012年、2015年の3回質問しているが、近所にモスクができることになったら不安かどうかという内容の自由記述は2012年と15年に設けた。

質問内容

Q16C. モスク(イスラム寺院)が近所にできることになったとするとあなたは不安を感じますか

1. 不安は感じない　2. 少し不安を感じる　3. かなり不安を感じる

Q16D. 上の問いで2または3を選んだ人は、その理由を簡単に書いてください。[　　]

①2012年

この年の回答者4,094名のうち1,782名がQ16Cの質問に「少し不安を感じる」、「かなり不安を感じる」と回答したが、そのうち1,447名（81.2%）と8割を超える人がその理由について具体的に記述している。多くは「怖い、アブナイ」、「テロを起こしそう」、「イメージが悪い」、「迷惑、治安が乱れる」といった簡単な記述に過ぎない。つまりほとんどイメージ的なものであると分かる。

「怖い（こわい)」という表現だけで200名近くにのぼる。テロという表現を用いた人が54名いる。アブナイという表現を用いた者も5名いる。「こわい」「こわいから」「こわそう」「なんかこわい」「なんかこわいから」「なんとなくこわい」「何となく嫌」といった程度の記述が大半であるが、少し具体的な記述もある。

＜テロなど、怖さについて言及したもの＞

「イスラム教の目には目を、歯には歯をという考え方が怖いから。」

「イスラム教は信仰心がつよいから怖い」

「過激な事をやりそうだから」

「過激派だったら（が来たら）と考えるとテロが怖いので」

「過激派によるテロ行為への恐れがある」

「イスラム教は少なからずテロリストと結びついていると思うから」

「テロなどが起こるのではないかと不安があるから」

「テロリストが潜伏している可能性があるため」

「テロリストによる悪用のおそれがあると思うから」

「イスラム教は怒らせると怖いというイメージがあるため」

「モスクに良いイメージがないため」

＜近くにモスクができることへの不安＞

「イスラームをよく思わない人がモスクやムスリムに対し危害を加えるかもしれない。それに巻き込まれることへの危惧」

「イスラム教をむやみに嫌がる人がいそう、そのせいで問題が起こりそうだから」

「イスラム教徒と近辺の住民がトラブルを起こすかもしれないから」

「自分の知らない宗教で、勧誘がこわいから。」

「宗教の結束はかたいと思うからトラブルが起きた時に不安」

「宗教的なデモなどが近所で起こるのは嫌だから」

「宗教的なトラブルが発生した場合、被害を受ける可能性があるから」

「人が沢山来て、交通が不便になりそう。」

「宗教的抗争が起こるかもしれないから」

「イスラム教はキリスト教とずっと戦争しているイメージがあり、何かキリスト教に対する計画を

たてたりせいているんじゃないかと思ってしまうし、単純に外国人が増えそうで怖い。」
「たくさんの人が毎日訪れる、反対派の人が来る、とか考えると不安だと感じるからです」

＜自分がイスラム教について無知であることを自覚＞

「イスラム教自体との関わりがなかったため、どんな宗教なのか分からない」
「イスラム教徒の人と関わったことがないから（全く未知の存在であるから）」
「イスラム寺院がどういうものか分からないから」

＜その他＞

「１日数回モスクから大音量でお祈りのお知らせが流れるかもしれないから。（インドネシアに行ったときそうだった。）」
「アザーンが朝っぱらから流れるのは少し迷惑であるから。」
「シンガポールに行ったときにモスクにおどろいたから」
「クリスチャンとして、摩擦が起きないか不安。間違った宗教の寺院が新たにできるということでも不安。」

②2015 年

2015 年は 5,773 名の回答者のうち、3,519 名が「少し不安を感じる」、「かなり不安を感じる」と回答、そのうち 2,798 名が具体的に記述している。2015 年に比べて不安を覚える人が増えたのであるが、その理由に IS に触れた記述が目立つことが特徴である。回答者のほぼ 8 割がこの設問に具体的に記述していることから、イスラム問題への関心の深さがうかがえる。

具体的記述を求めたのは「少し不安を感じる」、「かなり不安を感じる」という回答の選択肢を選んだ人に対してだけであったのが、「不安は感じない」という選択肢を選んだ人の中にも、その理由について具体的記述をした人がかなりいた。2,104 名のうち 1,550 名がなぜ不安を感じないかを記入していて、74%ほどに上る。そこからはイスラムをそれなりに理解しようとする姿勢が少なからず出てきていることもうかがえる。

不安と思う理由は、不安を感じている人たちが挙げているようなことがらは一部の人たちが関わっているに過ぎないという内容が大半である。つまりアブナイというイメージがあることや、IS が話題になっていること、それがテレビでしばしば報道されていることなどを踏まえた上で、それが日本にいるムスリムに結びつく話とは考えないということである。

具体的記述をいくつか紹介する。

「みんながみんなそうじゃないのはわかってるけど，最近は過激派が怖いから.」
「「イスラム教徒」が来るだけで「犯罪者」が来るわけではないから。」
「「イスラム国」としてテロを行う人はいるが、イスラム教徒全員がそうではないし、危険な宗教だと思わないから」
「ISIL のような過激派はごくわずかだと考えているので」
「IS とイスラム教は別だから」
「TV では話題になっていたがそれは一部だけだと思うから」
「あやしいと思ってないから」
「イスラムの教えは自分の考えていることに近いところがあるから」
「イスラム教そのものに不安を感じていない」
「イスラム教に悪いイメージはないため。」
「イスラム教は危険な宗教ではないから。」
「イスラム教は長い歴史の中で支持されてきた宗教であり大半の人はテロリストではないから」

やや具体的な理由を添えているもの

「イスラム教を信仰していて、危ないことをする人は一部であるから。世界の人口でいったらイスラム教は多いし、気にすることはない」
「イスラム教は長い歴史の中で支持されてきた宗教であり大半の人はテロリストではないから」
「あくまでも“宗教上の”建物であって、“政治的意図”を持って建てられたと考えないから（平和ボケと言われるかもしれませんが)」
「ISIS は聖書の拡大解釈を言い訳に好き放題やっているほんの一部のイスラム教徒だと思うから」
「イスラム教信者で IS のような危ない人はごく一部で, ほとんどの人は穏やかな人だと聞くから. 」
「イスラム教徒=過激派ではないと思うから。日本は治安がいいから大丈夫だと思う。」
「イスラム教徒でもおかしいのはほんの一部で、他の一般的なイスラム教徒の方が差別されるのはおかしいから。」
「イスラム教徒の方々は真面目で、人を殺してはならないと決まっていると TV で報道されていたから」
「イスラム教が恐い宗教だと感じないし、教会が近くにあるのと同じようなものだと思うから。」
「イスラム教について勉強しているため、週 1 モスクに行っているため」
「イスラム教徒，イスラム教の施設が存在することは他人が反対することでなく，必要だと考えるから」
「イスラム教徒でもおかしいのはほんの一部で、他の一般的なイスラム教徒の方が差別されるのはおかしいから。」

2015 年の自由記述全体で IS、ISIS、ISIL という言葉を用いて説明しているのが 110 名いる。「不安は感じない」理由を述べる中でこの言葉を用いたのが 42 名で、「少し不安を感じる」、「かなり不安を感じる」理由を述べる中でこの言葉を用いたのが 68 名である。それぞれ全回答者の 2.7%、2.4%であるので、似たような割合である。IS（イスラム国）を念頭に置いたとしても、それがモスクができることへの不安に直結するとは限らない。

［Ⅳ］日韓比較

日本と韓国で同時に調査を行なったのは、1999 年、2000 年、2005 年、2007 年の 4 回であるが、ここでは 4 回ともおこなった質問項目の他、とくに日韓の共通点や相違点を見ていく場合に重要と思われる結果を中心に示す。

第23章 宗教意識の比較

a）信仰をもつ割合

質問内容

あなたは宗教にどの程度関心がありますか。次のうちから選び、さらにそれぞれの質問に答えて下さい。

1.現在、信仰をもっている

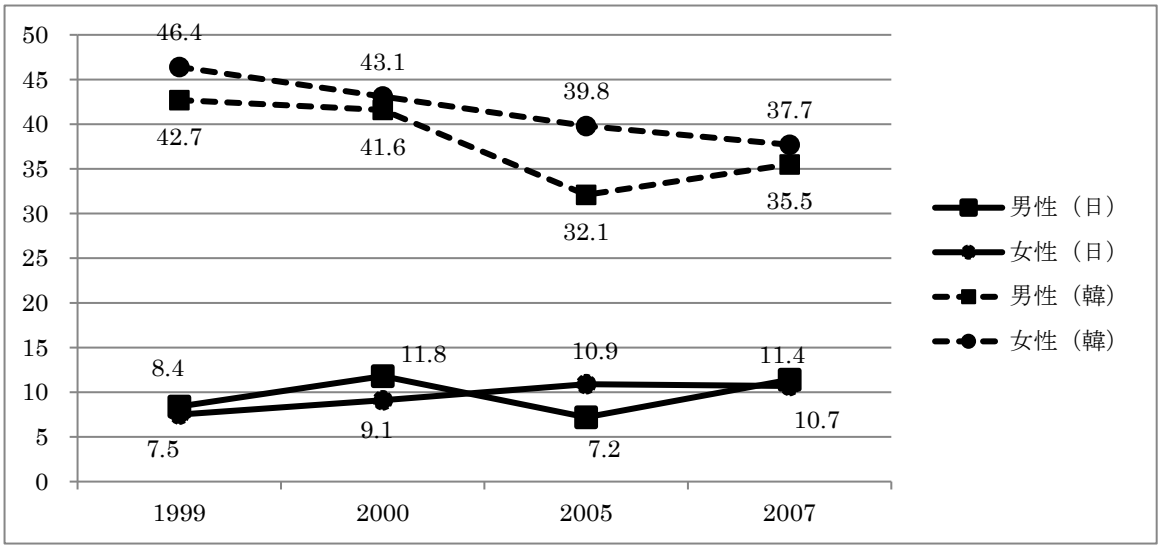
2.信仰はもっていないが、宗教に関心がある

3.信仰はもっていないし、宗教にもあまり関心がない

4.信仰はもっていないし、宗教にもまったく関心がない

この質問は日韓に共通して 4 回とも行っている。質問に対し、「現在、信仰をもっている」と回答した割合を日韓とも男女別に比較した。

グラフ 23a1



＊「信仰をもっている」という割合が4回の調査とも、日韓で大きな差がある。男女差はそれほど大きくないが、韓国の方がやや女性の割合が多い傾向が見てとれる。

b）神仏や霊魂の存在を信じる割合

質問内容

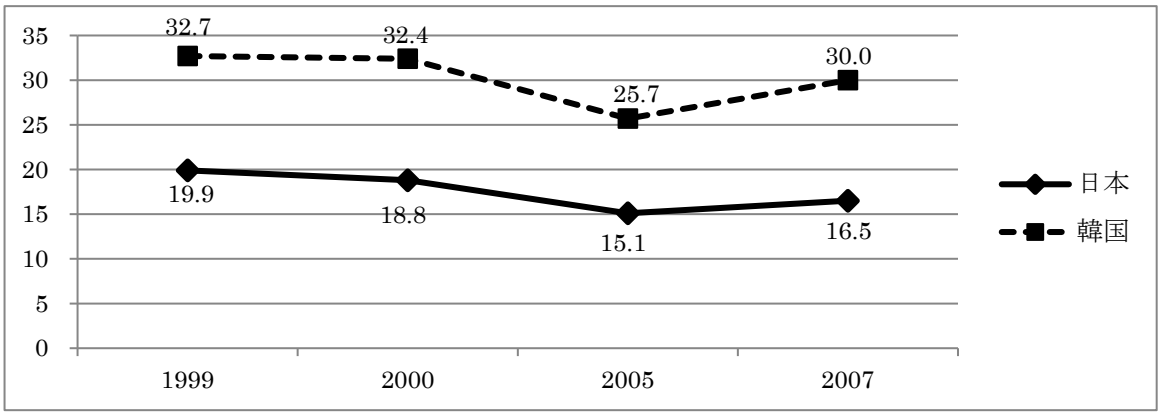
神や仏の存在について、あなたはどう思いますか。「1.信じる　2.ありうると思う　3.あまり信じない　4.否定する」のなかから、番号で答えて下さい。

1.神の存在［　］　2.仏の存在［　］　3.霊魂の存在［　］

この質問について、神の存在、仏の存在、霊魂の存在に関し、それぞれ「信じる」と回答した人の割合を比較する。

①神の存在

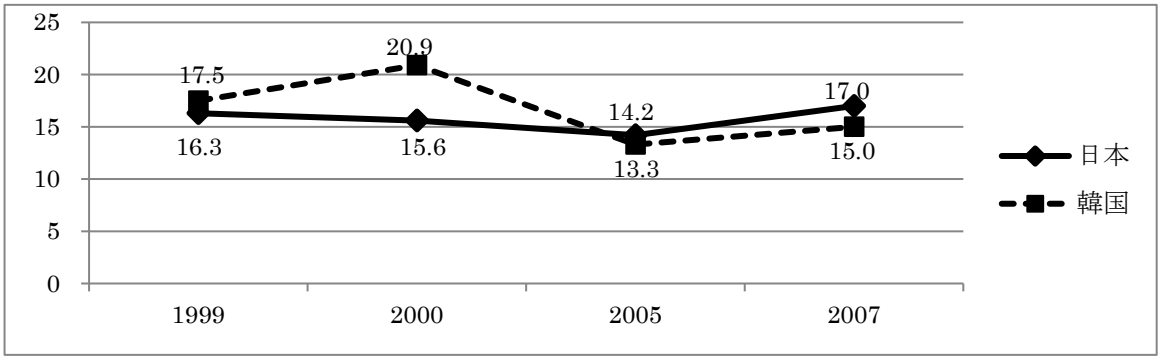
グラフ 23b1



＊4回とも韓国の方が明らかに高い割合を示し、1.5倍～2倍程度多い。

②仏の存在

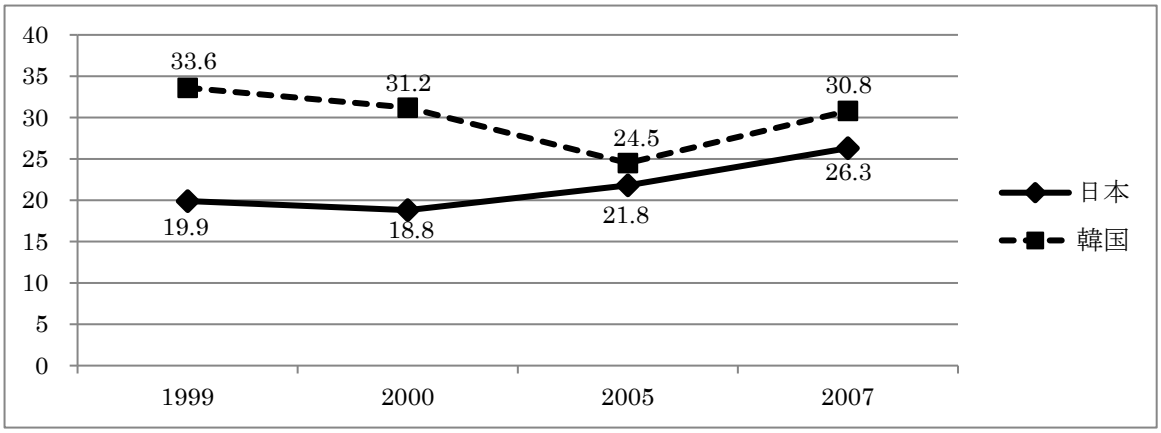
グラフ 23b 2



＊仏の存在に関してはあまり差がない。

③霊魂の存在

グラフ 23b 3



c) 死後の世界

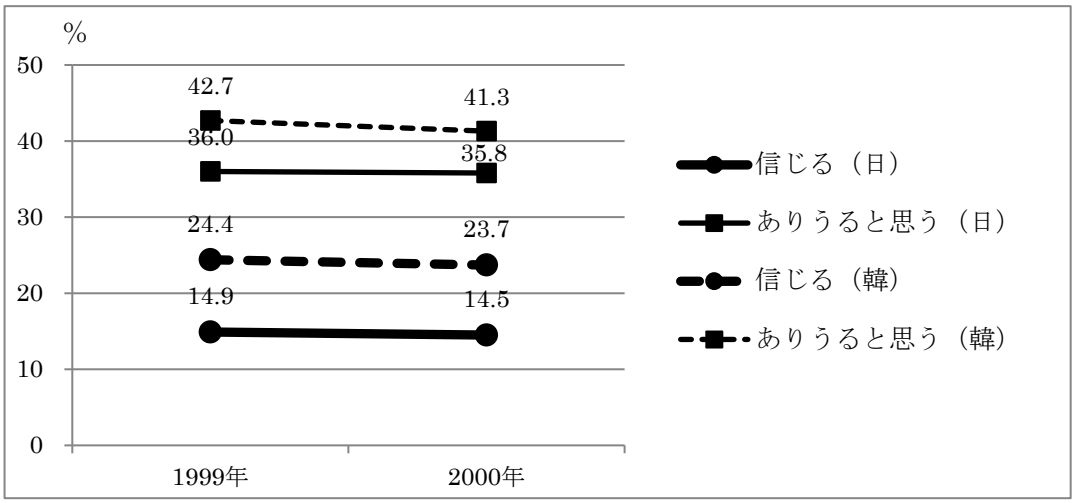
死後の世界に関する項目は 1999 年と 2000 年に共通して設けている。

質問内容

次の事柄について、「1.信じる 2.ありうると思う 3.あまり信じない 4.否定する 5.その事柄を知らない」のなかから、番号で答えて下さい。

6. 死後の世界の存在 [ ]

グラフ 23c1



＊「信じる」という割合も「ありうると思う」割合も、韓国の方が高い。とくに「信じる」という割合は2回とも1.5倍以上の多さになる。

第24章　家庭の宗教環境

a）両親の信仰

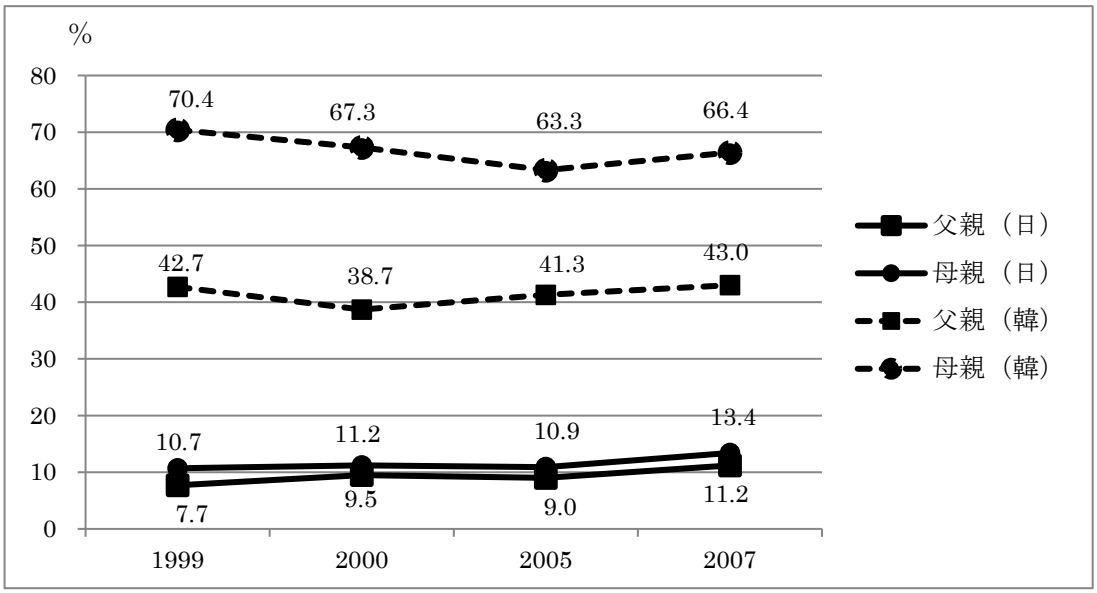
日韓とも父母それぞれについて信仰をもっているかどうかを質問しているので、4 回の結果を比較してみる。

質問内容

あなたのお父さんは個人で信仰をもっていますか。　1.はい　2.いいえ

あなたのお母さんは個人で信仰をもっていますか。　1.はい　2.いいえ

グラフ 24a1



＊韓国が日本よりも両親が信仰をもつ割合が高く、両国とも母の方が父より信仰を持つ割合が高い。また母親と父親との信仰をもつ割合の差は韓国の方が大きい。韓国の場合は約3分の2の母親が信仰をもっていることが分かる。

第25章　宗教習俗への関わり

a）墓参り

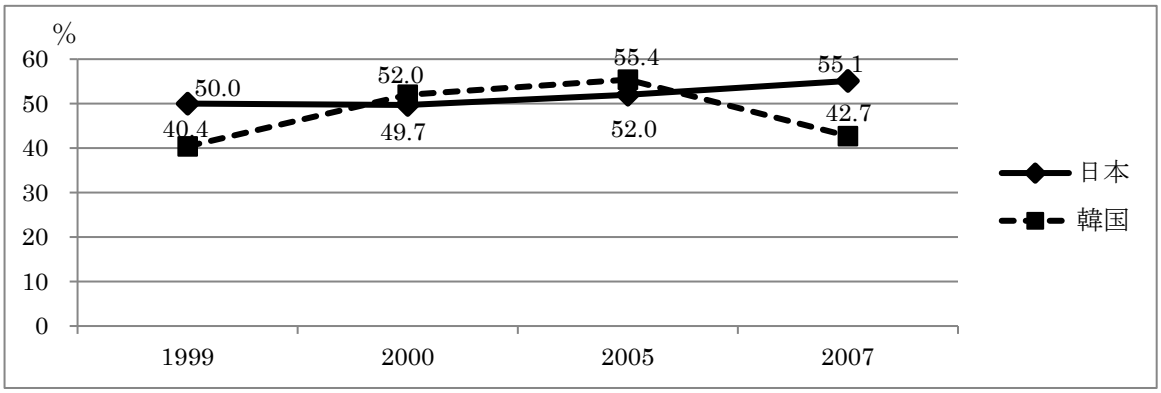
宗教習俗のうち、墓参りは両国において中心的なものの一つであるので、日本はお盆、韓国はチュソクの際の墓参りをしたかどうかで比較した。

質問内容

あなたは去年のお盆の墓参りはどうしましたか。次のうちから選んで下さい。

1.家族と行った　2. 家族とは別に自分だけで行った　3. 行った家族もいるが自分は行かなかった　4.家族の誰も行かなかった　5.その他[　]

グラフ 25a1



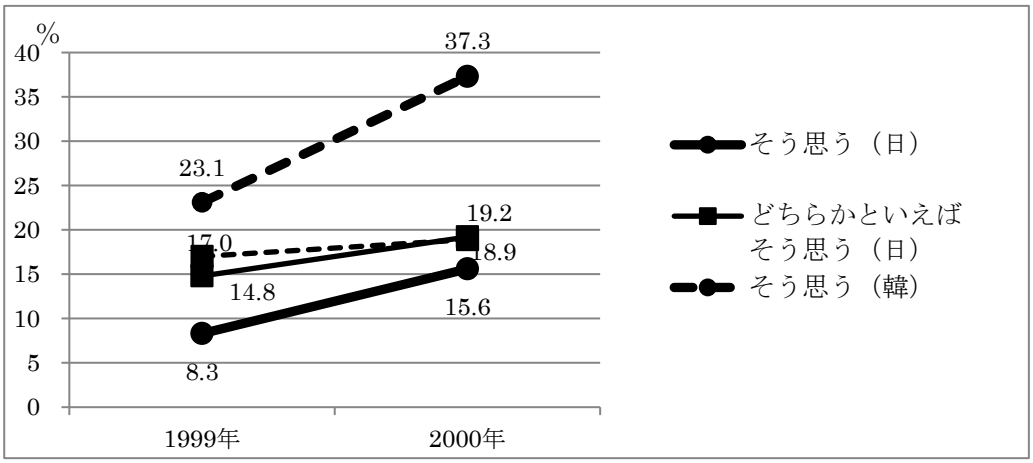
b）信仰と宗教習俗との関係

質問内容

次の事柄について、「1.そう思う　2.どちらかといえばそう思う　3.どちらかといえばそう思わない　4.そう思わない」のいずれかの番号で答えて下さい。

4. ふだん信仰のない家が、葬式のときだけ僧侶（お坊さん）をよぶのはおかしい。　[　]

グラフ 25b1



＊はっきりおかしいと思う割合は韓国が高い。「そう思う」「どちらかといえばそう思う」を合わせると、日韓は23.1%と40.1%（1999年）、34.8%と56.2%（2000年）となり、おかしいのではないかという反応は韓国が日本の1.5倍強である。

第26章　宗教や宗教家への意見

宗教や宗教家についての意見は、3 つを比較してみる。1 つは宗教者の信頼に関する質問で、「相談したいと思う宗教者」についてである。宗教に関する意見は「宗教は必要」と思うかどうかと、「宗教はアブナイ」と思うかどうかという、肯定的、否定的の両方に関して比較する。

a）相談したい宗教家

質問内容

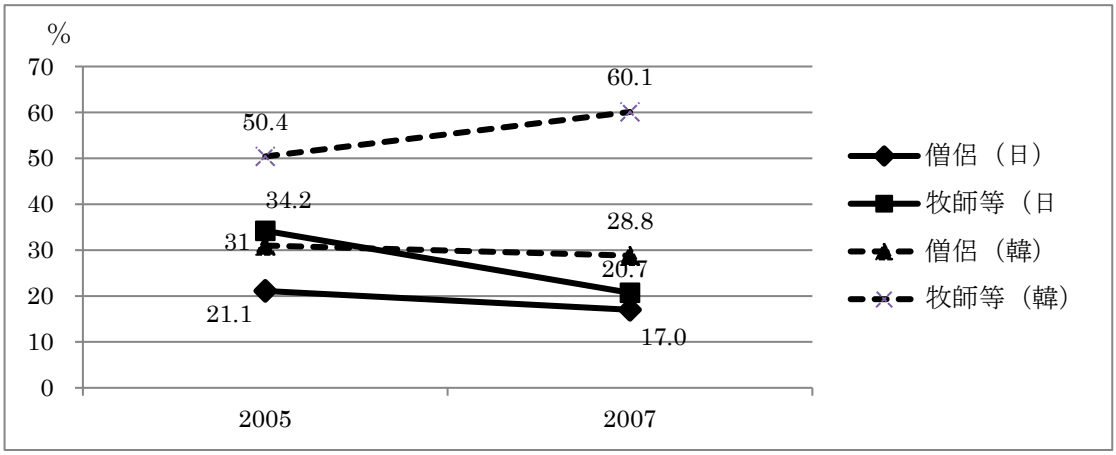
人生に悩んだ時に、相談したいと思う宗教者がいたら次から選んでください。[複数回答可]

1.仏教の僧侶　　2.キリスト教の牧師・神父・シスター　　3.神社の神主

4.街の占い師　　5.その他の宗教家(具体的に:　　)

この質問を共通して行ったのは 2005 年と 2007 年の 2 回である。

グラフ 26a1



＊韓国の場合、キリスト教関係者が高い割合を示すが、これは韓国に日本より多くのキリスト教信者がいることと関係していると考えられる。

b）　どんなに科学が発達しても宗教は必要

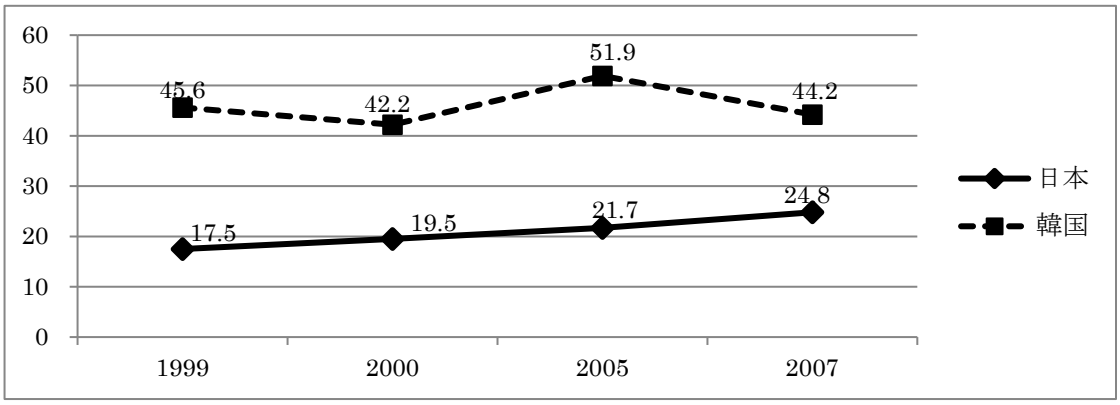
質問内容

次のような意見について、「1.そう思う　2.どちらかといえばそう思う　3.どちらかといえばそう思わない　4.そう思わない」のいずれかの番号で答えて下さい。

「どんなに科学が発達しても、宗教は人間に必要だ。」　　[　]

この質問は日韓において 4 回とも共通して行ったので、その結果を示す。

グラフ 26b1



＊信仰をもつ割合が韓国が高いのを反映して、この質問でも韓国の方が非常に高い。2～3倍の差がある。

c) 宗教はアブナイと思うか

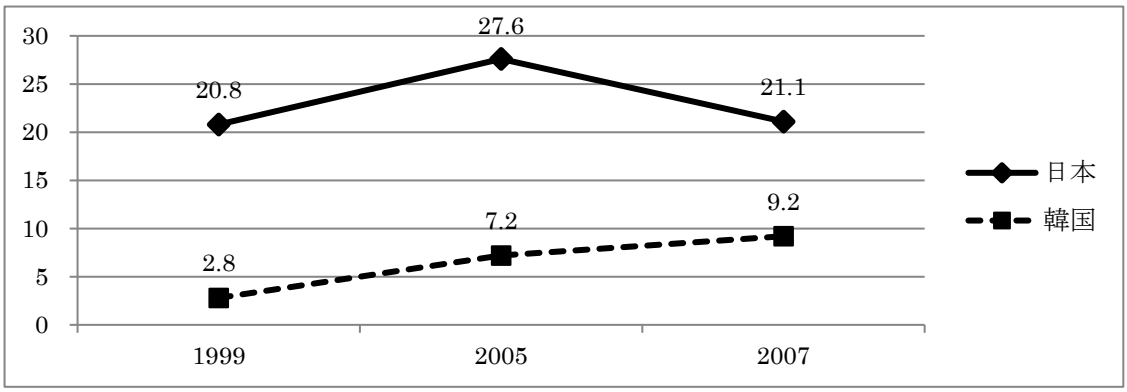
宗教に否定的な意見あるいはイメージを持つ割合を、宗教についてアブナイというイメージを持つかどうかで調べたが、日韓ではどういう違いが出たであろうか。これに関する質問を共通して行ったのは、1999 年、2005 年、2007 年の 3 回である。

質問内容

次のような意見について、「1.そう思う　2.どちらかといえばそう思う　3.どちらかといえばそう思わない　4.そう思わない」のいずれかの番号で答えて下さい。

「一般的に宗教は、アブナイというイメージがある。」　　［　］

グラフ 26c1



＊宗教がアブナイと思う割合は、日本の方がはるかに高い。ただ、韓国でも少しずつ増えていることが注目される。

第27章　宗教関連の社会問題

宗教関連の社会問題は数多くきいているが、宗教の勧誘、愛国心、靖国問題、脳死と臓器提供、ジェンダー問題について比較してみる。

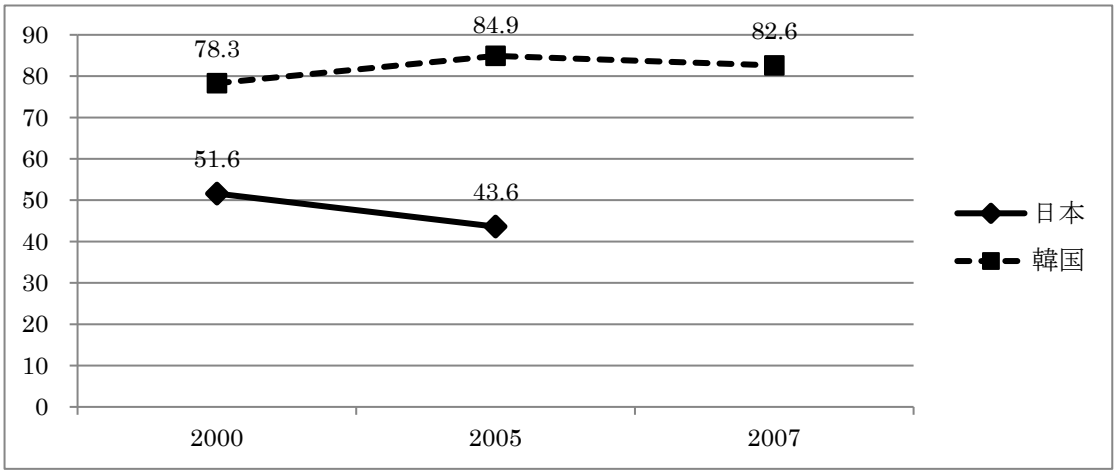
a）宗教の勧誘

質問内容

あなたは見知らぬ人から宗教の勧誘を受けたことがありますか。　1.はい　　2.いいえ

この質問は韓国では 3 回おこなったが、日本では 2007 年に質問を少し変えたので、2007 年の数値は示してない。

グラフ 27a1



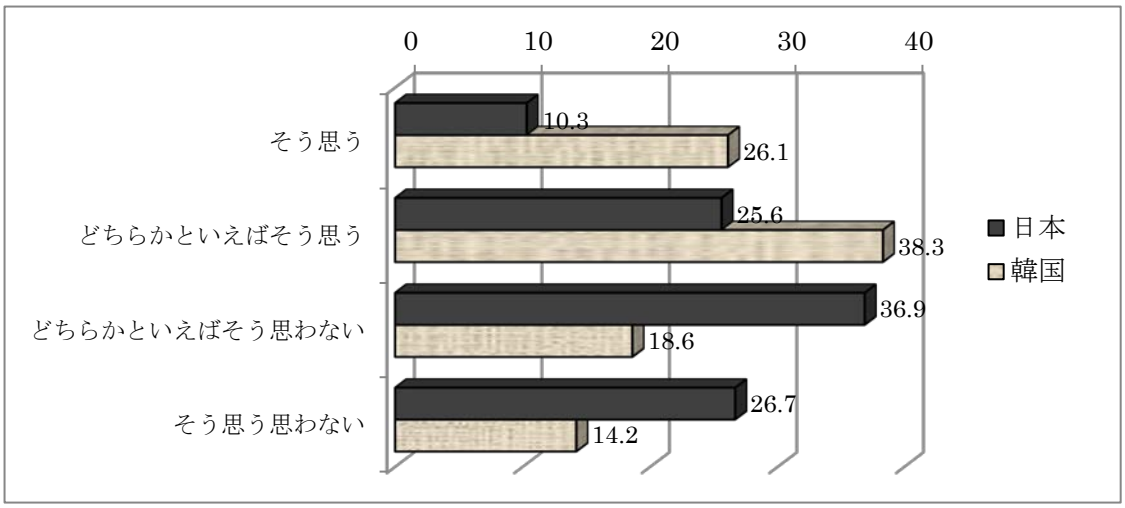
b）愛国心

質問内容

宗教と教育に関する次の意見について、「1.そう思う　2.どちらかといえばそう思う　3.どちらかといえばそう思わない　4 そう思わない」のいずれかの番号で答えて下さい。

「高校までの教育で、愛国心を深めるための工夫をした方がいい。」　　[　]

グラフ 27b1



c）靖国問題

靖国問題について、日韓に共通の設問をしたのは 2005 年だけである。

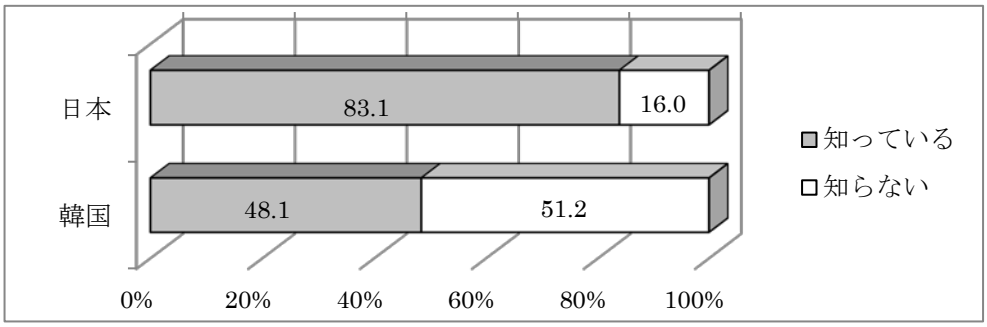
①対立があることの認識

質問内容

首相が靖国神社を参拝することをめぐって対立する意見があることを知っていますか。

1.知っている　　2.知らない

グラフ 27c1



＊日本は8割以上が「知っている」と回答しているが、韓国は半数弱である。

②首相参拝への意見

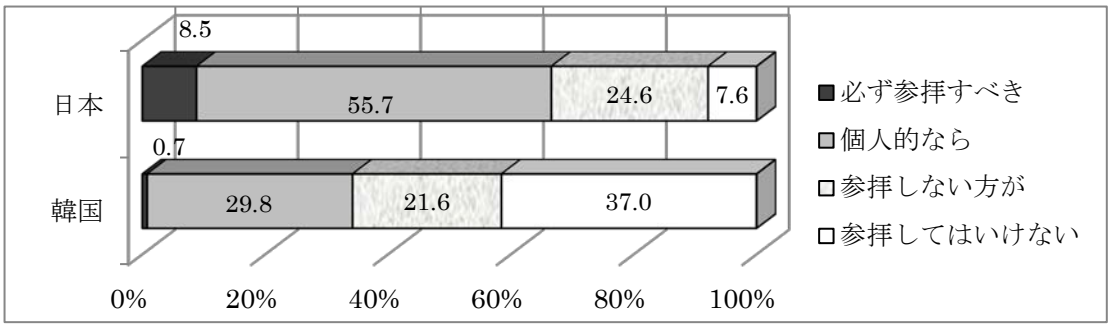
質問内容

あなたは首相が靖国神社を参拝することをどうおもいますか。次から 1 つ選んでください。

1.必ず参拝すべきである　2.個人的な信仰なら参拝してもいい

3.参拝しない方がいい　4.参拝してはいけない

グラフ 27c2



＊日本では「個人的な信仰なら参拝してもいい」が過半数を占めたが、韓国では「参拝してはいけない」が4割近い。しかし韓国でも「個人的な信仰なら参拝してもいい」が3割近くであることは興味深い。

d）脳死と臓器提供

質問内容

［2000 年と 2007 年］

次の事柄について、「1.そう思う 2.どちらかといえばそう思う 3.どちらかといえばそう思わない 4.そう思わない」のいずれかの番号で答えて下さい。

自分が脳死状態になったら、臓器を提供したい。　　［　］

［2005 年］

あなたが脳死状態になった場合、臓器を提供することをどう思いますか。

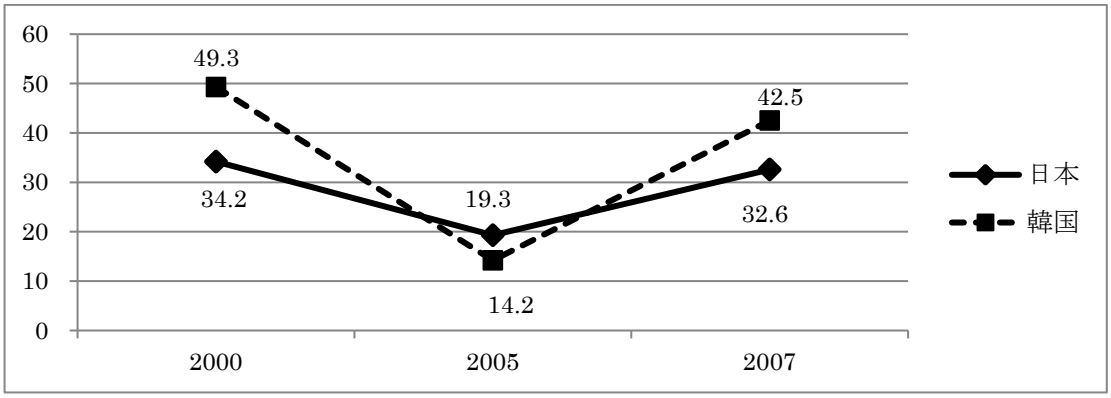
1.ぜひ提供したい 2.提供してもよい 3.あまり提供したくない 4.絶対提供したくない

5.その他［　　］

2000 年、2007 年の質問と 2005 年の質問とでは質問内容と回答の選択肢がいずれも少し異なる。2005 年は強い肯定の選択肢が設けられていて、それが反映された結果になっている。そこで、1 を選んだ割合と 1 または 2 を選んだ割合の 2 つを以下に示す。

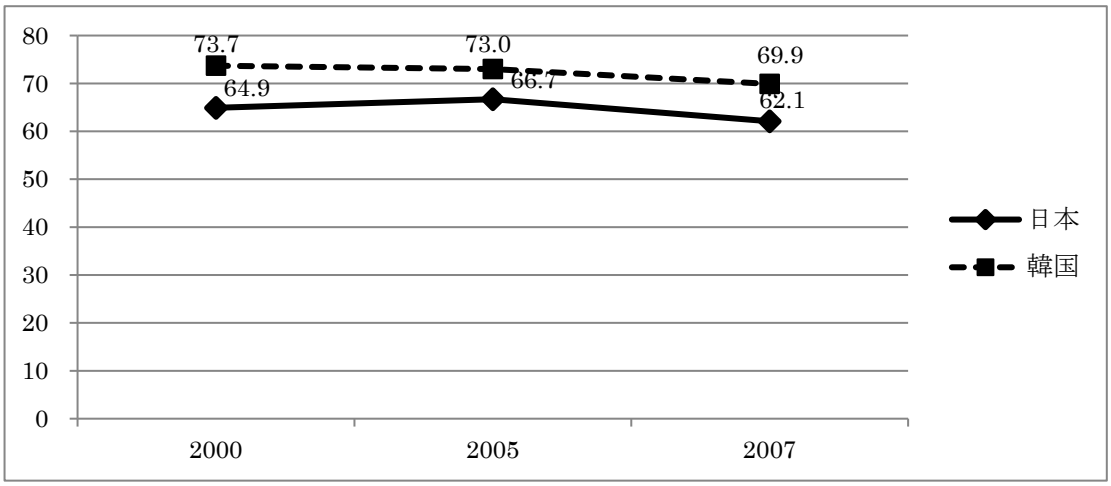
＜1 を選んだ割合＞

グラフ 27ｄ1



＜1 または 2 を選んだ割合＞

グラフ 27ｄ2



e) ジェンダー問題

ジェンダー問題に共通の質問をしたのは 1999 年、2000 年、2005 年の 3 回である。ジェンダー問題では日本での調査でいずれの質問内容によっても男女差が出たが、日韓で比較するとどうなるかを調べた。とくに宗教教団における役職や地位に関わる点での回答を比較する。

質問内容

（1999 年と 2000 年）

宗教によっては女性が教団の特定の役職や地位につけないところがあります。これについてあなたはどう思いますか。

1.その宗教の決まりにもとづくものだからそれでよい。

2.たとえ宗教の決まりであっても、そのようなことは問題である。

3.このような問題には関心がない。

（2005 年）

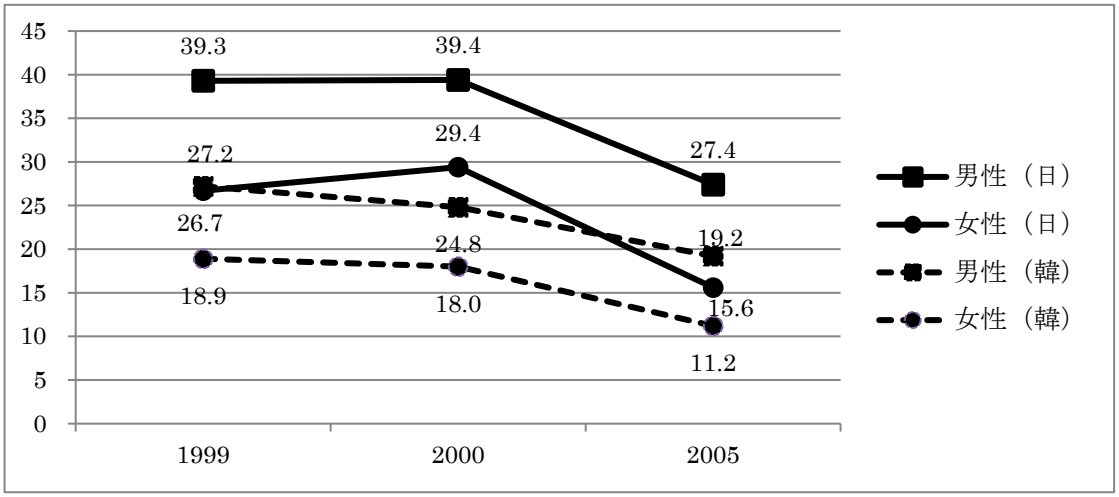
宗教によっては女性が教団の特定の役職や地位につけないところがあります。これについてあなたはどう思いますか。

1.差別だと思う

2.差別だと思わない

3.分からない

グラフ 27e1



＊1999年と2000年は問題と思わない割合、2005年は差別だと思わない割合をグラフにした。日本の方が差別でないと思う割合が高い。両国とも男性の方が女性より差別でないと思う割合が高い。

第28章　オウム真理教について

オウム真理教事件は日本では広く知られているが、韓国で知られている割合はだいぶ低いと考えられる。地下鉄サリン事件から 10 年を経た 2005 年に日韓でオウム真理教に関してどの程度知っているかを調査したので比較する。

質問内容

オウム真理教について、以下のうちあなたが知っているものに〇をしてください。[複数回答可]

1.1995年に地下鉄サリン事件を起こした

2.教祖は麻原彰晃（本名松本智津夫）である。

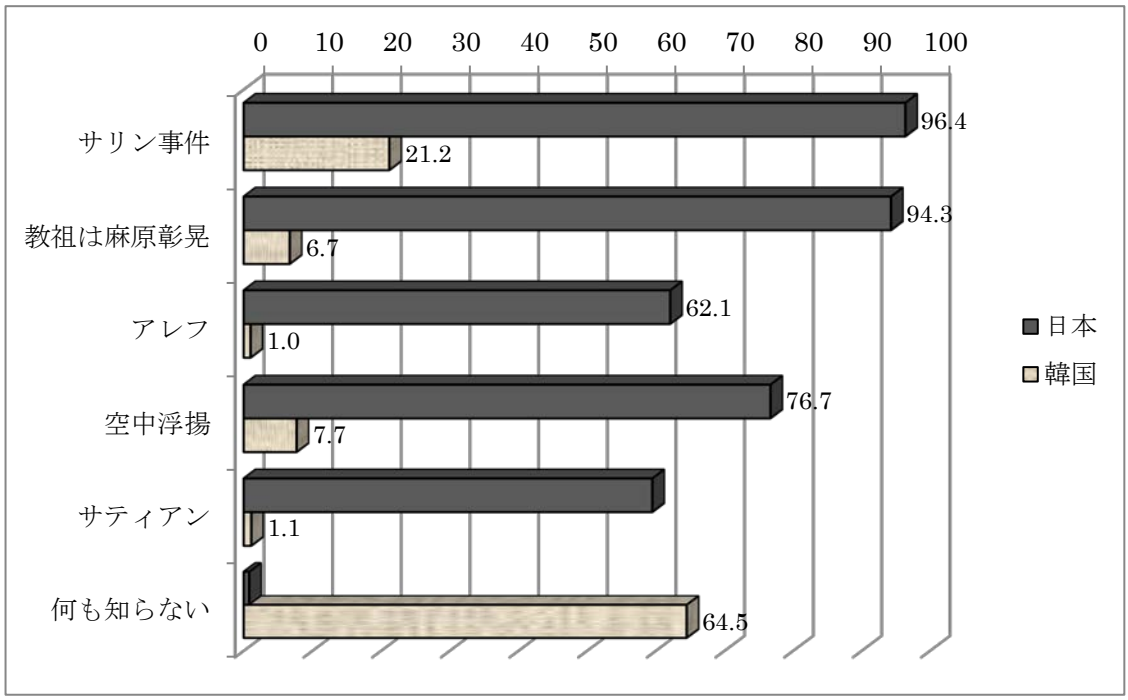
3.現在はアーレフと名乗って活動している

4.修行によって空中浮揚など超能力が得られると主張した

5.信者たちが修行していたところはサティアンと呼ばれていた

6.オウム真理教については何も知らない

グラフ 28a1



＊当然のことであるが、韓国では3分の2近くが「何も知らない」と回答している。しかし、サリン事件については2割強が知っていたことが分かる。

第29章　イスラム問題

a）イスラム教への関心

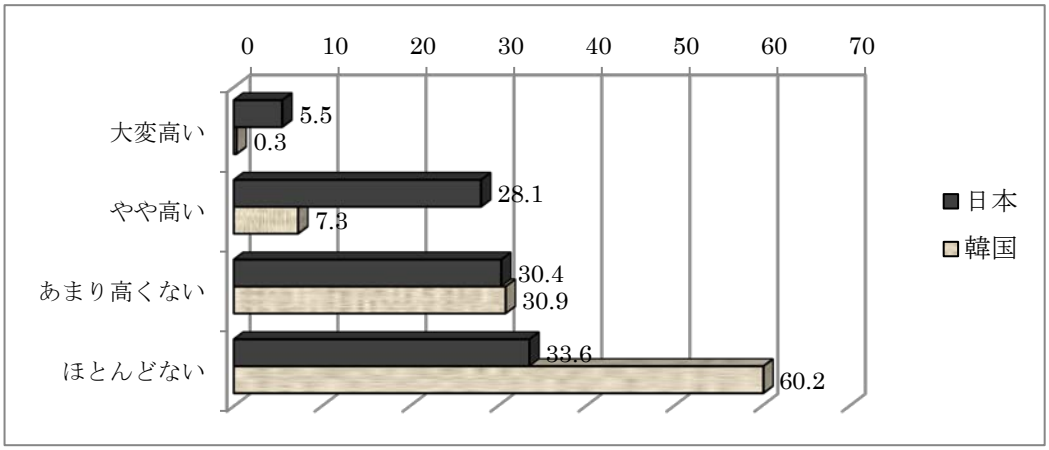
自由記述においてもイスラム問題への関心は日韓とも少しずつ高まっているが、共通する質問は2005年の1回だけなので、この年での関心度合を比較してみる。

質問内容

最近のあなたのイスラム教への関心は次のうちどれですか

1.大変高い 2.やや高い 3.あまり高くない 4.ほとんどない

グラフ 29a1



＊2005年の時点では、日本の方がいくらかイスラム教への関心が高いことが分かる。

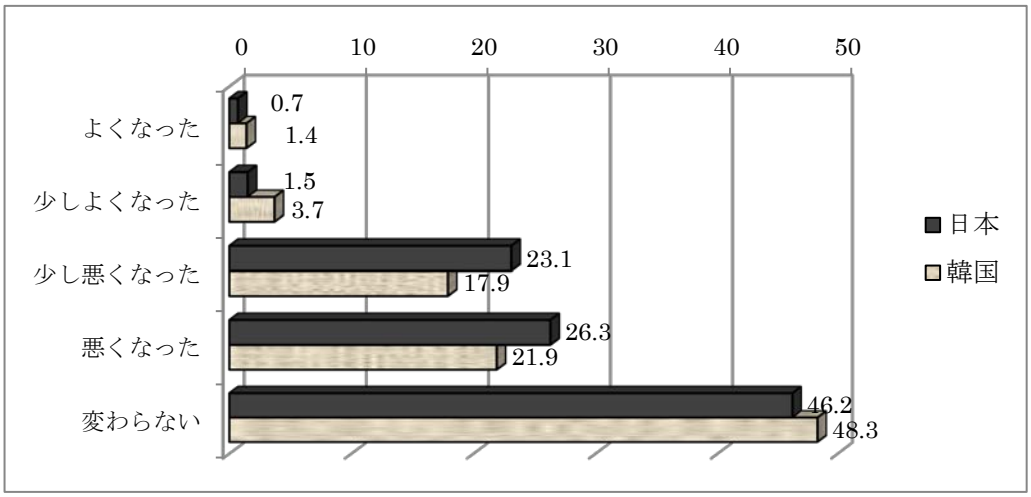
b）「9.11」以後のイスラム教のイメージ

質問内容

「9.11」（米国同時多発テロ事件）以後、イスラム教へのあなたのイメージはどうなりましたか。

1.よくなった 2.少しよくなった 3.少し悪くなった 4.悪くなった 5.変わらない

グラフ 29ｂ1



＊「9.11」以降どれくらいイスラム教のイメージが悪くなったかについて、日韓でそれほど大きな差は見られないが、韓国の方がイメージが悪くなった割合が1割ほど多い。「変わらない」という回答はどちらも半数近くである。

第30章　宗教教育に関すること

a）宗教教育の必要性

質問内容

（1999年）

次のような意見について、「1.そう思う　2.どちらかといえばそう思う　3.どちらかといえばそう思わない　4.そう思わない」のいずれかの番号で答えて下さい。

「高校までにもっと宗教についての基礎知識を教えるべきだ。」　［　］

（2005 年）

宗教についての次の意見について、「1.そう思う　2.どちらかといえばそう思う　3.どちらかといえばそう思わない　4.そう思わない」のいずれかの番号で答えて下さい。

「高校までにもっと世界の宗教についての基礎知識を教えるべきだ。」　［　］

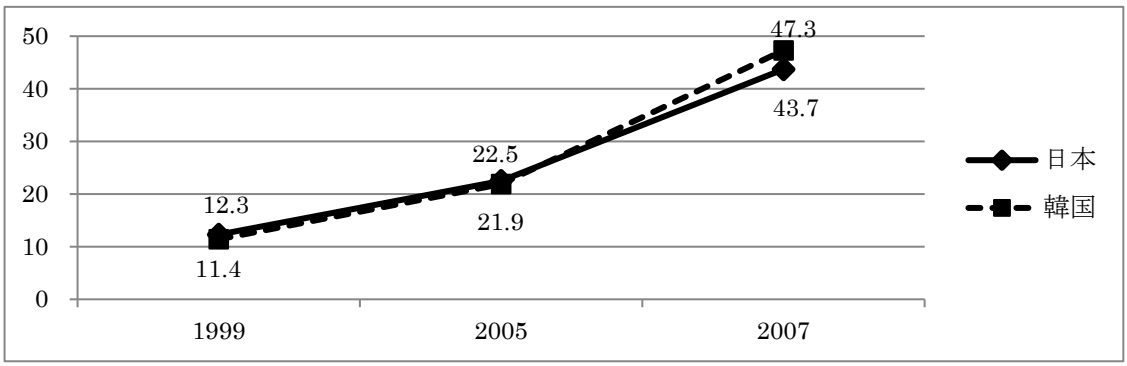
（2007 年）

宗教と教育に関する次の意見について、「1.そう思う　2.どちらかといえばそう思う　3.どちらかといえばそう思わない　4.そう思わない」のいずれかの番号で答えて下さい。

「高校までに日本や世界の宗教文化についての基礎的な知識を学んだ方がいい。」　［　］

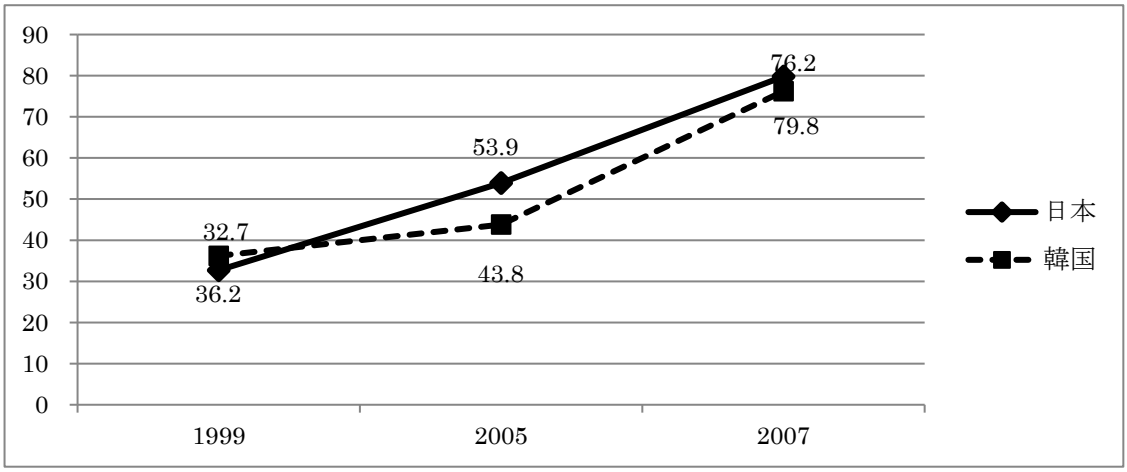
以上の質問に「そう思う」と答えた割合と肯定的意見を、それぞれ次の 2 つのグラフで比較する。

グラフ 30a1

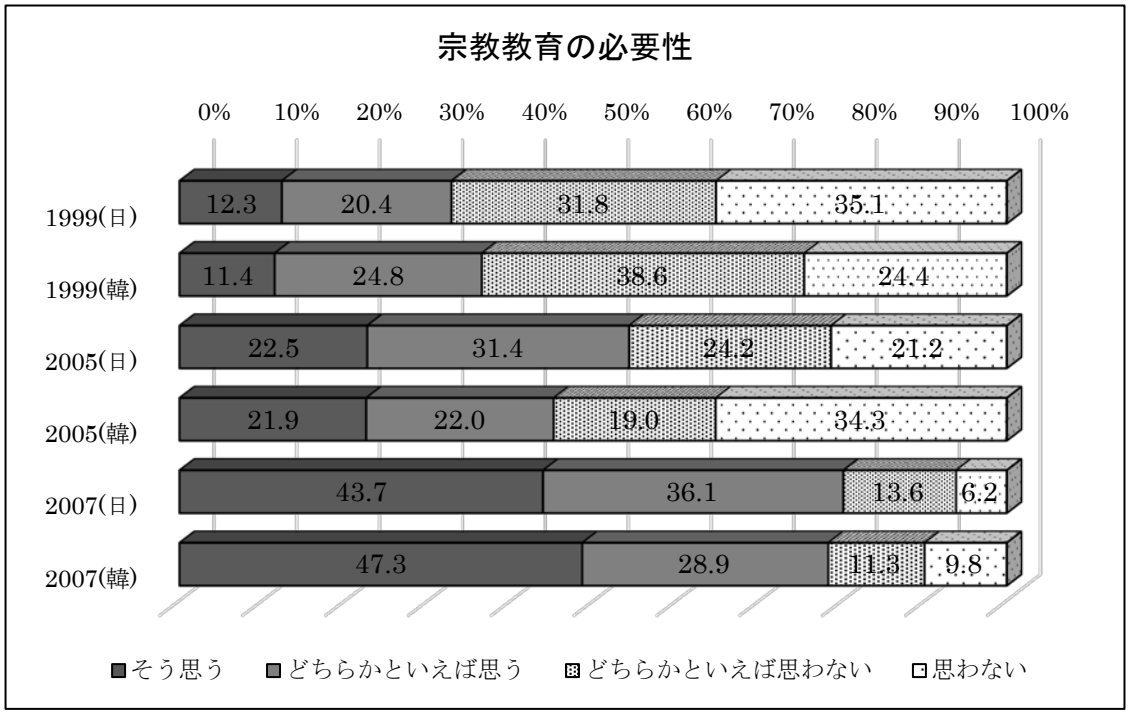


＊日韓とも差がなく、かつ質問内容の変化に応じた増加になっている。

グラフ 30a2



グラフ 30a3



＊「そう思う」は日韓とも似た増加。どちらかといえばそう思う」は日本の方が増加がやや顕著。

第31章　サブカルチャー、その他

サブカルチャー、その他に関しては、日韓であまり大きな差がない。このことを占い関連（手相、血液型による性格判断、姓名判断、風水）と、超常現象関連（テレパシー、前世・生まれ変わり）で見てみる。またこれらを含むウェブ上の宗教情報への関心も比較する。

a）占いへの関心

質問内容

次にあげた占いについて「1.かなり当たると思う　2.当たることもあると思う　3.当たらない　4.関心がないのでどのようなことをするかわからない」のなかから、番号で答えて下さい。

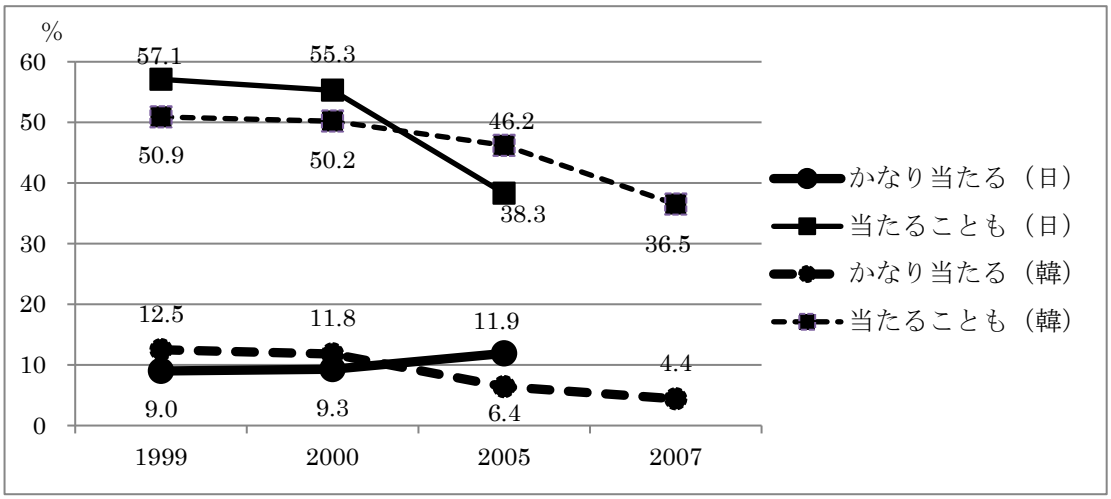
1.こっくりさん	[　]	5.タロット占い	[　]
2.手相	[　]	6.血液型による性格判断	[　]
3.姓名判断	[　]	7.神社･仏閣のおみくじ	[　]
4.生まれ月による星占い	[　]	8.コンピューター占い	[　]

占いに関する質問では 2000 年にはコンピュータ占いを外し、ジンクスと風水を加えた。占いに関しては、質問項目が一部調査ごとに変わったものがあるので、手相、血液型による性格判断、姓名判断についての比較を示す。

①手相

手相について、「かなり当たると思う」及び「当たることもあると思う」と回答した割合を比較した。

グラフ 31a1

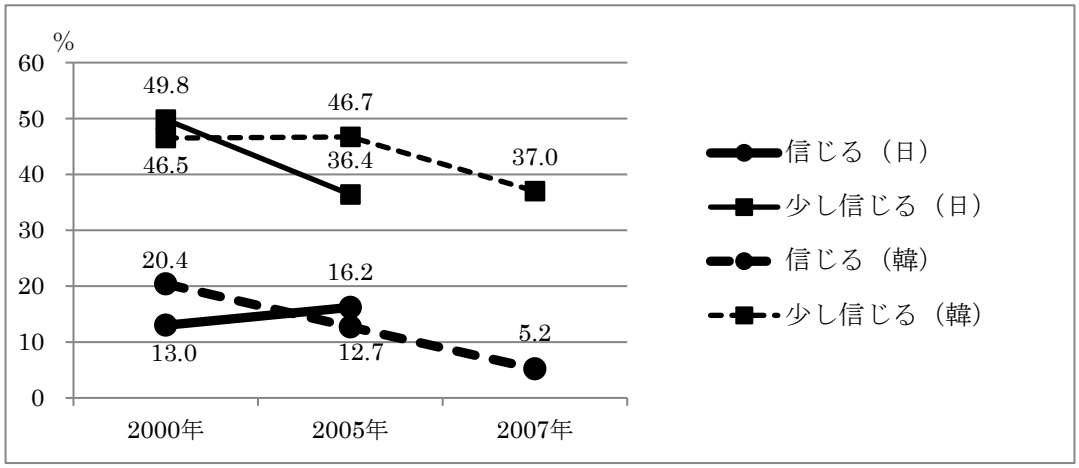


＊日本では2007年にはこの質問を設けなかった

②血液型による性格判断

血液型による性格判断について、「信じる」「少し信じる」と回答した割合の比較

グラフ 31a2

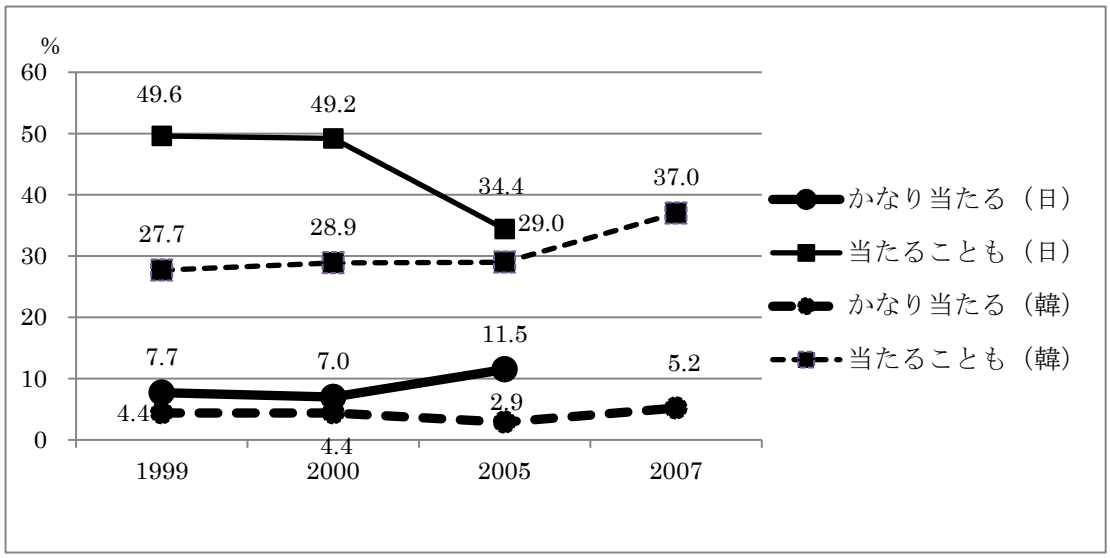


＊日本では2007年にはこの質問を設けなかった。

③姓名判断

姓名判断について、「かなり当たると思う」及び「当たることもあると思う」と回答した割合を比較した。

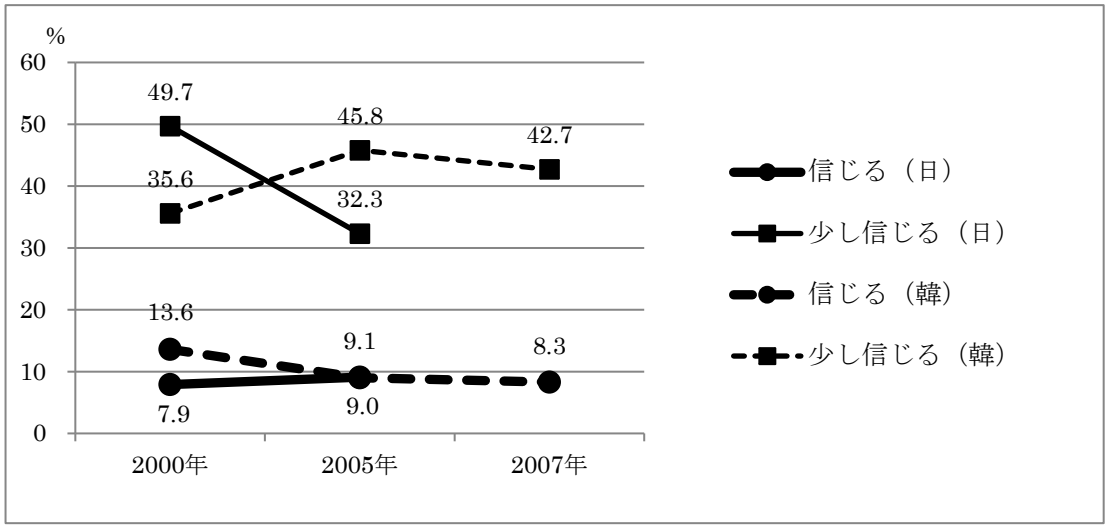
グラフ 31a3



＊姓名判断は日本の方が信じる割合が高い。日本では2007年にはこの質問を設けなかった。

④風水

グラフ 31a4



＊日本では2007年にはこの質問を設けなかった。

b）超常現象などへの関心

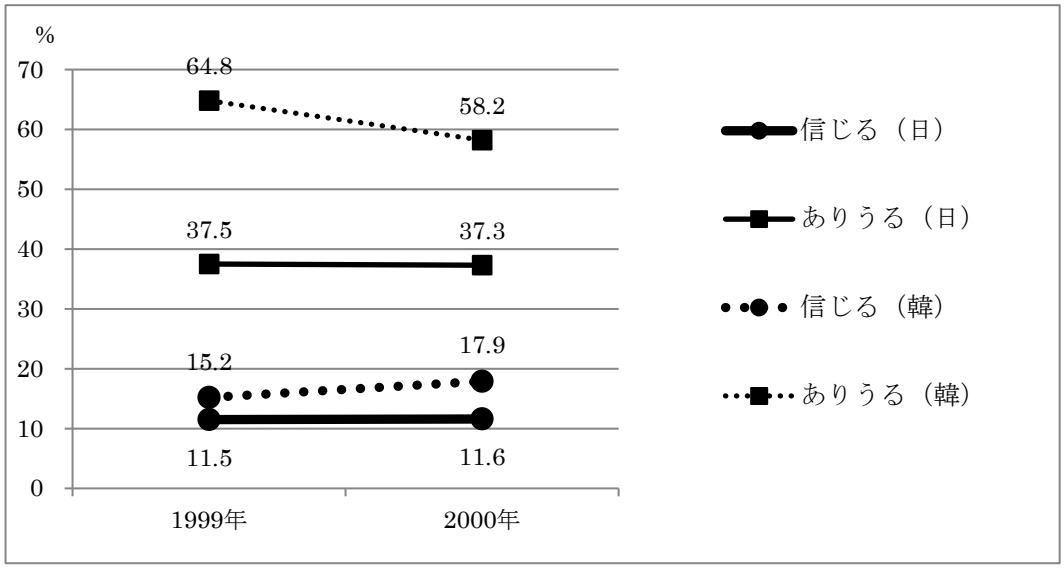
①テレパシー

質問内容

次の事柄について、「1.信じる 2.ありうると思う 3.あまり信じない 4.否定する 5.その事柄を知らない」のなかから、番号で答えて下さい。

テレパシーの存在[ ]

グラフ 31b1



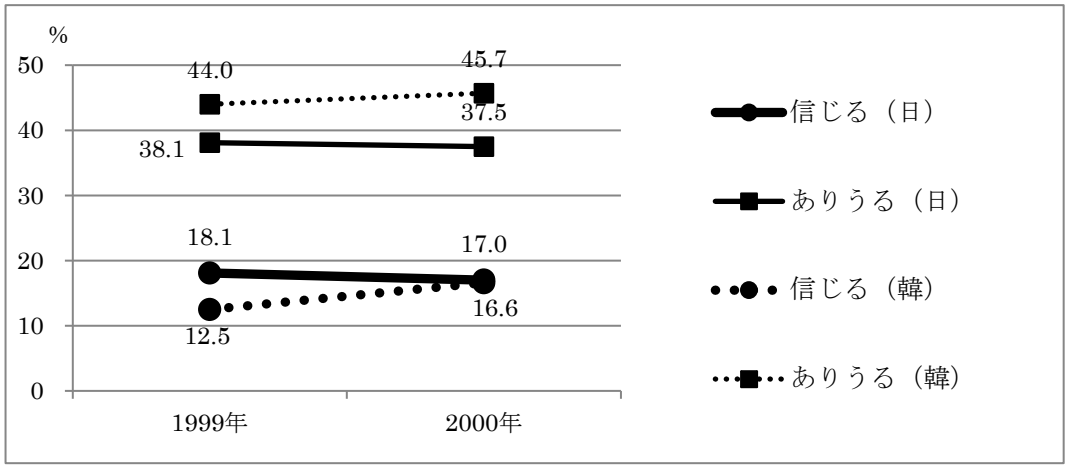
②前世・生まれ変わり

質問内容

次の事柄について、「1.信じる 2.ありうると思う 3.あまり信じない 4.否定する5.その事柄を知らない」のなかから、番号で答えて下さい。

前世・生まれ変わり [ ]

グラフ 31b2



c)ウェブ上の宗教情報への関心

宗教関連のどのようなホームページに関心あるかは、2005 年と 2007 年に日韓で質問している。

質問内容

インターネットのホームページのうち、あなたが関心をもっているものを選んでください。[複数回答可]

1.宗教団体のホームページ　2.オカルト・超常現象に関するホームページ

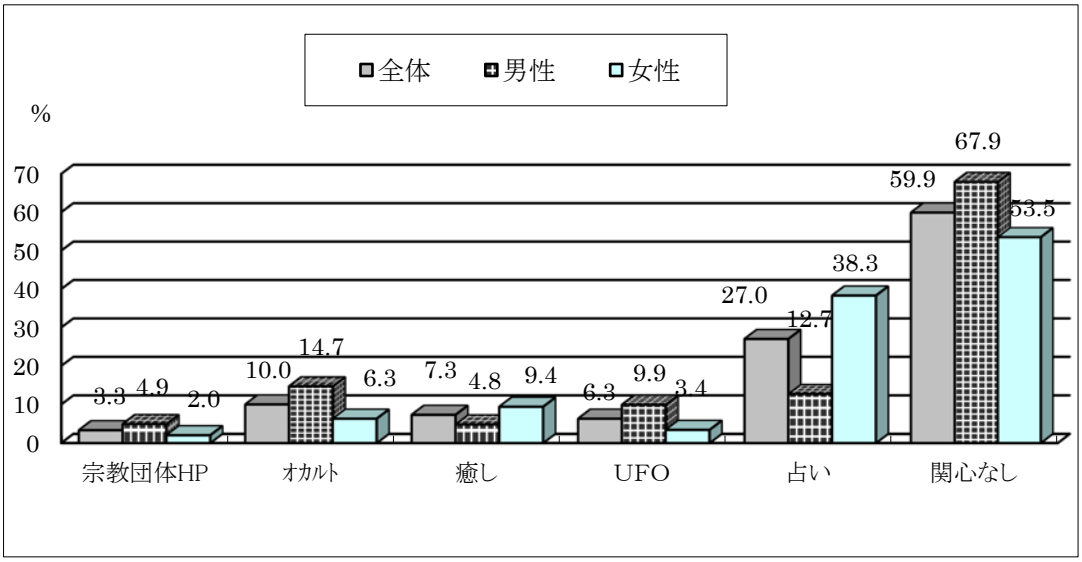
3.癒し・スピリチュアリティに関するホームページ　4.UFOに関するホームページ

5.占いに関するホームページ　6.1～5 のようなホームページには関心はない

この結果は日韓とも男女差が顕著であったので、男女別にグラフで示す。男女差はとくに「占いに関するホームページ」において大きく、2007 年で日韓とも女性が男性の約 3 倍ほど関心を持っていることが分かる。

＜日本＞

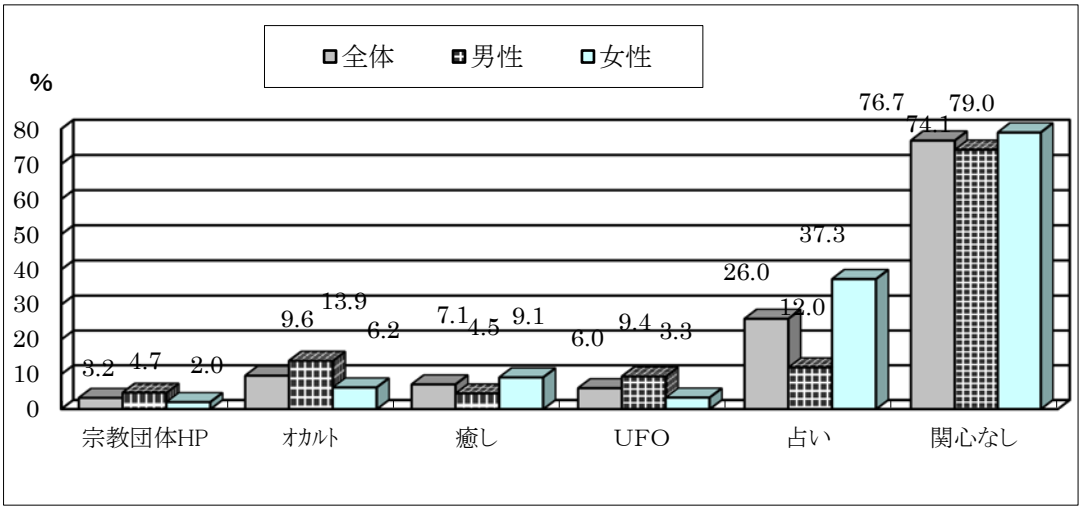
グラフ 31c1



＊UFO、オカルトにおいて男性が高く、癒しと占いにおいて女性が高い

＜韓国＞

グラフ 31c2



＊日本と同様にオカルトとUFOで男性が高く、癒しと占いで女性が高い。

本調査を参照している研究文献一覧

1. 日本語（単行本）

井上順孝『若者と現代宗教 ―失われた座標軸』、ちくま新書、1999 年。
井上順孝『若者における変わる宗教意識と変わらぬ宗教意識』、國學院大學、2006 年。
芹沢俊介『子どもたちはなぜ暴力に走るのか』、岩波書店、1998 年。
寺川幽芳『親鸞の思想 ―宗教心理学の視点から』、法藏館、2005 年。
西脇良『日本人の宗教的自然観 ―意識調査による実証的研究』、ミネルヴァ書房、2004 年。

2. 日本語（論文）

池上良正「日本における「死者の身近さ」をめぐって ―民俗・民衆宗教研究の視角から」『死生学研究』8、東京大学大学院人文社会系研究科、pp.308(341)-317(332)、2006 年。
磯岡哲也「大学生の宗教意識 ―1995～98 年調査結果より」『白山社会学研究』7、白山社会学会、pp.1-6、1999 年。
磯岡哲也「宗教系大学別の分析」『現代日本における宗教教育の実証的研究』、國學院大學、pp.38-46、2001 年。
磯岡哲也「韓国の宗教系学校における宗教教育の現状」『現代宗教』2007、秋山書店、pp.190-208、2007 年。
市川誠「宗教系高等学校の入学者と卒業者の傾向についての一考察」『現代日本における宗教教育の実証的研究』、國學院大學、pp.99-107、2001 年。
井上順孝「大学生の宗教意識 ―宗教教育に関するアンケート調査の分析から」『國學院大學日本文化研究所紀要』72、國學院大學日本文化研究所、pp.1-64、1993 年。
井上順孝「現代社会の世俗性と宗教性」『東洋学術研究』34-1、東洋哲学研究所、pp.37-52、1995 年。
井上順孝「学生における宗教および超常現象・神秘現象への関心」『國學院大學日本文化研究所紀要』78、國學院大學日本文化研究所、pp.25-62、1996 年。
井上順孝「宗教への関与のダブルスタンダード ―宗教と「宗教周辺」をめぐる意識の違い」『現代日本における宗教教育の実証的研究』、國學院大學、pp.1-37、2001 年。
井上順孝「新しい局面を迎えた現代の宗教教育 ―日韓の比較を通して」『宗教教育の日韓比較』、國學院大學、 pp.4-17、2002 年。
井上順孝「国際シンポジウム「宗教教育の歴史と現状」の報告」『宗教教育の日韓比較』、國學院大學、pp.66-90、2002 年。
井上順孝「日韓の学生のアンケート調査結果の比較」『宗教教育の日韓比較』、國學院大學、pp.91-96、2002 年。
井上順孝「中等教育・高等教育における宗教の扱い ―教師ができること・できないこと」『基督教研究』63-2、基督教研究会、pp.16-25、2002 年。
井上順孝「警戒される「宗教」と維持される「宗教性」 ―七年にわたる学生への宗教意識アンケート調査から」『現代宗教』2002、東京堂出版、 pp.265-282、2002 年。
井上順孝「現代学生が示す宗教への意識と態度 ―1992 年～2001 年のアンケート調査の分析」『國學院大學日本文化研究所紀要』92、國學院大學日本文化研究所、pp.15-52、2003 年。
井上順孝「公立学校における宗教教育の課題」『高等教育における宗教の扱いに関する日韓比較』、國學院大學、pp.4-16、2004 年。

井上順孝「日本人の宗教心の構造 ―学生への意識調査から見えてくるもの」『Gyros』1、勉誠出版、pp.167-177、2004 年。
井上順孝「宗教文化士制度の必要性とその概要」『宗教研究』81-4、日本宗教学会、pp.108-109、2008 年。
井上順孝「霊能番組への関心と宗教情報リテラシー ―第 9 回学生宗教意識調査の結果を中心に」『國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所年報』1、國學院大學研究開発推進機構、pp.27-54、2008 年。
井上順孝「大学生の意識調査から ―占い・オカルトブームと若者」『月刊国民生活』4、国民生活センター、pp.26-28、2008 年。
井上順孝「「宗教文化士」制度の発足へ向けて」『國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所年報』3、國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所、pp.29-36、2010 年。
井上順孝「学生の宗教意識の変化 ―2007 年度のアンケート調査を基本とした比較」『國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所プロジェクト「デジタル・ミュージアムの構築と展開」2009 年度研究報告書』、國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所、pp.32-78、2010 年。
井上順孝「グローバル化・情報化時代における宗教教育の新しい認知フレーム」『宗教研究』85-2、日本宗教学会、pp.111-137、2011 年。
井上順孝「教育における宗教情報リテラシー ―「宗教文化士」制度発足の背景」『宗務時報』113、文化庁文化部宗務課、pp.1-16、2012 年。
井上順孝「宗教の境界線 ―学生に対する意識調査から」『國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所年報』6、國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所、pp.40-66、2013 年。
井上順孝「学生宗教意識調査 ―Column 世界の調査／日本の調査」『社会と調査』10、社会調査協会、p.122、2013 年。
井上順孝「学生たちが感じたオウム真理教事件 ―宗教意識調査の 16 年間の変化を追う」『〈オウム真理教〉を検証する ―そのウチとソトの境界線』、春秋社、pp.257-286、2015 年。
井上順孝「ポスト・サリン事件の学生の宗教意識とオウム真理教観 ―20 年間に生じた宗教意識の変化を中心に」『國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所年報』9、國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所、pp.79-101、2016 年。
井上順孝「宗教文化教育と意識されない価値判断 ―認知科学等の視点を参照して」『國學院雑誌』118-6、國學院大學総合企画部、 pp.1-23、2017 年。
井上順孝「宗教文化教育とカルト問題」『宗教法』36、宗教法学会、 pp.1-21、2017 年。
井上順孝・磯岡哲也・葛西賢太・川又俊則・熊田一雄・佐々木裕子・永井美紀子・松本由紀子・弓山達也「現代学生の宗教意識 ―1995～7 年のアンケート調査の分析」『國學院大學日本文化研究所紀要』82、國學院大學日本文化研究所、pp.1-90、1998 年。
岩井洋「大学生の宗教意識 ―超常現象・神秘現象・占い」『現代日本における宗教教育の実証的研究』、國學院大學、pp.77-84、2001 年。
川瀬貴也「韓国大学生の宗教意識の特徴 ―『日韓学生宗教意識調査報告』を中心に」『現代日本における宗教教育の実証的研究』、國學院大學、pp.120-131、2001 年。
桑原智子「親の信仰の有無が子どもに与える影響 ―99 年度調査の日韓比較を中心に」『現代日本における宗教教育の実証的研究』、國學院大學、pp.132-142、2001 年。
櫻井義秀「新宗教の形成と社会変動 ―近・現代日本における新宗教研究の再検討」『北海道大學文學部紀要』46-1、北海道大學文學部、pp.111-194、1997 年。

櫻井義秀「宗教情報教育の可能性 ―「カルト」団体によるキャンパス内勧誘行為を考える」『高等教育ジャーナル ―高等教育と生涯学習』12、北海道大学高等教育推進機構、pp.51-60、2004 年。
澤井義次「現代日本社会における宗教状況」『天理大学おやさと研究所年報』1、天理大学おやさと研究所、pp.22-32、1995 年。
菅直子「放送コードと霊能者」『バラエティ化する宗教』、青弓社、pp.75-100、2010 年。
芹沢俊介「宗教の現在 ―離脱を軸にして」『岩波講座現代社会学』7、岩波書店、pp.147-178、1996 年。
田島忠篤「オウム真理教にたいする大学生の関心について ―家の宗教と本人の宗教別を中心に」『現代日本における宗教教育の実証的研究』、國學院大學、pp.85-98、2001 年。
永井美紀子「宗教への関心度からみる現代学生の宗教意識の多様性」『現代日本における宗教教育の実証的研究』、國學院大學、pp.47-67、2001 年。
日本教育新聞社編「「宗教文化の基礎知識を高校までに」が 7 割 ―国学院大の井上教授らが大学生の宗教意識調査」『週刊教育資料』1156、教育公論社、pp.8-9、2011 年。
日比野由利「ジェンダーに関する意識と行動」『現代日本における宗教教育の実証的研究』、國學院大學、pp.108-119、2001 年。
福島栄寿「札幌大谷大学・同大学短期大学部の学生の宗教意識調査 ―「宗教学」の授業アンケートを通して」『札幌大谷大学短期大学部紀要』39、札幌大谷大学、pp.13-39、2009 年。
福田孝雄「現代社会と仏教 ―特にカルトの盛行に関連して」『駒澤大学仏教学部論集』28、仏教学部研究室、pp.279-296、1997 年。
藤田庄市「カルトとスピリチュアル・アビューズ」『宗教と社会問題の<あいだ> ―カルト問題を考える』、青弓社、pp.20-42、2002 年。
前田美和子「祈りによる学生の意識変化について ―広島女学院大学の場合」『広島女学院大学人間生活学部紀要』1、広島女学院大学人間生活学部、 pp.71-77、2014 年。
松本由紀子「生活形態の違いと宗教への関与について」『現代日本における宗教教育の実証的研究』、國學院大學、pp.68-76、2001 年。
吉田俊六「価値観と生活意識に関する定量分析 ―宗教意識をめぐる考察」『GEIBUN ―富山大学芸術文化学部紀要』4、富山大学芸術文化学部、pp.86-104、2010 年。

3. 外国語（単行本）

Baffelli, Erica, *Media and New Religions in Japan*, Routledge, 2016.
Delakorda Kawashima, *Tinka, Religioznost in potrošništvo v sodobni japonski družbi*, Založba ZRC, 2015.
Inoue, Nobutaka, *Contemporary Japanese Religion*, About Japan series, 25, Foreign Press Center/Japan, 2000.
Lewis, David C., *Religion in Japanese Daily Life*, Routledge, 2017.
Kokugakuin University, *Japanese College Students' Attitudes Towards Religion*, Kokugakuin University, 2003.
Matsuoka, Hideaki, *Japanese Prayer Below the Equator: How Brazilians Believe in the Church of World Messianity*, Lexington Books, 2007.

4. 外国語（論文）

Ambros, Benjamin, "Celebrity Fortunes: Defining 'Religion' in the Post-Aum Era," *Handbook of Contemporary Japanese Religions*, Brill, pp.509-527, 2012.

Baffelli, Erica and Reader, Ian, "Editors' Introduction: Impact and Ramifications: The Aftermath of the Aum Affair in the Japanese Religious Context," *Japanese Journal of Religious Studies*, 39-1, Nanzan Institute for Religion and Culture, pp.1-28, 2012.

Inoue, Nobutaka, "The Possibility of Education about Religious Culture in Public Schools," *Политикологија Религије*, 1-2, Центар за Проучавање Религије и Верску Толеранцију, pp.99-110, 2007.

Inoue, Nobutaka, "Globalization and Religion: The Cases of Japan and Korea," *Religion, Globalization, and Culture*, 6, Brill, pp.453-472, 2007.

Klein, Axel, "Religion als politisches Programm. Der Fall Japan," *Sphärendynamik II: Religion in postsäkularen Gesellschaften*, Nomos, pp.193-240, 2012.

Kreiner, Josef, "Religion," *Modern Japanese Society*, Brill, pp.417-434, 2004.

Kurosaki, Hiroyuki, "Preserving the Dignity of Shinto Shrines in the Age of the Internet: A social Context Analysis," *Japanese Religions on the Internet: Innovation, Representation, and Authority*, Routledge, pp.62-79, 2011.

MacWilliams, Mark, "Religion and Manga," *Handbook of Contemporary Japanese Religions*, Brill, pp.595-628, 2012.

McLaughlin, Levi, "In the Wake of the Tsunami: Religious Responses to the Great East Japan Earthquake," *Cross Currents*, 61-3, Association for Religion and Intellectual Life, pp.290-297, 2011.

McLaughlin, Levi, "What Have Religious Groups Done After 3.11? Part 2: From Religious Mobilization to "Spiritual Care", " *Religion Compass*, 7-8, John Wiley & Sons Ltd., pp.309-325, 2013.

Mullins, Mark, "The Social and Legal Context of Proselytization in Contemporary Japanese Religions," *Proselytization Revisited: Rights Talk, Free Markets and Culture Wars*, Equinox, pp.321-338, 2008.

Mullins, Mark, "Religion in Contemporary Japanese Lives," *Routledge Handbook of Japanese Culture and Society*, Routledge, pp.63-74, 2011.

Occhi, Debra J., "Wobbly Aesthetics, Performance, and Message: Comparing Japanese Kyara with their Anthropomorphic Forebears," *Asian Ethnology*, 71-1, Nanzan Institute for Religion and Culture, pp.109-132, 2012.

Reader, Ian, "Buddhism in Crisis? Institutional Decline in Modern Japan," *Buddhist Studies Review*, 28-2, Equinox, pp.233–263, 2011.

Reader, Ian, "Secularisation, R.I.P.? Nonsense! The 'Rush Hour Away from the Gods' and the Decline of Religion in Contemporary Japan," *Journal of Religion in Japan*, 1-1, Brill, pp.7-36, 2012.

Rodriguez Plasencia, Girardo, "The Globalization of the New Spirituality and its Expression in Japan: The Case of Mt Ikoma," *Experiencing Globalization: Religion in*

Contemporary Contexts, Anthem Press, pp.109-128, 2013.

Roemer, Michael K., "Japanese survey data on religious attitudes, beliefs, and practices in the twenty-first century," *Handbook of Contemporary Japanese Religions*, Brill, pp.23-58, 2012.

Symonds, Shannon Reed, *A History of Japanese Religion: From Ancient Times to Present*, History Master's Thesis, The College at Brockport, State University of New York, 2005.

Tajima, Tadaatsu, "Attitudes of Japanese Students Towards Religion from 1992-2001: Findings in Relation to 'Family Religion' and Religious Education at High School," 天使大学紀要, 8, 天使大学, pp.53-60, 2008.

あとがき

本書は20年にわたって12回実施された学生へのアンケート調査によって明らかになったことを、より明確に示すために編集・刊行されたものである。こうした形で分析し比較考察してみると、この時期の若い世代の宗教意識や宗教行動を考えていく上で非常に参考になるデータに満ちていることがよく分かる。いずれの質問項目も、主に宗教社会学を専門とする研究者が相談して作成したものであるので、今後別の企画によって行われるアンケート調査においても、参考にしていただければ幸いである。この調査を参考にしたものであることを明記してあれば、質問内容や回答の選択肢をそのまま利用していただいてもけっこうである。こうした大がかりな調査は、そのままのやり方ではなかなか難しいかもしれないが、ネット時代にはまた新しいやり方が可能になるのではないかと考えている。

編集作業をしながら、この分析のもとになる調査が実に多くの方々の協力によって継続できたものであったことをしみじみと感じた。メンバー以外にも貴重な講義の時間を割いてアンケートに協力していただいた方々が数多くおられる。各調査メンバーがさまざまな講義を担当されている教員に依頼し、快く引き受けていただいたのである。

各回のアンケートの実施と分析は調査メンバーが行ったが、実際の作業でもっとも時間がかかったのは回収されたアンケートの入力作業である。データベースソフトを使ってのコンピュータ入力は非常に根気のいる仕事である。入力と分析作業に毎回数か月を費やした。また韓国での４回の調査にあたってはアンケート文の翻訳の他、回答の自由記述文を翻訳するという作業もあった。こうした作業には、編者の本務校である國學院大學の学生・院生の他、非常勤講師に行っていた日本女子大学、東洋英和女学院大学の学生、さらに東京都立大学や東京大学の学生の方たちにもお手伝いいただいた。ほとんどの学生・院生の方が調査そのものに関心を抱いて作業に従事してもらったようなので、これも有難くまた嬉しく感じた。

本書に収録した図表の作成に当たっては、國學院大學大学院生の西尾拓海氏にかなりの部分を協力してもらった。篤く感謝申し上げたい。

なお、12 回の報告書にはそれぞれ入力及び翻訳のお手伝いいただいた方々の名前が記してあるが、ここにあらためて全員の名前を記し、あらためて感謝の意を表したい。

佐藤理恵、北詰裕子、東千尋（2）、石野祐子、真下さやか、岩崎倫子（2）、川井真澄、関優夏、岡村文子（3）、伊藤久美（4）、田中さつき、樋口美幸、吉田愛、イ・ヨンス、日比野由利、野村歩、金子香奈里（2）、イ・ファジン（2）、玉置麻衣、杉内寛幸、三橋あづさ、宮崎浩一、山本一了、杉山美咲、成田圭佐、吉田尚文、中畑香々菜、奈良朋哉、西尾拓海、水野聡美。

＊敬称略、調査実施回順、（　）内は複数回手伝ってもらった場合の回数

2018 年 1 月

編集責任者　井上順孝

学生宗教意識調査総合分析

（1995 年度～2015 年度）

発行　國學院大學日本文化研究所

東京都渋谷区東 4-10-28

編集責任者　井上順孝

発行日　2018 年 2 月 21 日

印刷所　金山印刷株式会社